よこしまほら外伝集

神代ふみあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
よこしまほら外伝集

【Ｎコード】
Ｎ７２９６Ｒ

【作者名】
神代ふみあき

【あらすじ】
稚拙「よこしまほら（Ｎ１１８４Ｐ　ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１１８４ｐ／）」に挿入されていた外伝があまりにも「異質」過ぎたので、「外伝集」に纏めました。
本編もあわせてお楽しみください。

よこしまほら異説～少年は降り立った（前書き）

本編が全く進まないので、ちょっと書いてみたら面白くなってしまった。
初めからこっちのネギで書いていればよかったかしら？
※本編からこちらに移行しました。

よこしまほら異説～少年は降り立った

よこしまほら異説～少年は降り立った

「日本（アキハバラ）よ、ぼくは君に会いに来た！！」

わはははは！！！！！

とうとうやってきました日本（アキハバラ）に！！

僕は目の前に広がる楽園を見渡して、そして深呼吸して、この汗っぽい異臭と女の子の匂いを堪能した。

ああ、ここここそが、夢の天地。

ああ、ここここそが、妄想の発信地。

ああ、ここここそが、僕が目指した「楽園（アバロン）」。

「よっしゃー！　まずは・・・・」

自分用に作った楽園地図をのぞき込んだところで、なぜか影ができた。

そちらを見ると、なぜか、あの男が・・・。

「・・・タカミチ」

「やぁ、ネギ君。どうして待ち合わせ場所に来なかったんだね？」

「タ、タカミチこそ、待ち合わせ場所からここまで、絶対に今の時間じゃこれないけど？」

「・・・そりゃぁ、ネギ君が成田に来るといっていながら羽田に降りて、アキハバラに直行すると踏んでいたからだよ」

「・・・裏切ったな、裏切ったな、タカミチ！　ぼくをこんな体に

しておいて裏切ったな！！」

わざわざ日本語でいうと、周囲の視線がタカミチの集中。
よし、人でなしフラグが立った。
しかし、この程度で動揺するオタク師匠（タカミチ）ではなかった。

「ふふふ、さすがだね、ネギ君。世間体を足かせにして逃亡を図ろうとは。さすがイングランドで音に聞こえた「腹黒ショタロリ」だね」

ぐ、流石だよ、タカミチ。
そのハンドルを出されると、真なる敵が現れてしまう。

「ぴぴ！」

手元のスマートフォンが鳴る。

「どうしたんだい、気になるんだろ？　みてみればいい」

くそ、とつぶやいて僕はスマートフォンをのぞき込むと・・・・

『きた！　２〇h期待、噂の腹黒ショタロリ来日！！』『秋葉でダンディーと痴話喧嘩！　池袋なら鼻血で海ができるぞ！！』『というか、おれいまオッキ。』『わかるぞ、あれだけのショタロリだ、おれも・・・』

やばい、やばいフラグだ！！
一人になったとたん、１８禁の世界に旅立たされてしまう！！
・・・少しだけ興味はあるけど、初めてはきれいなお姉さんと、と決めてるんだ！！

こうなれば、あの切り札だ！！

「く、くそぉ、タカミチ、君の勝ラ（カッ）・・・。」

そういって、頭に乗せていたカツラを渡して、丸坊主をさらす。

瞬間、ネタのわかった人間、つまり周辺全員で大爆笑になり、タカミチも笑いで息ができず道に沈んだ。

「あばよ、とっつぁん！」

僕は走り続ける。
まだ見ぬ萌えに向かって！！
僕のオタクライフは始まったばかりだ！！

当然速攻で捕まって、麻帆良にきました。
タカミチはずっと僕と視線を合わせません。
あわせると笑ってしまい、崩れるからです。
よしよし、これなら日本で怖いものはないな。
あの飛び道具を始めて見たとき、僕は三日ほど寝込んだ。

おもしろすぎて。

だから、丸坊主でも問題ない年齢のうちは使い続けることを決めていた。
ふっふっふ、この飛び道具、広まる前に連発してやるんだ！！

髪の毛を伸ばすのはそれからだ！！

・・・回復魔法で結構早く伸びるし。

で、引き出されたそこは麻帆良学園の学園長室。

・・・流石にやられた。

僕は自分の飛び道具を過信していたことに気づいた。

だって、あの頭、絶対にあり得ない風格があるのに違和感がない。

あんなかぶりものを仕掛けて正式な場、正式な挨拶の場を乗りきろうだなんて・・・。

おじいちゃん、確かに僕は慢心してたよ。

何でもできる、笑いもとれると慢心してた。

でもこれは笑いの本場で有頂天になって、東京で挫折するお笑い芸人みたいなものなんだ。

慢心は笑いの敵だ。

相手に会わせた笑いを心がけないと、りっぱな芸人になれない。

僕は、この日本で、笑いを学び吸収するんだ。

ねぎ、いきまーーーーす！

「あー、タカミチ君。ネギ君はどうしたのかのぉ？」

「ああ、たぶん、自分の思考におぼれているだけです」

「そうなのかの？　なんだかワシを熱い視線で見つめておるのじゃが」

「ああ、多分ですね、勝手に勘違いして勝手にリスペクトしているのだと思います」

「・・・噂と違って、ずいぶんと奔放に育っているようじゃな？」

「はい、昔のナギさんを思い出します」

はっ、しまった、ちょっと考え込んじゃった。

「まことに申し訳ありません、師匠」

「し、ししょう、かの？」

「はい。あなたのようなすばらしい方に師匠となっていただける喜び、修行先で一番の喜びです！」

「・・・ネギ君、アキハバラは？」

「チャンピオンだよ？　一位とチャンピオンは別物、常識だよ？」

そんなわけで、僕は麻帆良で修行を始めた。

「では、ネギ君には「２－Ａ」の担任をしてもらう」

「さ、流石師匠、出会ったその日にその無茶振り、そこに痺れて憧れます！！」

マジで女子中学校の教師だそうです。

・・・すげー、まじすげー。

とはいえ魔法関係なので２〇ｈには書き込めませんでした。

絶対にネタ扱いされる自信があるんだけどなぁ。

追記：２〇ｈに腹黒ショタロリスレが乱立していて、中身をのぞいてちょっと鬱になりました。ああ、ちうたんのＨＰでもみて癒されよう。・・・そうか、今度からイベントとかオフ会にいけるんだ！！　やったーーー！！　日本万歳（アキバ）！！

筆者記載：思いついて書いた。・・・なんか後悔してるｗ

よこしまほら異説～少年は降り立った（後書き）

えー、ネギ君をまともに書くのが久しぶりなんで、頑張って書いたんですがオカシク成ってしまいました。
・・・おかしいなぁ・・・・第一話っぽくして勢いつけるつもりだったのに。
あれぇ・・・・？

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０１（前書き）

エー試供品のまま移転ですｗ
皆さんの御蔭をもちまして、総合評価が１３００＆お気に入りが５００を突破しました。
とってもありがたい気持ちを「妄想」して、こんな外伝を書いてみました。
お楽しみいただければ幸いです。

※これは「よこしまほら」の世界を題材にした三次作ですが、「よこしまほら」の世界が辿る決定未来ではありません。パラレルということでご理解ください。

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０１

評価ポイント１３００ポイント＆ａｍｐ;お気に入り５００件突破記念
特別企画「よこしまほらＩＮゼロ魔」試供版

魔法世界からの移民を異界に誘導中にそれは起きた。
突然の次元断層、突如の大爆風。
それを納めた男は、ひとり断層に落下していった。

光り輝く銀色の鏡。
それが現れた瞬間だけ、彼女はゼロじゃなかった。
一度の詠唱で現れた瞬間、プリミエへの祈りが通じたことを感じた。
しかしその感動は続かなかった。
そこに現れたのが、奇妙な平民だったから。

当時の彼女はそれを不運だと思い、絶望した。
召還のやり直しを教師に訴えたが認められず、致し方なく使い間として契約するしかなかった。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール
初めて成功した魔法、使い魔召還でさらに二度目に成功した使い魔契約の魔法。
これが伝説の始まりだとは思わなかった。
誰も。

見知らぬ世界に現れた横島だったが、あまり焦っていなかった。
神魔との付き合いではよくあることだったし、GS的にも頻繁だったから。
ただ、出会って初めての女の子にキスされたのには困った。
数年前の自分だったら「ロリやないんやー!!」と転げまわるほどの可愛い女の子であった。

彼女の名前はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
魔法使いという「貴族」なのだそうだ。
国を貴族で治め、魔法が使えない平民が治められるという実に封建的社会であった。
感覚的にはヘラス帝国に似ていなくもないが、魔法が使えない人間や人間以外の「ヒト」が少なすぎるので違うであろうことは明白であった。
ではどこか、といえば、まぁ、おおよそ予想はついている。

「異世界」なんだろう、と。

少女にキスされるまで言葉は通じなかったし、キスされた後で浮かんだ左手の紋章からは自分の知っている系統の「魔法」を感じたのに、他の少年少女が使っている魔法からは同じ系統の感じがない。

いや、ある程度の共通性を感じるし、流れ自体も見えるけど、どうも、こう、力が弱いのに周囲の精霊に無理やり助けてもらって効果を得られるようにみえる。
これほど魔力が弱ければ魔法の顕在化などできないはずなのに、其れが出来ているという事は、よほど補助がいいのだろう。

「いくわよ、犬」

どうもルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールにとって横島は忌々しい存在らしいが、無視するには自尊心が邪魔らしい。
使い魔というものがどういうものなのかを色々と横島に教え込んだ少女は横島を覗き込んだ。

「で、あんたは何ができるの？」
「丁稚」

間髪いれずに答える横島に、少女はがっくり肩を落とした。

「・・・わかったわ。じゃぁ、洗濯でもしておいて頂戴。・・・あたしは寝るわ。」

そういって部屋の中に消えた少女を見送った後、しばらくして部屋をのぞく横島。
どうやら本当に寝てしまったらしいと理解し、少女を起こさないように部屋の掃除を始めた。

しばらく掃除した後、洗物と思しい衣類を見つけたので、横島は惜しげもなく文珠を使った。
「浄」の文字をこめて行使すると、なぜか部屋中が浄化されてし

まった。
どうやらコントロールがうまくいっていないことに気付く。
「・・・こりゃぁ、ちーっと実験が必要か？」
そう思って横島は、周囲の魔法使い以外の人たちの話を聞いて学校裏の森までやってきた。
目的は霊力のコントロールがどれだけうまくいっているか、であった。
盾と霊波刀、ハンズオブグローリーまではいい。
なぜか文珠の威力が桁違いになっていた。
そして、其れを装備すると、なぜか左手の文字が光り輝き、身体能力も馬鹿みたいに上がる。
で、加えることながら、文珠の有効性能やら成功範囲なんてものまで馬鹿みたいに頭に流れ込んできていた。
こりゃ、どういうことだ？
とりあえず試しに木の枝を持ってみたが変わらない。
が、そこらの石を持つと「投石器」として認識された。
・・・ん？
ちょっと認識を変えてみよう、と横島は考える。
石は使える・・・枝も使えるだろ、と考えた途端、枝をどう使用するかで文字が輝くようだ。
葉っぱも気を使えば「武器」になる。
枝も同じ、石も同じ・・・。
つまりそういうことなのだろう、と理解した横島であった。

「おめーは、武器を補助する、そういうことか。」

左手のルーンを見つめて横島は苦笑い。

召還した使い魔、タダオは変な平民だった。

魔法の魔の字もわからないのに、メイドを助けて貴族と決闘したり、その貴族をこてんパンにやっつけたり、そんな貴族といつの間にか友達になってたり、ツェルプストーやタバサあたりに懐かれてたり・・。

「ちょっと、それ、私の使い魔よ!!」

「あらー、ヴァリエール～やきもち～?」

「な、な、な何を言ってるのよ!!　平民ごときに焼餅なんかやかないわよ!!」

「あーら、だったらいいじゃな～い?」

「・・・かんけいないじゃない!!　かんけいないじゃない!!かんけいないじゃない!!」

私は無理やりタダオをひっ捕まえて、学園の裏の森に引っ張りこんだ。

これからは、ご主人様と使い魔の時間は一時停止。

秘密の特訓時間だ。

ことの始まりはタダオのつぶやき。

「力入れすぎやろ？」

はじめは何のことかわからなかったけど、どうやら私の魔法のことだと気付いたのは暫く経ってからだった。

気付いた途端、タダオに掴み掛かったけど、タダオは冷静に説明してくれた。

今まで、魔法で失敗した人間で爆発という結果になったヒトはいるか？

爆発よいうからには火の系統だろうけど、爆発なんて結果を出すためにはどれだけの実力が必要なのか？

それはドットでもないメイジにも可能なことなのか？

隣で聞いていたツェルプストーは真っ青になって答える。

「トライアングルでも難しいわ」と。

つまり魔法力は火のトライアングル以上だとタダオは私に説明した。

急に目の前が開かれた気がした。

「でな、ルイズの魔法は、なんつうか無理に押さえつけられてるように見えるんや」

タダオの説明だと、私の魔法はすごく強い力で押し出されているのに、力に比べて出口が狭いので爆発しているように見えるそうだ。

つまる、強く押し出しすぎ、と言うことをいいたいらしい。

その気になった私が試してもまったく成功しないので文句を言う

とまだまだ強いという。
どのぐらい弱くしなければならないかと聞くと、今の力の千分の一。

それってどういう単位？

「せやな・・・・」

そういってタダオは教室まで移動する。
そこでは目を見張るような知識が開陳された。
王宮の数学者だって目を剥くようなそんな知識であった。
そして初めて周囲のメイジたちと同じ力具合になって、同じ魔法が唱えられるようになると言う。
信じられないし、嘘かもしれない。
でも私は縋った、縋りついた。
わたしの失敗魔法を、「ゼロ」を初めて論理的に説明してくれたそいつに、タダオに。

タダオ召還から一週間。
とうとう練金に成功した。
拳ほどの石ころが、爆発せずに変わったのだ。
きらめくそれを見た瞬間、私は喜びで膝から崩れ落ちた。

「やったな、ルイズ。純銀や」

銀？
青銅を越えて、銀？

「せやせや、ピカピカの銀や！」

タダオは私を抱き上げて、ぐるぐる回す。

「やったわ、やったわ！　私出来たのよねぇ！？」

「せや、ルイズ！おまえは天才や！」

私はタダオの腕をすり抜けて、彼をぎゅっと抱きしめた。

「全部、ぜーんぶ、タダオのおかげ！！」

「ちゃうちゃう、ルイズが頑張った、それだけや！！」

ああ、タダオ、私の使い魔。

あなたは私に幸せを運んできてくれた幸せを呼ぶ賢者なのね。

ラ・ヴァリエール邸宅は大いに沸いた。

なにしろ、魔法成功率「ゼロ」という大変不名誉な字を持つ三女が、初めて練金に成功したという手紙とともに、その成果を送ってきたのだから。

はじめ手紙を読んだラ・ヴァリエール公爵夫人カリーヌは、子供のつまらない見栄だと一笑に付そうとしたが、召還した使い魔による知識と特訓による成果だという下りで眉をしかめる。

三女ルイズが召還したのは、なんと人間で賢者だという。

人里から離れた僻地で研究をしていたという賢者の知識は、カリーヌに理解できぬ内容であるため、里帰りしていた長女を呼びだしてみせると、目を丸くし、ガタガタと震え、そして手紙から顔を上げたときには真っ青になっていた。

「エレノオール、この手紙はどう判断します？」
「お母様、大変恥ずかしい話ですが、真偽を問えるほどの知識が私にはありません。」
「・・・それほど胡乱な内容なのですか？」
「いいえ、お母様。この手紙の内容は王立研究所で研究し、その成果を献上すれば爵位をたまわえる程の内容かと。」
「・・・そこまでですか。」

暗く沈む親子の所にラ・ヴァリエール公爵が飛んで帰ってきた。

「ルイズが、あのルイズが、魔法に成功しただと！？」

めでたい、慶賀だ、祝杯だと騒ぐ公爵にダブル・ラ・ヴァリエールキックを決めた母と娘は腕組みで公爵を見据えた。
しばらく気絶していた公爵だが、ムックリとおきて二人の様子を見て、尋常ではないと把握したようだった。
そして手紙をよみ、かなりまずい状況だと理解する。
下手をすると異端とされる段階を遙かに飛び越えていた。

手紙にある内容は、練金における想像の限界とそれを打破するための学問、「物理」なる秘法。
物事の理を解明するという、正に禁忌にもっとも近いとも言える知識の体系。
その根幹をなすと書かれた虫食いの表のはこう書かれていた。

「元素周期表」と。

エレノオールは家族を愛していた。
父も母も、病弱な妹も、不遇な妹も。
だからこそ、現状を看過できず、魔法学校へ飛んだ。
家族を、父母を、姉妹を守れるのは自分だけだ、と。
たとえ、ルイズが悲しもうとも、異端の元など無事で済ませるわけにはいかない。
そんな悲壮な覚悟で飛び込んだ教室では、なぜか嬉しそうに授業をするルイズと、熱心にそれを聞く人々がいた。
中にはルイズの友人ともいえるアンリエッタ王女もおり、すでに事が遅かったと膝をついた。

「まぁ、エレノオール。あなたもこの講義を聴きに？」

聞けば、使い魔から得た知識から魔法の可能性を深めたというルイズによる説明会を実施しているそうだ。
金属の組成や合金というものの組成、金属の性質やその発展、練金一つにとってみてもその精度によって強度が変わるが、想像する対象の組成をイメージできるか出来ないかで大きく出来が違うとルイズは語る。

「では、一度比較してみましょう。」

そういいながら取り出したのは石ころ二つ。
それの練金を比べようというらしい。

「では、ルイズ。王宮から土のスクエアを。」
「姫様、では私が。」

二人同時に練金し、ほぼ同時に仕上がった。

結果はお互いの作品を確かめあい、そして膝をついたのはスクエア。

「私の方は、芯に不純物がございます。ミスルイズのものは、一点の曇りもない純銀でございます」

おお！　と声が挙がる。

次々に結果を確かめるメイジたち。

アンリエッタ王女も実に嬉しそうであった。

たぶん、自分の親友の魔法が使えるようになったのを喜んでいるのだろう。

「・・・我が国で、これほど見事な銀を作れるメイジはいないでしょう」

土のスクエアの言葉に、アンリエッタは深く頷いてルイズを抱きしめた。

「我が親友ルイズ、あなたに「銀生」の字(あさな)を送ります」

「・・・ひめさま・・・・・」

かくしてうちの妹ルイズは、ゼロの字から飛び立って銀生の名を頂いた。

文句の一つや二つ言おうと思っていたのに。

くそぉ、こうなったら余計な知恵を与えた「賢者」とやらを絞ってやる・・・・。

エレノオールねえさまがタダオの話を聞きたいというのであわせた途端、ねえさまはタダオに殴りかかった。

軽くよけたタダオに怒ったねえさまは、腕を足をブンブンふるうけど、全く当たらない。
タダオ、たしかに決闘で相手に怪我をさせないで終わらせられるほど強いけど、こんなにすごいとは思わなかった。

「あー、ルイズ、俺何か悪いことした？」
「な、に、が、悪いことした、よ！！」

ねえ様が語る内容は驚くべき事で、背筋が寒くなるものだった。
私が自慢げに語った内容は、すでに異端も異端、異端審問官にばんばん叩かれておかしくない内容だというのだ。

「よりにもよって、お姫様に、講義するなんて！！」

渾身の力を込めた拳を、タダオが軽く受けた。

「せやから、お姫様にみてもらったんやろ」
「・・・なんですって？」
「あのな、研究してて見つかったのが個人なら殺されるやろうけど、王立研究所で研究しとる内容やったらどうや？」
「・・・あ。」
「異端審問ちゅうても、研究所なら警告が先に入る。それから動けばいいやろ？」
「・・・つまり、この結果で国が動けば、研究を押しつける、そういうことなのね？」
「ひとぎぎのわるい。個人で出来る限界にきとるから、大きな組織に引き継いでもらう、それだけや」

にこやかに笑う使い魔にして賢者、タダオの笑顔に私は引き込まれた。
賢者タダオは、単なる研究バカではなく、きわめてバランス感覚のよい人物だった。
政治に対する嗅覚がよく、自分の異端さを感じていたため、ルイズの友人関係にある王族に庇護を求めた。
アンリエッタ王女にしても、ルイズがメイジとして名をあげることは賛成なだけに、細やかな計画への協力が取り付けられたという。

「・・・よくもそこまで考えられたわね」
「主のみの安全のためっすからね」

苦笑いのタダオ。
彼の知識はきわめて高く、そして実に多彩だった。
魔法に関してはかなり独自生が強いせいで理解できなかったが、物理という学問のアプローチは恐ろしいほど興味深かった。
このまま研究所に同行させたいぐらいだったけど、さすがにそれはまずい。
研究とルイズを分けた意味がなくなってしまうのだから。
と、そこで急にもう一人の妹の存在を思い出す。
水のスクエアメイジですら匙を投げた妹の病状を。
真剣に、心から真剣にはなすと、彼はにっこり笑った。

「わいは、美女美少女の味方や。」

ラ・ヴァリエール邸宅に竜籠で強襲したエレノオールは妹の部屋にタダオを連れ込んだ。
動物でいっぱいのあった部屋に入れた途端、なぜか部屋の中の動物全部がタダオに飛びかかりすり寄っている。
それをみた妹は、「あら、姉さんの新しい恋人ですか？」とか聞きやがった！！
思わず全力で睨むが、全く効いている感じがない。

「チビのルイズの使い魔よ。」
「まぁまぁまぁ。」

嬉しそうに妹、カトレアはタダオをのぞき込んだ。

「私は、カトレアともうします。」
「・・・あー、ルイズの使い魔のタダオです」

にっこりほほえむタダオだったけど、なぜか視線は胸に集中。
つうか、男はみんな胸、胸なのねぇ！！
そんな思いを込めて視線を送ったが、何となくタダオの視線の意味合いが違う気がした。

「あのーカトレアさん。」
「はい？」
「いま、胸がすごく苦しくないですか？」
「・・・！」

思わず目を見開くカトレアの姿勢が、急にふらりと傾く。

瞬間、タダオが支えて抱きしめた。

「苦しいことや辛いことに慣れちゃだめっすよ。」

「でもね、苦しそうにしてるとみんな心配しちゃうし。」

きゅっと腕に強い力を込めて抱きしめ直すタダオ。

「何となくわかったっすから、治しちまいましょう。」

そういったタダオの両腕が光輝いていた。

ルイズの姉であるエレノオールさんの頼みでその妹であるカトレアさんの病状を見に来たんだけど、なんつうか、魔法では原因不明なのがよくわかった。

なにしろ、「悪霊」なんだから。

悪いところが次々と変わるのも当たり前、治しても治しても治らないのも当たり前。

なにそろ、病原が悪霊で、悪霊は払われていないのだから。

逆に言おう。

悪霊さえ払われれば、二度と再発しない。

俺は、GSだから!!

エレノオールねえさんに遅れること半日。

私が家につくと、血色の良さそうなちぃねえさまがほほえんでいた。

エレオノールねえさんもほほえんでいた。

・・・タダオを挟んで。

「ルイズ、ルイズ、ルイズ！」

機敏な動きで私を抱きしめるちぃねえさま。

「あなたのおかげ、あなたの使い魔のお陰で病気が治ったのよ！」

驚く私に、さも嬉しそうに微笑むちぃねえさま。

「・・・ほんと？」

「ええ、ほんとうよ！　タダオは様子を見る必要があるっていうけど、大丈夫、私には解るの。だって、こんなにも体が軽い事なんて今までなかったんですもの！」

私を抱きしめたままクルクル回るちぃねえさま。

「おめでとうございます！　ちいねえさま！！」

「・・・ありがとう、タダオ」

ちょっと疲れた感じのタダオは、私の言葉を聞いて照れつつ笑う。

「ええんですよ、俺は美女美少女の味方やから」

何だろう、タダオの笑顔は平和の匂いがする。木漏れ日のような、若木のような。

元気にルイズとじゃれるカトレアをみていると、喜びが何倍にも

感じる。
隣に座るタダオ。
ちょっと寄りかかると、少しだけ驚いたみたいだけど、そのまま許してくれた。
タダオによりかかると、彼の暖かさを感じる。
なんだろう、初めて感じるこの安らぎは。
なんだろう、信じられないほどの多幸感は。

もしかしてこんな喜びを多くの女たちは求めていたのかもしれないと思うと、研究に明け暮れていた人生を振り返り寂しく思う。

「ねぇ、タダオ。あなたは何者なの？」

すると、タダオはまぶしい笑顔でいう。

「ルイズの使い魔、タダオ。ヨコシマ＝タダオや」

「よこしまほらＩＮゼロ魔」試供版　ＥＮＤ

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０１（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

こんなもの書いてないで、とっとと続きを書けというお話もあるでしょう。

ええ、ええ、もちろんその通りでございます。

とはいえ、この御バカ作「よこしまほら」は、妄想１００％でできていますので、その辺はご理解くださいｍ（＿＿）ｍ

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０２（前書き）

ご存知でしょうか？

よこしまほらが、１００万ＰＶを突破しました！！

つうか、気付いたら突破してましたｗ

多分お休み効果とかがあると思うんですが、それでも嬉しすぎです。

そんなわけで、調子ブッコいて外伝の続きを書いてしまったんですが・・・・

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０２

新年記念&とうとう１００万ＰＶに届きましたよ緊急執筆！！
特別企画「よこしまほらＩＮゼロ魔」試供版２

今、魔法学校一の話題、それは使い魔「タダオ」だろう。
平民のくせに生意気で面白くて気軽で捕らわれない。
ドットとはいえ「青銅」の字(あざな)まで持つギーシュに決闘で勝ち、さらには「ゼロ」と呼ばれた主人であるルイズへ独自の魔法練習をさせて練金を成功させた。
その見事な「銀」の練金にアンリエッタ姫殿下は「銀生」の字を与えたほどであった。
そこからの魔法上達は凄まじく、只でさえ座学トップであった成績が、魔法評価も合わさって単独トップとなった。

今までのルイズならばここで慢心しただろう。

が、異なる知識体系を持つ「平民賢者」を使い魔に持ったルイズは更に勉学につとめ、周囲からの評価の天井を押し上げていった。
ゼロと蔑んでいた周囲の評価が逆転したことに戸惑ってはいるが、地道に行ってきた努力が形になった事実を思うとくすぐったい思いであった。

「ねーねー、タダオ。この表の縦とか横とかにとなり同士の物質って・・・。」
「んー？　ああ、たぶんルイズが思っとるとおりや。」
「・・・それってさ、練金しやすさとかも関係あるんじゃない？」
「わいは練金はわからんけど、変化しやすいと思うで。」

「・・・やっぱり！！」

そんな思いつきを実験しては手紙にしたため、長女エレノオールに送付するという生活が最近のルイズの楽しいことだった。
返信でやってくるエレノオールの賞賛や誇りに思うとのほめ言葉を受け、実に嬉しそうなルイズであり、それをみて横島も嬉しそうであった。

王立研究所すら唸らせた平民賢者の噂は軍にも届き、様々な軍人が面会に来たが、誰一人面会に応じなかった。
ただ、友人、ギーシュ・ド・グラモンの父親だけは友情に免じて面会したのだが、その時の事を彼はこう語った。

「我々は彼に頼ってはならない。彼の知識は生活の中で生かされるべきものであった。」

湯気を立てつつ、びしょびしょの格好で。

実際にその場に立ち会っていたギーシュは、自分の父親に対する態度を怒るところか大爆笑だったという。

流れとしては、土の系統の上位魔法使いである自分を訓練するとすればどうするか、と聞かれたところで、様々な問答があり、最後にはどこまで遠くのものを練金できるか、という話になった。

基本、練金とは自分の周囲しかできないのだが、ルイズはかなり遠くの物まで練金できるという実験を行った。
見える範囲で約２００歩先のも野間で練金したのには驚いたが、実践向きではない、と苦笑いのグラモン将軍。

では、どのようなものが実践向きかという話になったところで、金属性のゴーレムを作り出す将軍。
その速度、密度共に素晴らしく、息子であるギーシュも感嘆の声を上げた。
が、平民賢者は指を鳴らす。
瞬間的に足下が無くなった。
人の背丈の倍ほど落ちたところでフライを使ったが、真上からお湯の柱が叩き込まれ、混乱のウチに穴の上まで押しやられた。
これはすべてルイズの魔法で行ったものだが、戦争行為で考えれば恐ろしいまでの話であった。
存在も気づかせない罠、そして気配も感じさせない連続攻撃。
あれがお湯ではなく岩だったら、武器だったら、考えるだけで恐ろしいものであった。
ゆえに、この手法は開示しないで欲しいと将軍が賢者に頼むと、彼はこう言った。

「こんな卑怯な方法、貴族がとるわけないじゃないですか。でも、傭兵は関係なしで使ってきますので、警戒するに越したことないですよね？」
「つまり、鍛えるべきは、卑怯千万な方法の奥の奥まで知り、それを喰い破る知性と技量を持て、と？」
「そのへんは将軍の思い次第かと。」

確かに賢者だと、将軍は笑い、そして去っていった。

以降、面会を求める貴族は激減し、軍関係者は皆無になった。
グラモン将軍のおかげだと、横島は感謝するのであった。

今日も今日とて魔法練習と勉強をするルイズとタダオであったが、

校内が騒がしいことに気づいていた。
どうしたのか、と最近仲の良いキュルケに聞いてみると、肩をすくめて答える。

「あんたのところの王女様が視察にくるのよ。」

お触れがあったじゃない、と言われて、そういえば最近そういう連絡事を聞くぐらいなら、と勉強ばかりしていた気がするルイズ。

「タダオ知ってた?」「んにゃ?」

魔法の本を読みつつ半分寝ていたタダオは、未だ夢の中らしい。

「もう、タダオ、まじめに聞いて」
「お、おう。」

ぶるぶると頭を振った後、周囲の気配を感じ取るタダオ。

「・・・ルイズ、聞いてええか?」
「なに?」
「王族の護衛って、弓をかまえていたりするんか?」
「・・・場合によるけど?」
「・・・さすがにその矢を主にはむけん、よな?」
「タダオ、それどこ!?」

タダオが指さす先の森へ向けて、大量の熱湯を練金するルイズ。
叫び声とか物が落ちる音とかが響きわたった。
すると学園側から大量の女性兵士が現れる。

「何事だ!!」

鋭い目つきの女性にタダオは見覚えがあった。

「親衛隊長殿、竜籠に向けて弓引く愚か者を我が主が見つけ攻撃しました。捕らえ、お調べになるが良いかと」

女性の方もタダオを知っており、そしてルイズのこともよく知っていた。

「ラ・ヴァリエール様、ご協力に感謝いたします。姫様にもこの事をお伝えさせていただきます。」

「いいえ、護国と王族への敬愛は我ら貴族の常識。この程度何と言うことはありません。」

その言葉を笑顔で聞いた女性たちは、きれいな敬礼をして、ダッシュで未だ呻く声に向かった。

「瞬間で熱湯練金って、どんな仕掛けよ。ルイズ」

「んー、水と反応する物質を先に練金して、粉状で浮遊させて、その後で周囲の水を集めると・・・ドカン！ってかんじになる・・・かな？」

「どんだけ魔法を同時に使ってるのよ・・・。」

「んー、みっつ？」

「四つやろ、ルイズ。感覚で魔法を使ったらあかん。精度が落ちるやろが。」

「えへへ、ごめーん。」

にこやかにほほえむルイズには、過去の暗い陰は見あたらなかった。

年相応の笑顔、明るい表情、公爵家の加盟を背負っていながらも

朗らかな雰囲気に、最近誰もが笑顔で対応するようになった。
これもタダオの指導によるものであった。
笑顔には笑顔が返ってくる。貴族だろうが平民だろうが笑顔で付き合えば、つき合えれば、それは素晴らしいことが起きる、と。
すでにタダオ信仰に傾きつつあるルイズは、何の疑問もなく実践する中で、この実践の先にある人物を思い至った。
ルイズが慕う姉、ちいねえさま、であると。
彼処にたどり着けるのか、そんな想いが、ルイズをさらに高みに押し上げた。
姉のようにほほえみ、姉のように語りかける。
子細はルイズのままで柔らかくなった彼女を「ちいさな姉様」と呼び従う下級生が増えたのは当然の流れといえた。
できれば家の兄と、従兄弟の兄と、と見合い話が日々舞い込んでくるのをみて、人の意識って淡いものだ、とため息のルイズであった。
そんなルイズをみると、タダオ、いや、横島もうれしい思いだ。
虚無に落ちた自分を救ってくれた小さな乙女。
どうも自分は「少女」に縁が大きいと落ち込みもしたが、それでもルイズが一歩一歩大きくなるのは嬉しく感じる。
まるで妹の成長をみる兄の気分だろうか？
そんな風に思っているところで、ドアがノックされた。

学院女子寮に現れたのは、お忍びでやってきたアンリエッタ王女であった。
表沙汰にできないながら、王立研究所の研究題材を数年分叩き込んだ平民賢者とその研究推進をしている主を非公式に慰撫に来たというのだ。
その事実に感激したルイズは、きゅっとアンリエッタを抱きしめる。
が、タダオは苦笑いのまま口を開く。

「で、さらに裏向きのご用件は？」
「！！」
「・・・姫様？」

タダオの言葉に身を堅くしたアンリエッタを驚いて見上げるルイズ。
なぜ見破られたのか、と驚く彼女であったが、海千山千の妖怪や女怪を相手にしてきた横島忠夫の経験が、この状況の裏を警告していた。
この女や厄介事を持ってきた、と。
が、さらに彼の「霊感がささやく」。
これを受けなければ、身の破滅だ、と。
かつての上司の苦悩を今一度理解した横島であった。

アンリエッタの言葉は正気を疑うものであった。
現在、レコンキスタなる軍勢に責め立てられているアルビオン王国の手助けをしてほしい、できればウェールズ王子を助けてほしい、そんな話であった。
たった二人からなる軍勢が、トリスティンからやってきて王国を救う。
売れない英雄談だとはおもったが、タダオは無表情にいう。

「それは、あなたの親友たるルイズに死ねと？」
「・・・！！！」

はっと息をのむアンリエッタであったが、ルイズは片膝をついて頭を垂れる。

「私は姫様の親友であり、家臣でもあります。あなたの望みを最大

限の力と最小の被害で達成する、「銀生」の名においてそれは誓約です。」

「ああ、ルイズ、私は何てことを・・・。」

「お信じください、姫様。私が王国を助けることを、王子をお連れすることを。」

「ルイズ、ルイズ、ああ私の真なる友ルイズ。貴女に託せるのは心ばかりの路銀と『これ』だけです。こんな力無き私を許してください」

「姫様、顔を上げてください。貴族が王族にここまでしていただいたのです。結果のみで答えましょう」

背筋を伸ばしたルイズを、涙であふれさせたアンリエッタが抱きしめた。

主が心を決めたなら、自分は最大限の力を込めよう。

話を決めた王女が去った後、即時に行動を開始するタダオであった。

「ギーシュ、どういうことよ?」

「あ、あれぇ?」

早朝から学園の門を張っていたキュルケ・タバサ・ギーシュは肩すかしを食らっていた。

日が上がる前にルイズの部屋の中に二人がいることは確認していたのに、何時まで経っても出立の様子がないのだ。

昨晩の王女とルイズの会話を聞いて感動したギーシュは、そのたった二人からなる行軍に参加するつもり満々であった。

同じく、その話を聞いていたキュルケも参加したかったのだが、いくら待っても現れない二人に苛立っていた。

そんな中、グリフォンに跨った男性騎士が現れる。

聞けば、王女からの依頼で、ある二人を王国まで送り届ける話になっていたそうだ。
どういうことか、とお互いに顔を見合わせたが答えがでないので、早々に部屋に踏み込むと、そこには誰もいなかった。
ルイズのテーブルの上には一枚の紙があり、そこにはこんな風に書いてあった。

『覗きはだめよ、ギーシュ　Ｂｙ　ルイズ』
『女子寮に忍び込んだことはモンモランシーに告げ口しておいたからｂｙ　タダオ』

ばったり倒れたギーシュであったが、そのメモから何かを読み取ったらしい騎士がモンモランシーへの面会を求める。
結構カッコいい騎士だったので気分はイヤであったが、かなりの迫力だったんであきらめて従うと、彼の問いの意味がしれた。
告げ口されたのは昨晩のうち。
紙のインクは既に匂いもしないほど乾いている。
つまり、

「タダオは昨晩のうちに出立してる？」
「・・・それも、誰にも知られないように・・・。」
「なんでそこまで？」

ギーシュの疑問をよそに、高らかに笑い声をあげる騎士、ジャン＝ジャック＝ワルドは獰猛な笑顔を浮かべていた。

「タダオ、ちょっと休みましょうよぉ。」

深夜から無理をしてフライをし続けたルイズであったが、そろそろ疲労もピークであった。
魔力は底をつく感覚がないのだが、集中力がそろそろ切れそうなのだ。

「そろそろ不味いか・・・。」

わりと正確にルイズの体調がわかるタダオは、木陰でしばしの休みを取ることにした。

一時間ほど仮眠して起きたルイズは、とりあえず無理に出立した理由をタダオに問う。
タダオが示した理由は、かなり恐ろしいものであった。

「まずな、ルイズがお願いされた内容やけど、かなりおかしいとおもわんか？」
「・・そりゃ、変だと思うけど、姫様が頼ってくれたのよ？」
「ちゃうちゃう、そうやない。戦争に投入戦力としての最大人員が二人っちゅうのがおかしいって言ってるんや。」
「・・・・え？」
「逆に言うたらな、二人で対応できる限度量を超えた依頼なんや」
「・・・」
「で、考えてみてきいたんや、ルイズを殺す気かってな」
「・・・・」
「姫さんはそこまで考えておらんかったみたいやけど、その結果は否定せんかった。」
「・・・つまり？」
「姫さんが信用して向かわせることが出来る戦力の最大がわいら二人やったんや。」
「軍部や貴族は？」

「反対されておるんやろ？　せやから軍部も貴族も派遣できん」
「でも、親衛隊なら・・・」
「その親衛隊も信用できんのは、みたばかりやろ？」
「・・・そうだったわね。」

アンリエッタの狙撃をここなおうとしていたのは親衛隊の人間であったが、尋問中に自害していた。

「それでも、あの姫さんは、敵中に押しやられる親友を見捨てておける人間やない、そうみてる」
「そうね、そういう人だわ、姫様は」
「そうなると、ちぃいと信用できんけど、言うことを聞く奴を護衛につけてくれるかもしれへん」
「・・・じゃぁ、無理矢理でてきたら不味かったんじゃないの？」
「これで城に戻って姫さんに報告に戻っとたらええけど、そのままこっちを追いかけてきたら不味い。」

その二つにどういう違いがあるのかが解らなかったルイズだったが、そのわけを聞いて青くなった。
なるほど、アンリエッタの信用できる最大戦力は自分たちしかいないのだ、と。
少ししか休んでいない割には気力も体力も復活している自分を感じ、非常事態が故の気力が支えている異常事態だろうと判断したが、常にルイズの視界の外で「癒」の文字の入った文珠が輝いていたことに気づくことはなかった。

グリフォンを全力で飛ばし、隣の町まで行ってみたが立ち寄った形跡はなかった。
「偏在」による捜索も同時に行っていたが、三つ先の町までその

存在すら確認できていなかった。
途中おそわせる予定であった山賊も気づかぬ内に移動するとは、どんな手段を使っているのか、と信じられない思いであった。
しかし、目的地は決まっている。
あの国へは船でしか出入りできない。
ならば、あの町に急行すれば間に合うはずだ。
少なくとも、食の関係でみれば、どんなに急いでも二日ほどロスが出るはずだから。
ふふふ、出発の時期を誤ったな、平民賢者よ！

ルイズのフライでぎりぎりまで近づいたところで、近くの町で小さな飛竜を買ったルイズとタダオ。
アンリエッタからの資金の大半を使うことになったが、ほぼ無休でたどり着いているので、宿代などがかかっていない。
ワルドの予想を超えて高速に移動できたのは、街道などを全く無視して一直線にアルビオンへの港の町へたどり着いたからだ。
もちろん、ルイズに内緒で「加速」の文珠を使っていたという事実もあるが。
その町で船に出向間際で間に合いそうになった二人だったが、手続きが間に合わず見送ることになった。
次の船は五日後だという。
これでは意味がない、と言うことで、飛竜を使おう、と言うタダオにルイズはまことに申し訳なさそうに言った。
「二人も乗れる飛竜を買うだけのお金を持ってきてないの」と。

いやいや、と首を振るタダオ。

二人とも着の身着のままなので荷物は軽減しているし、魔法を平行で使えば飛竜の負担も軽い。
自分たちも飛竜に捕まっているだけだから負担が少ない。
だから最大速度でたどり着ける飛竜なら何でもいいのだと説明すると、何となく納得していない様子であったが、理解はしたようであった。
この距離の強行軍だって、ふつうではあり得ない時間での移動だったし、見た目でタダオが消耗している。
正直な話をすれば、これ以上の無理はしてほしくない。
しかし、タダオの考える最悪の場合を現実とみると、急がない訳にはいかない。
だから、ルイズは渋々とその案を受け入れた。
では、どんな飛竜がいいかと買いに行くと、どれもこれも手の届くものではなかった。
どうしたものか、と首を傾げているところで、タダオが一匹の飛竜の前で立ち止まった。
体中傷だらけで、どこか反抗的な目をした飛竜。
いや、これは風竜だ。

「いやいや、そいつは言うこと気かねぇし、飯ばっかり食うからそろそろ処分するんでやすよ～」

瞬間、竜の視線が動いたのをみたルイズとタダオ。
同時に声を出した。

「「この子を買います！」」

竜としては二束三文でも、やっぱり高い竜。
旅費のほとんどを使ってしまったが、仕方ないと苦笑いの二人。

「とりあえず、この子を治すけど、水のそばまで移動した方がええな。」
「そうね、近くの湖まで行きましょう。」
「・・・・・」

事の変化について行けなかった風竜であったが、湖畔で治療を受けて驚いた。
その治療を行った魔法使いの少女の力も驚いたのだが、男の使った治療が驚きの本命であった。
何しろ、精霊を使っていないのだ!!

「きゅい！　なんで、なんで、なんでですのねぇ!?」

突然しゃべりだした風竜に驚いたルイズであったが、タダオはニヤリと笑った。

「やっぱり韻竜だったか」
「むぎゅ」

自分で自分の口をふさいだ竜であったが、もう遅かった。
何で解ったのか、と聞くルイズに苦笑いのタダオ。

「ほれ、タバサのシルフィードが韻竜でな。あいつと似た雰囲気だったから、たぶんってな」
「・・・むぎゅ」

力一杯自分の口を押さえている竜の頭をなでるタダオ。

「ほれ、ばれても平気だし、いじめねーから安心しろ」
「・・・ほんとですのね?」

「ほんとほんと」

そういいながら、ぎゅっとタダオが抱きしめると、なんとなく竜の顔がゆるんだ。

「・・・なんだか暖かくて気持ちいいですのねぇ・・・。」

力技で風の韻竜から信頼を得たタダオとルイズは、竜とともにアルビオンを目指すのであった。

「ほんとにびっくりよね。」

私はフライに集中しつつ竜の肩に捕まっていた。

確かにこの方法なら竜の負担を最小限に出来るけど、よっぽど優秀な竜と魔法使いじゃないと出来ない技であった。

「まぁな、さすがにシルフィードの妹とはおもわんかった」

雰囲気がにていると言われた、タバサの使い魔であるシルフィード（本名イルククゥ）は、なんと韻竜で、さらに召還に応じて家出した姉を捜しに来たそうだ。

で、お腹を空かせているところで捕まってしまい、誓約を刻まれて売られていたという。

余りにひどい話だったけど、ふつうの竜だと偽っていたからこそ今まで生きていられたのだろう。

もちろん、ぎりぎりだったけど。

「助かったのですね～、そのうえお姉さままで見つかるなんて幸運

なのですね～」

途中は別にして、アルビオンから往復すれば姉に会わせてあげる約束をした上で、誓約まで解放しているのだから感謝感激だろう。

「お腹もいっぱいなのですね～」

どうやら目先の充足感に満足しているらしい。

「ウルリリー、後どのぐらいとべる？」
「まだまだいけるのですね～、ルイズお姉さま。」
「ルイズでいいわよ」
「だめなのですねぇ！　お姉さまは有り金はたいて助けて食べさせてくれて治療までしてくれたのですね！　恩返しするのですね！！」

まぁ、食肉寸前だったんだから感謝もするかもしれない。

「全部、いろいろ終わってからにしましょう」
「わかったのですね～！」

非常に順調に私たちは白の国アルビオンの地を踏むことになった。

全く信じられない話だが、どうやら彼女たちはアルビオンに到着したようだ。
買った時、竜は半死半生であったと聞くが、湖畔で治療して飛び立ったと聞く。
もしかすると、水の精霊の加護かもしれないと思うと背中が寒くなる。

さらには、竜の大きさからみてアルビオンまで届く力はないはずなのに、偏在から国外れの森に竜で降り立ったという。
降り立った以降の情報は全く入らず、見失っているという。
どんな工作員なんだあいつ等は！！
たとえどんな事があろうとも、拠点は必要だし情報も必要だ。
そらなのに、酒場にも宿にも情報屋にも接触した痕跡が残っていない。
もしや、王宮に直接乗り込んだのか、とバカバカしいと思いつつ偏在を潜入させると、王宮は大広間は宴会場になっていた。
酒をあおる王侯貴族、芸をする怪しげな男、楽しそうに会話をするルイズとウェールズ。
これが劣勢の軍首脳かと言うほどに盛り上がり、笑いあっていた。
なんという機敏な行動。
これでは暗殺も出来ない。
せめて何か情報でも、と動いたところで消された。
気づきもしなかったタイミングで、背後から切りつけられた偏在は既に風になった。

平民賢者の噂は聞いていたが、ここまでとは思いもしなかった。
突然風竜に乗って謁見の間に現れた貴族と平民は、彼らの言うところ「たった二人」からなる「大軍勢」なのだそうだ。
送り出したのは愛しのアンリエッタ。
彼女が何も考えずに送り出すとは思わなかったが、さすがに二人の大軍勢と失笑してしまったのは仕方ないだろう。
が、彼らから示された反撃の方法案とその効果について提案を聞

いては動かざる得なかった。
とりわけ、内部の裏切り者についてはいぶり出す必要があるので、何重にも罠を仕掛けたのだが、かかるわかかるわ、王族派の三割が裏切り者であった。
この状態で戦っていたという事実に気づき、王も私も真っ青になった。
加え、歓迎式典と称してバカバカしい宴会を開いて見せたところ、更にレコンキスタに通じている軍人やスパイが現れたのが恐ろしい。
とりあえず露見しなかった裏切り者も含めると、総数四割になる。

「・・・逃げません？」

平民賢者タダオの意見は理解できる。
既に総数で負け、さらには造反者で兵数が負けているのだ。
どんなにがんばっても一撃も合わせればいいところだろう。
しかし、我々は、国民を平民を守る義務を負っている。
彼らの撤退が終わらなければ、我々も引くことが出来ない。
それを聞いたタダオは、目頭を指で押さえて上を向いた。
まるで涙をこらえるように。

「ウェールズ様、私どもは二つの命を受けております」

ヴァリエール嬢曰く、愛しのアンリエッタから「戦況への介入と改善」「末期戦場からの王子回収」の二つだという。
はっきりと言えば、既に戦況は末期であったが。
負けは決まっている。
今回の宴会すら、糧食をレコンキスタなどに渡さないために無理矢理消費したと思っている者も多いと聞く。
実のところ、そういう気分がないわけでもないが、この二人をみていると、そんな自堕落な気持ちが霧散する。

二人は「生きて」いた。
地に足を着け、前に向かい、全力で。
幼い判断もあるだろう、考えの足りないところもあるだろう。
しかし、二人は「生きて」いた。
前に向かって。

その姿に自分とアンリエッタを重ね、ウェールズは笑う。
何の仕掛けもなく突撃するぐらいなら、奇策の一つでも打って一泡ふかし、その上で生き残った方が向こうの損になるだろう、と。
そして、国を出た国民たちの依るべき代になるのではないか、と。
そんな私の肩をたたき、タダオが言う。

「あんたはオトコや。」

守るべきを守り、戦うべき時に戦い、そして戦い続けるべきタイミングを誤らない、それは戦士で「漢」だと。

「・・・わかりました、なら撤退を考えない抗戦で協力しましょう」
「よいのか、タダオ。」
「こっちとら、実力差が数百倍なんつうやつらと戦って生き抜いてきてるんすよ、日常っすよ、王子さん」

頼もしい笑いとともに私とタダオは乾杯をした。

「『銀生』ルイズが、見事その想いのお手伝いをさせていただきます」

後にアルビオンの聖女とまでいわれ、傭兵からは「銀の魔女」とまで言われる少女の出陣であった。

常に戦は力と言われている。
というか常識だ。
一対一ならば一般人でも魔法使いに勝てる要素がないわけではない。
しかし、二対一、三対一、四対一となるとほぼ不可能になるだろう。
魔法使いの詠唱という問題を考えれば、一般人がたこ殴りにしてしまうことは可能なのだ。
で、これが軍勢となると違うかというと、基本全く違わない。
現状、アルビオン軍一万五千に対して五万の兵力をブチ当ててきたレコンキスタは、戦略上の勝利を得ていると言っていい。
あとは実際の戦場で叩き伏せ、完全なる勝利を得ればいい。
それが戦争と言うものであった。
が、その戦場で、戦略をも覆す異常事態が発生していた。
戦功を焦って突出した船が、まるでフライの切れた魔法使いのように次々と落ち始めたのだ。

怒号と悲鳴、恐怖と狂気。

聞こえるはずのない絶望の声が、視界の範囲で広がっているようだった。
なにが起きたのか全く解らなかった諸侯軍であったが、兵たちの報告から、船が落ちる寸前に奇妙な竜騎が通り過ぎるという。
二人のりするには小さすぎる風竜に乗った男女が通り過ぎると、途端に船が落ちるというのだ。
本当になにが起きているのか解らなかったが、その風竜が視界の

範囲にはいると、誰もがおびえ逃げまどった。
戦列が乱れ、戦隊が乱れ、右往左往とする中、それがやってきた。

アルビオン軍。

思うがままに各個撃破した彼らは、未だ三万の兵力を持っていた
レコンキスタ軍を壊走させた。
希にみる大逆転である。
しかし、未だレコンキスタは三万の兵を内包していた。
が、その兵力は激減すること間違いなしであろう。
なにしろ、レコンキスタはすでに「加護」を失っていると判断さ
れているから。

まず、怒声だった。
あとは無謀と謗る声と冷笑であった。
提案した側であるウェールズですら正気を疑う内容であった。
曰く、
「絶対防御の障壁を張りつつ竜で接近し、風石を遠隔で「銀」に錬
金してみせるというのだ。
諸侯を納得させるため、いくつかの実験を見せたところ、作戦は
納得されたが、実行に戸惑いがあるという意見が集まった。
何しろ空の上にすむ方々だ。
まるで我が事のように思えてならないという。
が、ウェールズは声を大にした。
この戦功があれば守るべき市民の被害が最小になる、その間に我
々が切り崩せば、さらに守るべき市民の安全が高まる、と。
それを聞いた諸侯は感涙した。

たとえこの身が尽きようとも、国土と人々を守るためにと気勢が上がる。
すでに討ち死にの覚悟までしていた諸侯であったが、その覚悟は良い意味で裏切られた。
次々と落とされてゆく船。
その合間をくぐり抜け、矢も砲弾も跳ね返す二人の竜騎。
そして、混乱しつつある戦場に向け、王子は指揮をした。

「みよ、あれが神の加護を詠った賊軍のなれの果てである！」

全員が傾注していた。

「レコンキスタなる一司教の反乱ごときに始祖プリミルの加護はなく、ただ、翻弄されるだけだ！！」

まさに、今、大型戦艦が落ちた。

「我らには、たった二人からなる大軍勢がある。いとおしきアンリエッタの使いにして「銀生」と詠われたルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールが、「平民賢者」と詠われたタダオ・ヨコシマが、始祖プリミルの加護の元、いま、戦っている！！」

その声とともに、地上に落ちた戦艦が火柱をあげた。
そこに乗っていたであろう数百の人間の命とともに炎があがる。

「立て、諸侯の軍勢よ！　いまこそ愚かなる神の名を騙りつつ加護を失った者たちを蹂躙せよ！！」
「「「「「おおおおお！！！！！」」」」」

一万五千からなる軍勢は最精鋭であり、戦意は最高であり、士気は異常に高すぎるほどだった。
逃げまどう大戦艦を、我先に背を向ける戦艦を、未だ呆然としている船たちを次々に沈めていった。

地上に落ちた船、弐百。
アルビオン軍に落とされた船、一万九千。
数としては未だ劣勢のアルビオン軍であったが、レコンキスタの戦略は崩壊していた。

はじめ起きたのは傭兵の出奔である。
名もなき傭兵たちは、今回の契約の中で略奪や私掠が認められていたからこそ参加したという山賊崩れが多かった。
後一歩攻め込めば、アルビオンを根こそぎ喰ってやるとすらいていた傭兵もいたし、それは真実だと感じてもいた。
が、現実は全くの逆。
壊走、敗北、それしかなかった。
実際、兵力差は縮まったが、あの悪魔をどうにかしない限り「安全」を確保できない。

そう、正に悪魔であった。

矢がきかない、砲弾がきかない、飛びかかった剣士すらきかない、魔法もなにも通らない。
そのくせ、あの竜が通り過ぎると、何の損傷もないのに船が次々と落ちてゆくのだ。
正直、落ちた船の隣の船に乗っていた男は、落ちてゆく仲間の視

線が今でも離れないと震えている。

船で戦う人間といっても、落ちることはある。
が、戦闘も何もなしに、開戦の声も聞かずに落とされる恐怖というのはどんなものだろうか？
いや、少なくとも落ちはじめはなにも感じないだろう。
しかし、刹那、いや、鼓動が数回動く頃にその恐怖が理解できる。
あげろあげろと叫ぶ声が響いた。
助けてくれと叫ぶ声が聞こえた。
ただ悲鳴だけが響きわたるという人間もいた。
だが、傭兵たちは考える。
今度であったら死ぬ、と。
あいつらは戦いで何をやって良いか悪いかもわからない小娘たちであったが、それ以上に何にもとらわれない自由な狂気がある。

「あの悪魔、ラ・ヴァリエールらしいぜ」
「・・・げ、あの？」
「ああ、それも「烈風」と言われたあの悪魔の娘らしい」
「・・・まじかよ」
「二つ名は「銀生」。」
「・・・おい、ちょっとそりゃまずいぞ。」
「・・・どうした？」
「落ちた船を調査しに行った調査隊が、なぜか大量の銀が散らばっていて、それに平民たちが群がって居たって言う話だぜ・・・。」

震える男たち。

「まさか、船を、すれ違う瞬間に「銀」に錬金したのか？」
「うっそだろ？」
「・・・やべぇよ、今回はやべぇ。」

「・・・・」

正に、銀生に対峙した瞬間、自分の全身が銀にされた事を思った男たち。

「ずらかろうぜ？」
「ああ、ここにゃぁ明日がねぇ。」
「地道に山賊してた方が、まだまっとうだ」
「「「「ちがいない」」」」

こんな会話が随所で行われ、レコンキスタ軍は一晩のうちに一部を除き崩壊した。

レコンキスタへの欺瞞行動から帰ってきたタダオたちを待っていたのは、今回の戦功を目の前にして増援を決定させたトリステイン王国軍とその先頭に立って現れたアンリエッタ王女であった。

「ああ、ルイズ、私の友ルイズ。あなたはいつも私の想像を遙かに超えることを見せてくれます！！」
「姫様、未だ敵は残っております。ここで気を抜くことはできません」
「そうだよ、愛しのアンリエッタ。君がなぜ先頭を切ってやってくるんだい？」
「愛するウェールズ様と真なる友ルイズが戦場にたっているのです。ならば私もたたぬ訳には行きません！！」

この言葉にアルビオンの諸侯は無茶苦茶感動していたが、トリステインの王国軍は結構あからさまにゲンナリしていた。
その筆頭こそ、タダオにも面識のあるグラモン将軍であった。

「よくもやってくれたな、「平民賢者」」

怒りを秘めた笑顔のグラモン将軍居両手をあげるタダオ。

「王族の命っすよ？　逆らえませんって」
「それでも私たちに相談ぐらいはできただろう？」
「だーかーら、ラ・ヴァリエールには一報入れてます。」
「・・・たしかに、だからこそ派兵が決定したようなものだからな・・・。」

視界の端で、すでに沸騰しているラ・ヴァリエール公爵および公爵夫人。
あまりの怒りに周囲に空間があいている。
さすがのタダオも近づきたくなかった。
正に、サーチアンドデストロイを地でゆく視線を避けようとグラモン将軍の陰に隠れていたが、どうやら見つかってしまったらしい。

「「ターダーオー？」」

やばい、ころされる、本格的にそう感じたタダオであった。

オリバー・クロムウェルは悪夢の中にいるかのように思っていた。
次々とはいるレコンキスタ離脱の報。
一晩にして消えた傭兵隊。
諸侯であふれていたはずの軍議には、目端の利かない貴族しか残っていないのが丸分かりであった。
あれだけ金をばらまいても、あれだけ地位を約束しても、そこに残ったのは屑ばかりであった。
撤退すら、いや、金を持って逃げることすら出来ない状況にまで追い込まれたことを自覚したクロムウェルであったが、実のところ未だ楽観ししている部分があった。
雑兵とはいえ二万は居るであろう兵を正面からぶつければ、なんとか勝てるだろうと。
あのような異端な貴族など「異端審問にかけるべき」と書状を送った旨発表すれば、空中戦は回避され、純粋に数の勝負になるはずだと。
ならば負けまい。
そう発言したところ、追従が集まり、そして作戦は実行されることになった。

もちろん、それは破滅への序曲である。

『銀の聖女

それはそれは珍しいことに、ある日天から沢山の銀が降ってきました。

本当に本当にいっぱいの銀だったので、何か悪いことがるのでは、と思っていた人々でしたが、それは良いことでした。

天の国にいらっしゃる「銀の聖女」様が、戦乱で貧困喘ぐ人々にとても素晴らしい銀を錬金してくださったのです。

平民たちはその好意に感謝し、等しく手に渡るように教会を頼ろうとしましたが、そこに現れたのは不信心な魔法使いでした。

「はーはーはー、天からの贈り物ならば天に等しい力を持つ我ら貴族様が独占するのが習わしだ！　すべてよこせ！」

貴族に率いられた軍勢が迫る中、人々はあきらめにも似た気持ちで銀を差しだそうとしました。

しかし、天は民を見捨てない。

一条の光とともに現れるのは、幼い竜と一人の騎士を従えた「銀の聖女」。

「その銀は、われが民に与えた愛なり。その薄汚き手を離すがよい！！」

光輝く聖女様をみて、人々は頭を垂れましたが、心卑しきものにはそれを感じることが出来ませんでした。

「かっかっか、でたな「銀の悪魔」！　我々の元に鎖でつながれて、生涯銀を作り続けるがよい！！」

襲いかかる軍勢。
しかし、彼女の騎士が、竜が、いっさいの攻撃を阻み守る。

「我こそは、聖女の剣！　我が友なる竜と共に聖女を守る盾なり！！」
「ギシャーーー！！！」

万をも越える兵たちを払いのける騎士の背後で、聖女は声を上げます。

「愚かにして心卑しき貴族よ、ソナタ等の本来の役目を忘れ享楽にふけるその行為を恥じて死ぬがいい！！」

声と共に現れたのは、全身を金色に輝かせた天の兵、いや、民と人々の生活を守るために戦い続けた「白き国」の兵たちであった。

「我らの民を守るため、人々の心を守るため、ハルキゲニアのすべてのために、我らは悪を撃つ！！」

金の兵団をまとめるのは白の国の王子。

「我らが民のため、愛する人々のため、我らは卑しきものたちを許さない！！」

金の兵団と共に現れし、白の国の姫。

「「いけい、我らの正義を、正しき加護をみせてやれ！！」」
「「「「「おおおおおお！！！！」」」」」

金色の剣が槍が矢が、邪なる貴族たちを打ち据える。

しかし、悪しき貴族もまた貴族。
大きな力を持って金の兵団を押し返す。
まさに膠着状態となったところで、銀の聖女の祈りが天に届いた。

降り出した雨。
しかしそれはただの雨ではなかった。
断罪の滴と言われる聖なる雨。
罪人はその罪を焼かれ、心清き者には何も感じない、まさに奇跡の雨。
まるで塩をかけられたナメクジのように、悪しき貴族たちは溶けていきました。

「このままではおわらさん、このままではおわらさんぞ！！」

悪しき貴族は最後の力を振り絞り、極大魔法をしかけます。
ですが、白き国への援軍、「疾風」とまで言われた英雄がそんなことを許すはずもありません。

まるで世界の中心のような竜巻が悪しき貴族を襲い、そこには何も残りませんでした。

民はその力をおそれましたが、聖女は言いました。

「心安らかにいきなさい。平和に、心安らかにいきられることこそが、本当の奇跡なのです」

そうして、聖女は、悪しき貴族の鎧などを練金して銀とし、民に与えて天に帰りました。

めでたしめでたし

』

戦後処理というものは何時も恐ろしく手間がかかり、その上で気持ちの明るくなるものではない。

オリバー・クロムウェルが残した傷跡は、アルビオン王国の屋台骨を揺るがすほどであった。

さすがに国庫を空にするまでではないが、来期以降の収入は激減していることを考えると頭がいたい。

そんな折り、協会経由で「銀の聖女」という童話の出版と戯曲の制作に関する許可を求める話がきた。

このほどのアルビオン攻防の一部を、子供に分かりやすい話と演劇にして、民衆に周知したいという求めであった。

内容をみると、オリバー・クロムウェルのオの字も入っていないものであったが、逆に、権利料として提示された金額は「口止め」であることを納得させるにふさわしい金額であった。

「しかし、我が友タダオは多彩だな」

この話は間違いなくタダオが書いたものだと、確信している。

そして戦争に疲弊した我が国を助けるために、今度はこんな形で援軍になってくれたのだ。

たった二人からなる大軍勢。

子々孫々まで語り継がなければならないな、と苦笑いのウェールズであった。

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０２（後書き）

総量、１万五千文字前後。
３１ｋバイトって、一気に書く量じゃないよねーｗ

とはいえ、何話も続くのもどうかと思うので一気に書きました。

１／７　なおしました、いろいろと
取り合えず、好評なら外伝を独立させようかなーとか考えているのは秘密です。

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０３（前書き）

ひさしぶりの　よこしまほらｉｎゼロ魔
書いていなかった訳じゃないのですが、出しにくい状況でした。
とりあえず放置は無いだろうということで書きました。

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０３

「ありゃー、聖女とか魔女とかじゃねーよ。」

父はアルビオン軍分隊隊長であった。

隊長であるときは随分と規律正しいらしいのだけれども、家に帰るとこんな感じだったりする。

だから、ちょっとお願いして「銀の聖女」の話を聞かせてもらったら、先日の歌劇「銀の聖女」の前後の話を聞けた。

たとえば、空から降ってきて民を潤した銀というものが、元々敵勢力の船だったことや、祝福された黄金の鎧というのが、鎧表面を練金で「金」にされたものであったものだとか。

なぜ完全に金にしなかったかを誰もが聞いたところ、彼女は苦笑いで謝る。

「ごめんね、作戦上「金」じゃないといけないんだけど、あたし、ほら、「銀生」だから・・・。金、苦手なのよぉ。」

あはははは、と笑う姿は年相応の少女であったという。

しかし、すでに「平民賢者」から「純金にもできるけど、それでは重すぎるので却下」と聞かされていたので、ささやかな嘘だと理解できた。

自分の力量不足といいつつも、元々の鎧の部分と金の部分がきわめてよく混ざっており、実に具合が良かったという。

苦手は嘘で、みんなの緊張を解いてくれた笑顔。

ああいう娘を聖女とかいって祭り上げたらだめだ。

父はそう語った。
もちろん、冗談好きの父だから何割か嘘があるだろう。それでも父から聞いた聖女様の方が好きだと思えた私であった。

きけば、アドバリンの指輪っていうのは、かの湖の精霊の宝物だという。
で、その精霊の臍を戻せず困っているモンモランシ家に返還をさせようとタダオが提案すると、それを聞いたモンモランシーは感激で泣いていた。
干拓の失敗や事業展開の失敗で没落寸前、学校を出たら金持ち貴族の妾になるしかないとまで追いつめられていた彼女にとって、奇跡的反撃といえた。

そんわけで、グドリアン湖にやってくる一行。
モンモランシー、ギーシュ、ルイズ、タダオ、タバサ、キルケ、韻龍姉妹。
さすがに妹には大人数が乗れないので、タダオとルイズが乗り、残りはシルフィードで移動となった。

指輪の返還は行われ、その功績でモンモランシーは交渉人の役目を引き受けることができた。
感激とともに泣き崩れたモンモランシーであったが、それを優しくギーシュが支える。
かなりよい光景といえる。

「・・・って、尻なでるな!!」

「ああ、モンモランシー、ここで蹴りはないよ・・・。」

結構いい関係?

「で、精霊。水かさは下がるんだよな」

タダオの問いに精霊は答える。

「・・・ふむ、よかろう。元まで戻せばいいな?」
「ああ。んじゃ、よろしく。」
「待つがいい、希なるもの。」
「・・・おれ?」
「そうだ、希なるものよ。」

タダオに手を伸ばした精霊は、姿を変えた。
何となくスレンダーだけど、優しそうな女性に。
一瞬、ほんの一瞬、泣きそうになったタダオは、みたこともないような怖い顔になって、水の精霊を切り裂いた。

「・・・誰でもいい。その女を汚す奴は殺す」
「すまん、ソナタの心の奥にいた女なので、喜んでくれると思ったのだ」
「・・・人間の心の機微がわかんねーなら、二度とそんな真似をするな。」
「・・・わかった。」

水の精霊は、今度はなんというか、腹立たしい体型の女性の形になった。

「これならよかろう?」

「・・・合格！！」

さっきのスレンダーな女性の方がいいと思うけど？
そう思ったけど、さっきの怖い顔を思い出して飲み込んだ。
たぶん、最初の女性は、タダオにとって命に代えても守りたい人なんだろうって。
でも、私はその人から引き離してしまったんだ。

使い魔召還の儀式で。

・・・どうしよ、タダオはこんなに優しいけど、あの優しさの奥で、あんな怒りを秘めていたんだ。
どうしよう、どうしよう、タダオはあんなに怒ってる。
私をあんなに怒ってる。

どうしよう・・・・。

ルイズの様子がおかしい。

つうか、なんか俺を怯えた目で見てる、気がする。
なんか悪いことしたか、俺?
とりあえず聞いてみると、「ごめんなさい」といって泣きながら駆け出す始末。
わいはなにをしたんや!!

そんな悩みとともに、宿で月を見上げていると、寝間着を着たルイズが現れた。
目の下に隈を作っている。
どうやらずいぶんと眠っていないらしい。
悩みに悩んだ末に、ここにきた、そう感じた。
だけど、まずは謝らないといけない。
可愛い女の子をここまで悩ませたのは自分なのだろうから。

「「ごめん!!」」

それは同時に行われた。
驚いて見つめあうルイズとタダオ。
先に口を開いたのはタダオだったが、すべてを押さえてルイズは頭を下げた。

「大切な人と、別れ別れにして、召還してごめんなさい」と。

それを聞いてタダオは、横島はうれしくなった。

ルイズが今まで感じていた以上の優しさを持っていることを知って。

だから、本とのことを教えた。

最初に水の精霊がまねた姿の名は「ルシオラ」。

心底愛して、そして守ろうとして守れなかった恋人の名前。

信じられないほど短い間だったけど、愛し合えたことだけは間違いなく、そして忘れ得ぬ思いでだということ。

加えて、ルイズの召還がなければ、何者も存在しない虚無に落ち込んでいたはずであった。

だから、ルイズの召喚で助かったんだと。

何度も何度もゆっくりと聞かせ、そして腕の中でルイズの寝息が聞こえるまで横島は撫で続けたのであった。

タバサの頼みをきき、一行は対岸のガリアにわたった。

なんでも、タバサの母親が病気療養中だそうだ。

ちいねえ様の病気を治した話をしたら、どうしてもタダオにみてほしいと懇願してきた。

治らなくてもいい、みるだけでも、と懇願されては断れない。

キルケも同じように頼んできたのが印象的だった。

通された部屋には青髪の女性が体を起こしていた。

でもその瞳はなにも写していない。

どこでもない何処かを見ているのがありありと分かった。

その姿を眺めた後、タダオは少し光る手を女性に当てた。

じっと何かを考える風だったタダオは、タバサに向かって笑う。

「どうにか出来ると思うで。」

タバサは泣き崩れた。
それを支えるキルケも泣いていた。
家族の回復は、それほどにうれしいことなのだ。
私もそのことを知っているだけに、共感してしまい泣いた。
ああ、タダオ。あなたはいつでも奇跡を見せてくれるのね。

それは、そう、幻想的な風景だった。
タダオの周りを巡る光珠が、時間を追うごとに数を増し、数えることが不可能なほどになった。

「これから回復を始める。」

そう呟くと、タダオは右手を女性の額の上に重ねた。
同時にみみなりがする様な音が響く。
誰もが目を閉じて耳をふさいでいる所で、タバサだけがタダオと女性を見つめ続けていた。
この光景を絶対に忘れないように、と。

光の洪水のような光景が暫く続いた後、視界が急に真っ暗になった。
いや、全ての光が止んだのだろう。

視線の先には、疲れていながらも満足そうな笑みを浮かべるタダオと、呆然と両手を見詰める女性がいた。

「・・・シャルロット？」

無言で泣いたタバサが女性に抱きついた。

私たちとタダオは、ゆっくりと音も立てないでその部屋を後にした。

母親の記憶が戻ったのだから、名前を戻せば良いのに、今までどおりに呼んで欲しいというタバサ。

まぁ、本人の希望だしということで聞き入れると、彼女は俺に騎士の礼をとった。

「この身命をシュバリエの名においてささげる」

「まてまてまて！」

とりあえず、恩返しで身命捧げちゃだめだろ、と説得するが全く聞き入れる様子がない。

「タバサ、とりあえず、実家もタダオを狙ってるわ」

「・・・私は騎士として従属するだけ」

「つまり、誰が本妻になっても絶対にはなれないって事？」

「（コックリ）」

こえーーーー！！

思わず内心引いちゃったよ俺！

この重量級のボディーブローはおキヌちゃんか、小竜姫様かという重さ。

怖すぎじゃい・・・・。

で、ここにいたる恐怖を感づかせないまま外堀を埋めるのが千鶴ちゃん。

こっちは恐怖を覚える前に撤退不能になっているというどん底。

おれ、よく生きてたなぁ・・・・。

思わず溜息のルイズは、俺に向き直った。

「とりあえず、タバサの意思は硬いわ。お母さんの処遇もあるし、暫くはヴァリエールで預かろうと思うんだけど。」

「ええとおもうで、ルイズ。さすがやな」

俺がルイズを撫でると、まるで猫のように気持ちよさそうに目を閉じた。

うーん、かわいくなったなーうん。

「ね、タダオ。ヴァリエールもありだけど、うちもありじゃないの？」

「・・・ああ、せやな。ツエルプストーに頼めるんか？」

うんうんと頷くキュルケを、思わず撫でると、キルケもなぜか目を閉じた。

感覚的に大型犬が気持ちよさそうにしている感じだ。

ん？　タバサもか？

「ん」

擦り寄ってきたタバサを撫でると、タバサも気持ちよさそう。

んー、なんだかカトレアさんのところの動物王国だなぁ。

「なんか、ちぃ姉さまを思い出すわ」

「わいもや。」

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０３（後書き）

久しぶりの　よこっち＋ゼロ魔、いかがだったでしょうか？

お楽しみいただければ幸いです

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０４（前書き）

よこしまほらｉｎゼロ魔です。
こっちのルイズはインテリ系研究バカです。

というか、原作のルイズって、よほどナニだったんですねぇｗ

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０４

偽装は必要だった。

まず、タバサ自身が明かした話によると、彼女の血筋はガリア王家直系で、王弟の娘にあたるそうだ。

で、反乱を企てた王弟、不名誉印を押された紋章、離散した家臣、そして国家の裏仕事に使役される従妹姫。

母親の病状を盾にされ、心を凍り付かせて従事する使命。

心のより所などない毎日。

それがタバサ、だった。

しかし、母親が救われた今、彼女はガリアに縛られるつもりはなく、早々に縁を切ることを宣言した。

そして、その状況を作ってくれたタダオに感謝の意味を込めて従者の誓いをしたのだけど・・・・

「・・・とりあえず、タバサ。これ、私の使い魔」

「・・・私の主」

「「・・・・・」」

はいはい、とりあえず、ガリアだます偽装するわよ。

「「「は～い」」」

なんだか家庭教師みたいじゃない、私。

とりあえず、屋敷は焼く。

これ決定。

「あー、それよりも良い話があるぞ？」
「何々、タダオ？」

忠夫の話を聞いて、本気で驚いた。
そんな偽装方法があるだなんて。
証拠を隠滅するんじゃなくて、星の数ほど証拠を並べる、そんなアイデアにみんな驚いていた。

ガリア国内、貴族たちはある噂に酔っていた。

それはある貴族の別荘でのこと。
まるで数分前まで人がいたかのような、そんな別荘。
飲みかけのお茶、そろえられたソーサー、準備中の朝食、朝湯の準備は進められていて、庭先の木々が途中まで刈られている。
その横には、一休み用の茶が。
ほんとうに、本当に、ついさっきまで人がいた、そんな風情の別荘に誰もいない。
誰もいなくなった別荘。
どこの誰が、どこに消えたかも解らない怪奇。
その別荘には不名誉印が押されているという。

まさに、怪奇。

明らかに嘘っぽいながら真実が見え隠れしており、その分析や真相当てが先行して、誰が消えたのかす等消えてしまっている。
状況見聞した兵たちは貴族の夜会に呼ばれ、小金と食事を得て貴族たちの興味をさらにわきたてた。

湖の畔の秘密の別荘怪。

まさに、今一番ホットな話題であり、王宮で最も避けたい話であった。
この情報が隣国に伝われば、あの少女を押さえる手がなくなるという事だから。

「ま、知ってるんだけどね。」

ガリアの宮廷情報をまとめた報告書から視線をあげた俺は、隣のルイズを見る。
どうも金属素材を構造化して強度を上げることと軽量化することを思いついたらしく、どんな構造が一番堅いかを悩んでいる。

もちろん、むちゃくちゃ楽しそうに。

紙スキで作った和紙もどきは、現在ヴァリエール領の産業基盤となりつつあり、かなりの発注を各所から得ている。

ロマリアからの発注は枚数単位ではなく重さで発注があるほどで、そろそろ支払いがしきれずに「恫喝」がくる頃だろうと公爵が笑っていた。

つまり、「異端審問」かけられたくなきゃ紙代安くしろ、もしくは「寄進」しろ、と。

で、金自体は支払ったことにして、差額はぽっけに入れるという最低さを見せるのも間違いないだろう。

どこも腐ってるなぁ、と苦笑い。

勿論、そんな裏側を敵対指導者にリークして賄賂を渡しつつ価格を引き上げるという繰り返しを行って、無能な部下を間引きしましたと上司に恩を売る、というわけだ。

なんとも泥臭い話だが十分に理解できる話だった。

産地直送のせいか、ルイズには大量の研究用紙が送られてきており、学院内で試作した鉛筆と消しゴムをつかって超集中だったりする。

鉛筆と消しゴムはコルベール先生と共に開発したもので、研究開発費用と協力費として莫大な金額がヴァリエールから先生に支払われたとか。

それを補ってもあまりある収益があるものとヴァリエールは踏んでいるわけだ。

間違ってないだろうなぁ、と思う。

「ほれ、ルイズ。消しカスが髪の毛にたまっとる」

「ん～、とっといてぇ・・・。いまいいとこなの・・・」

こんなのカリーヌさんやらエレオノール三には見せられんなぁ。

「・・・よし！　どうどう、これでいいんじゃない？」

それは丸く肉抜きされた鉄板構造。
確かにありかもしれないけど、正解には遠い。
微妙に近いんだけど。

「もう一ひねりすると、もっと強くなるで」
「・・・ぐぅ！　でも、正解一歩手前なのね？」
「せやな」
「よーーーし！！」

胸を張るルイズの肩をたたく。

「そろそろ夕食や、一区切りして、風呂はいって、肩に入った力を抜かんとな」
「・・・んーー、わかったぁ。」

不満はあるが、自分でも煮詰まってることがわかっているのだろう、不承不承ながら席を立つ。
俺はブラシ片手に髪を整え、消しカスを取り除く。

「タダオありがと」
「いやいや、ご主人様にゃぁ、いつでも美少女でいてもらわんとな」
「・・・もう、からかってばかり」

苦笑のルイズと共に、俺は食堂に向かった。

学院の女子寮に泥棒が入った。
被害者はヴァリエール。
金品ではなく、数枚の絵だという。

「なに盗まれたのよ？」
「構造研究用の下書き」

意味不明。

とはいえオールド・オスマンに申し出たところ、大事にしないことを忠告された。
それってつまり・・・・・

「異端審問かいな？」
「その可能性が高いのぉ」

何とも下世話な存在だ。
で、何でそんなに余裕なのよ、ヴァリエール？

「だって、あの下書きから何かを説明できたら、そもそも異端であることを常に考えているって事で、説明できた方が異端よ？」

・・・うわぁ・・・

なんて達の悪い女になってるのかしら、この娘。

「せやけどなぁ、あれを持ち出されたのは気分わるいで。鉛筆と消しゴムの方が価値高いのになぁ」
「ま、わからない人間にはわからない。そういうものでしょ？」
「そういうもんかもしれんなぁ」

肩をすくめる二人は、被害届けを取り下げることにしたそうだ。
とはいえ、いやな事されるのも気分が悪いので、枢機卿経由で内緒で抗議してもらうそうだ。
この二人はいわば救国の救世主だ。
そんな人間を異端審問しようなんてバカはいないと思うけど、自分御権益を守るためならば、と命を懸けるバカは少なくないわけで。

安価な紙の開発や筆記具の開発による納税は莫大な額になる。
ロマリアからの横やりなどで潰せるものではないだろう。
勿論、ヴァリエールでなければ家を潰して言うことを聞きそうな貴族に引き継がせるという手もあるが、王位継承順位すらあるヴァリエール相手にできる話ではない。
ロマリアの異端審問官か、有望な貴族かと言えば、どちらを取るかなどわかりきっている。
ロマリアにだってプライドはあるが、無理難題をいえる相手ではないことだって理解できるだろう。
もし、今のロマリア教皇と事を構えることとなったとしても、次世代の教皇と後ろ手でとを握れば良いだけなのだ。

その程度の強かさは、十分に持っている二人だった。

いいなー、わたしもタダオほしいなぁ・・・。

「ね、ルイズ。タダオかして？」
「・・・あんた、借りてそのまま自分のものにする前歴あるわよね

？」

「・・・あはははは」

いやー、もう、あれ。

異端審問官ってバカね。

乙女の部屋に侵入して手に入れた証拠だって、胸張って大々的に自慢しに行ったらしいわよ、うちに。

で、異端の証拠として出したのが、丸での肉抜き構造思案図。

ただ、ほんとうに単純に一定間隔で丸が書いてあるだけの、それだけの紙。

それを、わざわざメイジを雇って学院に不法侵入して、勝手に人の部屋に入って、なんだかよくわからないから盗んで異端。

話を聞いたとき、本気？　と笑ってしまった。

で、お父様も大爆笑。

この図は、切り絵の下書きだろう、と。

切り絵というのは着色された色紙を一定間隔でいろいろと貼って絵にしたてる遊びで、貴族社会に流行らせようとしている遊び。

使うものが結構高額な紙なので、贅沢さもあるという価値もある。

まぁ、ふつうそう思うわよね。

さすがにお父様も材料工学なんかわからないだろうし。

そんなわけで、あまりにもとんでもないことをしでかしたという事で、公爵家王家ばkりではなく枢機卿からも厳重注意が教皇宛に送られ、その異端審問官は罷免されたそうだ。

「全部終わってから聞いても、つまらないわ、ちぃ姉様」
「だって、ルイズやタダオが動いたら、戦争になっちゃうもの」

ちぃ姉様とは思えない毒々しい話だけど、・・・否定し切れません。

いやだわ、一般的な貴族のつもりだったのに、何でこんなにまで物騒な評価になったのかしら？

「自業自得やな」
「タダオが言うな」

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０４（後書き）

これから暫くは、小さな事件の積み重ね、になる予定です。

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０５（前書き）

えー、こう、なんというか、盛り上がってしまって・・・・ｗ

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０５

ちい姉様が学院に遊びに来て三日ほどがたった。
聞けば、学院の教務員として採用される流れだそうで、私も結構嬉しかった。
そんなことをエレオノール姉様への手紙に認めたら、なぜか翌日学院に姉様が現れた。

なんで？

「カートーレーアー？」
「あらお姉さま、ご機嫌うるわしゅう」
「うるわしいわけないでしょ、あんた、抜け駆けとは良い根性じゃない」
「あらあら、おかしなことをおっしゃいますわね、お姉さま。ぬけがけ、とは何に対しての言葉ですか？　私は、ちいさなルイズを心配して、公職に就いていない自分で有れば見守ることができるであろうと、そんな思いでここにきたんですわ。」
「・・・ぬけぬけと、よくもそんなことが言えるわね！」
「あらあら、正論だと自負してますわ」

なぜか、姉様二人がにらみ合ってます。
タダオを挟んで、タダオの左右の腕をとって。

「タダオほどの賢者を、ただの次女に任せる分けないでしょ！？知性ほとばしる私が似合ってるわ！」
「あら？　お姉さまはご存じありませんの？　私の病気を治療できた者に私を嫁がせると、お父様は宣誓してますのよ？　始祖の宣誓をないがしろにするおつもり？」

えーっと、なんでかなぁ、うん。タダオが死にそうな顔をしてる気がする。

「宣誓？　そんな者に縛らせるつもりはないわ！　使い魔であり賢者でもあるという複雑な立場のタダオには、公爵家の跡取りである私が、わ・た・く・し・が、ふさわしいのよ！」

えー、と、そのー、タダオは私の使い魔、よね？

「お姉さま、お言葉ですが、タダオは私の命を救ったばかりか、救国の英雄となったお方。国に直接仕えるだけの権利を持った勇者ですわ。一、貴族の家柄に独占させる類の者ではありません。しかるに、家を背負わぬ私ならば、タダオの妻にふさわしいですわ」

あ、あれぇ？　そのぉ、あのぉ、タダオのご主人様は、そのぉ、私であってぇ・・・。

「カトレア、あなたとは一度本格的に話をしないといけないようね？」

「お姉さま、相互理解のための時間ならいくらでも・・・」

二人の間で火花が散った瞬間、するりと腕を抜いたタダオが、二人の頭にげんこつを落とした。

あれ、痛いのよね・・・・。

「あのな、二人とも。俺を好きだって言ってくれるのは嬉しいんやで？　せやけどな、目の前の末っ子が泣いてるのに気づかんお姉ちゃんちゅうのはどんなもんや？」

「「っ！」」

え、なになに？　誰が泣いてるって？

「・・・ごめんなさい、ルイズ。醜い姉妹喧嘩をあなたの部屋でしてしまって」

「ああ、ルイズ、小さなルイズ、ごめんなさい。あなたのことを一番大切に思っているのは間違いないのよ？」

エレオノール姉様とちぃねえさまが、優しく私を抱きしめてくれた。

そう、私は気づかぬ間に泣いていて、それに誰も気づいてくれないことがさらに悲しかったのだ。

タダオだけだった。

気にしていてくれるのがこんなににも嬉しいと思わせてくれるのはタダオだけだった。

でも、お姉さまたちがタダオと結婚したら、使い魔って立場はどうなるのかしら？

タダオって呼べなくなっちゃったら、少しイヤかもしれない。

初めての、本当に初めての想いだった。

いつでも生をあきらめていた。

いつでも日常をあきらめていた。

傷つき倒れた動物たちを保護することで、子供を産めない寂しさを紛らわしていた。

小さなルイズを抱きしめることで母親になれない残念を晴らして

いた。
でも、そんな小さなルイズが私を救ってくれた。
小さなルイズがつれてきた、大きな背中の男の人が、私を救ってくれた。
彼の名はタダオ。
ルイズが使い魔として召還してしまった人間の男性。
始祖の魔法の使えない平民の男性。
でも、彼にはとても不思議な力があった。
始祖の魔法でも先住魔法でもない、とても不思議な力。
そして、誰にも理解できないような不思議な知識。
このおかげで、ルイズは「ゼロ」とまで言われた魔法成功率を、魔法失敗率「ゼロ」に塗り換え、さらにはアンリエッタ姫から「銀生」の字まで受けた。
この力による快進撃は、アルビオンまで届き、貴族派の軍勢を切り崩した「銀の聖女」としての名までなしてしまった。
そう、いま、タダオの隣に立つ女性として一番近いところにいるのは、小さくかわいいルイズなのだ。
公の貴族の立場は公爵家三女という、重くも軽くもない立場。
魔法はすでに国の内外に届く名声を得ており、「平明賢者」タダオの一番弟子にして国立研究所すら唸る発想の持ち主。
知力・立場、そして関係からすれば、私たちはルイズに太刀打ちできない。
そんな焦りはあった。
でも、始祖の宣誓があるのだ、という事実にすがるしかなかった私は我慢できなくなった。
お父様に聞いても、お母様に聞いても埒があかない。
自分で動くしかない、と思った。
そして今は、その想いを支えるにふさわしい健康な体があるのだから。
今ならば、母になることができる。

今ならば、子を産むことができる。
今ならば、大好きになったあの人の隣にたてる。

そんな、ほんとうにそんな想いの暴走のせいで、ルイズを悲しませてしまった。
かわいいかわいい、大切な、小さなルイズを。
自分の思いに振る舞わされて、大切な子を忘れてしまった。
・・・こんな私に母になる権利など有るのだろうか？
・・・こんな私があの人の隣に立って迷惑じゃないだろうか？

・・・ああ、ルイズ、ごめんなさい。
あなたを、あなたを大切に思う気持ちにかげりはないの。
それだけは信じてほしい。

・・・何てことかしら。
こんなことじゃぁ、行き遅れが焦ってるだ何て言われても反論できない。
いや、焦ったいたのは事実だから反論なんかできないのは当たり前だった。
ろくに役に立たないプライドなんか捨て去って言えば、タダオを誰にも渡したくない。
そう、誰にも。

初めは知的好奇心だった。
彼の知識、彼の語る「科学」、彼の語る「霊力」、彼の語る「精

霊力」。

いちいちもっともな内容なのに、なぜ今まで私たちはこの力を手にできなかったのだろうか？

その答えをあれはこう語った。

「ブリミニつう呪いやろ」

不敬、とは思わなかった。

そう、異端審問という足かせが重すぎたのだ。

そして、ロマニアに不都合なことは全て異端とされるようになってしまえば、新しい技術など生まれるはずもない。

そんなこの世界、彼からみればどんな世界なのだろうか？

これもまた端的に聞いたところ、今度の答えはすごかった。

「高位の宗教家が考える、宗教家にとっての楽園やろな」

従順な平民信者、無限に寄進を続ける貴族、そして権力闘争をしても失わない信仰心。こんな楽園があると知れば、あらゆる世界の宗教家がこぞってやってくる日がいない、と苦笑い。

つまり、私たちは宗教家に搾取されている哀れな羊に見える、ということだろうか？

彼の言葉は、実に反ブリミル的であるが、物事の理からすると真っ直ぐだった。

そんな彼の心根が現れている話を聞いているうちに、ある種の違和感を感じた。

いつもいつも、私が会話していると感じる相手の嫌悪感がないのだ。

理由はわからなかった。

しかし、タダオと話していると、気持ちよい空気のままでいられ

た。

なぜかわからなかった、何でかわからなかった。

でも、わかってしまった。

理解してしまった。

ルイズからの、タダオの隣にカトレアがいるという手紙を見た瞬間に、私は理解してしまった。

そう、私は彼に恋しているのだと言うことを。

立場とか、爵位とか、そんなことは全く関係ない。

いつもいつも、傷つき続けた私の心が彼を求めているのだ。

今までとは全く違う吸引力で。

今までとは全く違う加速度で。

私の心は彼に、猛烈な速度で近づきたがっている。

・・・お父様、お母様、エレノオールは覚悟を決めています。

私の覚悟がそのまま実れば、もしかすると初孫をお目にかけることができるかもしれません。

「ねー、タダオ」

「なんや？」

「姉様と結婚する？」

「できんやろなぁ」

「なんで？」

「まず、わいは平民や。地位が違う」

「でも、その辺はどうにでもなるって、姉様たちは言ってたわよ」

「あとな、結婚てのは、愛し合うもの同士がするもんやろ？」

「タダオって、結構乙女だったのね」
「理想はそういうもんや」
「でも、姉様たち、タダオのことが好きよ？」
「・・・ルイズ、おまえはしっとるやろ？」
「うん、ごめん。わかってたけどね。ちょっとだけ期待してたの」
「なにを？」
「このままね、タダオがこの世界にい続けてくれて、姉様と結婚してでもいいから、一生そばにいてくれるかな、なんてね」

すうっと息を吸い、そしてほほえむ横島。
伸ばした手でルイズの頭をなでる。

「できるだけ長く一緒にいることだけは約束する」
「うん、約束」

すでに、ルイズにはわかっていた。
タダオと生涯をともにできないことを。
だがそれは、悲しみの別れではなく、再会を約束された別れであることを。
しかし、いまは、この今だけは、タダオはルイズのものであった。

ルイズだけのものであった。

ぎゅっと抱きしめたタダオの方だがどこにも行かないように祈るしかないルイズであった。

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０５（後書き）

文章量的には前作並みなのですが、時間は全然すすんでいませんｗ

皆さんご存知のとおり、この世界からよこっちが去るのは既定事項です。

ただ、どのタイミングで行き来するかは、まぁ、お楽しみにということでｗ

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０６（前書き）

お久しぶりのよこしまほらｉｎゼロ魔ですｗ

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０６

それは、天かける流れ星がごとく。

それは、地を走る竜がごとく。

それは、水面を飛び立つ巨鳥がごとく。

まぁ、タダオなんだけど。

タダオの作った玩具が大人気になっていた。

火薬を使ったロケット花火。

コルベール先生と一緒に作り上げたという「サイクル」。

そして布と何かで連金された空気浮力の簡易水上「船」。

まぁ、一番人気は「船」。

風系統の男性がすごい勢いで引っ張って、湖なんかで大騒ぎするのが大人気。

すでにコルベール先生とタダオは商会を立ち上げて荒稼ぎしている。

で、私が気に入っているのはロケット花火。

・・・あれいいのよ、こう、自力で飛んでいくのが。

で、あれを基礎計算して大型のモノを作ってみたら、タダオにあきれられた。

「これやと、兵器やん」
「・・・え？」

自分を乗せて飛べないかなーと思っていたんだけど、実験結果がそれを裏切った。

飛んだわよ？　すごい勢いで。
計算以上の勢いと早さで、トキメいたのよ？

で、爆発したのよ、最後に。
・・・ロケット花火みたいに。
ロケット花火の数百倍の勢いで。

正直に言うと、音と衝撃ですこし粗相してしまったわ。
だって、あの爆発って、私の失敗魔法みたいだったんですもの。
で、予備を使って威力試験をしてみたんだけど、ヤバかったわ。

なにがって？

その威力をみたエレノオール姉様の目が。

こう、なんというか、新しいお人形を見つけた乙女というか、新鮮な獲物を見つけた肉食獣というか。

この二つに形状的な差以外の差なんてないわよ？　存分に味わって所有したいという想いって女子共通だもの。

で、エレノオール姉様に拉致された私は、アカデミーで設計図と基礎理論を組み立てられさせられて、検証実験までつきあう羽目に

なったのでした。

姉様曰く、

「この研究が完成すれば、私たち姉妹は、「ヴァリエール姉妹」はアカデミー史上に名を残すわ！！」

大暴走のエレノオール姉様は、一時的に色恋沙汰を忘れることになったのでした。

で、ちい姉様のお気に入りは「サイクル」だった。

乗りこなすのに努力が必要だったけど、乗ってみればおもしろいほど快適だった。

登り坂や悪路は大変だけど、それでも馬みたいに糞をしないのが私も結構好きだった

ちい姉様は軽い運動と結果がかみ合うのがうれしいらしく、すいすいと学院敷地内も走り回っている。

これが宣伝になってか、「サイクル」の発注が怒濤のごとくで、タダオもコルベール先生もうれしい悲鳴を上げていた。

そんな中、タバサが足こぎなしで乗っているのをみたタダオは、貴族バージョンを思いついた。

そう、足こぎ部分をなくしたもので、レビテーションやフライ、もしくは風の魔法を使うというモノだった。

これでは意味がないだろうと、風魔法の教員が笑ったが、試しに乗って学院を一周した頃には意見が翻っていた。

「是非とも、是非とも私にも売ってくれ！」

なんでも、魔法でふつうに移動するときの精神力の１／１０以下で済んでいるそうだ。
これを聞いていこう、足漕ぎをする男子が激減したが、逆に女子の大半は足漕ぎのままだった。

「キュルケ、何で？」
「・・・わりといい運動なのよ、これ」
「納得したわ」

最近腰あたりがしまってきたキュルケ。
私も「サイクル」しようかしら、と本気で考えたのだった。

この噂が王宮に届く頃には打診があった。

「私にも「サイクル」、分けていただけません？」

もちろん相手は、トリステインの華。
そんなわけで足こぎ版と足こぎなしの両方を納めたところ、今度はグラモン卿からの嘆願が飛び込んだ。

「国軍へ導入したい。月産上限を教えてほしい」

うわー、と苦笑いの私だったけど、タダオも実は考えていたそうだ。
そんなわけで、工場開設とともに引っ張りだした新たな設計図をグラモン卿に持ち込んだところ、いくらでも金は引っ張りだしてみせるので、サイクルとともに納入してほしい、という流れになった。

その設計図の中身の名は「リアカー」

簡単な二輪の馬車みたいなもので、自転車の後ろにつけて使いので「リアカー」だそうだ。
私はその運用を考え、魔力の低い人間でも十二分に軍の力になることを感じて驚きを禁じ得なかった。
これならば軍務につけるにゃ弱い貴族を、後方勤務で使えるというわけで。
少なくとも、銀生と呼ばれる以前の私なら、このリアカーで輸送部隊を指揮してたかもしれない。
・・・いやいや、お父様が私を軍に入れる分けないか。

サイクルとリアカーの効率的な運用のためにトリステインの道が加速度的に整備されていった。
足漕用と魔法推進の道が分かれる作りだけど、理にかなった話だと思う。
少なくとも、魔法推進は軍、足漕ぎは主に「遊技」がメインだから。

タダオとコルベール先生の商会は、また新しいものを作り出した。
それが、目の前の「モノ」だった。
実験名は「フライ魔力軽減装置」。
タダオは「青い稲妻」と呼んでいた。

で、中身は、インテリジェンスマテリアルという魔法石と風石の欠片。
そして箒にサイクルのサドルをつけたようなモノだった。

「使い方は簡単や。とばそう、つう思いを魔法力とともに伝えるだけで、魔法力に見合った速度を出してくれる」

で、一度伝わった魔法力も、魔法石に一度貯められるので、なめらかな反応になるとか。
加えて、魔法力自体は、ハルケギニアの人間のほとんどが持っているので、平民でも9割方乗れるとか。
材料的には誰にでも買えるものじゃないけど、貴族のお使い程度には使える値段というわけらしい。
エレノオール姉様は、再び肉食獣瞳でタダオを〆あげたけど、タダオは怯えもせずにニコニコ笑顔で会話していた。
で、じつはこの「青い稲妻」は実験用だそうだ。
じゃぁ、本命は？　と聞くと、現れたのはコルベール先生の身長の倍弱ほどの木製板。
なんとなく丸みが帯びられているそれを「ボード」とタダオは呼んでいた。

「これが本命」

軽い仕草でボードを放り投げたタダオが宙で「ソレ」に乗ると、ボードの周辺の空気が光った。

まるで宙を滑るように移動する。
まるで宙を舞うように上下する。
まるで鳥のように天空に舞い上がり、そして何事もなかったかのように、滑るように目の前に現れた。

「どや？　けっこう流行るとおもわんか？」

私は感想の一つでもいおうとしたのだけれども、遮る声が飛び込んできた。

「わ、わ、わ、私にも貸してくれーーーーー！！！」

ギトー先生が現れ、簡単に操作を教えられ、結構無様に落ちたり転んだりしていたのだけれども、しばらくしてちゃんと乗れるようになったのを見て、周囲の私たちは感動の拍手をしてしまった。

「か、か、風さいこーーーー！！」

「「「「「風最高ぉぉぉぉ！！！」」」」」

たぶん、今日私生活初めての生徒との共感だろうと思う。

ボード自体は風の素養がなくてもいいんだけど、落ちた時を考えるとフライはあった方がいいということで、コモンを覚えていない人は禁止ということになった。

とはいえ、レジャー性の高さから、爆発的に広まってゆくのだが、実はアルビオンからの発注が一番多かった。

船に積むことで、転落者救護用にしたらしいのだが、恐ろしいまでに活躍するもので、王宮内ボード部隊なるモノまでできたというのはちょっとした未来の話。

で、学院ではギトー先生が先頭に立って箒とボードを指導しており、親元からは熱血先生として信用が鰻登りになっているとか。

いいこと、なのよね？

大地と空と水辺を遊技場に変えたT&C商会は、水辺の再開発を開始した。

船とは別のものを二種類開発したのだ。

一つは、個人用の手漕ぎボード「カヤック」。もう一つは「セイルボード」。

どちらも野暮ったいもので、貴族には不人気だったけど、平民には大人気だった。

一漕ぎ二漕ぎでスイスイ進むカヤックや、風の力を巧みに使って疾走するセイルボートは、平民にとっては魔法並の事で、それを自分で実現できるという事自体、きわめて爽快なことだった。

で、人がおもしろそうにしていると自分もやりたくなるのは道理。

何人かの貴族が挑戦し、惨憺たる結果に終わったのだけれども、一人の貴族がカヤックに目覚めた。

その名をモンモランシー。

水の魔法使いは、一度ひっくり返っておぼれそうになったけど、教わったことを思い出してオールの力で表がえり、呆然とした。

なんて面白いのだろう、と。

以降、学院内にカヤック部なるものを作りだし、水属性ならば水と一体になるべきだとか宗教的な話まで振り回しはじめた。

やばい、異端か？　という話まで持ち上がりそうになったそうだ

けど、運良く、いいや、運悪く、近隣の異端審問官も「カヤック」狂いになっており、専用カヤックを贈呈されて一切の讒言を無視しているというのだから恐ろしい。

加え、カヤック部の合宿にも呼ばれて一緒にカヤックしているというのだから、もう、抱き込み完了だろう。

私やタダオは、余りに周到な手腕に対して恐怖を覚えるのだった。

一応、資本は自分で出しているタダオだけど、貴族のバックボーンが必要だという事で、ヴァリエールの名前を貸している。

貸していただけならいいんだけど、その賃貸料ということで売り上げの何割かを納めてくれた。

そのおかげで、予定外の歳入が爆発的に入ってきている実家から、タダオとコルベール先生をパーティーに呼びたいという打診がきた。

タダオもコルベール先生も「華やかな場には向かないから」と速攻で逃げ出そうとしたけれど、これはヴァリエール家として、商会を保護しているんだという証明でもあるので、絶対に出席するようにとの伝言もあることを伝えると、二人は深々とため息をついた。

タダオは別にしてコルベール先生は一応メイジだ、そのへんの機微は解ってくれたみたい。

とりあえず、私たち三人は私の実家にいこうとしたんだけど、私は目の前の大きめの馬車をみて固まった。

「タダオ、なにこれ」

馬車のいない馬車。

で、御者の部分に囲いやら何やらいっぱいついてる。

「よくぞ聞いてくれた、ご主人様。これぞ馬車世界の新機軸、馬車なし馬車、その名も「車」や！！」

わーと盛り上がるコルベール先生。

細かい説明を聞くと、どうも馬車で引っ張るのではなく、実験中の魔動機関で自走する仕掛けだとか。

動力は細かい理論の話になるのでおいておくとのことだが、明らかに理解できる段階の話じゃない事だけは解った。

同乗してゆくエレノオール姉様は始終タダオからの技術説明を受けていたし、ちぃねえさまは乗り心地の良さのせいか、すぐに寝てしまった。

私も何度かねてしまったが、恐ろしいまでに声が通るエレノオール姉様の質問のせいで、数度と無く目が覚めてしまったのは内緒だ。

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０６（後書き）

続きますｗ

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０７（前書き）

続きです

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０７

ここ数ヶ月でヴァリエールの領内へ恐ろしいまでの歳入をたたき込んだ天才発明コンビは、着慣れない礼服を着てモジモジしていた。
その姿を見たエレノオールとカトレアは、結構嬉しそうにほほえんでいた。
ルイズは結構不満げで、自分をエスコートするのがタダオでないことを不満に感じていた。
ルイズをエスコートするのは、父ピエールであった。
タダオとコルベールは、ともに呼ばれて来場して、挨拶することになっている。
さぁ、会場、というところで、突然の来訪者が現れたことを知らされた。
プリンス・オブ・ウエールズ、プリンセス・オブ・アンリエッタ。
そう、銀の聖女に出てきた白の国の王子と王女であった。

すでに会場に入っていた貴族たちは大いに盛り上がる。

まぁ、これで注目度は下がったな、と安心したタダオとコルベールであったが、そうは問屋がおろさなかった。

「我が友よ！」
「私の親友！」

アンリエッタ王女にとって、ルイズが幼なじみであることは結構

有名だが、ウエールズ王子がタダオを「友」と呼んでいることは知られていなかった。
「賢者」とはいえ「平民」と侮っていた貴族たちは大いにその視点を変えざる得なかった。

「我が友よ、ボードは実に助かってるよ!!」
「そりゃよかった。でもあの使い方を思いついたのはアルビオンの勝利やろ?」
「いやいや、あの道具がなければ多くの兵たちが命を落としているところだ」

それに、と声を潜める王子。

「ソナタ等の「銀生」への恐怖で、船を下りたいといっていたもの達全員にショートボードを背負わせたら、今度はもっと乗りたいといい始めたぐらいでね」

なるほど、と笑うタダオとコルベール。
その隣では、ルイズとアンリエッタが談笑していた。
それは実に絵になる光景であったが、ここで黙っていられるほど自尊心の低い貴族はいなかった。
アンリエッタやルイズにアプローチする男性貴族、コルベールやタダオ、ウエールズにアプローチする女性貴族。
まさに肉食系行動であったが、不用意な男性貴族の一言で流れが変わる。

「・・・しかし、姫。コルセットはしっかりお締めになりませんと・・・」
「あら、あんな窮屈なものしてませんわよ?」

ピンと張りつめた空気。
瞬間的に女性貴族がアンリエッタを取り囲んだ。
男性貴族達をけ飛ばして。

「そこのところを詳しく！」
「どのような魔法で！？」
「いいえ、薬ですわよね、薬！？」
「教えてくださいませ、姫様！！」

それは既に殺気と等しいものだった。
が、それをにこやかに流すアンリエッタ。

「ご存じありません？　サイクルですわ」

アンリエッタが言うには、城内の移動の多くを魔法に頼らずに「サイクル」を使ったところ、思いのほかの運動量と心地よい汗のおかげで、腰元がくびれてきたという。
そういえば、と誰かが言った。

「学院に行っている妹がくびれてきている」と。
同じく、学院教諭のカトレアも、見事にくびれていた。
ぐびり、とのどを鳴らす貴婦人達。

「ど、どこで手に入れられますの？」

その人事に対する答え、それは一つだった。

T＆C商会。

貴婦人達の輝く瞳が集中した瞬間だった。

もてるとかもてないとか、そういう次元の問題じゃねぇ。

ヴァリエール伯爵だってこんな事態は予想外だったらしい。
各貴族へ、T&Cのバックにはヴァリエールがいるよーとアナウンスするだけだったらしいのだが、ジャッカルの群に死肉を放り込んだ状態になった。
いや、タスマニアンデビルか？

まぁ、なんつうか、肉食獣だったな、うん。

このハルケギニアには名刺なんてものは無いので、とりあえず持ち込んだ試供品の化粧品を名刺代わりに配ると目の色が変わる。
一応、水の属性の魔法使いには関係ない話らしいが、肌の保湿はイマイチ浸透していないらしい。
そんなわけで、エレノオールさんの協力を得て、水の秘薬の劣化版とローションで作った「夜のお手入れ」シリーズを販売することになった。
が、流石に基礎化粧品の有用性なんて説明しても胡散臭いだけなので、カリーヌ様とエレノオールさんに試していてもらったところ、今回日の目を見た。

つまり、使用後、ですよ、と。

「少女のようなみずみずしい肌」
「化粧のりがいい、つややかさ」

「張りがあり、弾力もあり・・・」

エレノオールさんやカリーヌ様を取り囲んだ貴婦人達は、パーティーであることを忘れて基礎化粧品の使い方を習っている。

「タダオ、私も必要かしら？」

「ルイズはいらんやろ？　肥料のやりすぎは根ぐされを起こすものやで？」

流石、ルイズも女の子。興味はあるだろう。

「いやいや、タダオ。君は恐ろしい商売を始めたね」

「女性向けの商品は半永久的に売れるものですからね。手を出さないわけがないっすよ」

ウエールズの問いにオレが答えると、ヴァリエール伯爵が入ってきた

「男性向けは何か無いのかね？」

「そうすうね、実験中のが一つ」

そういって、おれはコルベール先生の帽子を取って見せた。

其処には輝く地肌、では無く、五分刈り程度に伸びた髪の毛があった。

「・・・もしや・・・」

「・・・未完成ですが、「育毛」です」

おおおおおおお。

いつの間にか集まった男性貴族がスクラムを組んでいた。

「か、完成の暁には分けてもらえるのだろうか？」

「い、いや、ただとは言わん！　出来るだけの値段を・・・」

「わ、私なら、十分な資金を提供できるぞ！」

「いやいや、私を頼ってくれたまえ！！」

轟々と集まる協力者。

つうか、みんな結構明るい頭だった。

「タダオ、そんなにはげっていや？」

「それはな、ルイズ。人並み以上あった胸が、一晩にぺったんこになっていました、つうぐらいのショックや」

「・・・悪夢ね」

思わず自分の胸を抱きしめるように青くなるルイズ。

ないない、とキュルケにからかわれてるけど、スレンダーな体と普通の胸のバランスから考えれば、結構巨乳やとおもうんやけどなぁ。

ペタンコちゅうのは、ユエちゃんやらエヴァみたいな・・・・

あかん、背筋の寒気が止まらん。

ヴァリエールのパーティー以降、ある種の協定が生まれた。

T&C商会には手を出すな。
買収だの介入だの、馬鹿なことをしてはならない。
真似はいいだろう、模倣もいい。
しかし、直接触れることはあってならない。

本来の目的は達成したが、カリーヌ婦人が目論んだ長女成婚の目論みは大きく外れることになったのは致し方ないことだろう。
巨万の富の一端を手に入れたヴァリエール家であったが、実際は「良い婿」の方が欲しいという話もある。
が、発売された基礎化粧品と「育毛」は、爆発的ヒットとなり、国の垣根を越えて商人たちがハルケギニアを走ることになったのであった。

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０７（後書き）

こっちのルイズは、アホ＆インテリという新分野ではないかと思っていますｗ

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０８（前書き）

調子に乗って追加しました。
「フレデリカとゼロ魔」とは一風変わった作品を目指してます。
というか、計画話数に達したら、外伝ゼロ魔と外伝リリカルを分けよう、うん（＾＾；

最近生徒してないわ。
アカデミーに拉致されたり、貴族のパーティーに引き回されたり。
本当に成績の維持がつらい。

ともあれ、モンモランシーあたりは「金持ちが金儲けしてどうするのよ！！」とかいって怒っていたけど、化粧水の生産外部委託を任せたら「我が友」扱いになった。
タダオは「映画版ジャイアンやな」って笑ってたけど、何となく意味は通じた。

うん、そんな感じ。

香水作りも平行してしているらしくて、睡眠時間がないってグチを吐いてたけど、それでも満足そうな笑みで語る。

「なんていうの、こう、実感があるのよ。絵キュー金貨をこの手で生み出してるって、そんな感覚。・・・わかる？」

私にはわからないけど、タダオはウンウンと頷いていた。
自分の生み出す物の価値、その評価、そして自分のセンスで変化する価格。実感が熱を帯びているのがわかった。
なんというか、泥臭い話だけど楽しそうなのが羨ましい気もする。

昨今、新商品や新製品の販売熱で内需は拡大しているんだろけど、実は見せかけにすぎない。
色々なもので輸入や輸出で潤っているのは一部貴族だけで、逆に欲しい物いっぱいの貧乏貴族は困窮にあえぐ結果になった。
二番煎じ、三番煎じをねらった貴族もいたようだけど、二人の天才がいない形だけのまねでは再現が出来ず、さらなる借金を背負うことになっている。
国庫への歳入は増えているが困窮貴族が増える現実も無視できない。
そんなわけで・・・・

「爵位を持たぬかな？　タダオ殿」
「は？」

マザリーニ枢機卿の召還を受けて登城した俺とルイズに向けて、鳥の骨といわれている枢機卿は妄言を吐いていた。

「いやいや、妄言とは手厳しいことだ。国内外に評価が高く、そして租税にしても外貨にしてもトリステインの柱といってもおかしくないほどの人間を、貴族にしないわけにもいくまい？」
「俺、メイジやないで？」
「些細な話だよ、タダオ。君を貴族に押す声は少なくないのだ、うん」

そう言って、重数枚の書類を広げる枢機卿。

「グラモン、モンモランシ、ヴァリエール・・・・大貴族以外でも

かなりの数だね」

一応見せてもらったが、賛美麗句＋相応の地位につけるべし＋俸給はいらないだろ？儲けてるし・・・おいおい。

「領地は破産している貴族領をいくつかつなげることを考えている。どうだね？　この国を救うと思って引き受けてくれんかね？」

実質これは脅迫だ。

国を思って、ということは、この国にいる限り引き受けなければ許さないと言うことだから。

「あー、つまり、面倒を引き受けなければ、このハルケギニアに居場所はねえ、と？」

「そんなことは言っていない。君の国への貢献を考えれば、伯爵への推挙すら考えてもいいほどだ」

「で、破産した貴族領を押しつけて、借金を精算させる、と？」

「・・・！」

瞬間で瞳の色が変わった。

サービス期間の終了だろう。

「・・・さすがは平民賢者、といったところかな？」

「このまま破産すれば、借金の肩代わりを王国がしなければならない。しかし立て直せている最中の国庫の負担と見れば恐ろしい出費になってしまう。・・・だったら」

ニヤリと笑ってみせる俺。

「・・・小銭を稼いでいる平民に押しつけて借金を背負わせて、ひ

とときの貴族の夢でも見せてやればいい。なに、一度貴族に押し上げた後で難癖を付ければ、俸給でも借金でも何ら問題はない、立て直された貴族領は推薦者で切り分ければいい、ですか？」

一応、最悪の展開を口にしてみたら、真っ青になって枢機卿が震えている。

「あなたがそんなことを考えていないと言うのはいいですが、この推薦をしている貴族の中でどれだけの人間が清廉潔白でしょうね？」

大量の脂汗を拭った枢機卿は、胸を押さえつつ深呼吸。
すでに装うことすら出来ないほど動揺しているようだった。

「タダオ、貴族の名誉のために言うけど、そんな屑はヒトツマミよ」
「つまみでもいれば、その汚染は金で広がる、そういうもんや」

深呼吸を終えた枢機卿は、深々と頭を下げる。

「賢者タダオどの。このたびの話は一度撤回させていただきたい」
「・・・それは、思い当たる節が多すぎる、ということですか？」
「そのように解釈していただいて問題ありません」

まいった、と言う真っ青な顔でため息をつく枢機卿は、結構正直者で白い人なのかもしれないと思った俺だった。

政治色真っ黒な会談を終えた私たちは、とりあえずお土産がある

ので姫様を訪問してみた。

するとニコニコ状態の姫様が政務をしていた。

ゴシゴシ・・・・

何度か目をこすって見直すけど、結果は変わらず。

「・・・偽物ね！！」

「失礼よ、ルイズ！！」

打てば響くような返答に、安心できた私だった。

「この書類をすれば、「あれ」のじかんなの！」

聞くところによると姫様、サイクルが大のお気に入りで、城の中を爆走しているとか。

タダオが教えたドリフトやウイリーなどもマスターして、階段だろうと段差だろうと関係なしで走り回る姿は「暴走姫」というあだ名とともに国内外に広がっているとか。

モチベーションが高いことはいいことだ、ということで内務省からもサイクルを献上してくれた一見を高く評価しているとか。

国のあり方が変わってるわよねぇ。

「・・・お、ボード警備隊か」

城の外を、黒に塗られたボードを操る衛兵たちが巡回している。

ほぼ無音で魔法探査も通りにくいボードは、幻獣に騎乗して巡回していた兵たちに受け入れられ、扱い安さと利便性、そして「楽しい」という点から鞍替えを押し進めている。

一応、格式の点があるので、騎乗は訓練するけれど、パレード用の訓練になっているのが現状らしい。

「・・・ルイズ、私もボードに乗りたいわ」

「一国の姫が、嫁入り前の王族が、許可されるわけがないでしょう？」

「ウエールズさまは乗っていてよぉ！？」

「あれは国策。わかってるのですよね？」

「ううううう」

判っていないはずがない。

その程度には判断力が鍛えられているのだから。

「・・・姫様、せやったらいい方法がるんすけど、聞きますか？」

「・・・どんなですの？　タダオ」

「ロングボードで二人乗り、ラブラブボードを作ります。それを献上しますんで、お二人で楽しんでは？」

ぶば！と言う音とともに、ロケット花火の噴射のような鼻血を流す姫って、どこの姫よ？

「それれふ、それれふ！！」

そんなわけで、タダオはまた一部王族に心証をよくしてしまった。

後日送られたロングボードに乗る二人と、それを守るように隊列を組んで飛ぶボード騎士団は、きわめて強い印象となって周辺諸国へ焼き付けられ、ロングボードデートをする貴族とそれを守る騎士という構図が恐ろしいまでにはやったのは当然のことだったのかも

しれない。

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０８（後書き）

ロングボードに乗る姿は、まぁ、エウレ〇とレント〇をそのままイメージしてます。
ボード自体も「リフ」まんまですしｗ

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０９

食堂でお茶を飲もうとしたら、お茶に抵抗された。
よくよく見てみれば、美神さんっぽい水人形。

「なにしてる、水の精霊」
「用があって来た、希なるものよ」

どうやら水の精霊、わりと自由らしい。
じつにフリーダム。
あまりの状況に、周囲の人間が目を開けたまま目をこするという暴挙をして、水魔法のお世話になっていたり何だったり。

「つうか、水の交渉事はモンモランシの役目だろ？」
「それは仕事だ。これは私事だ」

めんどくさい話しそうだな、とおもって隣を見ると、興味津々で話の続きをねだる視線のルイズ。
すでに断るという選択肢が失われていることを自覚した俺だった。

「で、どんなお話ですの？」

いつの間にか現れたカトレアさんが、俺の腕を抱えるように寄りかかる。
くぅ、胸が、おっぱ○が・・・くぅ・・・。

「ふむ、話を聞いてくれるか、希なるもの」

「聞くのはええけど、どれだけの人間に聞かれていいん？」
「ふむ、簡単な話だ。先日、我が寝所に毒が流し込まれた。希なるものに頼まれたから、一応は単なるものの害になる行為を阻害しているが、次々と流し込まれては面倒だ。何とかしてくれ」

・・・どこのバカだ？
あそこは今や各国の富裕層や貴族が遊興に勤しむ別荘地だ。
そこに毒を流しこむだ？

「・・・タダオ、王宮に今から鷹便をとばすわ」
「ルイズ、あとヴァリエールにもな？」
「タダオさん、それは私から」
「カトレアさん、たのんます」

ゆっくりとコップを置いたタダオは、恭しく礼をする。

「タダオ＝ヨコシマ、水の精霊に感謝を」
「よい、契約とはそういうものだ。希なるものよ」

ちゃぽん、とカップの中に消えたそれを見ると、単なる水になっていた。
いや・・・・

「タ、タダオ、これもらっていい？いい？！」

「あー、たぶんそれ・・・・」
「いわないでぇ!!」

モンモランシの慌てぶりを見なくても、水の秘薬になってるんでしょうねぇ？
とはいえ私は姫様と枢機卿宛に手紙を書かないと・・・。
て、あ・・・。

「タダオ、ウルリリーで直接届けましょう！」

なぜか学院が気に入って、シルフィードの隣で生活している韻竜を使う提案をすると、タダオもうなずいてくれた。

「そうだな、ちょくちょく使わんと、肥満になるぞあいつ」
「あはははは」

肥満で飛べない韻竜、おもしろいかもしれないわね。
ウルリリーを学園に住まわせた当初は、食費も困る有様だったけど、最近のタダオの収入のおかげでかなり凄いことになっている。
当初、シルフィードに食事を分けて貰っていた恩があるので山分けにしているらしいが、タバサに「甘やかさないで」と文句を言われてしまったぐらいだし。

それはさておき。

「すぐに書いてくるわ」
「じゃ、わいはウルリリーに準備さす」

王宮に行ってみれば、実のところある程度は把握していたどうだが、実害がないので動けなかったそうだ。
ただ、それは、水の精霊によって被害が押さえられていただけと知って宮廷でも悲鳴が上がった。
毒の種類の選定のためエレノオールさんが召集され、一軍が組まれようとしたところで待ったがかかる。

「お待ちください、姫様」

現れたのはヴァリエール侯爵。

「これには小さな悪党と大きな策謀が絡んでおります。国で動くのは少しお待ちください」

実は侯爵、実行犯の内偵が進んでいることを公表した。
来期あたりに破産することが決定している貴族の中で、モンモランシ領に隣接している某貴族が、ちょくちょくと湖に通っているという。
さらには、借金の一部が返済されており、破産の線が消えかかっているとか。
あからさますぎる話だった。
もう、自分を疑ってくれと言っているかのようなものだった。
あんまりな話しに、思わず半眼でおれとルイズはその書類を見ていた。
が、姫様と枢機卿は涼しい顔。

つまり。

「これが我が国の日常だ」

「「うっわーーーーー」」

そりゃ、政務もしたくなくなるわな。

そうつぶやくと、我が意を得たりとばかりの姫さんと、苦笑いの枢機卿。

「じゃ、どう動きます？」

「・・・タダオならばどうする？」

「俺だったら、水の精霊の啓示はうけたんで、モンモランシと友人一同で直接話を聞きにいくつうことにしますね」

その言葉に満足そうにうなずく侯爵。

授業でよい答えをした子供を見るような視線がくすぐったい。

「平民賢者どの、お願いできるかな？」

マザリーニ枢機卿の台詞を聞いてルイズを見ると、鼻息荒く頷いていた。

「・・・ご主人様が、大いに乗る気なんで、行かせてもらいます」

「なによ、自分もいろいろと試したい商品があるくせに」

「・・・そうだなぁ」

まぁ、毒は管理してもらえるし、調査とは名ばかりの話になりそうだなぁ・・・。

よこしまほら　ｉｎ　ゼロ魔０９（後書き）

珍しく、ひさびさに引きです。
近日中に追加しますので、しばしお待ちをｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン０１（前書

よこしまほらの感想「藤之宮　アレス」さまの感想から、こんな話を妄想してしまいました。

火種は大切ですｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン０１

魔法ＧＳりりかるヨコシマン

・・・病んだタイトルだな・・・・ＴＴ

原因は実験の失敗だった。

ＧＳの仕事で貯めた資金で、カオスと共に実験した魂の分離実験。
俺の魂の強化とルシオラの魂の分離し、素体への定着までは成功したけど、その存在確定の段階で世界からの干渉が始まった。

「くそっ！　そこまでルシオラの存在を認めないのか、世界！！」
「忠夫！　緊急避難が必要じゃ！」
「おう、俺はこれからこの干渉世界から脱出する！　後は頼んだぞ！！」
「うむ、ルシオラ嬢ちゃんと仲良くな！」

さらば、我が世界。
こんな選択をするまで追いつめるとは、そこまでルシオラを認められないのか！？
ちょっと、胸のサイズを大きくしただけじゃないか！！
それすら認められないとは、なんて頭の固い！！

「ルシオラ、何年でも何十年でも俺が支える。だから、幸せになろ

う！！」

その日、横島忠夫はその世界から消えた。
もちろん、そんな世界脱出を認めるわけがない女性陣が捜索の網を広げることになるのだが、脱出中の彼には分かるはずもないことであった。

時間制止をかけたまま結界を張っていた俺が、外の時間の存在に気づけたのは何年が経った頃だろうか？
いや、時間というものは観測する人間がいて初めて経過するようなものだ。
ゆえに、観測すべき俺ですら時間経過していないのだから無空間では時間は存在していない。
が、そとで時間が存在すれば必然的に時間は存在し流れる。
だから時間を感じたという表現は間違っていない。

「・・・ここは、どこだ？」

文珠を使って周囲を検索すると、明らかに別の世界だとしれた。
腕の中のルシオラも存在確定しているのをみれば、間違いないところだろう。
干渉されることなく生命活動を続けているのを確認して俺は安心した。
とはいえ、ちょっとサイズがでかくないか、ルシオラ。

「・・・ん、ん？　ここは？」

目を覚ましたルシオラは、俺をみて、満面の笑み。

「ヨコシマ？」
「ああ、おれや。」
「ヨコシマーーーーー！！」

ぎゅっと俺を抱きしめたルシオラは叫ぶように言う。

「ヨコシマかわいいいい！」
「え？」

両手で俺を抱き上げたルシオラは、にっこにこだ。

「もう、ヨコシマはどこまで私を喜ばせればすむの！？」

抱き上げて振り回し、その上で抱きしめてと繰り返すルシオラを思わず呆然とみていた後、俺自身の体の変化に気づいた。

「おれ、子供になってるぅ！？」
「あら、気づかなかったの？」

「ああ、ずうっと時間を止めてたからなぁ・・・。」
「それ勘違いよ？　時間を止めていたんじゃなくて、ヨコシマの時間を使って結界を張っていただけよ」

ん？

「あのね、ヨコシマが世界横断をする際、霊力だけだとコストが足りなかったの。だからヨコシマの成長という時間をコストとして支払ったの。」

よく分からないけど、子供のなったのは仕方ないという事か。
しゃーないな。

「でも、ルシオラとまたあえた。それだけでいいや」
「ヨコシマ・・・。」

ぎゅっと抱きしめあう俺たちは、今後のことなんか関係なしに今を生きることを誓っていた。

で、だ。
ここはドコかという話になったのは、それから一時間後のことだった。

海沿いの、その町の名前は「海鳴市」。
結構栄えていて、結構住宅地だ。

ルシオラと俺は、手持ちの免許証と自分に幻覚をかけ、ざっくりと資金を稼ぐことにした。
まぁ、俺の文珠とルシオラの力があれば、さほど時間を置かず稼ぎ出せたのだけれども。

美神さん譲りの嗅覚で、裏社会的な世界に渡りを付けてみると、そこは結構オカルトな一家だった。
嗅覚的に、そう、ピートとかその系統。
ただ、かなり神経質に隠しているみたいなので黙ってるけど。
で、海鳴市を拠点に静かに暮らしたいので、公共社会に通じる「立場」を買おうと言うわけだが、なんだかむちゃくちゃ注目されてる。

主に俺が。

「で、忠夫君。君の本当の姿はどんなのかしら？」

わちゃー、幻術が見破られてる。
どうしたものかと考えたが、ルシオラが幻術を解除してしまった。
途端、正面の女性、月村忍さんの目がまん丸になる。

「あらあら、こんなに年をごまかしてたのね？」
「聞こえがわるいっすね。あのぐらいの年じゃないと、ルシオラの弟あつかいっすもん。不満爆発っすよ」
「うふふ、お姉さんのナイトなら、それも仕方ないでしょ？」

くそー、やっぱり子供扱いだわな・・・。
だって、目の前の美人にも「煩悩」もえないし。
あああ、早く大人になりたい！！
そうすればルシオラと「大人」になれるのに！！

「あー、一応言っときますけど、俺はみた目通りの年じゃねえっすよ？」
「そうなの？　いくつ？　六つかしら？」
「当年とって２５。」
「・・・・え？」
「いろいろと実験で失敗してな。こんな体になっちまったんだよ」

えー、という視線が俺に集中する。
やっぱ幻術やめないほうがよかったよ、ルシオラ。

「あとな、ルシオラは俺の相方だけど、純粋な人間じゃない」
「・・・・え？」
「細かいことは秘密だが、そのへんは空気で分かってくれ」
「あ・・・・、まぁ、うちも探られたくない腹はあるしぃ・・・・。」

よし、これでお互いは秘密は握って、お互い責めない土壌完了。

そんなわけで、月村さんちのブラックパワーで戸籍を得て、無事マンション購入が完了した。

横島忠夫　４歳。

・・・・泣いていいか？

どうっすか、どうっすか、藤之宮さん！！
神代入魂っすよ！ｗ

とりあえず、「原作、なにそれ？　とらは？おいしいの？」という展開プロットになってます。
だって、ほら、マンション購入って時点で・・・ほらｗ

３／２０　鳴海＞海鳴　心底勘違いしていましたｗ
３／２３　まだまだ修正だなＴＴ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン０２（前書き）

それは、あの海沿いの公園でのことでした。
いつものようにお父さんの病院に言った帰り、私はひとり泣いていました。
お母さんにもお姉ちゃんにも声をかけられず、怖いお兄ちゃんにも声を掛けられなかった私は泣くしかなかったんです。
でも、その日はやってきました。
彼とであったのです。

魔法ＧＳりりかるヨコシマン、始まります

誰かが儲かるという事は、誰かが損をすると言うこと。
市場経済の利益をかすめ取るというのがデイトレードの形であるのなら、その利益のパイは決まっている。
数の決まっているパイを独り占めする人間が現れれば、おこぼれをねらっていた人間は利益を得られない。

つまり、そういうことだ。

お隣さんのお姉さんと幼女の母親は、どうやらそう言う資金流用を狙っていたらしく、ここ数ヶ月の入金がないらしい。
おなかを空かせて泣いている姿を見せられれば黙っていられないのがヨコシマという人間。
マンションに放置状態だった姉妹を、うちで面倒を見るといい始めたのは間違っていないだろうと思う。

放棄児童の幼女、フェイトちゃんは、はじめ無表情で無感情な感じだったけど、最近ではよく笑いよく怒り、そして大きな感情を込めた声を出すようになった。

「忠夫ちゃん！　お手伝いぐらいさせて！」
「だめー、フェイちゃんは幼女だから、もっと大きくなってからなー」
「忠夫ちゃんだって、私と同じぐらいじゃない！」
「見た目に騙されちゃぁ、だめだぜぇ」
「ただお～、フェイトにも手伝いさせてやっておくれよ～」
「あのなぁ、アルフ。おまえが何でも甘やかすから・・・」

「家のお手伝いをしたいだけ。・・・だって家族だもの」

じーんときた。

じーんときちゃったわよ、ヨコシマ！

なんか、なんだか、私たちの子供って感じかも！！

「いいわ、フェイちゃん。いっしょに家事しましょ？」

「・・・うん！　ルシ姉様、ありがと！！」

きゅっと感情を込めて抱きしめてくれるフェイトちゃんを、私は「豊かな胸」で抱きしめた。

「豊かな胸」で抱きしめた！

大切なことなので二度言いました！！

アルフちゃんよりは少し小さいけど、前に比べれば雲泥の差！

大きすぎず小さくなく、さすがわかってるヨコシマ！！

「・・・ねぇ、ルシ姉様。ルシ姉様みたいにきれいになるのって、どうしたらいいの？」

ぐはぁ！　フェイトちゃん、それは反則質問。

だって、フェイトちゃんってば、誰の為に綺麗になるかなんてわかりきってるんですもの。

「あら？　誰か気になる人でもいるの？」

「・・・忠夫ちゃん。」

素直だわ、素直すぎて感動したわ。

「よく食べて、よく運動して、素直に誰かを好きでいる。これだけ

よ？」
「ルシ姉様も、誰か好きな人がいるの？」
「うん、ヨコシマのことが大好きよ？」
「・・・そっか、じゃぁ、私と一緒だね♪」

凄くうれしそうに微笑むフェイトちゃんをみて、ヨコシマの周辺女性が凄いことになる予感を感じていた。

「・・・マスター、感度、有りです」
「よし、さすがだな茶々丸」

突如虚空に消えた忠夫の捜査網は、人界はおろか霊界にも及び、心霊や神魔の手勢でも見つけることができなかった。　絶望に包まれた横島事務所だが、私はある事実に気づいた。

パクティオカードが、契約の証が失われていないことに。
つまり、生きているのだ。

そのことに気づいた私たち従者は、様々な手を使い調べ、そして一つのつながりを見つけた。

茶々丸のＡＦ。

ルシオラとなった茶々丸が、とうとう彼女を見つけたのだ。
それもこの世界ではなく、異なる世界で。

「あのバカ、また異世界か？」
「それだけではありません。ルシオラ様を復活させたようです」
「・・・そうか、それで世界から弾き出されたのか？」
「はい。」

なるほど、と理解した。

「女たちに伝えろ、世界を捨てる事が出来る者のみが忠夫を追える事が分かった、とな」
「・・・はい」
「で、茶々丸。おまえはどうする？」
「・・・妻の一人として、絶対に逃がしません」

よい答えだ、茶々丸。
もちろん私も逃がしはせんよ、忠夫！！

なんだ、背筋が猛烈に寒いな。
まぁ、気のせいやろ？

今日は、翠屋でケーキでも買って、みんなにプレゼントや～。
なんだか家族のお父さんになった気分やな～。

・・・って、なんや？

女の子の泣き声が聞こえる。
本当に悲しそうな、心がつぶれてしまうような。
それでも何かを我慢するように、すすり泣いている。

こんな声はだめだ。
こんな思いをさせちゃいけない！
俺はその声に向かって走った。
声で分かる、この娘は美少女になれる！！

わいは、美女美少女の味方や！！

というわけでやってきたのは高台の公園。
噴水前のベンチで、声を殺して泣いている女の子が一人。
フェイトちゃんと同じぐらいやろか？
・・・こんな女の子が、悲しくて泣いてるのはあかん。

「どうしたん？　なにがかなしいん？」
「・・・・！！」
はっとこちらを向いた女の子は、袖でゴシゴシ顔を拭いて、無理矢理笑顔でこちらをみた。
「な、なんでもないの。だいじょうぶなの！」
全く大丈夫に見えない。
だから俺は抱きしめた。
言葉がなくても、体温が癒す心もあることを知っているから。
「あんな、何で悲しいかは知らんことや。でもな、美少女が泣いてたらあかん。美少女が笑顔になれんやったら、わいが笑顔にしたる。」
きゅっと力を入れると、女の子は、ゆっくりとゆっくりと涙をあふれさせていった。
女の子の名は高町なのは。
なんと翠屋の娘さんだった。
で、現在大けがで旦那さんが入院している影響で、家族総出で頑張っているそうだ。
翠屋はかなり人気の店なので、閉店まで子供にかまっている時間などない。
ゆえに、寂しさを一人噛みしめて、みんなの迷惑にならないようにしていたそうだ。

なんつう、国民的美少女っぷり。
あまりのことにコッチが泣けた。
では、旦那さんはどんな怪我なのかと聞いてみたが、よく分からないと言うなのはちゃん。

「なぁ、なのはちゃん。お父さんが治ったら悲しくなくなるんか？」
「・・・・うん。でも、お医者さんも時間がいっぱいかかるって・・・。」
「それでも、治れば悲しくなるなるんやろ？」
「・・・うん。」
「せやったら、わいにまかせて！」

公園で知り合った忠夫君は変な男の子だった。
泣いてる私を放って置けないと言って、一緒にいてくれて、その上でこんな事を言い出した。

「な、美少女好きの忠夫はな、美少女が信じてくれれば奇跡を起こせるんや。」
「・・・ほんと？」
「ほんとほんと。なのはちゃんみたいな美少女が信じてくれるんだったら、なんでもできる！」

だったら、と私は願った。
お父さんを治してって。

本当だったら、こんな事は言わない。
ふつうに考えれば無理だって分かる。
でも、忠夫君は、忠夫君は輝く笑顔で言ってくれた。

「まかしとき！！」

人気のない病室まで、なぜか誰にも止められずに入り込んだ私たちの目の前に、まるで人形みたいな顔をしたお父さんが寝ている。
植物状態、というやつだそうで、なにを話しても答えてくれない。
そんなお父さんを、忠夫君は真剣にのぞき込んで、何かをつぶやいてる。
なんだろう、と耳を澄ませたけどよく分からない言葉だった。
そのまま数分たった後だろうか、忠夫君はニカッと笑って私を見つめた。

「なのはちゃんが信じてくれたから、わいは魔法を使えるようになったで。」

そういって、私に何かを握らせて、そしてお父さんの手も握らせた。

「さぁ、優しいお父さんを思いだすんや。健康なお父さんに戻ってきてっていのるんや。」
「・・・うん。」

お父さん、お父さん、お父さん、お父さん、お父さん！！

私の祈りにあわせるように、握られた何かが熱くなる。
握ったお父さんの手に力がわく。

「・・・お父さん、かえってきて・・・・。」

瞬間、目の前が真っ白になった。

私は闇の中で暗闘していた。

これが自分の中のイメージで、実際は昏睡状態にあることは理解していたが、状態回復の手段がなく困惑していた。

このまま時間が朽ち果てるのかと思っていると、不意に誰かのイメージが頭の中に浮かんだ。

泣きぬれる「なのは」、悲しみに顔をゆがめる「なのは」、滔々と家族の想いを語る「なのは」。

わたしは、こんなにも娘を悲しませていたのか!?

慚愧の念が高まったところで、私に言葉が贈られた。

「娘さんが、なのはちゃんが今手を握ってる。そこを頼りに覚醒するんや」

暖かいイメージがそれを思い出させる。

泣きぬれた娘が、いま、私の手を握ってくれているのだと。

私の意識は急激に覚醒に向かった。
なのはを、娘を守れるのは私しかいないのだ、と。

「ところで、少年。なのはに手を出していないだろうね？」
「わいはロリちゃうわい」
「それは良かった」

私は、私の網膜は、暖かな光を感じ始めていた。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン０２（後書き）

さぁ、どんどん出会いますよ～ｗ
で、どんどん集まりますよ～ｗ

わはははははｗ

３／２３　修正修正～

その人の笑顔は太陽のようでした。
今までの苦しかったことが全て溶け出してしまったみたいな、そんな太陽の笑顔。

私は、私たちは救われた。そして、彼はその笑顔をいろんな人に向けている。
・・・私だけに、私たちだけに向けて欲しいと考えるのは良くないことかな？
アルフと私とルシ姉様だけに向けてもらうのは、無理なのかな？

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまる、よ？

横島忠夫。

それが娘の心を救った少年の名前だった。

後に確認できた事で、店の常連でもあり、なのはと同い年だという。

そして、何らかの神秘を持っているはずだ。

医師も驚くほどの回復を見せた私は、あの後、三日後に退院した。

家族中で喜んでくれたのだが、なのはは少し寂しそうだった。

聞いてみると、なのはを助けてくれた少年タダオ君にお礼をいえなかったから、ということらしい。

妻桃子もその話を聞いて酷く感激し、そして自分達が如何になのはに負担を掛けていたかを知り後悔していた。

だから、そのタダオ君に全力で御礼をすることで、何らかの埋め合わせにしたいようだった。

とはいえ、なのはの記憶だけの存在。

捜索は困難を極める、と思っていたのだが、チャンスはすぐにやってきた。

なんとタダオ君が向こうからやってきたのだ。

「なのはちゃん、あそびにきたで」

「タダオ君！！」

喜びのあまりに泣き出したなのはを、まるで父親かのように抱きしめた少年、タダオ君に向かって、私は意地悪そうに笑う。

「ロリじゃなかったんじゃないのかね？」

「・・・今は、見た目合法や」

ま、確かにね、と私が笑うと、妻が不満そうに頬を膨らませている。

どうやら妻もしゃべりたいようだったので場所を空けると、実に嬉しそうに微笑み始めた。

「なのはがお世話になった見たいね、タダオ君。」

そう切り出した桃子は、深々と頭を下げる。

「・・・本当にありがとうございました」

瞬間、真っ赤になったタダオ君は、わやわやと手を振り出した。

「いや、その、ほら、わいは、わいは、美女美少女の味方やから・・・」

「じゃ、なのはや私の味方でいてくれる？」

「も、も、もちろんや！」

胸を張り、そしてぎゅっとなのはを抱きしめるタダオ君。

なのはは真っ赤になりつつもタダオ君にすがり付いていた。

うーん、父親として複雑だなぁ。

興味が先行して、道場につれてくると、なぜか息子がいた。

どうやらタダオ君となのはが仲良くしているのが気に入らないらしい。
恭也、なのはを護ったのはお前ではないのだ。
ヤキモチはみっともないぞ。

「・・・がき、おまえになのはが護れるのか！？」
「少なくとも、苛ついて子供をビビらす事しか出来ないガキよりましだ」

いったよ、言い切ったよ、この子は大物だな・・・。
桃子も美由希も目をまん丸にしてる。

「・・・よく言った、小僧！！」

キレた恭也が木刀で切りかかった
割って入ろうとしたが、空気が変わった忠夫君に気圧された。
打ち返すのかと思ったが、タダオ君は危なげなく避け続けているだけだった。
全く勝負にならず、恭也のほうが息が切れて膝をついたほどだった。

「焦ったってたどりつけねーぞ。地道に毎日積み重ねるしかねーだろ？」
「・・・・！！」

目を見張る恭也。
うんうん、よく言ってくれたね。
恭也もバカみたいに修行したがるから困っているんだよ。
うーん、これは認めるしかないかなぁ・・・・。
とはいえ、流派は継いでもらえそうもないなぁ・・・。

シスコン兄を潜り抜け、なのはちゃんともお話した所で帰ることにしたら、奥さん、桃子さんに泊まって行けと薦められた。
とはいえ、翠屋のケーキを買ってくるって言ってるので、もって帰らんと家族が心配するんだよなーというと、箱三つ分も詰めてくれた。
全部種類が違うというのだから、翠屋の手腕が知れる。

うーん、うちの女性陣に大人気だものなぁ・・・。

「た、タダオ君。また来てくれる？」
「当たり前やで、なのちゃん。」
「・・・・♪」

嬉しそうに微笑んだなのはちゃんを撫でてから、俺は翠屋を後にした。

・・・で、だ。

「つけてくるなって、シスコン」
「・・・お前が怪しい素振りを見せたら・・・・。」
「あんたはバカか？　相討ち狙っても勝てないってわかんないかね？」
「・・・・・・・」

つよい怒気を孕みつつ、気配が消えた。
消えたんだけど・・・・。

「なんで貴方までいるんですか、士郎さん」
「いやー、僕の気配までわかるのかい？」
「だって、隠す気無さそうじゃないですか」
「あはははは」

軽く笑って姿を現した旦那さんは、一升瓶を二本ほど担いでいた。

「で、それは？」
「お宅にご挨拶、と思ってね。」

んー、ルシオラはいける口だし、アルフも呑むからいいか。

「んじゃ、ウチまで同行してください。遅くなった言い訳もお願いしますよ？」
「任せてくれ。」

このときの台詞を、ボクは一時間後に後悔した。

「ヨコシマ！　何でこんな時間まで掛かってるの！」
「忠夫ちゃん、浮気絶対だめだって言ったよね！！」
「よこしまーーー！　フェイトを裏切るたぁいい度胸だ！」

ＳＨＩＲＯＵシールド！！

「いや、申し訳ないね。タダオ君に助けてもらったお礼に、色々と妻や子供たちが構ってしまって。」

「「「・・・」」」

すらりと最終兵器が出された。
清酒「神魔王」。
ルシオラとアルフは引き下がった。
こうか　は　ばつぐんだ！！

「ううううう、忠夫ちゃん！」

でーい、と、彩り鮮やかな翠屋のケーキを差し出した。
三つまで好きに選んでいいという約束つきだ！！

「・・・ほんと？」
「もちろん、フェイちゃんがいいこだからなー」
「・・・忠夫ちゃん大好き！」

こうか　は　ばつぐんだ！！

と、ここで話が終わらないのが俺クオリティー。
早速酒盛りが始まり、大いに盛り上がったルシオラとアルフに、翠屋のなのはちゃんのことを白状させられ、三人大爆発。

ＳＩＲＯＵシールド！！

「ぐはぁ！！」

あかん、紙より薄い装甲や！！

「「「ヨコシマ（よこしま）（忠夫ちゃん）・・・」」」

ぎゃー、マジで怖いんですけど！！

逆天号の改造は順調だ。

既に千雨は渡航を決意しており、ＡＦの改良に専従していた。

もとよりＧＳというよりも横島忠夫の従者であることを優先していた事もあり、共に行くのは当然だと胸を張っていた。

従者の中で家族が重い人間は残る事を宣言した。

ユウナは既に事務所独立し、従業員を抱える立場であることもあり渡る事を諦めた。

加えて言えば愛子も早々に残る宣言をしている。

曰く、

「私はみんなを待っていられるわ。だからいつになってもいいから、帰ってきてね」

その間、私たちの家とも言える横島忠夫事務所を支えてくれるという。

多くの人間を育て幾人者ＧＳを育てた事務所。

何人もの子供たちを育てた、そんな場所。

私たちが帰るべき場所ともいえる。

「愛子、私たちの子供たちを頼んだぞ」

「まかせて、エヴァちゃん。」

硬い握手と共に私たちはわかれた。

現在逆天号は、月神族の亜空間ベースで改修中だ。

茶々丸が飛ばしたプローブ兵鬼から、世界移行の際に消費するエネルギーが判明したからだ。

～体内時間が外に巻き出される～

記憶や記録は残るそうだが、肉体年齢がかなり巻き戻されてしまうらしい。

最大で二十年、最小でも十年分は持っていかれるようだ。

瞬間的に持っていかれるわけではないのが救いだが、それでも二十歳に満たない女達には酷な話だ。

ではどうするか、そんな検討はすぐに終わった。

魔法球を逆天号に導入することで、流出時間と経験時間の差を作ってしまえばいいという乱暴なやり方だった。

「・・・でもな、エヴァちゃん。いま、忠夫さんは、幼児なんやろ？」

「ん？　茶々丸の計算では、未就学児らしいな」

「・・・同い年になるか、愛育するかの選択肢があるんやなぁ・・・今から悩むわぁ」

ふ、ぐふぅ！　コノカ貴様は天才か！？

そうかそうか、確かにそうだ！！

でも私はちょっとお姉さんぐらいが好みだな。

「なんで？」

ふふふ、大人からみれば一年ぐらいの差など関係ないが、当事者からすれば大人と子供の差をまざまざと見せ付けつつ、子供特有のアプローチ可能とするのだ！

「・・・エヴァちゃんこそ天才や」

「ですが、そんな一歩離れた年齢でいいのですか？　エヴァンジェリンさん？」

「刹那、よく考えろ。あの忠夫が子供の頃からとはいえ、何のフラグも立てないで生活できると思うか？　何らかの切り札をそれぞれ用意すべきだと思わんか？」

「・・・流石です、エヴァンジェリンさん。私はまだまだ未熟なのですね」

ふっふっふ、しかし私たちが揃えば、忠夫の鉄壁ガードも打ち破

れるぞ！？

「ふふふ、幼児から開始、幼児から開始・・・・。」

あー、千鶴はどうしたんだ？

「あー、ちづ姉ぇ、ほら、昔から年齢ギャップトラウマだから、幼児に巻き戻せるって無茶苦茶魅力みたい。」

夏美の台詞を聞いて、私は苦笑いだ。

私などエターナルロリータ等といわれて凹んでいるのだがな。

「エヴァンジェリンさん、宜しいかしら？」

「エヴァさま、決めてきました！」

高音と愛衣が瞳を輝かせて現れた。

どうやら両親家族の説得が済んだようだ。

「よかろう、仲間（とも）よ。旅路は厳しいぞ？」

「「はい！！」」

さぁ、忠夫。

おまえを追い詰める布陣を今から構築してやるからな？

調子ぶっこいて、書けるうちに書いちゃおうと、他のをとめて挑戦中ですｗ

とはいえ、全然時間がすすまねーｗ

つうか、そろそろフェイトの実家を絡めようと思っていますが、某幼女をどのレベルまで覚醒させるかが鍵っすよねー。

他のＳＳみたいに余裕復活はありえないので、ルシオラ&月村ブラックパワーに頼ろうかナーとか考えています。

つうか、これ、プロットなしかよ、とかいうツッコミはなしの方向でｗ

３／２３　修正いんふぃにてぃｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン０４（前書き）

愛は得るもの奪うもの。
愛の数は決まっているので奪い合うしかないのです。
愛から始まる日本語は、和音でおわる物語

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまります

すずちゃんは月村さんとこの末っ子だ。

はじめは物陰からのぞいてるだけだったけど、フェイトちゃんやらなのはちゃんやらを連れていくうちに、きゃっきゃと遊ぶようになった。

子供は子供同士で遊ぶのが良いのだよ。

「きぃ、ただおさんは私を愛人って呼んだのよ。愛人、いわば愛する人、わたしがいちばんなんだからぁ！」

「わかってないのね、すずちゃん。妻はいわば港、いずれ帰ってくる港。子供がいる限り揺るがない、なの」

「ふふふ、忠夫ちゃん。私は所有権はいらないのよ？　だけど忠夫ちゃんはちゃ～んと所有してね？」

子供、子供、なんつう遊びしてるんや？

「「「将来を見据えたロールプレイングおままごと」」」

胃の調子が悪くなる台詞満載なんですけどぉ！？

「でも、忍お姉ちゃんが、ここはリアルにしておいた方が将来の研究になるわよって」

「ルシ姉様もノリノリで台本書いてくれたし」

「結構おもしろいよね？」

「「ねー？」」

本当だろうか、と首をひねってしまった俺だった。

「で、その忍さんとルシオラは？」

「ん？　なんかおもしろい機械を作るって、盛り上がってるよ？」

「・・・・フェイトちゃん、盛り上がりレベルは？」

「大迷惑一歩手前かなぁ・・・・。」

俺が気配を探ると、地下が何となくヤバイ気配だ。

「・・・ノエルさん、おれら翠屋に避難しますんで、暴走の始末をお願いするっす。」

「・・・わかりました、忠夫様。」

冷静に対応してくれたけど、武器を準備しながら走ってるんで、真意は伝わっているモノと信じたいわな。

「じゃ、うちで続きなの」

「「さんせー♪」」

おままごとのはずなのに、なんでこんなに消化器系に悪いかね？

忠夫君はモテるなぁ。

うちのなのはに加えて近所のフェイトちゃん、そして月村のすずかちゃん。

近隣美少女のほとんどに想いを寄せられてるんじゃないかな？

ただ本人は「ぴっちぴちの美女好き」を公言していて、なのはたちは守るべき妹感覚なんだそうだ。
それを知った三人は、正面からの攻撃は無理だということで、外堀を埋める作戦に出たようだ。
何という絡め手だろうねぇ。
末恐ろしい話だよ。
そんなモテ夫をうちの息子は殺気を込めて見つめている。
それを感じないわけではないだろうけど、おもいっきり無視しているのが又面白い。
たぶん、あの年で息子を超える実力を持っているんだろうなぁ。
うーん、そろそろ僕の修行も詰めだし、相手になってもらえないかなぁ・・・・。

「あの、士郎さん。そんなに幼児を熱い視線で見つめないでください」
「ああ、すまんすまん。そろそろ手合わせしたいなーって思っただけだから」

その言葉に、ぴくんと反応する三人の幼女と一人の娘。

「た、ただおさんって強いの？」
「うん、忠夫君は、とってもつよいんだよ！」
「・・・わたしも忠夫ちゃんの強いところみたい」

熱い視線を集中させられた忠夫君は、ダラダラと脂汗を流していた。

「ねー、忠夫君。お父さんと手合わせしてくれたら、試合後の汗を一緒に流してあげよーかなーなんて思うんだけど？」
「是非ともお受けいたします！！」

・・・忠夫君、忠夫君。
君はわかりやすいなぁ・・・・・。

それは演舞と言ってもオカシくないほどの予定調和に見えるほどの剣劇。
お父さんの剣が吸い込まれるように忠夫君にとらえられる。
見えない剣が、見えている剣にすいつかれる。
見えない攻撃が、阻まれた瞬間に見える。
拳が足が小太刀がすべて阻まれた。
ここまで通じないと焦ろうものだけど、お父さんは実に楽しそうだった。

「いやぁ、忠夫君、楽しいねぇ。」
「・・・士郎さん、思いのほか痛いんすけど」
「そりゃそうさ、気を使ってるからね」
「げ、それなしだっていってたじゃないっすか！」
「なしじゃ、当たりもしないじゃないか」
「くそぉ、こっちもちょこっとだけマジに行くっすよ！」

まるでワイヤーアクションのように飛んで距離をあけた忠夫君は、まるで何かを抱く前のように両手を広げた。

「右手に霊力、左手に気力」

まるで呪文のようにつぶやいた後、忠夫君が囁くようにいう。

「合成」

そこに現れた姿を見て、思わず私は叫んでしまった。

「スーパー地球人！！」

「半分正解や！」

きゅっと床を蹴った音とともに、忠夫君の体は宙を舞う。

「極限○奥義、竜虎乱○！！」

幾人モノ忠夫君がお父さんをフルぼっこ。

お父さんが泡を吹いて倒れたのをみて忠夫君はこちらに親指を立てていう。

「よゆうっす！」

わっと盛り上がる三人の幼女はよそに、私に視線を向けた忠夫君。

（やりすぎたっす）

ま、お父さんも調子くれてたし、いい薬だよ。

そんなわけで、泡を吹いたお父さんはそのまま部屋に放り込んで、私たちは忠夫君を勝利の湯船に誘ったのであった。

うむうむ、かわいい・・・くないところが一部あるけど、かわいい・・・ねぇ・・・・。

「た、ただおくん、これは・・・・。」
「おとうさんよりすごいの」
「・・・さ、さわってもいい？」

「あかんあかんのや、これはあかんのやーーーー！」

月面ベースに集まったのは、従者のほとんどであった。
ユウナと愛子をのぞく、魔鈴ですら世界を捨てる覚悟を決めた。
そんな中、旧来の忠夫の同僚でもあるおキヌとシロが参加したのは意外と言えば意外だった。

「もう、躊躇はしません。ぜったいに捕まえちゃうんです」
「拙者も、もう弟子だけでは足りないのでござるよ」

三百年の積年と発情期は強いというわけか。

「積年してません！！」「発情期じゃないもん！！」

まぁまぁとアスナとさよに宥められた二人はさておき、私は全員に向き直った。

「これから向かう先は、我ら以外の友はいない。社会も常識もすべ

て異なる異世界だ。それでも、それでも行くのか？」

「ですが、そこには忠夫さんがいます」

ネカネ＝スプリングフィールドの声に、誰もがうなずいた。

ふ、本当におまえは幸せな男だ。

これだけの良い女が、世界も常識も飛び越えておまえに会いにゆくのだからな！

「エヴァンジェリンさん、搭乗準備を。」

「わかった。」

私は仲間（とも）を見回す。

「これから渡る先は、絶望かもしれんし悲嘆の大地かもしれん。しかし、しかしだ。そこには忠夫がいる。それだけは変わらん。だから、だから我々は、ただ男に会うだけに世界を超える。・・・ふふふ、バカな女になったものだな」

「それでも、それが女として誇らしいアルよ？」

そうだな、そうだ。それこそが真実だ。

「仲間（とも）よ、いざ、世界を渡らん！」

「「「「「はい！！」」」」」

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン０４（後書き）

りりかる世界とＧＳ世界のギャップが素敵ではないかと自画自賛ｗ

３／２３　修正まっくすすぴーどｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン０５（前書

ルシオラさん、自重。

魔法ＧＳりりかるヨコシマンはじまりますｗ

俺は学校なんかどうでもよかったんだけど、フェイトちゃんには行って欲しかったんで、俺も行くことになった。
その理由と言えば・・・

「さすがに学校の仲間で護衛でいけないんだよ～、フェイトと一緒に忠夫も入学しておくれよ～」

狼姿でウルウルした瞳で哀願してくるのは反則だ。
思わず了解してしまったではないか。

そんなこんなで、いつの間にか入学式だったわけだが、ルシオラの準備した洋服に絶望した。

「・・・半ズボンはないやろ？」
「ヨコシマの魅力が一杯あふれてるのよ！　総天然色で残せるこの機会に肌を隠す？　ありえないわ！！」
「どこのヌード写真家だ、おまえは！？」
「ぬーど、ふふふ、さすがヨコシマね。さりげなくハードルをあげてくる！！　わかったわ、写真ではヌードに写る服、４５秒で作ってみせるわ！！」
「や、やめてぇーーーーーーーー」

そんな訳で、絶望したけどその服を着ざるえず、関係各位の爆笑を誘うことになった。

まず、忍さん＆バカシスコン爆笑。

士郎さん桃子さん、ニコニコ。
美由希さんはちょっとウルウルしてる。
続いてノエルさん、ファリンさん、なぜか鼻血。
で、アルフ悶絶。
くそぉ、生涯の汚点じゃ。

「・・・た、ただおさん、かわいい。」
「忠夫君、かっこういいなの」
「忠夫ちゃん、結婚したい」

フェイトちゃん、空気読め。

まぁ、そんな騒ぎが入学式でした。
クラスは四人とも同じクラスで、月村のブラックパワーをじんわり感じたのであった。

一月ほどたって、教室の机の一角が空なことに気づいた。
入学からこっち一度もきてない。
そんな子、どこの子？　と興味を持つと、担任が詳しく教えてくれた。
下半身麻痺で一人暮らし。
生活に追われてて学校に来れない。

「って、なんで冷静に話してるんや！？」

俺の絶叫に疑問を浮かべる担任。
何かオカシいことを自分が言っているのか？　と言う表情だ。

・・・これは、認識阻害か！？

文珠を使って解析してみると、なんと町全体にその児童のことをオカシく思わないように干渉してるのがわかった。

だれだ、だれなんだ！！

幼い子供を放置して、それを無視させるなんて悪辣なことをしているバカは！？

沸き上がる怒りを無理矢理押しとどめて、俺はダッシュで月村の屋敷に向かった。

汗ダクの忠夫君が転がり込んできたときにはなにが起こったかと思ったけど、話を聞いて驚いた。

この海鳴市全体に行われている認識阻害とその真実、その中心にいる少女の話を聞いて、私ですら声を上げそうになった。

忠夫君はその様子を見て謝ってくれた。

その結界を月村が何らかの形で関わっている可能性を考えたからだろう。

間違いではあったが、その可能性はきわめて高かったのだ。忠夫君の剣幕も理解できる。

「で、忠夫君。君はどうするんだい？」

「わいは、わいは、美女美少女の味方や！」

でたよ、この決め台詞。
結構好きなんだよね、これ。

「その結界を仕掛けた奴がわかったら連絡してほしい。こんなことを月村の目の前でやらかしてくれた落とし前はつけたいからね」

真剣な瞳でコクリとうなづいた忠夫君。
うーん結構いい男になるんだろうなぁ・・・・。
つば付けたろか？

図書館からの帰り、なぜか車いすが動かん。
なんでやろ、ってのぞき込んだら、急に動き出した。
なにかかんでたんやろ、そうおもってん。
せやから。
ブレーキをにぎったんや。
でも、とまらへんかった。

迫る車、きかへんブレーキ。
周りの人はうごいとらん
あかん、もうだめか。

そう思った瞬間、なぜか誰かの腕の中やった。
私と同じぐらい、でも力強くて暖かい。
だれやろ、そう思って顔を見たら、知らん顔やった。
知らん顔やったけど、なぜか安心できた。

なんでやろ、そう思って見つめてると、彼がほほえんだ。
太陽みたいな暖かい顔やった。

「はやてちゃん、君を、助けにきた！」

なんでやろね、すっとはいてきてん。
胸の中の奥底に、すぅって。
ぽかぽかのあったかな言葉が、うちの胸で暴れてるんや。
せやからな、泣いてるのはそのせいなんやで。
せやからな、責任とってや。
責任とって、うちの涙、全部受け止めなあかんで。

「大丈夫や、わいは、美女美少女の味方やからな！」

ふふふ、たのもしいなぁ、ほんま頼もしいなぁ。

ヨコシマは又幼女を拾ってきた。
今度は半身不随の女の子で、名前をはやてちゃん。
クラスメイトだけど一度も登校してこないことに不審を感じて調べてみたら、魔法による隔離認識阻害の結界が張られていたことに気づいたそうだ。
で、その中心を調べているうちに、その本人が車にはねられる寸前だったそうで、速攻で拉致誘拐してきたという。

「ヨコシマ、誘拐は犯罪よ？」
「いやーん、ただやんにさらわれてもうた～」
「あんなぁ、絶対にうちに来い。一人より楽しいっていうただけや

ろ？」
「これがプロポーズの言葉ですぅ」

だめね、このはやてって娘、すでにヨコシマに落とされてる。

「まぁ、冗談はさておきな。わたしも一人暮らしに疲れててな、できれば同居を認めてほしいんや。だめ？」
「ヨコシマが拾ってきた女の子なんて一人や二人じゃないのよ。かまわないわ」
「・・・ふぅぅぅん、ただやん、そんなにひろうとんの？」
「ひろってないって！」
「うちのことは、あそびやったん？」
「なんで俺の周りはこういう女の子ばかり何や！」

定めね、ヨコシマ。

「忠夫ちゃん。浮気？」
「忠夫君、浮気？」
「ただおさん、うわき？」

「ふわっ！　なんでみんなおるんや！」
「それはね、忠夫君が必死になって走っていた先が月村で、その事情を私たちが聞いて心配したからなの。」
「そっか、なのちゃんには心配かけたなぁ？」
「・・・忠夫ちゃんの心配は私もした」
「フェイトちゃんもありがとな」
「・・・ただおさん。わたしも」
「うれしいなぁ、こんなに美人さんが心配してくれるんやから。俺はかほうもんや」

ヨコシマ、あんたタラシね。
決定。
今晩はお仕置きだわ。

「・・・というあらましです。」
「横島さん、相変わらずだなぁ。」
「というか、幼女を今から洗脳教育？　あらあら、お仕置きしなくちゃいけないかしら？」

茶々丸経由で得られたルシオラのストレージ記憶をみんなで見ていて、いろいろとストレスがたまりつつ、それでも嬉しくなれた。
見知らぬ世界で忠夫が元気に暮らしているということがわかったから。

虚無の空間に躍り出た逆天号が航行し始めて何年が経っただろうか？
比較時間がないのでわからないが、少なくとも一年以上は航行している。
魔法球による時間調整も順調で、各(おのおの)が目指す年齢に調整できていた。
虚無の空間とはいえ虚数距離があるため瞬間跳躍はできないが、それでもあの世界に介入する寸前までは航行できただろう。

もちろん、観測できない空間の話だ、感覚にすぎん。
しかし、その感覚が教えてくれる。
もうすぐだ、と。

「千鶴、夏美にチャンバーに入るようにいってくれ」
「エヴァンジェリンさん？」
「既存空間に復帰する可能性がある。あの科学レベルの世界に逆天号はオーバースペックすぎる。」
「わかりました、エヴァンジェリンさん。」

さーて、ヒト暴れしてやろうかな？
ふふふふ。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン０５（後書き）

子狸ひろいました！
釣った魚には最大限の餌をやるただやんは、たぶん背中を刺される人生になることでしょうｗ

３／２３　修正～、って、何時まで修正してんじゃわしｗ

あいつの笑顔が好き。
アイツの自信ありげなかおがすき

でも、怒った顔も好き。
私たちを護ってくれるときの顔が好き。

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまるよ

すずかちゃんもアリサも用があるということで、校門を一歩でた瞬間だった。
黒塗りのワンボックスが二人をさらっていった。
余りのことに反応できなかった自分を三秒ほど呪った後、俺は隣のなのはちゃんに声をかける。

「なのちゃん、フェイちゃん、月村とバニングスに電話を頼む！」
「忠夫君は！？」
「わいは、後を追う。せやから・・・・・」

二人をきゅっとだきしめる。

「わいを信じてくれ。美少女が信じてくれたら、どんな奇跡だって起こしてみせる」

「忠夫君はあのころから私の魔法使いだよ。だから信じてる」
「忠夫ちゃんは私の王子様。絶対に信じる」

よし、勇気充電完了。

「じゃ、俺は追うけど、なのちゃんもフェイちゃんも電話した後は月村にＧＯやで！？」
「「うん！」」

さーて、俺の目の前で美少女泣かした罪、全霊で支払ってもらうで。

しくじった。
いつもは校門の目の前まで鮫島さんがきてくれるのを待つのに、今日は何かの事情かと油断した。

・・・あいつにあんな顔をさせちゃったわよ。

勉強でも運動でも勝てないあいつ、横島忠夫。
女たらしって評判だけど、それは男子だけの話。
女子の間では、表沙汰にはならないけど一番人気だった。
女の子を守ることに関しては決して妥協しない、そんな男子。
そんな横島忠夫の前で誘拐なんてされちゃったよ。
まいったなぁ・・・・。
まるで殺されたみたいな顔色だったもんな。
こりゃ、絶対無傷で帰らないと、なのはやフェイトに殺されるわ。

なのは・フェイト・はやて・すずかというと、横島忠夫が絶対守護対象にしているという噂の女友達。
こいつらを守るためだったら、大人だって半殺しにすると言う噂もある。
鮫島さんも「彼は怒らせない方がいいですね」と忠告してくれたほどだった。
が、怖いもの見たさでからかった時など何の反応もなくイジケたり逃げたりしていたんだけど、唯一、フェイトの両親がいないことを揶揄したときが怖かった。
本気で怖かった。

次の日に学校に行けないほど怖かった。
でもその次の日、あいつは女の子を怖がらせたといってうちの玄関で土下座していた。

あいつは、女の子に優しい。
だから、私たちはさらわれたのを見ていて、黙っていられるわけがない。
頼むわよ、なのは、フェイト。
あいつを暴走させちゃだめだからね・・・。

みつけた・・・。

町外れの廃工場に車が止められていた。
文珠で解析してみると、奥の部屋に二人は隔離されていて、犯人たちは手も触れていないようだ。

最低目標は達成できそうやな・・・。

「（ヨコシマ、こっちもヨコシマを捕捉したわ）」
「（ルシオラ、殺さねえから好きにさせてくれねえか？）」
「（だめよ、ヨコシマ。すずかちゃんならまだしもアリサちゃんには見せられないでしょ？）」

舌打ちとともに「隠」の文珠で気配を消して、俺は宙に舞った。

「（ヨコシマ、相手は素人、それも脆弱な素人だってことを忘れな

いでね）」
「（わかってるよ、ルシオラ）」

壁を這い、天井に入り込む。
音を殺して目的地の真上まで到着した。
二人の少女は声を殺している。
つうか、すずか、寝てるんちゃうか？

「ね、すずか。寝てるところ悪いけど、何でそんな余裕なのよ」
「・・・ふにゅ？」
「・・・お願い、聞かせて」
「だって、ただおさんの目の前でさらわれたんだよ？　無事に助けられるに決まってるよ」
「その確信の意味が分からないって。」
「アリサちゃん。今こうしているときにもただおさんは助けてくれようと全力で、もしかすると、もう来てるかも知れないよ？」

ぶっ、その重々しいまでの信頼が怖いんですよ、すずかさん。

「・・・なのはといいフェイトといい、あの男を何でそこまで信用できるんだか・・・」

「それはね、ただおさんが美女美少女の味方を実践してるヒトだからだよ」

まけた、負けたよすずかちゃん。
俺がここにいるって確信してるね。
だって、まっすぐこちらを見てるもん。
こえーなー、もう。

すずかの確信は本物で、真実だった。
気づけば音もなく立っていた横島忠夫が、私とすずかの戒めをほどいてくれた。

「何でわかったかな、すずかちゃん」
「愛の力だよ？」
「そりゃこえー。」

そんな軽口をたたいているうちに、入り口に人影。

「小僧、どこから入りやがった！！」

拳銃を構えた男に、横島忠夫はニヤリと微笑んで上を指さす。
その次は、本当に一瞬だった。
すずかに引き倒された私。
ジャンプで拳銃を蹴りあげた横島忠夫。
銃声に驚き目をむいた瞬間、男は白目をむいて倒れていた。

「すずちゃん、ナイス！」
「へへへ、ただおさんＧＪ」

ハイタッチの二人に、どんな声をかけて良いのかわからなかった私だった。

「さーて、子供パーティーじゃ攻略は難しいから、忍さんたちが強

襲するまで時間稼ぎだな」

そういって、横島忠夫は、気を失っている男の身ぐるみを剥いだ後、全身を奇妙な縛り方をしてころがした。

「すずちゃん、先に天井にあがって、アリサを受け取ってな。」

「うん、わかった。」

まるでカンフー映画のようなやりとりで、天井の穴にとりついたすずかは、こいこいっと手を振る。

「飛べる？」

むりむり。

私が首を振ると、横島忠夫は、わたしを横抱きにした。

いや正確にはお姫様だっこ。

「俺がジャンプですずちゃんに渡すから、すずちゃんとアリサは隠れてるんやで。」

「うん。」

そんなやりとりとともに私は軽々と天井裏に押し込められ、そのあとで忠夫がひょいっと入って来た。

「じゃ、隣の部屋の上ぐらいまで移動な」

息を潜めていると、先ほどまでいた部屋のあたりで大騒ぎが起き、あれやこれやと声が交わされ、そして大騒ぎで走り出す音が聞こえた。

「に、にがすな！　まだとおくまでいってねぇ！！」
「相手は子供だ！　足の骨の一本でも折りゃ、おとなしくなる！！」
瞬間、横島忠夫の雰囲気が変わった。
鮫島さんがいった怒らせてはいけない横島忠夫に。
でも、私は怖くなかった。
そう、彼は、私のためにも怒ってくれているのがわかったから。
そう、これは、自分が守るべきものをぞんざいに扱うものへの怒り。
やばい、結構嬉しい。
「すずちゃんアリサ。おとなしく、耳を塞いでまっといてくれるか？」
「うん、わかったよ、ただおさん」
「わかったわ、忠夫」
その後のことは聞かない、みない、知らない。
ただ、鮫島さんが結構苦労したと聞く。
どんな苦労かも知らない。
知りたくもない。
でも、一つだけ知っている。
それは、忠夫が私たちを、私を守るために命を懸けてくれたという事実。
これだけで私は暖かくなれた。

警報が鳴り響く。
位相が違う空間で爆発事故があり、その影響が忠夫のいる世界に干渉しているというのだ。
干渉している存在は、あまり質(しつ)でも力でも大したモノではないが、破壊にかける能力でいえばふつうＧＳに対処できる内容ではなかった。

「で、どのぐらいなんだ？」
「瞬間８０マイト、保有力で１００マイト程度です。」

なるほど、初期の忠夫の文珠程度の力はあるということか。
となると、素人が万能を夢見る程度の力があるな。
とはいえ２０マイトも消えるというのは効率が悪すぎじゃないか？

「それは逆に文珠の効率がよすぎるのです。」

ま、確かにその通りかもしれんがな。

「エヴァちゃん、今の警報なに！？」

興奮するアスナを押さえつつ、集まってきた仲間に現状を報告した。

「つまり、忠夫さんの危機が迫っている可能性がある、と？」
「可能性でいえば、現在進行形で忠夫は危機だがな」
くすくすと笑いが満ちあふれた。
「しかし、すこし急がねばならないかも知れない。今回の観測結果から位相空間への移動、さらに干渉方向からの逆干渉を行うとしよう」
「お、エヴァも本気か？」
「あたりまえだ、千雨。そろそろ私も痺れが切れているのでな」

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン０６（後書）

アリサ当番回かと思いきや、なんとジュエルシード事件の発端発生ｗ
早々と原作が開始されますｗ

３／２３　修正、オールナイトＩＮ広島ｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン０７（前書

歴史は繰り返すって言うけど、それって同じ間違いをし続けてるって事。
じゃぁ、その間違いを正すことが出来たら？
そんな事に答えはない。
でも、今回は、そういうことが起きた気がする。

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまります

さて、目の前にいる白い物体。
まぁ、俺の感覚ではオコジョ。
違うという意見はあるんだろうけど、おれにゃぁオコジョだった。

俺にとってオコジョといえば不幸の象徴だった。
オコジョの魔の手によって従者を増やされ、オコジョの魔の手により罠にかけられ・・・・。

「で、この犯罪者（おこじょ）をどうするんだ？」
「お、犯罪者（おこじょ）じゃないよ、フェレットなの！」
「いや、この白くて長くて自分の姿を偽っている感じは、絶対犯罪をしてオコジョの刑を受けている変質者だ。」

まちがいない、あのカモミール＝アルベールと同じ、性犯罪者のにおいがする。
そんな俺の断定に、目を白黒させるオコジョ。

「ちょ、ちょっとまってください、僕は助けて欲しいだけで・・・。」
「はぁ？　助けて欲しい？　だったらなんで、こんな怪しげなアイテムを渡す？」
「いや、ほら、僕は今力を失っていて、でも、彼女は力があって・・・」
「で、なのはちゃんを利用するのか？」
「・・・・！！」

「おまえがなぜ一人でなにを回収しようとしたかはしらん。でもな、その危険なことに他人を巻き込めるのか？」

エロオコジョは、ぐっと力を入れて身を起こした。

「ごめんなさい、ほんとうに追いつめられてて。信じてもらえるとは思えないけど、僕は別の世界から来て、この世界に迷惑をかけてしまいそうなものを回収しに来たんだけど、事故で・・・。」

ふむ、異世界に迷惑をかけそう、だから世界に迷惑をかけないうちに回収。

で、回収する前に事故で負傷。

迷惑をかけたくないけど手を借りないと大きな事故になる。

だから、迷惑を承知で、何とか協力して欲しい。

「・・・と、そういうことか？」

「・・・うん」

静かにうなずいたオコジョを、優しくなでる。

「あんな、騙すつもりがなくても騙したことになることがある。だからな、できるだけ整理してはなすんや。整理して誠意を持ってな」

「・・・はい。」

で、

「なにを回収すればいいんや？」

「え？」と目を点にするオコジョ。

「それを回収せな、みんながあぶないんやろ？」
「うん」
「まだ見ぬ美女美少女の危機やぞ？　わいが動かんでどうするんじゃ」
「・・・やっぱり忠夫君は忠夫君なの」
そんなわけで、オコジョが持ってる発動体を解析してみると、魔法というよりも「超」のカシオペアに近いものだった。
こりゃ、俺と相性が悪そうだな。
そういう意味では、なのはちゃんの手に渡ったのは、ある意味正解だろう。
なのはちゃんにはコノカと同等の魔力があるから。
「じゃ、なのは、僕のいうとおりに復唱してね。」
「わかったの！」

事態は動いた。
高町なのはと横島忠夫。
在野の未確認魔導師とは思えないほどの魔力にあふれたなのはと、同い年とは思えないほど思慮深い横島忠夫。
僕と忠夫でなのはをフォローすれば、かなり早いうちに回収できる、そう思った油断が、瞬間を生んだのか？
後は回収するだけという状態のジュエルシードが暴走した。

近くにいた子犬にとりついて、そして巨大な猛獣に変わった。

「なのは、バインドだ！！」

「うん、バインド！」「Ｙｅｓ，ｎａｎｏｈａ」

レイジングハートから信じられないほどの力がこもったバインドが発射されるけど、はじかれてしまった。

「あほ！　捕縛は弱らせた後じゃ！」

気づけば信じられない早さで忠夫が巨獣の気を引いている。

彼は本当に人間？

「オコジョくん、何か攻撃はないの！？」

「ぼ、僕はオコジョじゃない！」

「なんでもいいの！！」

「そんな、初めて使って大丈夫な魔法なんてバインドぐらいしか！！」

「忠夫君、むりだってーーー！」

「わかった！」

そういって答えた忠夫は、なにかカードのようなものを取り出した。

ベルカ式？　いやちがう。

あれは全く違うものだ。

「アデアット！」

カードが消えて、次の瞬間、忠夫自身が光に包まれた。

その次に現れたのは、神々しいまでの気配に包まれた女性。

「ふふふ、異界で初めて呼んだのが私ですか。忠夫さん、その思いに答えますよ」

嬉しそうな言葉の後、女性は剣を構えて歌うように声を発しました。

「神剣の使い手、龍神小竜姫。召還者の望むままに、悪を切ります！」

まさに目にも止まらない早さだった。

彼女が剣を振るううちに、どんどん巨獣の体は小さくなってゆき、最後には子犬とジュエルシードになっていた。

「さ、エロオコジョさん、この先はお願いしますね」

にこやかな笑みの女性にまでエロオコジョ扱い。

僕は泣いて良いんだよね・・・。

久しぶりのＡＦ使用。

うまくいって良かったと思う。

ＡＦ使用中の交流で、小竜姫様とも久しぶりに話せたし、結構嬉しかったかも知れない。

そんなことをぼーっと考えながら、封印が終了するのを待っていると、何とか終わったらしく、エロオコジョが深々と頭を下げた。

「やっと一個封印できました、ありがとうございます」
「まー、これからもよろしくな、エロオコジョ」
「よろしくなの、オコジョ君」
「・・・あのー、僕はオコジョじゃなくてフェレットなんですが・・・。」
「似たようなもんだろ？」「同じみたいなものなの」
俺となのはちゃんの結論に、真っ暗になったオコジョだった。

深夜の徘徊、これの言い訳を考え込んでいたなのはちゃんだったけど、俺は正面から細かい事情を説明することにした。
魔法なんて信じてもらえないよ、と後込みするなのはちゃんを引っ張り込んで、正面から高町一家に説明すると、まず第一声。

「なるほどね、魔法少女というわけかい」と士郎さん。
「乙女の夢ね、なのは」と桃子さん。
「で、衣装は？　コスチュームは？　相棒はオコジョで良いとして・・・」大興奮の美由希さん。
「・・・とりあえず、変身して見ろ」と、むっつりシスコン。

「・・・みんな、信じてくれるの？」
「嘘だったのかい？」
「そんなことないの、うそじゃないの！」
「だったら、なのはのことを信じるよ。だって、僕たちはなのはの家族なんだから」

かっこいい男前士郎さんだったが、実のところリアル魔法少女の変身がみたいだけらしい。

道場に引っ張り込まれて動画カメラが数台、スチルカメラも何台も並べられた。
・・・あんたら、本気か？と俺が聞くと、鼻息も荒く美由希さんが魔法少女の良さを熱く語ったりしてもう。
なんだかなぁ・・・。

高町家による魔法少女鑑賞会は、盛況のうちに終わった。動画やスチルによる解析を美由希さんが行い、より魅力的なポージングや変身スタイルの研究が行われることになったそうだ。
結構迷惑そうなのはちゃんだったけど、家族に秘密がなくなったこととエロオコジョを飼えることになったことが嬉しそうだった。

「全部、忠夫君のおかげなの！」

そんなことないんやで、と撫でると、嬉しそうに目を細めるなのはちゃんだった。

一方、横島家マンション。

「なのはだけ魔法少女はずるいと思うの！！」
「あら、フェイちゃんも魔法少女したいの？」
「乙女の夢だと思う！」
「じゃ、ルシ姉様が、フェイちゃんにぴったりの発動体を作ってあげようか？」
「え、いいの？　ほんと！？」
「いいわよ～、ただ、ヨコシマに許可をもらいなさいね。」

「なんで？」
「フェイちゃんが危ない目にあったら、ヨコシマ自殺しちゃうから」
「・・・ほんと、かな？」
「ほんとほんと。」
「えへへへへへ」

そんなマンションの一室の会話を聞いていた某狼。

「・・・私がマスコットかな？　マスコットかな？」

結構平和かも知れない。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン０７（後書

とりあえず、ぶっちゃけたら面白いかナーと思ったら、思わぬ方向に大暴騰ｗ
面白いどころではなくなってしまいました。

３／２３　修正しまくり、マックスハート

いやー、テスタロット家はいま、どうなってるんでしょうねぇ？ｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン０８（前書き）

秘密は漏らさぬものだけど、漏れてしまった秘密は秘密なんかじゃない。
面白い遊びはみんなで楽しむもの。
さぁ、命の危険もなんのその、護ってくださいヨコシマン

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はーじーまーるーよー

いつもと同じ高町家。

「ちがうちがう！　それじゃあ、もろ見せになっちゃうでしょ？　こう、ちらっと見えそうで見えない感じで変身しないと、修正が入っちゃうじゃない！」

「お姉ちゃんが何を言っているのか、なのはには解らないの」

ここにいつもと違う姉妹の断絶が生まれていた。

思いの外千雨ちゃんぽい趣味の美由希さんの熱血指導により、魔法少女の何たるかを学び取ったなのはちゃんだったけど、パワータイプのなのちゃんに不満を感じた美由希さんは、せめて変身ぐらいは乙女っぽくしたかったらしい。

が、なのちゃん。結構男前で、マッパスッパ関係なしで早さを求めていたりする。

その割り切りは男性陣に好評で、女性陣に不評。

つまり、高町家においては変身は優雅にという方針になったわけだ。

逆に、横島家における魔法少女は、じつにブリリアントな変身を身につけており、美由希さんの羨望を集めている。

「フェイトちゃんに、ライバルキャラに差を付けられて、悔しくないの！！？」

「関係ないの、仲良く封印してるんだから」

どうやれあ美由希さん的に、白いジャケットのなのちゃんが主人公で、黒いジャケットのフェイちゃんがライバルキャラらしい。

熱入ってんなぁ、と呟くと、コッチにまでとばっちり。

「忠夫君はね、もっと謎めいた登場しないとキャラが強すぎなのよ！　どこのオリキャラ？　俺ｔｕｅｅｅｅｅなんて流行んないんだからね！？」

商業なめるなと怒髪天をつく様子。

「ほらほら、根を詰めないで。そろそろ休憩にしましょ？」

そんな桃子さんの言葉に俺たちは応え、翠屋にあつまるのだった。

で、

「なんでこんな面白いことに噛ませないかな？」

「ただおさん、私にも声をかけてほしかったかなぁ～？」

お怒りの二人。

どうやら美由希さんの熱血指導を、もろに見ていたらしい。

最初はお芝居かと思っていたが、俺の「こと」や、実施あの変身を見て手に汗握ったとか。

危険なんだよーとかあぶないんだよーとかいうなのはに二人は聞く。

「「じゃ、なんでなのははやってるの？」」

「忠夫君が助けてくれるからなの！」

「「じゃ、わたしらでもかまわないわよね？」」
「あ・・・・」

そんなわけで、イカしてイかれた発動体を、ルシオラに発注しなければならなくなった。
のだが・・・・・。

「なんでそんな面白いことに混ぜてくれないかなぁ！！」

忍さん乱入。
二人の発動体は、実にカオスに満ちあふれることになったのであった。

なんか、あのころの事務所を思い出すなぁ。
そんな風に思う俺であった。

忠夫の魔法はすごく不思議だった。
一応、デバイス使っているみたいなんだけど、普段は隠しているみたいで見せてもらえなかった。
僕がデバイスの研究をしていると打ち明けると、そういうことはルシオラさんが詳しいので相談しろと言われた。
そんなわけで相談に行くと、そのまま二つのデバイス作りにつき

あわされ、三日ほど貫徹させられた。

結論は、一つ出たけど、謎は多い。

で、感想なんだけど、ルシオラさんにしろ忠夫にしろ、なぜかジュエルシードの扱いが雑だった。

何度も何度もロストギアの危険性を説明しても、全く右から左だ。

一応、アルフさんは理解はしてくれたけど、二人の態度は仕方ないだろうと言う。

なぜだろう、そう考えて見たけどわからなかった。

だから直接聞いてみた。

すると、忠夫はあるものを見せてくれた。

金色に輝く珠。

それは、その内包する力は、ジュエルシードなんか目じゃないものだった。

「た、た、ただお。これは？」

「ん？　これは俺の発動体。文珠って呼んでる」

そりゃ、本気にならないはずだ。

こんなデバイスを使っているのなら、ジュエルシードなんか玩具みたいなものだ・・・。

「なんか勘違いしてるみたいだから言うけどな、オコジョ。ジュエルシードは危険、これは間違いない。回収も管理も必須、これも事実。忘れたらあかん」

そうだった、そうだ、そうだった。

思わず頭を左右に振って、そして気づいた。

「ルシオラさん、あの二つのデバイスの空き空間って・・・」

「ご名答、天才君は楽しいわねぇ。」

優しく撫でてくれるルシオラさん。

なんか、こう、ドキドキするなぁ・・・。

僕もこんなお姉さんがほしいかも・・・。

すずちゃんとアリサを含めた魔法練習に、はやてが乱入するのは自明の理だった。

で、いろいろと適正を解析しているところで、おかしなことに気づいた。

上半身にはあふれている魔力が下半身にはないのだ。

まるで何かに吸われているかのように・・・。

「（ルシオラ、わかるか？）」

「（んー、もう少し細かく調べないと無理かも）」

そっか、と、首をひねる俺。

「ただやん、うち、魔法つかえんの？」

「いやいや、使えるんやけど、なんか変な感じなんや」

「なにが？」

「んー」

とりあえず、見えたままを説明すると、はやては何か思うところがあったようだ。

「なぁただやん、その両足に魔力があれば動くんかな？」

「・・・あ、ためしてみるか」

というわけで、急遽臍のあたりのチャクラに文珠を仕掛け、下半身に魔力を満たしたところ、なんとゆっくりと動き出したのだ。

「たった、立った！　はやてがたった！！」

「なんでそこでふつうに感動せんでネタにはしるんや！！」

「関西人の血統や！」

感動なんか吹っ飛ぶはずのやり取りなのに、みんな泣きながらはやてを抱きしめた。

が、実のところ、これがある事件、いや様々な事件を早める結果になるだなんて誰も思いつきもしなかったのだった。

「マスターエヴァンジェリン、文珠です、文珠の反応です！」
「瞬間か、継続か！？」
「継続です、継続的に使用されています！」
「ならば、座標特定も可能だな？」
「はい、今固定しました！！」

艦橋に歓声が響く。
後一歩のところまで近づいていながら、全く座標固定ができなかった世界の固定ができたのだ。
目印も地図も海図もなにもない海の上で、目的地を見つけたようなものだ。
感動もひとしおだ。

「・・・マスターエヴァンジェリン、文珠の力が一部虚空に消えています。」
「・・・その先はわかるか？」
「ある種の呪い、そんな存在です」
「ふむ、では文珠は治療に使われていると見て良いな？」
「予測になりますが、自己再生型の呪い、登校地獄のようなものではないかと・・・。」
「・・・人事ではないな。その呪い解析できるか？」
「目標接近までの時間があれば何とか」
「では、茶々丸は解析に精励せよ。ミニマリアは茶々丸を引き継いでくれ」
「「はい、了解しました」」

では、酒保を解放して、一時の喜びに浸るぞ、仲間(とも)よ。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン０８（後書）

ビビットにフラグがたちまくりですｗ

読める展開だと思いますが、お付き合いくださいませ

３／２３　ぐあぁ・・・・修正、か・・・・。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン０９（前書

私の無の中には色々な色があるけれど、忠夫ちゃんと一緒にいると
光り輝いている。
なのはもすずかもはやてもアリサも、みんなみんな大好き。
あの頃みたいな真っ黒な気持ちなんて忘れてた。
あの頃みたいな気持ちが、私の心にあふれるなんて忘れてた。

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまる、よ？

劇的な回復をしたはやては、嬉しそうに家事を手伝い学校に通い、そして体育を楽しんでいた。
とりわけ、体を動かす関係が楽しすぎて倒れるほど遊ぶ姿が何度も目にされたが、その姿こそが回復の証拠だと言うことで、周囲から見逃されていた。
これは認識阻害によるモノではない、暖かな歓迎の視線だといえる。

で、もちろん、文珠は対処療法にすぎないので、詳細な解析は行われたのだが、その結果が芳しくなかった。
原因判明、結果も分かった。
そしてその対処に困っていた。

「魔改造」魔導書「夜天の書」

これがはやて不調の原因だった。
俺やルシオラが細かく解析してみると、どうやら元々は情報集積型魔導書であったのを、誰かが魔改造したようで、このままだと、はやての全魔力を飲み込んで暴走することが決定しているそうだ。
魔力を供給しなければ暴走はしないがはやてが衰弱する。
魔力を供給すれば暴走する。

「まいったわね。」

忍さんがため息をつくが、俺もルシオラも苦笑い程度だ。
なにしろこっちとら、もっと分の悪い勝負なんかいくらでもこな

してきているのだから。

「ま、とりあえず、このシーケンス「守護騎士」起動まで時間を見るしかないわな」

「そーね、ま、起動した後も時間があるわけだし、最終的に取り込まれたって、真っ正面から救えばいいのよ。難しく考える事なんてないわ」

笑いあう俺たちを見て、忍さんが苦笑い。

「なんかさ、深刻になってたのが馬鹿らしいわ。」

「そのぐらいでいいんすよ。逆に、絶対に決めてることだけ守ればいいんすよ」

「絶対に決めてること？　それは？」

「はやてを救う。絶対救う。これ決定っす。」

明るい笑いが満ちあふれた部屋の外で、はやては泣いていた。

嬉しくて嬉しくて、心の底から嬉しくて泣いた。

人間、嬉しくても大量の涙がでるのだと知った瞬間だった。

部屋の外で聞いていたはやては生活を改めるどころか、どんどん動き回ることにした。

そう、守ってくれると言ってくれたから。

絶対に守ると言ってくれたから。

大好きな人が守ってくれると思うだけで、これほどまでに幸せなのかと信じられない思いであった。

さすがに前衛で別々に動ける魔法少女がこれだけいると、ジュエルシードの回収も早いもので、２１個散らばったジュエルシードも残り二つになった。
敵対組織やライバルがいないのだから早いものだが、それを知るものはどこにも居ない。

残りの二つがどこにあるかまでは解らないが、反応があれば即時に動ける体制ができていた。
まず、ルシオラの早期警戒電探網、続いて月村の情報網、そして俺の文珠による警戒網。
これだけあると、どれかにひっかかり、誰かが回収できる。
時間がたつと被害も大きいらしいんだけど、早々に処理できているので、ちょっと力を散らすのと、その後の封印ですんでいる。
はやての遠隔による指示も的確で、指令としての風格があると評判だ。

「狸隊長、これからもよろしく！」
「だーれが狸や、なのは！」
「・・・小狸？」
「小ってつけりゃかわいいつうもんやないで、フェイト！」

「豆狸っていうのもあるわね？」
「・・・アリサ、喧嘩ならかうで？」

そんな魔法少女隊のもとに、奇妙な訪問客が現れた。

子猫の訪問者、その名はリニス。
プレシア＝テスタロッサの使い魔だという。

プレシア、それは育児放棄の母親の名前。
横島忠夫の敵、とまでは行かないが、能力を使って探していたにも関わらず見つからなかった相手だ。
確かに母子家庭であれば育児は大変だろう。
仕事にかまけていて子供がじゃまになることもあるだろう。
でも、それを乗り越えることにこそ母親の愛があるってものだ。
そんなことをツラツラと考えていた俺だったが、リニスの証言で、どうやらプレシアなる女性が魔法関係者で、亜空間に住居を設置して研究三昧の毎日だったらしいことが解った。
で、その研究資金が数年前に一気に尽きて、身動き一つ出来なくなったという。

・・・？　何で一気に尽きるんだ？

「それが解らないのです。資金の調達は元金を使って自動運用して

いたのですが、ここ数年の市場乱高下のせいで自動運用プログラムの幅を超えていて・・・・」

あー、と視線を交わす俺とルシオラ。

それって俺らの介入の影響じゃね？　と。

とはいえ、言い出しにくいな・・・・

「で、今回はなにをしに？　アルフ、落ち着け！」

ずうっと警戒して唸っているアルフを抱きしめながら、俺はリニスに向き合った。

「・・・こんな事をお願いできる話じゃないのは解ります。ですが、お願いです、プレシアを助けてください・・・・」

「！！！！」

アルフが飛び出そうとするのを俺は全力で押さえた。

はやても一緒になって押さえてくれたので、何とかとどめることが出来ているが、アルフの激情も理解できるだけに心が痛かった。

「あんたは、アンタは、アンタ達は！　どの面下げてここにきた！ここに来れた！？」

「・・・それでも私は、プレシアを守りたい・・・・。」

それが使い魔の哀。

それが使い魔の愛。

「だからっ、おちつけ、アルフ。んで、ちょっと聞きたいんやけど

な、リニスちゃん」
「・・・はい」
「君の後ろにいる幽霊は誰なんや？」
へ？　と言う顔になったのは俺とルシオラ以外の全員。　幽霊の少女も驚いた顔になっていた。

驚いた。
忠夫ちゃんやルシ姉様には何時も驚かされるけど、今回は本当に驚いた。
お母さんの使い魔のリニスの後ろに誰かが居るという忠夫ちゃんが、光る手の魔法を使った途端、半透明の女の子が現れた。

・・・この子、知ってる。
この子、たぶん・・・・・。

「あ、あ、あ、アリシア、さま？」
『すごいね、君。こんな感じになってからだれも気づいてくれなかったのに、なんで君は解ったの？』
「ん？　結構全力で自己主張しとったからな。」

何気なく笑う忠夫ちゃん。
でも、なぜか私の胸の内には黒いものが渦巻いていた。

あの優しさは、あの微笑みは、あの笑顔は、少なくともあの子のものじゃない、と。

「フェイトちゃん、おちつきや」

はやてがきゅっと抱きしめてくれた。

アルフもきゅってしてくれた。

・・・そうか、私は嫉妬してたんだ。

お母さんを独り占めしたあの子に忠夫ちゃんが取られる気がしたんだ。

・・・そんな筈無いのに。

だって、忠夫ちゃんは所有させてくれないけど、所有してくれる、台本にも書いてあったし。

「はやて、ありがと」

「ええんや、一緒に暮らす姉妹やろ？」

「ライバルでもあり、よね？」

「せやね」

さっきまでの黒い気持ちは吹っ飛んでいた。

ああ、やっぱり私はこの家が大好きだ。

私はとても幸せだったんだね、忠夫ちゃん。

いろいろと聞いてみると、どうやらプレシアさんはずいぶん前から精神失調状態だったらしい。

さらには、フェイトちゃん自身にも自我ではなくアリシアちゃんを復活させようとしたが、失敗故に生まれたものとして扱いがぞんざいだったのだという。

このマンションも、復活後のアリシアとともに暮らすつもりだったが、うまく行かなくて放置したようだ。

『ごめんね、フェイちゃん。お母さんがオカシくなったのは私が死んだせいだったの。だから貴女にひどいことしたのも私のせいなの・・・』

「いいんだよ、アリシア。そのおかげで忠夫ちゃんに会えた、ルシ姉様に会えた、はやてに、なのはに、すずかに、アリサに会えた。禍福はあざなえる縄の如し、だよ」

「お、ずいぶん難しいこと覚えたな、フェイちゃん」

「ふっふっふ、あなたの未来の妻は努力を忘れないのよ」

「まちや、未来の妻はここにもおるで！」

そんな様子を見て、アリシアはスゴく嬉しそうに微笑んだ。

『・・・ほんとはね、お母さんに未練があると思ってたフェイトに頼むのってヒドいことだって思ってたの。だからどうにかして止めようと思ってたんだけど・・・』

はやてとじゃれあうフェイトを、嬉しそうに見つめるアリシア。

『・・・ね、忠夫ちゃん。私たちを助けてくれない？』

「ええで、わいは美女美少女の味方やからな」

『ありがとね、忠夫ちゃん』

ちゅっと頬をついばむアリシアを見て、はやてとフェイトは怒りに燃えた。

「「浮気はだめーーー！」」

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン０９（後書）

・・・簡単復活はしないようなことを書いていましたが、霊体があって自我があって肉体がある。
ＹＯＫＯＳＨＩＭＡなら簡単やん！　無茶苦茶簡単やん！？
あかん、自分の構成能力のなさに絶望した・・・ＴＴ

３／２３　絶望しつつ修正

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン１０（前書

護ると決めたものがある
護りきれなかったこともある。
取り戻すと決めたときに、全部を諦めることになるとは思わなかった
でも手にしたかった
忘れたくなかった

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじめる

魔法少女隊集合や！

はやてちゃんの号令で集まった魔法少女隊、プラス美由希さん。

本人曰く「撮影班」なのだそうだ。

なのはちゃんやらフェイトちゃんやらの変身を生で見て以来、自重という言葉を忘れている気がする。

衣装や変身パターンまで口を出し始めて、どうしたものかと思っていたけど、ルシオラや忍さんと意気投合し、強引に現場まで出向いてくるようになった。

仕方ないので、文珠のタリスマンを作ったところ、忠夫君の愛を感じるよとか叫んで一層の集中を始めた。

士郎さんや桃子さんも了解しているらしく、実践に勝る特訓は無いとか言っているらしい。

さすがに今回はまずいと思ったんだけど、妹やその友達を心配しての行動だったので諦めることにした。

「（アルフ、フォロー頼むな）」

「（わかってるよ。美由希になにかあったら、フェイトも悲しむしね）」

交戦的フェイト主義だったアルフも、先守防衛的フェイト主義に変わってきているのがありがたかった。

そんじゃま、いきますか！

「リニス、アリシアちゃん、先導頼むな」

「『はい！』」

育児遺棄と呼ばれる虐待がある。

それに気づいたルシオラさんと忠夫君が、早々に保護したのがフェイトちゃん。

その間も忠夫君やルシオラさんが親を捜していたらしいけど、全く見つからなかったみたいなの。

でも、今回見つかって、で、相手が魔法使いだって解った。

だから「Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩ」しなくちゃいけないから、私たちは「発動体」を持った。

オコジョ君は発動体を「デバイス」っていうけど、忠夫君が発動体って呼んでるんで、私たちはそういう風に言うようになってしまった。

「ね、忠夫。なんでジュエルシードを持ってくる必要があったの？」

「ん？　ああ。これって、その「管理世界」だと貴重なんだろ？」

「・・・うん。スゴく貴重だよ」

「だったらな、もぬけのからになった家から家捜しされたらいやだろ。」

「・・・ちょっとまって、忠夫。このロストギアを保護しに来るとしたら、管理局、管理局だよ？」

オコジョ君はスゴく焦ってたけど・・・・。
私もフェイトちゃんも持って歩いた方がいいという感じがした。
何となくだけど。

「あんな、オコジョ、いや、ユーノ。権力ってもんは集まれば集まるほど勘違いした馬鹿が増えるんや。でな、勘違いした馬鹿が一定数を超えるとな、高速で腐るんや。」

もう、見る見る早さやで、と肩をすくめる忠夫君。

「で、でも、管理局は平和と正義のために・・・。」
「なにも全部だめだって言ってる訳じゃねーんだ。でもな、腐った奴らは必ず権力を志向して、必ずトップにたちたがる。腐った仕事は部下にやらせて安穏とした地位に昇りたがる。それは人が人であるうちは変わらん事実だぞ」

ショックを受けたように黙るオコジョ君。

「地元の平和を守る人たちやらな、みんなのために理想を燃やしてる奴らはいい。でも、そんな奴らを利用して私腹を肥やす奴らはいっぱい居る。それが世界つうもんや」

苦々しい表情でオコジョ君は忠夫君をみます。

「忠夫は、ペシミストなんだね」
「んにゃ、楽観主義だぜ。だって・・・・・」

転移したての空間に、無数の陰が生まれる。

「こんな状況でも・・・・・・」

魔法少女達(わたし)の発動体に力が込められた。

「・・・ハッピーエンドが待っているって信じてるんだからな！！」

光の帯が陰を薙払う。

それは希望に向けた期待の光だった。

警報を受けて意識を覚醒した私は、信じられないものをみた。

自動迎撃兵が一瞬にして消え去ったのだ。

結界も守護兵(ガーディアン)もすべて。

娘のために、すべては愛する娘のために捧げてきた人生に陰りが見えたのは、あの失敗作(フェイト)が生まれたところからだろう。

記憶も、容姿も同じなのに、あの娘(こ)の心を受け継げなかった人形。

私はあの忌々しい人形を捨てたはずなのに、なぜか視界の中に人形が居る。

なんで、という思い以上に、心の底からの怒りを感じた。

なんであの子は生きているの？　何であの子は成長しているの？

何であの子は動いているの？

「私の娘(アリシア)は動けないのに！！」

端末を起動して全方位から攻撃をしたのに、なぜか当たらなかった。
画面の中の少女達の周辺に張られた光の盾に当たった瞬間、ありえない動きで、にゅるんと丸まってしまった。

「なっ・・・・」

『忠夫君、これ、結構シリアスぶちこわしだよ?』
『だけど、そこがいいんや』

にこにこ笑う少女と少年。
何でだかわからないけど、心の奥底から熱いものがみなぎる。
なぜ、この場にアリシアがいないのか、と。
なぜあの笑顔の側に、あの人形が同じような笑顔を浮かべているのか、と。

・・・リニス、助けなさい、リニス、助けなさい!!　この狂気を、この狂気をぶちまけるのよ!!　あの何の苦労もしていない子供達に、たたきつけてやるのよ!!
世界がいかに無情で狂気で最悪かを知らせてやるんだから!!

「ただやん、気配がやばいで」

ガクガクふるえる両足は、たぶん、別の魔力に共振しておるんや。
怖いわけやないで?

「わかっとる、たぶんネグロママや。」

『いちおう、精神的に病んじゃってるけど、私のお母さんだから、その・・・・』
「わかっとる。お手柔らかに、やろ？」

ただやんが私とアリシアの手を握る。
途端、足の震えがなくなった。
・・・あかん、怖いの丸判りや、もろ見えやん。

「はやてちゃんはつよいなぁ、こんなに怖いのに落ちついとる」
「ダメダメやで？　さっきまで怖くて震えとったもん」
「今は元気やろ？」
「愛するただやんが手をにぎっとるんや、元気になるて」

思わず見つめあう私ら。
なんでやろ、死亡フラグっぽいのにやめられへん。

「こらー、いちゃつくなー！」
「ただおさん、終わったら覚えててくださいね」
「だめなのー！　そういう役はなのはのものなのー！」
「忠夫ちゃん！今日は一緒に寝るからね！！」

あーうるさいうるさい。
戦場のラブラブは、こういう立場の特権や。
フォワードは火の粉かぶっとき。

なんだろう、こういう雰囲気懐かしいな。

麻帆良で事務所を開いた頃、こんな雰囲気だったのを覚えてる。
必死で必至、全力で駆け抜けながら笑ってた。
そう、たぶん、この子達もその空気を感じて笑ってる。

だったら、だったら、わいがその空気を守ったる。
この娘達を守ったる。
わいの全力全開で守ると決めた。

「（ルシオラ、来れるか？）」
「（三分待ってちょうだい。この世界の外に知ってる気配と知らない気配があるの。）」
「（・・・わかった、今回はそっちに集中してくれ）」
「（ありがと、ヨコシマ。愛してるわ）」
「（おれもだよ、ルシオラ）」

いつものやつで、勇気百倍。
気力満タン、霊力全開！！

「きたな、ネグロママ。良心の貯蔵は十分か！！」
「ただやん、それ貯蔵できへんで」
「気持ちだ気持ち！！」

相応のシリアスを吹っ飛ばし、俺たちの「ＯＨＡＮＡＳＩ」が始まる。
もちろん「高町家」式だ！！

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン１０（後書

ルシオラと横島の会話、実はイメージしているキャラたちがいます。
ヒントはエウレカセブンのラブ夫妻。・・・答えやねｗ
そのままの台詞は無理だけど、あの支えあう気持ちが好きだから。

３／２３　読者の皆さんに支えられて修正

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン１１（前書き）

気持ちは伝わる伝えられる。
思いは伝わる伝えられる。
強い、とても強い力で伝えられると、時間も空間も越えてしまう。
伝わってしまう。

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまるわ

ヨコシマにはハッキリと伝えなかったけど、知ってる気配は気配どころではなかった。
私の心のどこかでつながっている「彼女」の気配が、猛烈に感じられたから。

あの戦いのとき、次元潜行していた次元とはさらに異なる深深度の次元を航行してくるそれは、間違いなく「逆天号」。
いや、あの逆天号を模したＡＦの気配だった。

いまだ物理距離が遠いためコンタクトは出来ないが、より深くつながっていることを感じる。
不意に、頭の中にイメージが浮き上がった。
これは、ＡＦを使って私を召還した彼女の記憶だろう。
ここに至るまでの記憶、世界を捨てるまでの決意、そして、深く潜行している計画。

正直に言おう、さすがヨコシマの従者、と。

ヨコシマのハートを直撃せんとする計画の数々に、目眩すら感じた。
そんな中、向こうの記憶に「劣化文珠」として分類されているものを感じた。

そう、それはジュエルシード。

どうしても見つからなかった二つが、あっちに保管されていた。

とりあえず、簡単にエネルギーを取り出せるようにしてしまっているあたり、向こうの連中とは良い酒が飲めそうな気がする。

そんな記憶を味わっている中、一枚のボードが見せられた。

『無事でいろよ、まっててね、いま会いに行きます・・・・』

ヨコシマへのメッセージの中で一つ見つけたメッセージ。

『一緒に幸せになりましょう』

私は泣いた、泣けてしまった。

ヨコシマはずるいなぁ、こんなに良い女達に好かれてるんだもん。

くそぉ、知らない気配に八つ当たりね、決定。

何枚もの守りのベールを、一枚一枚はがしてゆくと、急にそれは現れた。

大きな救命ポッドのある空間で、窶れた女性がたっていた。

真っ黒な空間で、地面しか存在しないかのような空間で。

「お、おかあさん・・・・。」

「だまれ、だまって！　そう呼んでいいのはアリシアだけよ！！」

「・・・・！！」

フェイトは、それでも手を伸ばすことをやめられない。
失ってしまっていた郷愁が、失われていた思慕の情が沸き上がってきて止まないから。

「あんた達、何の用なの!?　わたしの、わたしとアリシアの世界に入ってこないで、壊さないで!!」

滂沱の涙と狂気に彩られた顔を見て、不意に俺は理解してしまった。

彼女は俺だ、と。

何人もの従者が出来ても、何人もの弟子が出来ても、愛をささやいても恋をしても、いつもぽっかりと空いていた心の穴。
いろんなものを詰め込んでみても、いろんなものを埋めてみても埋まらない、虚無の穴。
そこから沸き上がってくる黒い感情は、すべて従者に拭われてしまったけど、穴だけはふさがらなかった。
たぶん、彼女は、その穴からシミ出てきた黒いものに支配されてしまったんだろう、と。
必至にリニスとフェイトが拭ったが、それでも溢れてきてしまったのだと。

『忠夫ちゃん泣いてるの?』

ああ、俺は泣いてる。
おれがあの麻帆良に行かなければ、あのままGSを続けていればこうなったかもしれないと言う未来をみて泣いた。
あんなに尽くしてくれた従者達から離れてしまったことに泣いた。

まるで見捨てたみたいに離れてしまった事実に泣いた。

彼女は俺だ。

その事実を深く理解した。

「その絶望は知ってる」
「忠夫君？」
「その悲しみを知ってる」
「ただおさん？」
「だけどな、その絶望の先にあるものは知らない。」
「忠夫？」
「みんなが救ってくれた、みんなが助けてくれた」
「ただやん？」
「俺は、救ってみせる、フェイトも、アルフも、リニスも、アリシアも、あんたも！！！」
「・・・忠夫ちゃん」

絶望色の空間に、真っ白な光が生まれる。
それは俺が与えて貰うばかりだった希望の光。
心に灯った暖かな思い。

貫き続けることが出来たのは、絶えず心の力を貰っていたから。
仲間に友達に、両親に。
だから俺もかえし続けることにしよう。

与えて貰ったと信じる心を、倍返しで！！

何度も何度もたたきつぶしたはずなのに、何度も何度も殺したはずなのに、あのガキは、立ち上がってきた。

心臓を貫いたつもりだった。
脳味噌をぶちまけたはずだった。
内蔵を消滅させたはずだった。

それなのに、ガキは無傷で立ち上がった。

私の魔力は限界に近い。
私の生命も限界だろう。
ああ、あの子を生き返らせることすら出来ずに私は朽ち果てるのか。
ああ、なぜ、この朽ち果てかけた体で、こんなにも苦しめられなければならないのか。
教えておくれ、アリシア・・・・

『だって、お母さん、人の話ぜんぜん聞かないし』

・・・・？

『忠夫ちゃんがせっかくお母さんも私も助けてくれるって言ってるのに聞かないし』

・・・！？

『だったら、半死半生までもっていて、無理矢理治療しましょうっ

て・・・あれ、聞こえてる、お母さん？』

あ、ありしあ？

『うん、アリシアだよ、お母さん』

ありしあ・・・ありしあ・・・ありしあ・・・・・。

私の目の前で、天使の笑みを浮かべるアリシアがいた。
あの死相を浮かべたまま凍り付いたアリシアではなく、人形でもなく、あのアリシアが・・・・。

『・・・だからね、お母さん。ちゃんと忠夫ちゃんの話を聞いて？』

・・・私はガキをみた。
エメラルドグリーンの魔法剣を構えた子供は、苦笑いでこちらをみている。
敵意はなく憎しみもない。
なぜそんな思いでコチラを見れるんだろう？

『忠夫ちゃんはね、フェイトもアルフも面倒みてくれてたんだよ？
お礼は言っても文句は言えないよ？』

なぜ、なんだろう？
なぜなんだろう？

私は理解できないまま、アリシアに向かって倒れ込んでしまった。

「格好よかったね、忠夫君」
「うん、さすがなのはの旦那様なの」
「・・・ただおさんは月村の婿だよ？」
「ふっふっふ、忠夫ちゃんはうちを救ってくれるって約束だもん。うちの婿に決定だよ」
「ま、まちなさいって、フェイトは所有しないんでしょ？」
「・・・忠夫ちゃんは私の嫁！！」
「「「だめーーーー！！」」」

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン１１（後書）

がんがん幼女ハーレム形成中のよこっち。
やっぱ某女子中学生たちの猛攻が、絶対正義を失わせたんでしょうかねぇ？

とはいえ、魔法使い＆獣＆物の怪などの親和性は顕在。
がんがん落としてゆきます。

３／２３　あ・・・睡眠時間がねぇ、修正中ｗ

え、なになに？　なにしゃべればいいの？

う、うん。じゃ、うん

忠夫ちゃん大好き！！

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまるよ！

何年ぶりかの穏やかな気持ちに戸惑う。

あの、せき立てられるような思いが信じられないほどに穏やかになっている。

病院の一室のような空間で、私は今までの自分を省みていた。

アリシアの事故、治療行為の絶望、「Ｆ．Ａ．Ｔ．Ｅ」計画への参加、そしてさらなる絶望。

いや、なぜ絶望を感じたのだろう？

わたしは確かに落胆したが、あの子の、フェイトの優しさに救われていなかったか？

あの子の献身に、アリシアの影を見ていなかったか？

なぜ、私は絶望したのか？

「お、気がついたみたいやな」

少年は穏やかな笑顔をしていた。

まるであの時みたアリシアの幻みたいだった。

その笑顔で胸の奥が熱くなる。

暖かで、暖かで。

「・・・ここは？」

「おれんち。」
「・・・そう」

見回せば、その部屋は異常だった。
この管理外世界とは思えないほどの科学力もそうだが、随所に魔法が組み込まれていた。
絶対にこの管理外世界の技術ではない。
しかし、管理局の支配する世界の技術力でもなかった。
少なくとも、私が知るミットチルダ技術の数世紀先を行っている。

「・・・助けてくれたのね」
「フェイトちゃんに約束したからな。助けるって」
「・・・そう」

純粋な言葉を受けて、自分は悲しくなった。
自分の欲望と、自分の絶望を一方的に叩きつけた相手に助けられて。

「なぁ、あんたなら判ると思うけど、俺はこの世界の人間じゃない」
「・・・そうでしょうね」

この魔法と科学が融合した空間、それもミットチルダを遥かに越える技術力、洗練された空間に違和感を覚えないはずもない。

「でな、その元いた世界から俺ははじきとばされた」

・・・、この子供はなにを言いたいんだろう。

「到達した技術が、世界に受け入れられなかったんや」

子供とは思えないほどの悲哀に満ちた笑顔。
なぜだか心がふるえた。

「・・・その、その技術は？」

問わずとも理解していた、魂が。
でも問わずには居られなかった。

「魂の復活とその定着」

いま、私は理解した。
彼は、彼自身が、私と同じ道を歩いていたのだ。
私は道半ばで絶望したが、彼は行き着いたのだ。
その険しくも猛々しい波乱に満ちた旅路を。

彼は半身以上の誰かを失い、それを一度諦め、それでも諦めきれずにたどり着いたのだ。
説明されなくても判る。
私には判る！！

「・・・私もたどり着けるかしら？」
「いくにゃいけるけど、無理していく必要はねえだろ？」
「・・・？」

不意に胸に何かが当たる感触。

「おかーさん、きがついたんだぁ！」

それはいとおしい存在。
それは愛すべき存在。

それは、すべてをかけて取り戻すと誓った存在。

「ま、完全に死んではいなかったから、治療と定着と復活ですんだからな。世界からははじかれなかったみたいだぜ？」

涙が溢れる、心が悲鳴を上げる。

失われていた心の部分に、何倍もの何かが注がれる。

溢れでるものは光、溢れでるものは希望、溢れでるものは、その名は・・・・・。

「・・・アリシア・・・・・」

力ない腕で、わたしは愛娘を抱きしめていた。

「よかったね、フェイトちゃん。」

「うん・・・・・。」

フェイトちゃんとなのはちゃんがボロボロに泣きながら抱き合っていた。

はやてちゃんやすずかちゃん、そしてアリサちゃんも号泣で、声を殺して泣いている。

さすがにあの雰囲気を壊したくないからだろう。

乙女の心という奴だろう。

あれほどプレシアを嫌っていたアルフも、機嫌良さそうにしていたけど、私はあまり脳天気ではいられない。
なにしろヨコシマから明かされたプレシア＝テスタロッサの狂気の原因が衝撃的だったから。

彼女からサルベージされた狂気の大本、それは常時展開型の認識阻害魔法だった。
彼女の魔法の力に寄生する形で展開するウイルスのようなもので、それははやてちゃんの認識を狂わせていた魔法と同列のものだった。
呪式解析と分解をしているところに現れたエロオコジョ、じゃなくて、ユーノ君曰く信じられないものだという。
その呪式には「ミッドチルダ」と呼ばれる異世界の、管理局と呼ばれる組織のサインが入っているというのだ。
このサイン自体はかなり意図的に消さない限り消えないもので、逆に消してしまうと威力がかなり落ちるのだという。

「ユーノ君、これは秘密。ヨコシマ以外には言っちゃだめよ」
「・・・わかりました、ルシオラさん」

人の姿のユーノ君は、真っ青になって座り込んでしまった。

「だいじょうぶ？」
「・・・少しだめです」

彼の話では、以前、組織に対する話をヨコシマからされていたそうだ。
ヨコシマ自身が大きな力や組織に翻弄されてきたので忠告のつもりだったのだろう。
しかし、真実は意外な形で現れ、そしてありがちな展開を見せてきた。

ベタベタでドロドロで、ため息がでるほどありきたりな展開。
とはいえ、信じていた正義の崩壊は、ユーノ君には重いかもしれない。
なんだか昔のネギ君を思い出すわね。

「ね、ユーノ君。君には私たちがこの世界の人間じゃないことは判るわよね？」
「・・・はい。」
「私たちのいた世界でもね、一度ある国が崩壊したの。「正義の魔法使い」と呼ばれる英雄をバックアップしていた国が、ね」
「・・・・」
「まぁありきたりな話なのよ。戦争を操作して欲望を満たし、正義の魔法使いなんてバカを操って世界を操作したり、ね」

本当にありきたりな話。

「・・・それで、どうなったんですか？」
「それが傑作なの。その国の人たち全員が、こんな国じゃやってけない、っていって、みんな国からいなくなっちゃったのよ」
「・・・・えええええええ！？　ありですかそれ！」
「ま、本来ならなしなんだけど、その国も含めた世界が崩壊するって危機もあったから、それならとっとと逃げましょうって話になって、一夜に消えた幻の国の出来上がりよ」

嘘のような本当の話。
茶々丸ちゃんの記憶だけど、私にとってもリアルな笑い話。

「そ、それで、国のトップは？」
「それでも国の行政府に居座って、崩壊に巻き込まれて死んだって話よ？」

「・・・バカだったんですね」
「そりゃ、民草をみないで行政する奴らなんてバカでしょ」
「・・・そして、バカじゃないと政治は出来ない」
「あら、結構含蓄ある言葉ね？」
「・・・おじいさまの言葉です。だからバカが政治をして、知恵者が指摘しなければならない、そんな話です」
「ふふふ、結構意地悪なおじいさんね」
「？」
「だって、知恵者は責任のない立場から指摘して、政治を思うがままに動かせって言ってるんでしょ」
「・・・・あ。」

まぁ、きれいごとじゃすすめられないし、前線に立つばかりが戦いじゃない。
そういう話なんだけど、少年には早い話かな？
ネギ君は結構な年になるまで理解出来なかったみたいだけど、ユーノ君はどうかな？

誰もいない八神家のはやての部屋で、二匹の猫は途方に暮れていた。
しばらく主の世話が忙しくて見に来れなかった八神はやての様子を久しぶりに見に来たのだが、誰もいなかったのだ。
家の様子を見れば年単位で帰ってきていない。

魔法で情報を集めると、数年前におきた交通事故が原因で、それ以降見た人間がいないという。

ふつうであれば近所で一人暮らしの半身不随の少女が居なくなったとなれば大騒ぎである。
しかし、彼女を取り巻く意識操作の魔法によって、些細なことだと警察に報告もされていなかった。
ゆえに、なにが起きたのかすら判らなかった。

一応闇の書の転移は観測されていないので生きてはいるであろうが、どんな状態なのかすら判らない。

「・・・これ、まずいかも」「うん、まずいかも」

ダッシュで管理世界に戻ることにした二匹。
その軌跡が観測されているだなんて、二匹は気づきもしなかった。
この管理外世界のマッドな科学者達と、その世界外を航行中の二隻に監視されていたなんて。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン１２（後書）

修正マラソン、一週目を終えましたぁ・・・・。

やっぱり原作を見たことがないままに、ういき先生の記憶をウルウルで突っ走ったのが失敗でした。

とはいえ今から原作を見るのも違う気がするので、皆さんの忠告を受けながら進もうと思います。

・・・とはいえ、なんか、もう、外伝じゃなくなってきた規模になってしまった＞よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは

本腰入れなおしたほうが良いかも・・・（＾＾；

３／２３　というわけで、修正一週目終了

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン１３（前書き）

背伸びして、努力して、飛び上がって、頑張って。
とどかに所に届くようになったとき、視界が開けた気がしたけれど、
同じく護ってくれていた何かを失った気がした。
それは成長なのか、それは喪失なのか

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまる

報告は常に受けていたはずだった。
しかし結果は、

「八神はやて、失踪」

だった。

ここ一年ほど、口座が動いていないことに気づき、調査させた結果だった。
八神はやての異常生活を不審に思わせないために張った結界が裏目に出たともいえる。
彼女の軌跡は、あの管理外世界で追う手段が全くない。
唯一の救いは、あの「闇の書」が転移していないことだけが判っているということだ。

自動車事故以降失踪しているという事実から、事故による自身の喪失という可能性がある。
だが、その捜索には、かなりの人員と直接的な能力者が必要だ。
そうなれば、事が露見することになる。

いや、露見自体は構いはしない。

しかし、闇の書自体が再び転移されては困る。
せっかく管理外世界に転移してくれたのだから。

手元の資料から、あの管理外世界に近い船に気づく。
それはあの「闇の書」に縁深い存在であった。
ならば、その存在を確認させるしかないだろう。
少なくとも優秀な彼女ならば、目算通りに動いてくれることだろう。

艦長命令で、この管理外世界に降り立った。
曰く、未登録のモグリ魔導師が多数存在しているので動向を確認の上、任意同行を求めよ、というものだった。
執務官の仕事じゃないな、とは思ったが、相手のレベルを聞いて耳を疑った。
観測できているレベルで平均「S」。
放射された魔力だけで計算しても「SS」が居るという。
とはいえ、力はあっても世界を乱しているわけではないので、接触だけでいいのではないかと進言したが、絶対的な命令であることを言い渡された。

つまり、艦長からさらに上の命令か、それ以外の圧力なんだろう。

最近だが、艦長の言動に裏が多いと感じる。
もちろん、戦略的な意味もあるだろうが、何かに怯えているかのような気配を感じないでもない。
直接、息子として母に聞いてみたが、強く拒絶された。
まるで、治ってもいない傷口に触れられたかのようだった。
そんなわけで、親子関係もしばし低調だ。

まぁ、仕事には関係ないが。

「お、いいねー、いいねー、なのはいいねー！」
「お姉ちゃん、そろそろ勘弁してほしいの」
「なにいってるの！　魔法少女は忍耐と愛の結晶よ！」

よくわからないが、姉の好みのジャケットと妹の好みがあわないらしい。
まぁ、よく聞く話だ。
俺も初めのうちは母のお仕着せだったが、好みというのは育つほどに保護者から離れてゆくものだ。
いまでは口も出してこないが、ね。

「どうどう、どうよ、忠夫君、この魔法少女っぷりは！」
「いけてるでーなのちゃん！」
「／／／／」

やはり肉親よりも異性の声だな。
うん、どこの世界も一緒か・・・・。

・・・？

あれ？　なんで堂々とバリアジャケット展開してんの？

「・・・あ、あのぉ、ちょっといいですか？」
「なんや、にいちゃん」
「その、だねぇ・・・・。きみたち、魔導師？」
「なのちゃんはそうやな。俺と美由希さんはちゃうで」
「えー、忠夫君、魔法使いじゃない」
「魔導師ちゃうやん」

・・・えーっと、ちょっとまってくださいねぇ～？

隠遁して隠れて居るであろう魔導師を探そうと転移してきたら、目の前でバリアジャケットのデザインショーをしている子供達を見つけた。

聞いてみたら目的の魔導師みたいだ。

・・・おかしくないか？

いや、まぁ、話が早くて良いけど。

「あ、あのだね、実は、この周囲で大きな魔法の力が働いていることがわかってね、その調査できたんだ。」

「兄ちゃん何者？」

「・・・管理局ってところの執務官なんだ。・・・この辺は管理外世界なんで知らないと思うけど」

「管理外の世界なのに管理にきたんか？」

「ちがうよ。知識も技術もない人たちの手に渡れば危険なものがある。それから守ったり、それの事件を防止する仕事も僕らの仕事なんだ。」

ふーん、とうなずいた少年は、一つのアタッシュケースをどこからか引っ張りだした。

「じゃ、これ、預けた方がええな」

ふたが開かれると、そこにあるものを見て驚いた。

弾けんばかりに力を内包した宝珠がいくつも存在していた。

「こ、これは？」

「ちょっとまえに、町に落ちてきてん。やばそうやったから封印して回ってあつめといたんやけど、使い道なんか無いからな。ちゃんと管理してくれるんなら預けておいた方がええわな」

・・・信じられないほど簡単に、信じられないほど抵抗なしでロストギアの回収ができましたよ、艦長。

「その、君たちのほかにもこの町には魔導師がいるのかな？」

「・・・なんかまずいことでもあるんか？」

「いや、さすがにこの量を一人二人で集めることはできないと思ってね。だから協力者が居ると思ったんだ」

そういうことか、と笑顔の少年は、学校の友達数人が魔導師で、さらにその親族何人かが魔導師だと教えてくれた。

なるほど、この町は管理外世界に落ち延びた魔導師の隠れ里というわけか。

「でな、あんちゃん。わいらが知らんうちに、この町に魔法をかけた奴らがおるねん。一応解いたけどな、不気味やから調べておいてくれへんか？」

実に善良で純朴な少年の願いを聞いた僕は、その解除したという魔法の構成を受け取って、一度船に戻った。

いや、戻ったことにした。

「どういう事かしら、クロノ・ハラオウン執務官」

艦長、リンディ・ハラオウン提督はいらだちも隠さずにいた。

現地状況、証言、そして「執務官としての判断」をもって、任意同行を提示しなかったことを報告したのだが、それを「反抗」と受け取ったようだ。

どうも母親の意識が濃い気がするのは、低調気味な親子関係のせいだろうか？

「私は執務官の立場として、モラル意識の強い現地魔導師への武力干渉は適当ではないと判断しております。」

がん！　と拳をデスクに叩きつける艦長。

「私は、あなたに、何を、命令、したのかしら！？」

「未登録のモグリ魔導師が多数存在しているので動向を確認の上、任意同行を求めよ、という内容には、確認の行動と任意同行への同意という自由意志の介在する範囲があります。つまり、判断内容において、彼らの自由意志と執務官の判断が関わる自由意志が、です。これらの自由意志を束縛するのであれば、管理局としての執行の意志と内容の説明を指揮官へ求めます。」

「・・・・！？」

絶句とともに押し黙る艦長。

つまり。綺麗事が介在しない非情が存在するが、管理局として動くだけの正義が存在しない、いや、足りないのだろう。

ゆえに、頭が固いと信じる息子に話すことが出来ない、か。

こりゃ、ずいぶんと息子をなめてるね、母さん！

「艦長、実は地元の第二世代以降の、この世界しか知らない魔導師たちから、このような相談をされています」

提示したのは認識をイジるという作用の魔法。

簡易的な魔法だが、内容は極悪なものであった。

ある少女、半身不随で生活もぎりぎりの少女の存在を当たり前のように感じさせ、何の干渉もさせないと言う「無視」の魔法。

学校に入りたての子供でもしない嫌がらせどころではない悪質な、卑劣な、最悪な魔法だった。

その魔法要素を分解した公式を見て、艦長の表情も固まる。

「こ、こ、これは・・・・。」

「管理外世界へのモグリ魔導師の干渉が違法と言うのであれば、管理局の正式な人間の干渉がどのような法律に抵触するのか、艦長の背後の方に問い合わせていただけますか？」

真っ青になり固まった艦長へ、退出の意志を伝えて僕は去った。

どうやら彼の言いたいことは伝わったようだ。

さてさて、しばらくはこの世界に居座ることになるだろうから、ストレス発散用の甘味を入手しておかないとね。

なになに、プライベートではいい息子でいたいんだよ、僕は。

修正で死にそうになっているくせに新しい話が進んでしまう、そんな不思議なヨコシマンｗ

うちのクロノ君は一味違います！
様々なＳＳで描かれているようなアンチＫＹ要素を一切省いたら、なんと別人になって登場！！　というか、このこ誰？　って感じに！！

・・・魔改造しすぎでしょうか？　とはいえ、こういう「有能」なタイプだといいナーという妄想なんですが・・・ｗ

もちろん、リンディさんをアンチで落とす方向もなしです。久川綾ですからｗ

３／２３　修正後半戦ｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン１４（前書

途切れぬものがある。
それは愛、それは感情、それは、血統。
再び合うことが無いとしても、それは連なる血の記憶。

バカ息子、頑張るんだよ。

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまるんだよ・・・って酷いタイトルだね？

解れとはいえない。そんなのは指揮官として言えるはずもない。
解って欲しい、ともいえない。それは母親として失格だ。

折角掴んだあの人の仇、いえ、あの人への想いの禍根。
「闇の書」の尻尾を掴んだというのに、息子は信じられないほどに非協力的だった。
いや、そのモノの情報を私が与えていない所為もあるだろう。

息子は聡明で優秀で優しくて・・・・

・・・そして、正義、だった。

正規任務から外れた艦隊運用や復讐塗れの曲解任務など、息子の正義の前では薄っぺら過ぎてどうにもならない。
その上、あの人の行っていた不正すら掴んで帰ってきた。
なんと優秀な息子。
忌々しいまでに優秀で困る。

私とて、このような魔法が実施されていたなど信じられない思いだし、わざわざ管理局の端末を使ってこんな魔法を設計する神経も信じられなかったが、事実として突きつけられてしまっては、事実として動くほかない。
少なくとも、現地魔導師を始末すれば済む問題ではない。

「ロスト、ギア・・・・ね。」

現地魔導師から提供された、回収ロストギアの力は恐ろしいもので、この宝珠一個で空間破壊すら出来るほどの力を内包している。
少なくとも、この宝珠を使って「なにか」をされたとすれば、我々では何ら対抗する手段はない。
この「19個」の宝珠を全て使えば、管理局全体の破壊すら可能だろう。
そんな宝珠を、管理が必要だろうから、と差し出せる神経を疑る。
力を求めない魔導師などいない。
その力を手放して、平穏を望む？
そんな事があるのだろうか？

「・・・わからない、本当に分けがわからないわ」

私は、私の正義の姿を見失っているのかもしれない。
息子という正義があまりにも輝かしすぎて。

マリアちゃんの話だと、バカ息子が見つかったらしい。
量子間共振通信、だったかしら？
時間も空間も世界も飛び越えて、大量のデーターをやり取り出来るとかなんだとか。
で、数年前にこの世界から旅立った、息子の嫁達からの連絡で、息子のいる世界に接近でき、さらには無事な生存を確認できたそう

だ。
実に嬉しい話しだし、喜ばしい話なんだけど、お嫁さんたちの親御さんには申し訳なさ過ぎて笑顔は浮かべられない。
表面上は押し切られたというご両親ばかりだけど、苦々しい思いがあるに違いないから。
しかし、子供を心配しない親などいない。
そう思って、だんなと二人お詫びの巡業をした所、我がことのように喜んでくれた。
そして、向こうで子孫が育つことを祈るといってくれた。
私は、その言葉の裏も読める。
だけど、私は、それを無視して、心のそこから感謝した。
その想いに答えるために。
バカ息子、バカ息子、あんたは愛されてるよ。
バカ息子、子供が出来たら絶対に写真を送りな！
えー、翠屋に管理局の執政官が屯してます。
クロノさんという方で、結構優秀です。
ボクはというと、なのは達が学校に行っている間、人の姿に戻ってアルバイト中。
で、クロノさんを接待できるのはそっち側のボクだけなので、い

ろいろと話すようになりました。
そんな中で気付いたのですが、クロノさんってば、以前、忠夫が話してくれた組織論の中の異端に属する人で、だいたい出世の途中で弾かれるタイプに当たります。
そんなことを話した所、実にすがすがしい笑顔で笑った後、がっくりと肩を落としました。
何でも、上司と衝突して謹慎を言い渡されているそうです。
謹慎中の人が、こんな所に出歩いていていいんですか？

「ん？　ああ、甘味を持って帰ればナイナイにしてくれるんでね」

随分緩い組織だったんですね、管理局って。

「組織自体は冗長性のない硬いものだ。ま、末端の辺境部隊となれば、独自色が濃くなるものだがね」

その緩さが独自色ですか・・・・。
イメージが壊れる瞬間を感じましたよ、ええ。

僕自身が周りの子達と違ってミッドチルダを知っていること次元漂流者であった所をここの人たちに救われたこと、そして管理局を知っていることを明かすと、クロノさんも表情を固めました。

「それでも、彼は「あれ」を預けてくれたんだな」
「はい、全てが悪いわけではないことは解っている、といっていました」

そうか、まいったな、と頭をかくクロノさん。
クロノさん曰く、彼の上司は「そっち側」の干渉を受けているらしいのだといいます。

とはいえ、肉親だけに信じたいとも言っていました。
ボクは、その話を聞いて、ひとつのカードを切ることにしました。
ある人に仕掛けられた精神操作魔法とそのサインを。
ルシオラさんに託された、最大の情報の一端を。

なのはちゃんたちと校門まで来ると、えらく雰囲気のある美人が立っていた。
なんつうか、あの頃の隊長みたいなそんなかんじ。
つまり、関わると巻き込まれて死ぬ目にあう、つうわけやな。
避けて通ると意識してるとわかるので、正面から無視することにした。
だけど、美人は笑顔でこちらを見る。

「横島、忠雄君ね？」
「ちゃうで」「ちがいます」「ちがうのなの」「かえろか、ただやん」「夫よかえるわよ」「「「「夫は違うでしょ！」」」」」

呆然とする美人の横をすり抜けようとしたけど、正面に何かの壁が生まれた。

「・・・貴方が横島忠夫クンなのは解っているわ・・・。」
「ただおさん、また浮気？」
「忠雄君、Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩの時間なの」
「いややーーーー、高町式はいややーーーー！」

地面をごろごろと転がりながら、カベをすり抜ける。

なぜか足元にはねーんだもん。

「忠夫にげるな！」

当たり前のようにアリサもすずかも腹ばいですり抜ける。
なのはもフェイトもはやても追ってきた。

「え？」

呆然とした美女は、自分の張った障壁に阻まれて俺達を追う事は出来なかったようだった。
詰めが甘いこと甘いこと。
隊長っぽいのは、雰囲気だけって事は・・・・。

「護らなくちゃいけないものがある、って事か。」

子供が走るより早く匍匐前進をする俺は、今風になっている。

「「「「「まてーーーー！」」」」」

臆病風という追い風は、何よりも早いのだ！！

「マスターエヴァンジェリン、データが揃いました」
「茶々丸、ご苦労」

示された「のろい」は、確かにオドロオドロしいものだったが、蓄積された業以外は単純なものだった。
通常空間に復帰すれば、私たちだけでも一日、忠夫がいれば二時間ほどで叩っ切れる程度のものだった。
構造解析もすんでいる現段階では、通常空間でも生身で分解できるはずだ。

「ま、なんにしても通常空間に復帰せねばならないが、な。」

現在の問題は、マーキングできた通常空間との接点が小さすぎたことだ。
大きさにして人間の子供大。
これでは何も通らない。
少なくとも車一台分ぐらいの面積がないと空間破砕が起きてしまう。

「ルシオラからの返信は？」
「半年以内に面積面は解決する可能性が高い、とのことです」

可能性、か。
つまり、夜天の書の暴走を利用しようということ。
なんとも清々しい「悪」だな、向こうの妻頭は。
話せば忠夫もそれを認めざる得なくなるから、我々の存在を隠しているのだろうが、あの男が本当に何も気付かないはずもないだろうに。
まぁ、付き合いの長さで言えば我らのほうが長い。

あいつの考えそうな反則だって、な。

「エヴァちゃん、なんとなく、動くみたいに思うんだけど。」
「流石だな、神楽坂アスナ。どの動物的な勘は、ナニから来るのだろうな？」
「愛よ、愛。きまってるでしょ？」

ふ、と鼻で笑ってしまった私を、ポコスカ殴る神楽坂アスナ。
まぁ、時間は無いだろうが、全く無いわけではない。
しばしの休養といこう。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン１４（後書

奥さんずの要望があったので、奥さんフルコースでｗ

え？　なにか勘違いがありましたか？

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン１５（前書き）

思いは伝わる伝えられる。
それは背中で言葉で手紙で愛で。
囁いて呟いて抱きしめて・・・。
愛の形は様々だけど、愛は形にとらわれない。

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまります

とりあえず、親子対談。

「なんでこんな所にいるのかしら、クロノ執務官」もぐもぐもぐ。
「そりゃ、提督への土産を買いに、ですよ」もぐもぐもぐ。
「・・・それには感謝しますが、あなたは謹慎中でしょ？」もぐもぐもぐ。
「まぁまぁ、そういうぬけ技もＡＡＡの修行のうちです」もぐもぐもぐ。
「・・・で、うちの鑑の娘を何人籠絡したのかしら？」もぐもぐもぐ。
「人聞が悪いですね、エイミィだけですよ。ケーキセットだけです」モグモグモグ。

間抜けな効果音は翠屋特製ケーキバイキングを争うように食べているから。

魔法少女隊と俺が翠屋に到着すると、なぜかクロノさんがいて、ユーノと談笑していたんだけど、そこにあの美人まで現れて、二人で大騒ぎを始めた。
聞けば、クロノさんの上司がこの美人で、加えて言えばクロノさんの母親だとか。
とりあえず、翠屋の中には魔法を知っている人間しかいないことを教えると、肩の力を抜いてため息をつく美人、リンディさんだった。

心温まる家族の会話を終えた後、彼女は頭を下げた。

「このたびは、当世界の管理局関係者が皆様にご迷惑をおかけしたようで、申し訳ありませんでした」

素直な挨拶に驚いたクロノさん。
つう事は本題は他に有りってわけだ。

「ん、つうことは、あの迷惑な魔法、あんた等の仕掛けたもんなんか？」
「正直に申し上げますと、誰が仕掛けたかは解りませんが、管理局の端末を使って作られた魔法であることは確認出来ました。」
「・・・あれか？　右手のやることを左手は知らん、そういうことか？」
「その諺通りかは判断しかねますが、少なくともおっしゃる意味通りであると認めます。」

むずかしいな、責任の所在。
なにしろ、管理局の端末で作られたといっているが、管理局で作ったとは言っていないのだ。
仕掛けたのすら管理局だとは言わないだろう。
・・・？

管理局関係者が迷惑をかけた？
だれや？

「うちの執務官が、大変ご迷惑をおかけしているようで・・・。」

なんつうこっちゃ、こいつら絶対認めん気や。
腰強いなぁ。

「その件は問題ないで、なぁ？」

俺の言葉になのはちゃん達がうなずく。

「でもな、俺の身内があの結界に巻き込まれてん。さすがにそれを告発せん訳には行かんけど、管理世界での操作と告発は可能か？」

「難し「可能だ、それが犯罪ならばなおのことだ」い、クロノ！」

険しい顔をしていたクロノさんが、リンディさんの言葉を遮った。

「艦長、感傷は排除してください。このサインが入った魔法が、単なる管理局の端末なはずはないでしょ。・・・加えて・・・・」

ばっと叩きつけられた書類を見て、真っ青になったリンディさん。

「この、精神操作系の魔法を研究するだけでも違法なのに、制作に提督以上の人間のサインが入っていることは間違いないのです。これは絶対に許されるモノではない！」

熟読し、ため息をもらしたリンディさんが何かをつぶやいくと、手元の書類が燃えた。

「艦長！！」

「謹慎中の執務官が、任務外で手に入れた怪しげな資料を上司に渡す？　あなたは首になりたいのかしら？」

「・・・艦長・・・。」

うなるような噛みつくような視線でリンディさんをにらむクロノさんを無視して、こちらに視線を向けた。

「まったく、落ち延びた魔導師なんかにだまされて、これでも執務官なのかしら？　あなた方がどんな罪で逃げてきたかは知りませんが、このようなでっち上げで揺らぐほど管理局は小さくないわよ。」

ニヤリと笑うその顔に、先ほどの空気はなかった。
守るモノも戦う意志もない、そんな顔。

「どこで切り替わったか知らんけど、ばればれやで、その魔法」
「・・・どういうことかしら？」
「精神系に寄生して、所定キーワードに反応する魔法、こっちではウイルスって呼んでるけどな。」
「・・・何が言いたいの！？」
「ウイルスがあるなら、当然、あるもんやな？」
「・・・まさか！！」

取り出すのは俺のＡＦ！！
呼び出すのは、元ご主人様！！

「アデアット！」

「ふん、人を道具扱いとは、まったくタダオはしょうがないわね・・・。」

目の前で、忠夫の姿が変わった。
そこに現れたのは、始めてみたときの神々しい美女ではなかったけど、誰もが振り向くような女性、ピンクブロンドの美女だった。
彼女は流れるような呪文を紡ぎ、そして大きな力をふるった。

「「ディスペル！！」」

木製の杖を降り抜くと、その先にいた女性は、リンディさんは、小さくふるえて座り込んだ。

「タダオ、たまにはこっちにきなさいよ？」

そう、愛おしそうにささやいて、彼女は消えた。
消えた場所には忠夫が苦笑いで立っていた。

「・・・忠夫君、今のは、誰だね？」

力なくす割り込んだリンディさんを支えるクロノさんは、何かを耐える用に聞いた。

「昔、異世界召還されたときのご主人様っすよ。わりと万能な人なんで、召還を逆にかけることを承諾してもらったんすよ。」
「・・・でたらめだな、君は」

クロノさん、僕もそう思います。

で、まるで目覚めたかのような表情なのはリンディさん。
二度三度と頭を降って、深呼吸をした。
「・・・つまり、私にもあの精神操作系の魔法が掛かっていたのね。」
というよりも、一定以上の地位を持つモノには仕掛けられていると思います。
というか、それしかないでしょ、感覚的に。
「たぶんな、資格試験とか法規焼き付けの時にでも混入したんやろ。」
忠夫の言葉を聞いて、再び吹きため息のリンディさん。
「・・・なんて事なの。じゃぁ、管理局はすでに・・・。」
「誰かの意志で、誰かの恣意で動く組織になってるんやろうなぁ。」
がっくりと肩を落としたリンディさんの肩を抱くクロノさん。
「母さん、母さんは解放されたんだ。それだけでも俺はうれしいよ。」
「ク、クロノ・・・・。」
「それにさ、艦長になってからの母さんに違和感があってさ、その理由が解って本当にうれしいんだ。」
「くろのぉぉぉぉ・・・。」
ぼろぼろと涙を流す母親を抱くクロノさんは男前だと思う。

落ち着いたクロノさんのお母さん、リンディさんの話だと、今回のこの世界への干渉には自分たち親子の私的な恨みが関わっているという。

「闇の書？」

「そう、無作為に魔力を収集し、周辺に被害を与えつつ、最終段階で暴走。最後には世界破壊までしたあとで転移再生し、また別の人間にとりつく・・・・。」

「ああ、あれ？」

忠夫君はリンディさんの話を聞いて、思い当たることがあるみたいなの。

「・・・忠夫君、君は闇の書の所在を知っているのか？」

「うん、わいの身内に取りついとる。」

「なんですって！！！」

つかみかかろうとしたリンディさんを、クロノさんは押さえてくれた。

「・・・忠夫君、あれはとても危険なものだって解っているのかい？」

「もともと夜天の書って名前と、ゆがめられたシーケンスと、結果ぐらいは把握し取るで。」

にこやかにほほえむ忠夫君をみて、肩の力を抜くクロノさん。

「・・・その様子だと、何とかする手法があるのかい？」

「今はないな。でも、身内は救う。それは決定や」
「どんなに困難でもかい？」
「不可能なんて言い訳や。出来ると信じんもんに出来る事なんて無いもんや。」

胸を張る忠夫君を眩しそうに見つめるクロノさん。

「無謀で無計画で、そして頼もしいな、きみは」
「美女美少女の味方。それだけやで？」

「あら、また誰かの味方？」

そういいつつ現れたのはプレシアさん。

「いらっしゃい、プレシアさん、アリシアちゃん」

桃子さんが出迎えると、嬉しそうに微笑むアリシアちゃん。

「こんにちわ、桃子さん♪」
「忠夫ちゃんもいるわよ？」
「わーい！！」

とき放たれた矢のごとく、突き刺さるアリシアちゃんを余裕で抱き止める忠夫は「漢」だと思う。
僕も体を鍛えようと思った。

私は目の前に現れた女性をみて声を失った。

プレシア＝テスタロッサ。
ミッドチルダでも有名な科学者で、その優秀さから管理局の開発部にいた天才だ。
が、事故によって娘を失い、精神的に病んで一線から身を引いたと聞いていたが、目の前の人物にそんな気配はなかった。
実の娘を愛おしそうに見つめる瞳に陰りはない・・・、娘？

「あ、アリシアお姉ちゃん、いらっしゃい」
「フェイトちゃん、こっちに来てたの？」
「うん。」

双子のような二人、アリシアとフェイト。
なんだろう、何かが引っかかる。

「あら、なにか聞きたいことがあるって顔ですね、提督。」

いたずらっ子の顔で彼女は私をのぞき込んだ。
そして気づく、あの精神操作系の魔法をかけられていたのは、彼女か、と。
娘の事故、彼女の心神喪失、そして彼女の現在。
・・・管理局はすでに真っ黒だったのだ。

「あら、自分で気づいてしまったの？」
「・・・ええ、流石にここまでの材料があれば、気づかないわけがありません。ドクターテスタロッタ」
「じゃぁ、一つだけ追加情報。」

囁くように彼女は言う。

「人造魔導師計画「F．A．T．E」。聖王教会。二匹の猫の使い

魔。」

調べてみるといいわよ、とにこやかに、それでいて道を踏み外すことを誘う悪魔のように言った。

少なくとも、アースラの端末からでは調べることはできまい。

邪悪な魔法が切れたとたん、悪夢の真実が始まった。

「・・・とりあず、私、美女の範囲だと思うんだけど、横島君は助けてくれるかしら?」

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン１５（後書

なんと桃色さんの登場です！
つまり、ゼロ魔世界からの帰還が予定に組み込まれたわけです。
・・・やべー、ネタを自分で首絞めたｗ

いいとこ取りとは良く聞くがな、いいところをとるための努力なんかは聞かない。
ま、とんびに油揚げって言うが、油揚げをさらったとんびの気持ちなんて聞かなくてもわかるからだろう。
じゃぁ、油揚げをさらうまでの作戦は？　行動は？　潜伏は？
考えてみりゃ、かなりの努力の塊だろうさ。

待ってるほうだって、狙ってるほうだって苦労しているんだよ？

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はやくはじめるんだよ

リンディさんが管理局の絶望を感じた翌々日、俺たちはアースラという管理局の次元航行鑑に招待された。
招待されたのは魔法少女隊と俺、そしてルシオラとユーノだった。

転移によって乗り込んだ鑑は、わりと狭く感じだのだけれども、それは逆天号に慣れすぎだとルシオラに窘められた。
まぁ、そういやそうか、と内心で答えて見学を続ける。

今回の見学の名目は、管理外世界に流れ着いた魔導師の子孫に、ミッドチルダの技術力を見せて勧誘するというもの。
とりあえず、アースラではリンディさんとクロノさん以外はマジで名目を信じている。
だから、魔力的に優秀なのはちゃんやフェイトちゃんを本気で勧誘している人が多い。
で、続いてルシオラに声をかけるバカが多いのが不快だ。

こ、れ、は、おれんだ！

と睨みを利かせるが、

「あ、あははは、弟君はこわいね」

とかいいやがる！
くそー、と歯がみしていると、ルシオラがそっと手をつないでフォローしてくれるのがさらに悔しい！

もう、子供はいややーーーー！

「あら、忠夫君、飽きちゃった？」

ちょっとかわいい系のオペレータに声をかけられて、すぐに機嫌が直る自分もいやだった。

やっぱおれ、情けねぇ。

まぁ、そんなボケ倒しはおいておいて、そろそろ偵察鬼の情報が集まるかな、と思っていると、ルシオラの声が感じられた。

「（最悪ね。ほぼスルーで情報が転送されてるわ）」

「（つうことは、なんや、わいらの情報が全部か？）」

「（いいえ、はやて以外の全員って感じ。どうやらはやてに私たちが仕掛けた認識阻害はキャンセルできていないみたい）」

・・・技術力にさがありすぎやろ。

「（麻帆良の認識阻害がすごすぎなのよ）」

まぁ、それもあるか・・・。

神魔ですらごまかされる認識阻害。

あの駄女神（ヒャクメ）ですら気づかないうちに見逃していたというのだから、その威力たるや・・・・。

「（で、どこにいっとるかわかるか？）」

「（この前はやての家から転移した何かの向かった先って感じ）」

「（ここにも座標情報はあるか？）」

「（アースラの観測していた情報は改竄されてるわ）」

そりゃそうか。
とはいえ、ルシオラの観測情報と、アースラの情報があれば大体解んだろ。

「（あ、もう一つ匿名の情報があるから、精度は高くなるわよ？）」
「（プレシアさんか？）」
「（ひみつ）」

まーいいか。
精度が上がるっていうんだし。

ヨコシマの文珠で外の空間を閉鎖したあと、訓練室といわれる空間で模擬戦をして見せてほしいという話になった。
とはいえ、私とヨコシマは規格外なので、アリサとすずか、なのはとフェイトでする事になった。

「・・・とりあえず、ユーノとはやては各（おのおの）のチームの指令な。」
「「「「了解！」」」」

はやてがすずか&フェイトを受け持ち、アリサ&なのはをユーノが指示する。
指示には疾風に一日の長があるけど、発動体の調整をやりこんでいるユーノには全体が見える。
いい勝負になる、そう思っていたんだけど、実際は・・・・

「やめやめやめ！！　そんな高出力な魔法を打ち合うなんて命がいらないのか！！」

クロノさん乱入で中止。

いつもの半分ぐらいで打ち合ってるのに、というすずかの台詞に本格的な勧誘を考え始めたクロノさん。

まぁ、ヨコシマを説得できればいいけど、無理だと思うわよ、管理局を入れ替えない限り。

最近、すずかの発動体「東方不敗」の成長が著しい。アリサの発動体「世紀末覇王」の成長を大きく上回っている。

名前と違って、仲間の回復や防御に優れているんだけど、ヨコシマは「東方先生なら当たり前や、愛に満ちたかたやからな」と意味不明なことをいう。

逆に、はじめから高出力な「世紀末覇王」は成長率が悪い。

もちろん、例のスペースに「文珠」を入れればチートになるんだけど、その分の反動もすごいので使用禁止にしている。

その辺に不満はないのか聞いてみたら、「私がその分がんばればいいのでしょう？」と微笑むアリサ。

いい子だわ～。

ともに思考機能を付けているから、結構二人とも発動体と話しているらしいけど、内容はよく知らない。

プライベートに属することだしね。

「で、ルシオラ君と忠夫君は、どんな感じなんだ？」

さて、何か見せておいた方がいいかもしれない、と視線を送ると、いらずらを仕掛けた子供っぽく笑うヨコシマ。

両手には文珠が仕掛けられていた。

・・・あ、そういうこと？

この世界の、管理世界のデバイスの話を聞いて思いついた偽装を試そうと言うのだろう。

私は目で了解をつたえる。

「じゃ、ま、俺たちの切り札を見せるよ」

「「ユニゾン、イン！」」

「「「「「なっ！！」」」」」

それは美しい人だった。

腰まである黒髪をたなびかせた、神々しいまでに美しい人。

物憂げに視線を走らせた後、側にあった鉄板に自分を映して微笑んだ。

「「と、いうわけで、これが奥の手」」

にっこり微笑んだその人が、瞬間的にぶれて、そして二人になった。

横島忠夫君とルシオラさん。

そうか、彼女は忠夫君のユニゾンデバイスだったのか・・・。

なんだろう、心の底から残念だと感じてしまっている自分がいる。

あれ、なぜ母さんは俺をそんな可哀想なものをみるような目で見

るんだ？
何でみんなは同情的な視線なんだ？
なんで、なんで？

「クロノ、ユーノ君、あきらめが肝心よ？」

母さんにそう声をかけられて、膝から崩れ落ちたユーノ。
なぜだろう、俺もそんな格好になりそうになっていた。
なんだろう、この絶望感は・・・。

とりあえず、ルシオラにちょっかいかけてくる奴はいなくなった。

うん、平和やな。

ところで、なのはちゃん達にルシオラが引っ張っていかれたけど、何の話があるんやろ？

「なるほどな、低い次元階層を航行している時空航行鑑に一時転移し、そこから通常空間に降りようと言うのか・・・。」
「そうなのです。ドクターカオスから提示された現状で最適のプランなのです」

忠夫とルシオラが下位次元の異空間を潜行する次元航行船に転移したことで判明したのだが、その下位次元を経由すると、マーカーを通さずに転移できることが解った。
エネルギー自体も保有する「劣化文珠」で賄うことが可能で、確かに時間をかけずに再会できるだろう。
が、

「それではおもしろくない、でござるね」
「もう少しドラマチックに再会したいでござるよ」

ござるコンビ、犬と忍者が私の内心を言い当てる。
というか、みんなそう考えているのではないのか？

「・・・たしかに、その通りなのです。」

綾瀬、貴様もか・・・・。

とはいえ、この方法を使えば、向こうの様子を探りながらノータイムで介入が可能だともいえる。
つまり・・・・。

「おいしいタイミングをつかんで、おいしい登場が出来る、ということかしら？」
「まぁ、すてきな話ですわね」
「はい、結構おいしいですね！」

千鶴の合いの手に高音も愛衣も乗ってきた。
なんというか、うちの事務所的なノリだな。

「では、当直は常に忠夫の様子を観察。介入タイミングに見当がつ

いたら全員召集。これでいいな？」

是の言葉がそれぞれから発せられる。

ふふふ、おもしろい。

これは外の時間との戦いではないか？

誰の当直で「いいタイミング」になるのか。実に楽しい娯楽だよ、忠夫。

というわけで、足踏みをしなくてもいつでも踏み込めるフラグを立てました。

「この泥棒猫！」というわけですｗ

まぁ、そのへんは「よこしまほら」クオリティーなので、諦めてください

・・・・あれ？
「なのは出番ないのかな？」
「はやてが濃すぎて目立たなかったのよ」
「はやてちゃん、ちょっとこわかったね。」
「・・・一緒に住んでる私は、毎日がホラー」

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　「「「「はやくおわってーーー！」」」」

昨日、ただやんからいろいろなことを教わった。

私に発動体が渡されない訳、半身不随だったわけ、私に誰も構わなかった訳、そして、私の家にあったはずのこの本が、なぜかいつの間にかただやんの家の私の部屋にあるわけ。

私は私が知らない間に「夜天の書」という魔導書と契約していたそうや。

その魔導書が大食らいで、ふつうの量じゃ足りなくて、私の魔力をどんどん食べていたので、下半身が動かんようになっていたそうや。

・・・そうか、この子は大食らいやったんやね。

で、大食らいの子は、そろそろ私のために守護騎士という子たちを生み出してくれるそうや。

ただやんの力とウチの力の結晶、つまり・・・・・

「ただやんと私の子供やね！」

ずだだだだっ、と久しぶりにシリアスモードだったただやんとルシオラさんが倒れた。

忍さんも地面につっこんどる。

ありゃ？　読み違えたんかな？

「・・・はやてちゃん、おもろすぎや」
「えー、事実やろ？　ただやんの魔力と、私の魔力が元になって生まれるんやから。」

あーうー、とか何か言いたげやけど聞いたらへん。
最近ただやんは私にかまわなスギや。
もっと構ってくれへんと、すねるで？

「うん、ごめんなぁ。」

すぐに謝るただやんは、きゅっと抱きしめてくれる。
これで機嫌が治るんやから安いわ、自分ながら。

「でもな、はやてちゃんの発動体は夜天の書やからなぁ・・・。」

・・・ん？
騎士がでてくる夜天の書。
・・・もしや・・・・。

「ルシオラさんみたいな「乳」が出て来るんか！？」

なぜやろ、再び倒れとる。

おかしい、一番大切なことを確認しとるのに、なんでそんなにこけるんやろ？

ルシオラさんはな、巨乳やないけどな、大きさと良い柔らかさと良い、そして形・色・硬度、すべてがバランスをとられているバランスクイーンなんやで！　神が作りたもうた奇跡なんやで！！

・・・て、なんでただやん赤くなっとるんよ？

・・・・

・・・・

・・・・なんやて！？

あの乳を、あのルシオラさんの神乳を作ったのはただやんなんかぁ！？

そうか、あの胸を作り出すことが出来るんか、私にも出来るやろか？

・・・・

ああそうやったな、出来ない思ったらそこでしまいやった、出来るおもわなあかん、出来るんや、私には出来るんやーーーー！！！！

「あはははははははは！！！！」

はやてが狂った。

忠夫ちゃんと話した後、夜までずうっとあんな調子で笑ってた。

あんまりに不気味だったんで、忠夫ちゃんになにを話したのか問いつめたんだけど、精神攻撃はしとらん、ただ真実がハッピーすぎ

たんや、と訳の分からないことを言うばかり。
翌日からはやては、なぜかルシ姉様の胸を嘗めるように見つめたり拝んだりを始めた。

「はやて、何かの宗教？」
「ふふふ、似たようなもんや。私は成し遂げるんやぁ・・・。」

なんか病んでる感じが抜けない。
仕方ないのでお母さんに相談したんだけど、お母さん曰く・・・

「人にはね、なにも見えない時間があるの。後で後悔してもね」

ということなので、放置を決定した。

はやて、早く元気になってね。
一緒に暮らす人間として、ちょっと怖いから。

今日は楽しい誕生日～
わたくし「はやて」のたんじょうび～
なんといっても「乳」の日やで～
らんらんらら～～～ん♪
「おっぱいおっぱいおっぱいおっぱい～」

「はやて、声に出てるわよ」
「あ、ごめんなぁ～アリサ～」
「だめね、脳味噌とろけてるわ」
「はやてちゃん、いかれてるね。」
「ほら、自分の騎士なら、いやがらず堪能させてくれるはずだって、そのへんが緩んでる根本らしいわよ」
「・・・これで騎士が男ばかりだったら・・・。」

「いうな、いったらあかん!!　ウチの中で四体の騎士は、全員別の好みの「乳」なんや!!」

そや、一人は貧乳、ステータスや。
一人は巨乳、これもステータスや。
さらに一人は神乳、ルシオラさんや。
そして最後は・・・にゅふふふふ。

あかんあかん、このイメージ通りにならんとあかん!!

「もーいーくつねーるーとー・・・・」
「はやてちゃん飛ばしとるなぁ。」
「ただやんならわかるよな、わかってくれるよなぁ?」
「んー、始めから組み上げるのもええけど、自然に流れで積み上げるのもええなぁ。」

・・・流石や、わたしの旦那様。
そこにしびれるあこがれる・・・

「でも!　私はあきらめんのや～」

るんたった～。

あんなに明るかったはやてちゃんも、さすがに押し黙って待っていた。
自分から注がれる魔力が増えるに従って、魔導書から、夜天の書からあふれる光が増えていった。

それを周りでみていた俺たちも、手に汗握る光景だった。
握りしめた手を、ぷるぷると振るわせながら、はやてちゃんは祈るようにしていた。
まるで神に祈るかのように。
それは神に仕えるシスターのようだった。

「おっぱいおっぱいおっぱいおっぱい」

この呟きがなければ・・・・。

「忠夫君、なんではやてちゃんはあそこまで胸にこだわるんだろうね？」
「・・・しりまへん」

クロノの問いに答えられる俺ではないけど、はやてちゃんのこだわりの一端は仕方なく理解する。
だって男の子だもん。

苦悩する聖人のように、窮乏したおっぱい星人は今、己の夢を現

実のものにした。

もみしだいても逃げられない、理想の乳達が今ここに爆誕する！！

・・・爆誕、したんやで？

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン１７（後書き）

・・・誠心誠意謝ります。

ごめんなさい

なんでやろ～？　はやてがだめおっぱい星人に進化してしまった。
おかしいなぁ・・・・？

後悔はしていますが書き直しません。濃すぎて忘れられないんですもの。
だから謝ります、はやてファンのひと、御免なさい。

理想や理想や理想的や～
みんなみんなだいすきや～

ただやんにルシオラさん、それに守護騎士！
ああ、わたしはしあわせやな～
おっぱっぱ～

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじめてええで～

はやての狂気は収まった。

・・・訳じゃなかった。

忠夫ちゃんの話だと、夜天の書に設定されていた守護騎士は女性三人男性一人だったはずなのに、召喚されたのは女性四人だった。

烈火の将　剣の騎士シグナム、巨乳。
紅の鉄騎　鉄槌の騎士ヴィータ　貧乳。
風の癒し手　湖の騎士シャマル　美乳（ちょっと大きめなのは、はやて曰く「欲望が漏れ出した」とか）。
蒼き狼　盾の守護獣ザフィーラ　硬乳。↑ここ重要

設定上は筋骨隆々とした男性で、アルフみたいな狼っぽい感じにもなるはずなのに、出てきた姿は戦士の肉体を持つ女性。
本人も無茶苦茶戸惑っていて、叫び声まで挙げそうになっていたけど、性格がそうさせないらしくて一晩中声を殺して泣いていた。

・・・でも、ナニがそんなに悲しいんだろう？

忠夫ちゃんに聞いてみたら、男にしかわからん喪失感があるんや、男ならわかるんや、と泣きながらザフィーラを抱きしめていた。

ザフィーラも泣きながら忠夫ちゃんに身を預けていたのがジェラしい。

とはいえ、色々と受け入れることが出来たと語ったザフィーラは、一晩中開催されていたであろう「はやて抱乳祭り」に参加し、主従の誓いを深めたとかなんだとか。

なんだか解らないけど、忠夫ちゃんは参加しちゃだめだからね？

夜天の書の守護騎士が現れてから、アースラの情報規制も厳しいものになってきた。

ルシオラさんの調査でわかったのだが、アースラの情報は管理局に筒抜けだという。

そんなわけで、ウソの報告が出来ないので、闇の書発見とその主の状況を嘘にならない程度に報告した所、ある人間の使い魔が頻繁に、この管理外世界に現れるようになった。

ギル・グレアム管理局顧問官の使い魔であるリーゼ・アリアとリーゼ・ロッテであった。

俺の魔法と体術の師匠である二人をだますようで心苦しいが、あの精神操作魔法に関わるであろうグレアム顧問官の使い魔の二人を

どうこう出来る訳は無いので、偽装情報を流すほか無かった。

「ふーん、じゃあクロノ、失恋したんだ。」「したんだぁ～」

がん、とテーブルに頭をぶつけてしまった。

何を言っているんだ、リーゼ。

「だって、この忠夫ちゃんのユニゾンデバイスに恋をして、告白前に関係を知って失恋したんでしょ？」

「さっすがクロノ。初恋が横恋慕とは、お姉さん関心したわ」

・・・くそぉ、現地魔導師の情報を三段ぐらい落とした機密として渡したのに、なんでそこに食いつくんだ？

母さんもなんだか、その辺に食いつくし、エイミィも最近優しいし・・・・。

悲しくなんて無いんだぞ！！！

「でもさ、あんなに可愛かったクロノも、いつのまにか恋をするようになったんだねぇ。」「感慨深いよねぇ。」

その話はもういいから！！

「えー、もっと話そうよ、恋ばな」「どんどん掘り返そうよ、傷跡」

・・・質悪いな、このドラ猫どもめ。

やっぱ、手加減しなほうが良いのか？

それに、・・・悲しくなんて無いんだからな！！

「とはいえ、この、横島君だっけ？保有魔力が凄いね」

「現地混血の先祖がえりかな？」
「血統分析しても、系統不明、か・・・。」

うーん、と腕組で悩んで見せているのは、夜天の書こと、闇の書の収拾ページの問題だった。
闇の書は、魔導師や生命体の持つ生命エネルギー（もしくはリンカーズコア）からページを作り出す。
６６６ページ集まると収拾完了になるらしいのだが、実は騎士起動の時点で殆どのページが埋まっていたそうだ。
それは、はやてちゃんの魔力と共に流し込まれた忠雄君の魔力が膨大だったためらしい。

俺はそれ以上に「夜天の書」の設定すら飛び越える妄想を叩き込み続けたはやてちゃんのほうが怖いけどね。

「で、どうするんだい、執務官殿。」「アースラ実力一番の意見を聞きたいね」

いたずらっ子ポイ笑顔の二人に、似合わない笑顔を浮かべる俺。

「ま、そのへんは基本方針「待ち」だね」
「あらら、ママのお話聞かないと、僕ちゃん動けないってわけ？」
「まま、ままってか？」
「それが正しい上司と部下の関係だろ？」

からかったはずなのに反応なしで、少し機嫌の悪くなる二人。
ふふふ、いつまでも玩具じゃいられないんだよ、師匠たち。

「ロッテ、なんだかクロノが生意気だ。」
「アリア、私もそう思う。」

「「こりゃ、お仕置きだ。すみませーーーん、セットじゃないケーキを後六つ追加～」」
「ありがとうございまーす！」

・・・やられた。
くやしいが、女性という性別に勝てる気がしない。
母さんにもエイミイにも、誰にも勝てないのではないだろうか？

報告を理解した。

つまり、地元の魔導師の保護されており、収集も十分らしい。
ただ、彼女がねらわれていると判断した地元魔導師による隠匿が完璧すぎて、こちらでは察知できなかっただけらしい。
・・・隠れ里だけに、隠匿に徳化した魔法だとのことで、管理局でも採用をとアースラからの進言だった。

なるほど、確かに学ぶことではあるが、胡乱な人間が作り出した術式など使えるわけがない。
が、局内の研究者が作り出したというのならば話は別だ。
それは当たり前のように優れていて、それは当たり前のように信用できる、ものなのだから。
出口が決まったのならば、入り口に手を加えればいい。

なに、あんな世界など、闇の書と共に凍結されてしまうのだから、術式の資産などは早めに引き上げておくべきに決まっている。

ふむ、そういう意味ではアースラの諸君もずいぶんと役に立ってくれる。
夫も妻も息子も、管理局のために命を散らすのだから。
ふふふ、ずいぶんとまぁ世界のために頑張ってくれる一族じゃないか。

「・・・ねぇ、へんじゃない？」
「・・・うん、へんだよね？」

二匹の猫は息を殺して伏せていた。
それは使い魔の愛。
それは使い魔の哀。

「・・・クロノに言ってみない？」
「・・・クロノに言ってみる？」

しかし彼女たちは猫。
主を想い、主のために裏切れる猫。

「「いこう、アースラに」」

そういえばあのケーキおいしかったね、と囁きあう二匹の想いを乗せて。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン１８（後書き）

八神はやて、ここまでの魔法ｇｓの流れを、真っ向両断に断ち切りよったＷ

はやて、怖い子ｗ

犬系の使い魔は従順、というか保護者っぽい。
鳥系は、そう、使者って感じ。
じゃあ猫系は？
うちのリニスは、結構自由で奔放で可愛くて、その自由度全てを私を支えるために使ってくれる。
あたかも敵に与して見えても、私のことが一番なんだ。

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまるわ

はやてハイテンション

これが日常になってしまった。

担任から「検査を受けさせたらどうだ?」と相談されるぐらいハイテンションだった。

仕方ないので、海外にいた親戚の姉妹が一緒に暮らすようになったので、うれしすぎてねじが緩んでいると説明すると、大いに納得して教師も様子を見るという事になった。

はやてがこの国で天涯孤独なことは知られていて、うちが共同生活を申し出ている事を歓迎していた教師だったが、肉親ではないことをヨロシク思っていなかった風だった。

で、同性の姉妹が海外からきたという話はかなり歓迎できるらしく、このまま八神の家で暮らしてはどうかという話までしようとしたのだが、姉妹が家事能力ゼロであることを聞き、あきらめたらしい。

せんせ、せんせ、あんさんも家事能力駄目やったやろ?

・・・まぁ、それはさておき、我が家はルシオラとフェイトちゃん、そしてアルフの家事能力が高いため、人数が増えたぐらいではびくともしない。

もちろん俺もするけど、女の子の下着はあらえん。もったいなさすぎる・・・いや、恥ずかしすぎる。

若い頃とは違って、料理ぐらいするようになったし。

・・・現実逃避はやめよう。

学校の校門を出た途端、二匹の猫に飛びつかれたと思ったら、美女になった。

なにを言ってるか解んねえと思うけど、目の前の事実だけ並べるとそんな感じだ。

さらに言えば、なのちゃんとフェイちゃんがドスグロい気配を垂れ流しにしているのがみなくても解る。

他の三人がいないのが救いか？

「もしもし、はやてちゃん？　緊急召集事項ーAなの」「もしもし、アリサ？　すずかもいる？　緊急召集事項ーA、それもダブル」

あかん、なんかやばい気配しかせん。

「ねーちゃんら、離れてくれんか？　わいの寿命が秒単位でけずれてんねん！」

「にゃーーーー！　このいぬ！！」「にゃーーーー！　いぬきらーーーい！！」

「・・・緊急召集事項ーA、確認したで。」

「・・・忠夫、命の貯蔵は十分かしら？」

「ただおさん、今宵の東方不敗は、血に飢えていますよ？」

あれ、なんでやろ、背後から、絶対見えない背後から、即死レベ

ルの殺気が放たれとる。

「「「「「はなれろーーーー！！」」」」」
「「「「にぎゃーーーーーー！！」」」」」

忠夫からの電話は、変な人に絡まれているという「救助要請」だった。
駆けつけてみると、血塗れの忠夫とそれを恐れて抱き合っている二人の女性。
あと、血塗れの鈍器を構えた魔法少女。

・・・忠夫、成仏してね。ルシオラさんの後添いは僕が・・・・

「しんどりゃせんわ！！！」

・・・ちっ・・・・。

とりあえず、管理世界の人間だという事なので、翠屋に集合。
話を聞きつけたクロノさんも驚いていた。
なんでも、今回の黒幕だと思っている人の使い魔だというのだ。
少なくとも、事件を操る側だと思っていたので、こういう訪問は予想外だとか。

「・・そうか、クロノもおかしいって気づいてたんだ」
「あたし等の気のせいじゃなかったんだ・・・。」

彼女たちは、ここ数年の主の様子がオカシい事に気づいていたが、日頃の実務や責任感の影響だろうと納得しようとしていたそうだ。
でも、今回のはやてや管理外世界の扱いが普段の主の行為とは思えない行動が多すぎてクロノさんに相談にきたそうだ。
基本、忠夫にとって、この二人は直接的な犯行をしていた敵だ。
はやてが酷い生活をさせられていたのも、周囲から孤立していたのもすべて、この二匹と主のせいだと思っている。
でも、忠夫は黙っていた。
無言ではやてが忠夫の手を握っていたから。

「で、おふたりさん、これからどうするんだい？」
「「・・・うっ・・・・」」

その時は意地の悪い話し方だと思ったけど、後で聞いた話では同じ振りを二人にされたそうだ。
そう聞いても意地が悪いとしか思えないけど。

最近、うちの店が異世界人の集会所になっている。
親父やお袋は、ご近所の常連さん気分らしいのだが、基本、非常識だ。
まず、魔法。
魔法だよ、魔法。
信じられないが、俺たちの世界の外には魔法があふれているそうだ。
さらに、科学。

これがまた非常識だ。
あの、美人のルシオラさんもまた、そっちぐぁの人間らしく、結構落ち込んだ。
なぜだろう、わからんが。

なのはが拾ってきたフェレットも魔法だった。
なのはの友達のフェイト、はやて、すずか、アリサ。
全員魔法だった。
・・・美由希、俺、寝込んでいいかな？

「こら、ドラ息子。足りない努力を非常識のせいにするな」

親父、それはあんまりじゃないか？

リンディさんを絡めた会議が、翠屋で行われるのは、ケーキバイキングの魅力のせいばかりではないだろう。
この翠屋は、あの駄女神でも一見見逃すレベルで認識阻害をかけているので、管理局程度の観察力ではなにが起きているか解らないようにしてあるのだ。

実にチート。

ま、逆に麻帆良の連中なら見慣れた呪式なんで、逆に何かやってるな、と感付かれる事請け合いだけど。

「すごい呪式・・・。」「これ、アースラが提出したのよりレベル高いし・・・。」
「「クーローノー？」」

ねこねこ美人達に凄まれているクロノはさておいて、俺たちは現在の認識を合わせることにした。
俺たちが把握している夜天の書の状況、はやてを取り巻く状況、そして管理局に巣食う精神魔法の脅威。
少なくとも、幹部職員への干渉は間違いないだろうという話をしたところ、ねこねこ美人達は思い当たることがあるらしい。

少なくとも、彼女たちと俺たちの危機感は共有された。
もちろん、こっちのカードをすべて見せているわけではないけど、ねこねこ美人たちもこちらの動きに合わせてくれることになった。
なにしろ主の為だから、と。

「うちの使い魔もそういうところがあったわね。」

ふらりと現れたプレシアさんも苦笑いだった。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン１９（後書き）

アリシア空気、というよりも、ヤバヤア最前線の翠屋につれてくる
はずが無い、子煩悩ですから！

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２０（前書

それは、知る人ぞ知る「大号令」
それは、信じられないかもしれないほど明確な「合図」
それは、体験しなければ確信に至らない「現実」

虚無の海を渡ってなお、私たちはそれに出会えたことに喜んでいる。

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまりますわ

それは突然始まった。

予兆はあったし前振りもあった。
しかし、突然起きたというイメージは避けられないだろう。

始まりははやてが倒れたこと。
高熱を発し、起きあがることができなくなった。
譫言のように呟くはやての言葉を聞き、俺はザフィーラに添い寝を命じる。

「し、しかし、主を守ることが・・・・」
「堅乳でちちまくら、っていってんだよ、おまえの主は」
「・・・・ＴＴ」

とりあえず、朦朧としつつも嬉しそうなはやてだが、時間はもうないのだろう。

横島家の居間には、はやてを除く魔法少女隊とザフィーを抜いた守護騎士がいた。
加え、ねこねこ美人とクロノ、プレシア＝テスタロッサ、そしてルシオラと忍さん。

なんだか集まってる連中がカオス。

「現在のところの手段は？」

ルシオラ視線を向けると、彼女はホワイトボードを引っ張りだした。

「一つは、夜天の書との契約破棄。これは守護騎士及び管理人格のリセットにつながるわ」

「そりゃ、いつでもできるから検討外やな。ほかは？」

「完全起動前に管理人格と契約して、闇の書の部分を切り離す」

「難易度高そうやな？」

「ヨコシマとはやてが同期すれば、成功率は跳ね上がるわよ？」

「どんぐらい？」

「３％から４５％ぐらいね。」

「半分いかんのか」

思わず苦笑いの俺は念話をとばす。

「（で、正味、どんなん？）」

「（文珠使っても５０％を越えないわ）」

けっこう一か八かやなぁ・・・。

「つまり、はやてちゃんと、管理人格がどれだけ同期できるかてことでいいかしら？」

さすが研究者、プレシアの意見は的を射ていた。

「そのへんはコミュニケーションとってみんと、わからんわなぁ・・

・・。」

うー、と腕組みのおれをのぞき込むルシオラ。

「なんや、まだあるんか？」

「最後の一個がおすすめよ。」

「なんや？」

「任意の場所で闇の書に暴走させて、取り込まれたはやてちゃんを管理人格に保護させて、闇の書部分だけを最大火力で焼き払うの」

第二案の発展型っぽいが、最大火力ってのが引っかかる。

で、内容はむちゃくちゃだ。

最大火力って、どんだけの結界を張らんといかんのや？

ちゅーちゅータコかいな・・・・

むりや、そんな火力を納める結界なんかはれへんて。

なのはちゃんのレイハちゃん、すずかちゃんの東方不敗、アリサの世紀末覇王、そしてフェイトちゃんの・・・・・。

同時攻撃なんかして耐えられる存在なんかあるんか？

まじ時空振もんやて。

・・・時空振？

ああ？　もしかして・・・・

「異常な状態にして、管理世界からの観測が出来ようにするってか？」

「そうそう。前もって情報を流しておいて、管理世界群の注目を集

めとくっていう絡め手もコミコミよ。」
「うっわぁ・・・・」

最近、月村と付き合うようになってルシオラの黒さが増した気がする。

「なーなー、忠夫ちゃんよぉ。闇の書凍結じゃぁまずいのか？」

猫1をとりあえず睨む。

「おめー、はやてを永遠の闇の中に凍結して、歴史が忘れ去るのを待つってか？」
「で、でもさ、それで世界が救われるなら・・・。」

正直に言えば、これがはやてじゃなくて誰ともしれないイケメンなら有りかもしれない。
けどな、その台詞はやめとけ。
その台詞を吐いて、本当に実行されれば、その台詞の心の意味を知るぞ？

「・・・昔な、そうやって一人の女を捨てて世界を選んだバカがいたんだよ。そいつは生涯かけて悔やんだぞ。その選択を生涯背負わせるのか、この娘達に。おれは絶対にそんな選択はさせねぇ！」

猫1・2は押し黙った。
そんな問いに答えはないからだ。

「まぁ、感情論はいい。成算は？　忠夫君のことだ、確証のない事象まで含めれば、かなりの確率なんだろ？」

クロノ、あんたはいいひとや。
感情論を排してとか言いながら、確証のないものを成算にいれろって、あんたどんだけ俺の味方なんだよ。
思わずニヤついてクロノをみると、向こうも微笑んでいた。

「ま、努力とか根性なんて精神論を入れないで、もうちっとこっちが話の確証を入れれば、９０％を越えてるな」
「ほぉ、その確証っていうのはなんだい？」

俺は、にやりと笑ってこう答えた。

「霊感がささやくんだよ」

当直の千鶴から、ちょっと会議っぽいことをしているという北こくがあり、少しだけ期待して全員でみていた。
そして、子供化によって少し違和感のある忠夫が、あの台詞を言った瞬間、沸いた。

「「霊感がささやくんだよ」」

「エヴァちゃん、チャンバーに入っとくね」

「アスナ、まだ早くないか？」

「ふっふっふ、この盛り上がりがあれば、空間だって次元だって切り裂ける気がするの」

「マスターエヴァンジェリン、逆天号、エンジン臨界点前で待機」

「エヴァさん、周囲干渉用のマーカー射出」

「総員、転送陣準備開始」

何とも気が早い連中だ。

しかし、忠夫のあれが出たという事は、事件が一両日中に終わるといってもいい。

未だ忠夫の発言の真意が理解されていない向こうだが、こっちにしてみればクライマックスのカーテンが開いたようなものだ。

盛り上がらないわけがない。

「直接干渉は？」

艦長席の千雨が、インカムをつけながらこちらをみた。

「ルシオラに準備してもらってる。召還陣を敷いてくれるそうだが、二人程度が限界だそうだ」

「じゃ、高音さんと愛衣ちゃんかしら？」

千鶴の検討は私の決定につながった。

「高音、愛衣、召還要請とともに二人を送る。千鶴はバックアップだ。」

「「「了解」」」

これで最悪、高音の影からと言う進入も可能になる。
高音の影なら、この逆天号の形状を変更しなくてもそのまま受け入れられるだろう。

「・・・ふふふ、愛衣が今の新しい従者達を保護するのですね？」
「お姉さまがこの船を呼ぶのです。結構燃える展開ですね」

さすがに正確な状況を把握している。
うん、さすが我が仲間達だろう。

「きけ、仲間よ。雌伏の時は終わった。これより暫時介入が出来るよう準備する。日常品収納、生活を常戦に切り替え、コアタイムを拡大！見せ場は自分で作れよ、私も指揮から「女」にもどる！」
「「「「「はい！！」」」」」

さぁ、忠夫。
おまえの熱い血潮をすすりに三千世界を飛び越えてやってきたぞ？
失血寸前まで味わってやるからな？

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２０（後書

じわりと進みます。
この事件自体が、これ以降の基点になるはずなので、大切に書きたいとかなんだとか思っているのです。

単なる外伝のはずだったんだけどナーｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２１（前書き）

恋なんてものはいつだって艱難辛苦
愛なんてものはいつだって波乱万丈
恋愛はいつだって大冒険は必至。
胸を張りましょう、私達がする冒険は、誰もが通る道でありながら、
誰も知らない物語。

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまるわ！

大方針は決まった。

さすがに海鳴市には、周辺状況を考えずに魔法を叩き込める場所がないので、月村の大型クルーザーで外洋まで出ることにした。

アースラによる保護も考えたが、管理局自体は信用できない現時点で難しい。

調べてみてわかったのだが、アースラの攻撃管制まで干渉されており、オペレーターの操作ミスというログが残るような仕掛けまでされていた。

もし、これが発動すれば、どんな悲劇が起き、その責任をうちのオペレーター達が負わされるのかすら想像もできない。

瞬間、エイミィの顔がちらついた。

・・・あんなにも明るいエイミィが、もしかすると・・・。

グツグツとマグマのような感情が沸き上がってきた。

「クロノさん、どうしたんすか？」

忠夫君が何か心配そうに俺をのぞき込んでいる。

「・・・ん？　ああ。さっきルシオラさんから聞いた仕掛けのことを思い出してね。ちょっとマジムカって感じだよ」

「あれは、俺もまじで怒ってるっす。」

忠夫君は、見つけた仕掛けに対して逆ウイルスを仕掛けたと語っ

ていた。

ウイルス呼んでいたあの魔法は、なんと恒常的に士官閲覧画面に仕掛けられており、艦長もレジストしていることを伺えないように防御しているそうだ。

さすがに辛いと言うことをルシオラさんに相談すると、簡単な「呪符」という魔法式を宝珠に閉じこめたアミュレットを貸してくれたとのことで、かなり楽になったと嬉しそうだった。

そのウイルスに対して、逆ハックをかけるというのだからデタラメだ。

「そうでもないで？　案だけ恒常的にかけて来るっつうことは、管理局のＯＳかシステムに近い人間が常に確保されてるつうことや。せやったら、その人間を逆洗脳すればええ。もう逆探も済んでるしな」

もう驚くという行為自体が難しくなってきた。

「それにな、クロノさん。そんときにな、みんな一気に正気に戻った事を表明させるから、それに乗り遅れた人間だけをチェックすればいいんや。そいつがウイルスの手引きをした人間やな」

悪辣、というか、意地の悪い話だ。

まぁその意地の悪さも心地いいのだが。

「ね・・・忠夫ちゃん。うちのご主人様は・・・・。」

「たぶん、操られている側やな。」

「・・・そう、それならいいんだけど・・・。」

笑顔で答える忠夫君だが、内心はいかなるものだろうか？
彼の大切にしている少女、はやての境遇を生んだのは彼女たちとその主なのだから。
少なくとも、夜天の書が彼女にとりつき、それに気づいた彼女たちの主が、彼女の封印などと言う方策を採らなければ、この管理外世界全体を凍結封印するなんて恐ろしい発想まで行き着かなかったはずだ。

操られはする。
恣意的な意図に沿うように行動もする。
しかし、直接的な命令や異色行動は行われない。
普段の言動、普段の思考の範囲で行動できなければ、周囲の人間に怪しまれるからだ。
しかし、肉親や使い魔などから見れば違和感は際だつ。
ゆえに、今回のような発覚騒ぎが怒るが、再びかけられる魔法によって違和感が最小になるという流れだろう。
実に気分の悪くなる話だ。

「忠夫ちゃん、はやてが結構苦しそう」
「でも、はやてちゃん、わりと至福なの」

あー、あのこは女の子なのに、なんであそこまで胸が好きかな？
守護騎士たちの胸に囲まれて、本格的にとろけた顔をしている。
熱に浮かされつつも、憧れた乳が目の前にあるという状況が、至福の感情を生んでいるのだろう。

『クロノくんの、えっち！』

ぴょこっと現れたエイミィの通信ウインドウが、暴言を吐いて消えた。

なにを言いたいんだ、エイミィは。

「クロノさん、最低なの」

「クロノ、ひどいわ」

謂われのない暴言が魔法少女隊から浴びせられた。

悔しいが、女性という性別には逆らえない流れを感じていた。

針のムシロかと思われたアースラへの介入は、どちらかというと「横島家」へ身を寄せる形になった。

アースラの情報が、そこまで管理局に筒抜けになっているとは知らなかったし、私たちの行動すら筒抜けだった。

そんなことを解説してくれた「ルシオラ」は忠夫ちゃんのユニゾンデバイスだという。

でもわかる、私たちには。

あれは契約以外の、契約以上の何かでつながった関係だ。

「んー、そうねぇ、多分私にとって唯一の人で、ヨコシマにとっては私が一番ってところは事実よ。」

その辺のところを詳しく。

ぐぐっと私たちが踏み込むと、彼女も察してくれたらしく、色々と話してくれた。

はじめの出会いは敵同士、色々とあって捕虜の男と敵の女。

お互いを少しづつ知り、お互いを庇いあう。

そして運命の日、愛を誓い、愛を送りあった日が別れの日だった。

泣いたわよ、泣いた。
安っぽい気持ちで聞いて後悔したけど感動したわよ!!
少なくとも、今がどれだけ幸せだといわれても、絶対敵対できなくなったわよ!!

「ね、あなたたち、クロノ君ねらってるんでしょ？」

「「どっきーーーー!!」」

「あの手の男は、目標を見つけると一直線で、脇にいただけじゃ気づかないわよ？」

・・・やべぇ、見透かされてる。

「・・・私もね、純粋な人間じゃないから色々と引け目を感じることもあるけど、この気持ちだけにはうそがつけないわ。」

きゅっと私たちの手を取るルシオラ。

「がんばりましょ？　前途多難な愛のために。」

あ、姐さーーーーん!!!!
いろいろおしえてくださーーーーい!!

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２１（後書

キャラクターが増えた影響で、全然話が進みません
ごめんちゃいですｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２２（前書

ほら、かんじるやろ？
ほら、わかるやろ？
私とあんたの間に吹いている暖かな風が、お互いを行き来している
ことを。
私たちは、そう、既に絆で繋がっているんやで。

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまるで

四人の騎士に守護されたはやては、急遽発光した。
突然のことに驚いた騎士たちであったが、それでも離れなかった。
今までの契約者は、主は、明らかに精神を病んでいた。
暗い欲望を、泥のような野望を持って夜天の書を手にしてきた。
しかし、はやては違う。
同じ欲望でも、同じ野望でも、それは光輝く何かであった。
・・・まぁ年相応とは思えない欲望だが。
そんな強い思いは従者たちにも影響を与える。
そんなに好きならば、好きなだけもみしだけ、と。
シグナムは己の胸を差し出す。
ヴェータは己の胸を押しつける。
シャマルは己の胸にはやての手を当てる。
そしてサフィーラは涙を浮かべつつ抱きしめた。

ここに、はやての夢の結晶の一つが生まれる。
そしてここで気づく。
彼女たち騎士が、自分たちが、夜天の書の守護騎士でなくなっていることに。

「みなさん、ご苦労様です。我が主はやてとの対話はすばらしく、そして感動しました」

はやてがはやてではない口調で話していた。

「私は、夜天の書管理人格。名前はありません」

みんな驚いていた。
しかし手放さなかった。
それがよかった。

「管理者権限により、騎士のみなさんの契約対象を夜天の書から主はやてへ変更しました。」

だから、とはやての顔でほほえむ管理人格。

「・・・夜天の書を、闇の書を排除してください。」

宙に舞う夜天の書。
囂々と風が吹きすさみ、その中心で闇が生まれる。

音もなく、光もなく、ただ空間を呑み込むような闇。
気配もなにもなおそれは、その名は「闇」。
まさに闇を生み出す「闇の書」であった。
その中にまだ、管理人格とはやての意識がある。

俺はそのタイミングを逸したことを感じていた。
はやての意識と同調して、管理人格の起動そして説得を行うはずだったのに、はやてがはやて自身がそれを行っていたのだ。
行き場をなくした同調の文珠。

これを使うには、はやての意識は遠すぎた。

「ヨコシマ、願いなさい。ハッピーエンドを思い描くのよ。それが、私たちの仕事！」

ああ、ルシオラ、おまえはやっぱり最高の女だよ！！

「魔法少女隊、注目（アテイション）！！」

呆然としていた少女たちは俺を見た。

「管理人格は起動した、はやてと管理人格はまだ本の中だが、見えやすい敵が現れたのはラッキーだ。」

うん、と頷く気配が満ちる。

なのはが、フェイトが、アリサが、すずかが、ルシオラが、忍さんが、プレシアが、ユーノが頷く。

クロノが、リーゼロッテが、リーゼアリアが周囲警戒をしている。

「計画は修正。周辺に延びる闇を牽制しつつ勢力を削り、管理人格とはやての脱出を補助する。」

「はやてと管理人格のサルベージ方法は？」

プレシアが防御結界用の魔法を使う。

「わいがやる。」

俺の答えに少女たちはほほえんだ。

「まかせたなの！」「忠夫ちゃん、まかせる」「まかせたわよ、忠夫」「ただおさん、信じてます」

その声に答えて笑う俺。
ああ、こういう関係は本当に久しぶりだな。

「魔法少女隊、健闘に期待する！」
「「「はい！！」」」

それぞれが構える発動体が光を帯びる。

「レイジングハート、セットアップ！」
「世紀末覇王、汝の力を我が手に！」
「東方不敗、流派東方不敗は王者の気風よ！！」
「・・・曹巍覇王「絶」、大号令ぇ！！」

四体の思考発動体、インテリジェントデバイスがそれに答える。

「イエス、マイマスター！」
「よかろう、その覇気に応えん！」
「ふはははは！みよ、東方は熱く燃えている！！」
「・・・この曹操を使うからには、無様は許さないわよ？」

なにげに恐ろしいラインナップにレイハさんの影は薄かった。

感じる、感じる。
闇の書が解放されたことを。
でもでも、わたしはここを離れられなかった。
ここにはあの子がいる。
わたしとただやんの魔力の結晶、わたしとただやんの想いの結晶。

「だからな、私と一緒にきてや、な？」
「しかし、主はやて。私がここを去れば、必ず闇の部分が暴走します。そうなっては誰も押さえられません。」
「信じてや。うちとただやん、そして仲間を信じてや。」

苦笑いの管理人格を抱きしめるはやて。

「かんじるやろ、外で何が起きてるのか。」

視線の先に浮かぶのは、なのはやフェイト、そしてアリサやすずか。
魔法少女となって、闇の世界浸食をはじいている。
その攻撃すらエネルギーに変えている闇に対する暫時戦力投入は阿呆以外の何者でもないが、はやてと管理人格の救出が目的であれば理解もできる。
いわば、時間稼ぎなのだから。

「なのははな、みんなはな、私たちを待っててくれるんや。迎えてくれるんやで？」

頬を流れるそれを、胸に熱く吹く風を、彼女は言葉にできなかった。
しかし、少女には、はやてには理解できた。

だって「胸」のことだから！！！

「そうかそうか、素直になったんやな？」
「え？」
「わかってるわかってる、私はな、自分のモノになったオッパイを通して、心が読めるんや」

・・・はやて、怖い娘！！

「さぁ、その旨の中に吹く熱い風に名前を付けたろう。

一度、一度管理人格から離れたはやては、にっこりほほえんだ。

「その名は、祝福の風、「リインフォース」！！」

彼女の中で熱い風がはやての中につながる。はやての中で吹く熱い風が彼女につながる。
力が、想いが、心が、二人の中を巡り循環していた。
そん中、もう一つの風が吹く。
力強い、暖かい、そんな風が彼女たちに加わり、そして巡り帰る。
循環のもう一人、そう・・・・

「ただやん！！」
「きたで、はやて！！」

ふわりと、はやての隣にたった横島を抱きしめるはやて。
それをみてほほえむ管理人格、いや、リインフォース。

「紹介するで、この子が私とただやんとの最新の子供、リインフォースや！」
「まだ続いてたの、そのネタ！」
「・・・よろしくお願いします、お父様」
「案外、ノリがいい！？」
「守護騎士四人にリインフォース、育てがいのある乳ばかりやな？」
「育てるのは乳専門！？」
「・・・よろしくお願いします、お父様」
「え、俺も？」

思わずつっこみを続けているところで浪費した時間は戻らない。
流石にギャグパートはまだ遠かったのだから。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２２（後書

じつは、フェイトちゃんの発動対はギリギリまで迷ってましたが、
ほら、鎌だしｗ
個人的に大鎌といえば、彼女なのですｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２３（前書

幸せは歩いてこない
だから歩いてゆくんやで？

一歩、また一歩近づくごとに幸せは形になってゆくんや

魔法ＧＳりりかるヨコシマン、しあわせや～

レイジングハートを構えると、その先に広がるのは暗黒の空間。
何をしても、何を撃っても無駄な気がするけど、そんな気持ちは無視する。
いまも、はやてちゃんと忠夫君ががんばっているのだから。

「レイジングハート、いくよ！」
「イエス、マイマスター！」

手数勝負の攻撃を繰り返すけど、いまいち感触を感じない。
というか、ほかの魔法少女に比べて決め手に欠く気がする。

「世紀末覇王！　たたき伏せて！」
「おおっ！　北斗剛掌波！！」
「「どりゃぁぁぁぁ！！」」

「東方不敗、いきますよ！！」
「おぅ！　超級」「覇王」「「幻影弾！！」」

もうすでに、この時点で反則なの。
でもフェイトちゃんの先行試作型多機能発動体はこの上なの。

「チェーンジ、夏侯惇「春蘭」、セットアップ！」「おう！　いくぞ、我こそは巍の大剣！！」「「大切断！！」」

このほかにも「夏侯淵「秋蘭」」とか「曹操「華琳」」とか、正直に言うと一人で何でもできるの。
ちょっと悔しいかも。

「オコジョ君、やっぱりパワーアップは必須かも！！」
「むちゃいわないでよ、なのは！！」
「戦争は火力なの！」
「大鑑巨砲主義はロマンの彼方だよ！！」
「乙女にはロマンは必須だと思うの！！」

わりと余裕がないのに、こんなやり取りをしてしまうのは忠夫君の影響だと思うの。

「・・・主はやて・・・・・・」

四人の騎士に守護された少女、八神はやての体から三種の光が漏れ出す。
無色の光、金色の光、そして・・・・・・

一人の少女が三人の姿になったとき、騎士ははやてから離れた。
三人に礼の姿勢をとる。

「・・・主はやて、ご帰還を祝福します」
「・・・主、ご帰還を祝福します」
「・・・おかえり、はやて」
「・・・主はやて、無事のご帰還を祝福する」

四者四様の姿を見つめたはやては、自慢げに隣を見た。

「どや、リインフォース。うちの乳軍団は完璧やろ？」

「はい、主はやて。私も以前から疑問に思っていた違和感が解消されました」

ばっと両手を広げ、感謝を体で表し、そして一点を指さす。

「あらゆる美女美少女が揃っている我が騎士たちの中で、おっさんが混ざっているという違和感、それに気づかせられないバグ、最悪でした！！」

「せやろ！！」

周囲全員が崩れた。

もちろん騎士たちも。

「黒き欲望に染まっていたときには気づけませんでしたが、主はやてとともに目覚めてわかりました。私たちの守護騎士にオッサンは不要！！」

ずび！と言い切るリインフォースだったが、ザッフィーラは泣いていた。

泣き崩れていた。

「ふはははは、それが真理や」

「はい！　真理でした！」

ふはははは！　と笑う、はやてとリインフォース。

じつに似たもの主従である。

ともあれ、いつまでも崩れているわけにはいかなかったので立て

直す。

「はやてちゃん、指揮に戻ってちょうだい。わたしとヨコシマは前線にでる準備を始めるわ」

「了解や、ルシオラさん！」

ばっと表情を引き締めたはやては、己の騎士たちに胸を張る。

「きいてや、我が騎士達よ。」

崩れていた表情を引き締める騎士達。

「シグナム、あんたがおらんかったら、この騎士達（ヴォルケンリッター）はありえへん。おまえあっての騎士達（ヴォルケンリッター）や。」

「・・・主。」

「ヴィータ、あんたは私の力の象徴や。私の目の前にふさがる困難のすべてをたたき伏せてくれる力の象徴や。ずっと頼りにしとるで。」

「・・・はやて。」

「シャマル、あんたは騎士達（ヴォルケンリッター）のお母さんや。私とともにみんなを守りいやすんや。それができるいい女や」

「・・・主」

「ザッフィーラ、最後に私を守る騎士たる盾よ。騎士達（ヴォルケンリッター）の守り手よ。守り立ちはだかるものとして、共に歩いてや」

「・・・主はやて」

「みんな、みんな、私の家族や！　私ら家族の生きるこの世界を守る、守りきるで！」

「「「「はい！！」」」」

生気漲る視線の騎士達（ヴォルケンリッター）。
それを受けて、はやては内心歓喜にふるえていた。
「いくで、リインフォース。ユニゾンで、前線にでる！」
「はい、主はやて！！」

前線にでて、私の乳軍団の勇士を見るんや！！

八神はやて。
たぶん、この世界で一番横島に浸食された少女。

「でさ、前線にでる準備って何をするの？」

忍さんの言葉に微笑むルシオラ。
俺も少し疑問だったけど、なのはちゃん達の状態を考えると少しだけ余裕があるので聞き流していた。

「ちょっと強力な援軍を呼ぼうと思ってるわ。」

強力？　と小首を傾げる忍さんの目の前でプレシアさんが魔法陣を展開し始めた。
個数は2個。
しかし、かなりの空間固定をしている。
そんなに不確定な存在なんだろうか？

「こんな感じかしら？　ルシオラ」
「はい、プレシアさん。いい感じね」

描かれた魔法陣、なんとなく何かに似ている気がすると思う。
どこで見たっけか？
というか、こういう構成の解析って文珠ばっか使ってたから、全然覚えなかったんだよな。
・・・ん？
この構成は、うん、そうか、召還？　の系統だな、うん。
とはいえ、ここまで強力なパスをつなぐって、どんだけ離れてるんだか。

「さぁ、援軍を呼ぶわよ。」

ルシオラの霊気が高まると、なぜか俺まで光り出す。

「代理召還、横島忠夫の従者、高音＝Ｄ＝グッドマン、佐倉愛衣！！」

そこに現れた少女を見て、俺は固まった。
出会った頃よりも年齢は低いが、それでも「二人」に違いない、そんな二人だった。

「おひさしぶりですわ、忠夫さん」

「ふふふ、かわいいですね、忠夫さん」

え、え、え・・・なんで？

いや、気配は感じてたよ？

でも、魔法使いであることに誇りを持っている高音や、家族を大切にする愛衣が来るとは思ってなかったから・・・・。

「・・・そんなすべてより、忠夫さんを選んだ、そう言うことですわ」

「お姉さまのいうとおりです。女は強くて怖いんですよ～？」

「・・・いま、実感した。」

ふふふ、と笑ったルシオラが、二人に頭を下げる。

「初めまして、ルシオラよ。」

「・・・初めまして、横島忠夫の従者、高音＝D＝グッドマンですわ」

「はじめまして！　横島忠夫の従者、佐倉愛衣です！！」

なんやろ、この居たたまれなさ。

・・・ああ、なんか叫びながら逃げたいわ・・・・

「つまり、忠夫ちゃんの前の世界の奥さん達が追いかけてきた、というわけかな～？」

「半分正解」

俺の言葉に二人は、高音と愛衣はにっこり微笑む。

「あら？　八割じゃありませんの？」

「九分九厘、正解だと思いますよ？」

「そっか～、奥さんとそれ以外の女も追ってきたってことね～？」
「「大正解！」」
「だれやーーーーー！！」
なんだろう、この逃亡したい気分は。
「さって、忠夫さんイジリに時間をかけるのは、しばらくお預けですわね」
「はい、お姉さま。」
そういいながら、二人はカードを構える。
「「ａｄｅａｔ（アデアット）！！」」

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２３（後書

言い訳はしません！
その代わりに展開から逃げませんｗ

正直、書いてて楽しすぎて、逆に仕事の支障が出てしまい、ここ数日書いていられませんでしたｗ

とりあえず、週末に各シリーズを書き溜めることにします

忠夫、お前を思わない日は無かったよ。
忠夫、お前を思いすぎて涙を幾万流したよ。
忠夫、お前無しには居る事すらできなかったよ。

忠夫、この万感の想いの全てをこめて、お前の血をすすろう・・・。
さぞや甘美なことだろう。

魔法ＧＳりりかるヨコシマン、はじめられるかな？

守護騎士ザフィーラの防御により、私たちは一度距離をとった。

「ザフィーラが出てきたということは？」

「主はやてと管理人格リインフォースを夜天の書の闇からの分離が成功したぞ！」

ザフィーラの言葉に私たちの胸は熱くなる。

「魔法少女達よ、私も切り込むぞ。」

「私は、はやての「強い」意志だ。一緒に戦うぜ！」

シグナムとヴィータが自分の発動体を構えた。

「守ります、みなさんを、主はやてを！」

シャマルが慈愛の笑顔で微笑む。

「さ、戦う指令の登場や、いったるで！」

少し大人びた風のはやて。

魔法少女達と同じようにバリアジャケットを着ていた。

「うん、はやてちゃん、いこうなの！」

「はやて、指示を頼んだわよ」

「一緒に、いきましょう、はやてちゃん」

「はやて、いこう・・・。」

私たちはスクラムを組んだ。
はやてを含めた「真」魔法少女隊の新生。
いまから全力疾走だ。

「ザフィーラ、あと3分耐えて！」
「御意！」
「そのうちに、私らは、最大火力で闇をたたきつぶす。滓が残るやろうから、守護騎士は入れ替わりで大気圏外まで叩き出すんや。」
「そのあとは？」
「ただやんが何とかしてくれる」
「「「「了解」」」」

他人が聞いたら作戦なんてものじゃない。
でも、私たちには確証の出来た流れだった。
忠夫ちゃん、信じてるよ。

高音が自分達と俺との縁を通して魔法少女達を祝福してゆく。
これにより行動成功確率が信じられないぐらいに成功に傾く。
魔力が回復し、体力も気力も回復する、そんな万能感を感じているだろう。
懐かしい感覚に俺は微笑んだ。

「忠夫さん、みなさんを呼びますわ」

そういって、高音は自分の影を媒介にした大きな壁を呼び出す。

その大きさを見て、俺は「もしや」という思いと「やっぱり」という思いが入り交じる。
あの七日間を乗り越えた旗艦、その後の自分達の基地（いえ）ともいえるほどに馴染んだ、あの場所。

ずずっと雰囲気を出しつつも、音もなく影から現れる船首。
ゆっくりと、ゆっくりと、それがあらわれた。
昆虫、甲虫をイメージしたその船体を見て、俺は自然に涙が出た。

「逆天号・・・・。」

俺たちの家、俺たちの基地、俺たちの・・・・。

『忠夫、今からあの「呪い」の動きを止める！　小娘達を一度下がらせろ！』

その孤高の心根を感じる気高い声を聞いて、俺の声は揺れそうになった。
しかし、持ち直す。

『はやてちゃん、みんなを下がらせてくれ。助っ人が闇をばらす！』
『了解や、ただやん。みんな、もう一回下がるで！！』
『「「「「「了解」」」」」』

光の線となって舞っていた魔法少女と守護騎士達が引くと、そこをめがけて闇が手を伸ばす。

『させるか！！』

六角形の光の盾が何枚も闇に突き刺さる。

『アスナ、キャンセルモード！！』
『ウォォォォォォン！！』

照準は千雨が、力はアスナが受け持つ。
それはあの日々で何度も見た光景。

「・・・どうだ、忠夫。懐かしかろう？」

懐かしい声が背後から聞こえた。

「・・・まったく、こんなバカ捨て置けばいいじゃねーかよ」
「ふっ、その選択肢がないからこそ、ここまできたんだよ、忠夫」

そうか、と振り向きつつ抱きしめる。

「ようこそ、エヴァちゃん」
「うむ、大歓迎せよ。」

それはとても大きい存在だった。
甲虫にも似た「それ」から発射された光の板が、闇を駆逐してゆく。
目の前に迫った闇を、広がりゆく闇を。

「主はやて、あれは!?」
「わからん、でも、あれはただやんの仲間や!」
「すごい!!」

大きな甲虫からは、何人もの少女が現れ、闇を取り囲んでゆく。

「さぁ、うちらもいくで。作戦詳細は変わらん。こっちの意図をただやん経由で伝えるから、作戦続行や!!」
「「「「「了解!!」」」」」

守護騎士達が魔法少女たちが答える。

『ただやん、甲虫にこっちの作戦伝えてんか?』
『おう、今、逆天号に伝わった!』

あの甲虫は「逆天号」というらしい。
ただやんの話では、あの光の板は「マジックキャンセル」という魔法拒絶能力を持った攻撃で、その攻撃を使って闇の部分の分解をしているという。

「・・・なんつう対応の早さや」

闇の部分の分離なんて、ここ数時間の話だったはずだ。

『いやな、数ヶ月単位で闇の部分が異界にあるのを観測しとったそうや。』

怪しいので分析していた、って、どんだけやねん。
思わずつっこみを入れようと思ったけれど、今助かっているのは

事実だ。

『了解や。詳しい話は、ただやんの嫁を交えて、Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩしよな！』

『高町式はいややーーーー！！』

ごろごろと床を転がっているイメージのただやん。

でもな、ゆるさへんで。

目の前を飛ぶ魔法少女たちのなんと有望なことか。

あの「乳」が、みんなただやんのモノやて？

ゆるさん、ゆるせへん。

・・・私にも育てさせな、ゆるさへんでぇーーーー！！！

「・・・まったく、本当に「女」の行動しやがって」

空間の位相がそろった瞬間、影の転移で横島さんのところへ飛んだエヴァを見ていて苦笑い。

まぁ、あの人は無茶苦茶がんばって私たちを導いたんだ、このぐらいの役得があってもいいと思う。

とはいえ、みんなが色ボケしてちゃ、このタイミングで出てきた意味はない。

この絶対的なタイミングで、こっちの戦力と立場をアピールしなきゃ、な！

「アスナァ！いくぞぉ！！」
『ウォォォォォォ！』

すでにＡＦ全開の狼娘モードのアスナ。
それに呼応して狼モードのシロさん。

「おっし、すでに舞台は整った。役者もやる気十分、作戦は伝わった。じゃぁ、豪華絢爛な舞踏って奴を、この場にいる関係者全員に見せつけようぜ！！」

「「「「「了解！」」」」」

全員が横島さんとのつながりを感じた瞬間ＡＦを発動させる。
カードはその繋がりを祝福するように輝きを増した。

「千雨、つっこむアルよ！！」
「クーと拙者は、先陣でござるな」
「ま、待つでござる、拙者もいくでござる！！」

完全戦闘民族が武装と共に立ち上がる。
が、「シロさん、後詰めの防衛っすよ？」「切ないでござる！」というやり取りは忘れちゃいけない。
鉄板だしな。

「ネカネさんとタマモさんは、中央指令系統を。」
「わかったわ」

「ん」

二人の狐美少女がほほえむ。

「じゃ、逆天号の管制はいつもどおりね」
「了解なのです」
「おまかせください！」

次々に所定の位置の席に座る仲間(とも)たち。

「千鶴さん、火器管制に入って石化体制に入って」
「・・・わかったわ」

特殊体制だけど、そんな訓練はいくらでもしている。

「ほんじゃま、魔法少女と共同作戦だ、燃えるぜ！！」

だって、ほんものだぜ！？
魔法少女、魔法少女が、リアルで活躍する世界って、まじかよ！！

あたしゃ、いろいろと女の感情で突っ走ってきて、それなりに後ろ向きになったときに後悔もしたけどな、でもな、横島さん！！
リアル魔法少女の世界に流れ着いた？
リアル魔法少女を守って育成してる？

うわっはぁ！
私にもかませろ、つうか、私も魔法少女する！！

「テンションあがってきたぜぇ！！」

・・・やべ、鼻血でそう。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２４（後書

えー、これからＧＳ側の出番ばかりで魔法少女が空気になりますが・・・
よこしまほら外伝、というかサードステージということで、ご理解くださいＴＴ

４／２　ざくざく修正しました。＋ＷｉｎＸｐ標準のテキストエディィターで編集すると一定以上の文字数だと改行バケすることを発見。以後注意ですね

念を起こそう。
残念を呼び起こそう。
無念を呼び覚まそう。
失念を思い返そう。

闇に沈んだ全てを引き上げて、光の輪に戻そう。
そこには、希望の未来があるのだから。

魔法ＧＳりりかるヨコシマン、はじまりますよ♪

「～♪」

それは黒い意志。

「～♪」

それは闇の意志。

「～♪」

それは無念に終わった、残念したこの世に残る負の意識。

「～♪」

恥ずかしながら、この私、氷室絹の得意分野だ。

思いを込める、意識を込める、力強く、安らかなる想いへの昇華を願いながら。

「おキヌは拙者が護るでござるよ！！」

シロちゃんが霊波の剣で襲い来る闇を切り裂く。いや、闇の切り口が光へと転化してゆき、切り咲いてゆく。

散華する闇の意識が光へと昇華してゆく。

これこそが、死霊使い（ネクロマンサー）の真骨頂。

この場所でも、私は死霊使い（ネクロマンサー）で居てもいいの

だと、そんな想いが笛に乗ると、闇たちが、黒い意識から光へと転化したものたちが暖かい想いを返してくれる。

黒い意志よ、闇の意志よ、無念に終わった、残念したこの世に残る負の意識たちよ。

あなたたちの長い旅路は終わりを告げた。

暗い闇夜はすでに終わった。

明るい先をこれから目指そう。

明るい明日を目指して進もう。

輪廻の明日が手を伸ばしている。

輪廻の未来が明るく迎えてくれている。

さぁ、進もう。

さぁ、共に歩もう。

踏み出した先にこそ、あなたたちの明日があるのだから。

撤退中の船を護るようにシールドを張っているが、取りこぼされた闇の破片は其れだけでも強力で、連携でもされると一人では始末できかねていた。

もちろん、忠夫君の仲間と呼ばれる少女二人の力が弱いわけではない。

逆に強大で強力だった。

しかし、それ以上に闇は、闇の手は細かく多く強力で絶望的に感じた。

「クロノ、引け！」

反射的に背後に身を引くと、目の前に一人の少女が現れた。
それは、先ほど忠夫君のそばに現れた金髪の少女だった。

「アデアット！」

輝くカード型のデバイスを構えた彼女は、闇を、闇の触手をすべて跳ね返した。
まるで、聖なる乙女かのようだった。

「ふふふ、ここまでやりたい放題ということは・・・・」

聖なる乙女とは思えない声色で。

「・・・忠夫、思いっきり「やって」いいのだな？」
「おっけーや！！」

船の上で「丸」を腕で作る忠夫君をみて、聖なる乙女の顔が邪悪に変わった。

「ならば、見せてくれよう、真祖の真祖たるその力を！！」

少女の詠唱が始まると、周囲の闇すら巻き込むような魔力の渦ができ始めた。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック・・・・」

三連接以上の口頭呪文による大型魔法など、研究所でも見られないほど珍しいものだけれども、それは洗練されているように見えた。

「・・・来たれ氷精、大気に満ちよ。白夜の国と凍土と氷河を・・・・」

囂々と吹き荒れんばかりの冷気が彼女から溢れる。

「凍る大地！！」

彼女を起点として、一直線に氷の道が出来た。

それは道というよりも、氷で出来た、横倒しのビルディング。

「・・・ふはははは！　この地の精霊は、どうやら私に協力的のようだな」

同じ呪文を連発し、高笑いの少女。

唖然と見ていた自分の隣に氷の壁が出来た。

「「氷爆」！」

気づけば闇が迫っていた。

「小僧、私の魔法に見ほれても、忠夫から引きはがすことはできんぞ？」

・・・あー、はいはい、そのとおりですよ！　見とれてましたよ！！

「さぁ、闇は使い放題、氷精は協力的、ならばやるしかあるまい！！」

「クロノ、にげてぇー、にげてぇーーーー！」

あ、忠夫君がすごい勢いで撤退指示を出してる。

・・・やばい、命の危険しか感じない。

目の前で、こおるせかい＋おわるせかいのコンボが発動。

クロノはギリギリ逃げられたみたいだけど、半分ぐらい凍って船に落ちてきた。

まぁ、広域戦滅呪文だしなぁ。

対軍呪文が個人で、それも精度無視でたれながしって、ドンだけ迷惑よ？

涙目で体をふるわせているクロノだが、猫1号2号の双子山に挟まれているのは少し羨ましい。

「はーーーーはっはっは！　すばらしい世界だぞ、忠夫！！」

そうなんだよなぁ。

この世界って世界意志が薄いせいなのか、魔法に対する拒絶が少なくて、無茶苦茶威力があるんだよなぁ。

文珠もかなりの威力だしなー。

「忠夫さん、ちょっとウザイので打ち落としていいですか？」

愛衣ちゃんや、ちゃんとエヴァちゃんの援護してるのは知ってるから。

「エヴァちゃんや、そろそろ戦線あげてくれや！　俺も前にでる！」
「わかった、では待ってるぞ！！」

猛烈な高周波音を置き去りにエヴァちゃんが闇の中心へ飛び立つ。

「高音はこのままＡＦ制御、愛衣は周辺護衛。クロノ、復帰したら護衛とアースラとの連絡頼んだぞ！」
「「はい！」」
「・・・・りょ、う、かい、だ・・・・。」

というわけで、隣のルシオラの手を取る。

「それじゃぁ、まいりましょうか？」
「うん、いっしょにいこう、ヨコシマ」

音もなく融合を果たす俺とルシオラ。

「こ、これが同期合体なのですね・・・。」
「きれい・・・・」

従者の呟きを背後で聞いて、俺たちは飛び立った。
向かう先は逆天号。
最後の大詰めは、やはりこいつの出番だ！！

我が内なる十二神将。
彼らの出番は、こういう純粋な悪意に弱い。
基本、霊症や怪異に強いが大規模な大事には弱い。
だから、こういう大事での私の立場はブリッジクルー、それも通信関係になる。

『きこえるか、逆天号』

その声に背中がふるえた。
そして、即座に回線をメインに移す。

「こ・・・こちら逆天号。感度あります！」

私の声に、向こうの気配がゆるむ。

『その声は、アキラちゃんやな。こちら横島忠夫とルシオラ、乗艦を希望する！』

その声に、みんな声を上げた。
歓声を上げてしまった。
やっと会えるんだ、やっと会えるんだ！！
見れば全員が、茶々丸さんですら瞳を潤ませている。

「艦長・・・・」
「じょ、乗艦を、許可する！」

千雨ちゃんの言葉に心の内側が万歳三唱。
浮き足立ちそうな心を抑えつつ言葉を紡ぐ。

「いつものゲートから入ってください。チャンバーまでは一直線です！」

『さすがやな、アキラちゃん。いつも頼りにしてるで！』

ああ、私ってば、なんて単純なんだろう。

こんな一言で気分が最高潮だ！

「横島さん、そんなに火力が必要なのかい？」

苦笑いの艦長に横島さんは笑顔のような声。

『ん？　ああ、火力が必要というよりも、次元震を起こして中央世界に恫喝を入れたろかと・・・・。』

うわぁ、横島さんは横島さんだなぁ・・・・。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２５（後書き）

おまたせしました～、そろそろ大騒動が終局に向かい、別の修羅場になりますｗ
とはいえ、横島従者隊は共有することが当たり前なので、その洗脳に魔法少女達が耐えられるかという話になります。

・・・というか、はやては門が開かれれば飛び込みます。
乳天国ですからｗ

４／４　いろいろ修正したんです

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２６（前書

力は見せられて感じるもの。
力は魅せられて近づくもの。
力を見せられて恐怖させられた人たちは？

魔法ＧＳりりかるヨコシマン、はじまる

私たち魔法少女と、横島さんの仲間が闇を徐々に細切れにしてゆき、そして浄化していくけれど、それに近い速度で闇は増殖していった。

疲労もあるけれど、気力が削れていくのがわかる。

「すずか、ブレてきておるぞ！」

「ありがとう、東方不敗！」

あぶない。

集中力が切れかかっていた。

いくら魔力が回復するといっても、大業を何度も繰り返しだしていれば、回復しきれない疲労というものが残ってくる。

それが神経を圧迫し、集中力を乱す。

・・・あ！

東方不敗でも気づけなかった隙をついて、闇が私に襲いかかった。

ま、まずい！　そんな思いの私の前に、金色の影が現れた。

「・・・闇の血筋の一端を担うものが、この程度で心乱すな」

ひと目でそれを見破られて私は動揺しそうになったが、彼女の口元に気づいた。

八重歯というには鋭すぎる犬歯。

いや、「牙」。

「常に胸を張れ、常に誇り高くあれ。それが「我ら」というものだ！！」

彼女の気迫と共に、氷の世界が爆発的に広がる。
これは、魔法。
だけど、私が使っているそれとは違う。
でも、根元的に、根本的に何かを感じることができた。
これは、「私たち」に最も合う魔法だろう。

「うむ、学んだようだな？」
「はい！」
「ならば、後ほどあおう。」

ジェット機のような音を立てて彼女は去った。

「主よ、負けていられぬぞ？」
「うん、がんばるよ、東方不敗！！」

護りたい。
仲間も、友も、世界も、そして・・・。

「誇りを！」

春蘭・秋蘭のコストを使いきり、いま、最後の覇王曹操「華琳」

を操っている。
　鎌という特性上、受け流し返すことに先鋭化していて、コスト消費が少なく、最後まで使うことが多い。
　逆に、この曹操こそが、「絶」の真の姿ともいえる。

「フェイト、集中力が途切れてるわよ」
「ごめん、華琳。」
「私を使う貴女が途切れては、私が生かされないわ。最後の瞬間まで淑女たれよ」
「うん！」

　視界の端ですずかを襲おうとする闇が見えたけど、華琳が接近友軍の情報をくれた。
　そう、集中、だ！

「ふむ、幼いながらよい極みに達しているでござるな」
「うん、いい感じアルね」

・・・集中・・・・

「おお、すばらしい！　こちらの気配を伺いながらも集中しているでござる」
「さすが、忠夫の弟子アルね」

・・・・・・集中・・・・・・

「む、今の一撃、刹那殿に通じるものがあるでござるな」
「うんうん、武器に振るわされている感じは残るけど、いい修練アルよ！」

・・・・しゅうちゅう・・・・

「できるかーーーーー！！！」

「フェイト、私が許すわ、たたっきりなさい！！」

「いやいや、まつでござるよ、そろそろ逆天号の全力照射が始まるから、退避勧告にきたのでござるよ」

「・・・退避？」

感じた。

あの、カブトムシっぽい船から、忠夫ちゃんの力を、今まで感じたことの無いような高まりを！！

「・・・ありがと」

「なになに、いいでござるよ」

「さ、とっとと引くアルよ？」

まるで駆けるように宙を舞う二人を見て、私は華琳に囁いた。

「（あれ、練習しよ？　ちょっとかっこいいもん）」

「（同意ね。あんな風に駆けられれば、白いのにまた差を付けられるわ）」

なにげに、なのはとレイハにライバル意識を持っている華琳だった。

忠夫君からの連絡で、一気に闇の質量を削るらしい。
私のディバインバスターでも半分も削れないのに、一気に大半を散らすというのだからどんな攻撃かと思ったら、スゴいのが来た。

「ーーーーーぎゃーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

それは絶叫、それは絶望、それは断末魔の叫びのような音を立てて、衝撃を与える。

甲虫、逆天号から発せられた光によって、闇の大半が消え失せた。
すでに蠢く黒い点でしかない。
そこに、忠夫君の仲間が集まって取り囲んだ。
二人の女の子が横笛を響かせ、何人かの女の子が光を注いでいる。
よくわからない、よくわからないけど、きれいな光景だった。

「よ、なのちゃん、ごくろうさん」
「なのはちゃん、お疲れさま。」

宙を駆けるように現れた忠夫君とルシオラさん。

「ね、忠夫君。あれは何をしてるの？」
「んー？　闇の中心を浄化しとるんや」
「浄化？」
「うん。」

忠夫君の話を聞こうと、みんなが集まってきた。

「あれはな、闇の意識や運命にとらわれて、世を妬み拗ねていた魂を説得して、元の輪廻の輪に戻そうとしているんだ。」

私たち魔法少女には解らなかったけど、守護騎士のミンナには解ったらしい。

「忠夫殿、そこまでしていただけるのですか？」

「美女美少女の味方やからな！」

シャマルの言葉に胸を張る忠夫君。

いつものことなのに、なぜか格好よく見えたのだった。

すべての映像は、アースラから現地状況として、管理世界すべてに送信されている。

管理局、次元管理局は強権で押さえようとしたが、こと、「異世界間外交」となっては次元管理局の職分ではないと「政府」が乗り出してきた。

次元間連合政府という、有名事実の存在が。

いや、自分たちの魔法科学をも超える技術を持つという世界と接近して初めて意味を持ち得た「外交」という存在が。

基本、管理世界にとって、管理外世界など技術の劣る野蛮な世界だった。

管理してやることすら厭う存在であったのだ。
しかし、見せられた技術の数々は、管理世界にとっても解析不能、理解不能、再現不能の技術体系であり、不可侵条約を結んででも関係を切りたい相手であった。
が、少なからずいくつかの事実がそれを許さなかった。
ジュエルシードを代表とした管理世界が管理していると主張している「ロストロギア」による被害。
闇の書への独断専行による干渉とその被害を彼らに与えていること。
そして、その解決まで現在進行形でさせている事実。
また、表にできない事実として、「精神干渉系魔法」による次元管理局の暴走にも巻き込んでいた。
これは、諸外国が存在しない、ひとりぼっちの孤独な国なら問題はなかった。
が、他国が、それも自分たちよりも遙かに進んだ攻撃魔法が存在する世界に対して起きた事件ともなれば、話の筋道をただす必要があった。
事件担当者の処分程度で話が済む問題ではなかった。
少なくとも、対外国に対して言い訳の立つ処分が必須といえる。
そんな反応まで引き出すことを計算に入れているのが、あんな子供たちだというのだから恐ろしいことこの上もない。
すでに精神操作系の魔法についての操作はミッドチルダで相当進んでおり、捕縛された人間のリストは恐ろしい数にまでになっている。
私自身がかかっていた経緯も報告しているので、辺境を巡回している部隊まで捜査の手は伸びるだろうから、最終的な事件のあらましが纏まるのが何時になるのかも解らないレベルだ。
とはいえ、今は目の前の「現実」に目を奪われていた。

我々「管理世界」における、最悪のロストロギアとまで言われた「闇の書」が、闇の書が作る闇が、正面から押さえられていた。
横島忠夫が率いる魔法少女たちが、見たこともないようなディバイスを用いて切り飛ばしてゆく。

しかし、これも全力ではないのだ。

全力で彼女たちが力を振るってしまうと、闇の書に取り込まれた「八神はやて」が失われてしまう、だから手加減して押さえ込んでいるのだ。
が、この作戦行動と戦力だけでも目を見張るものがあった。
管理局基準で言えば、空戦魔法技術がすべて「S」以上、集団戦闘における連携と作戦行動すべてが「S」以上という判定がされている。
これが単なる管理外世界の少女たちならば、どんな手を使っても取り込みたいに違いないだろうが、彼女たちはより強大な存在の向こうにいる。

横島忠夫

彼の存在が、これからどんな扱いになるのかが注目される点だろう。

「艦長！　高エネルギー体が転移してきます！！」

オペレーターによる操作によって、画面が切り替わると、そこには闇とは違った雰囲気の黒い存在が写っていた。
が、そこから現れた存在は私たちの度肝を抜いた。

「・・・見た目はふざけてますが、エネルギー保有量が並じゃあり

ません。」
「エイミィ、推測でいいわ。どのぐらい？」
「見えているエネルギーだけで、アースラの５２倍です・・・・」

ブリッジで息をのむスタッフ。
すでにアースラが正面から対応できる限界を超えていることを意味する。
いや・・・・・

「正体不明の砲撃により、闇の書が、闇の書の闇が・・・「分解」されていってます！！」
「な・・・・、どうやってるというの！！」
「解析不能です！　探査魔法も解析魔法も反応ありません！！」
「周辺で待機していた部隊から撤収許可が求められています」
「艦長、あそこは危険です！　うちの部隊では生き残れません！！」
「・・・クロノ執務官が魔法の影響で凍結しました」

半分凍って、リーゼたちに抱きすくめられているクロノが画面に写った途端、エイミィの顔が般若のようになった。

「・・・艦長、ドラ猫ごと転移させることを進言します」
「あー、エイミィ？　いちおう、管理世界側の法務執行担当として現場にいなくちゃいけないのよ、あのこ」

血の涙を流さんばかりに画面をにらむエイミィ。
あー、うちのこ、何気にモテるわね。

「艦長、あの戦艦より「射線上より引け」との警告が来ています」

本来であれば鼻で笑う話だ。

しかし私は指揮した。

「アースラ、三次元座標上から移動！　惑星半分ほど移動するわよ！」

はじめは驚いたスタッフだが、私の表情を見て即座に動いた。

「メイン動力全力稼働！！」

「スラスター奇数番、全力噴射！！」

「シールドエネルギー割り当て増大！！」

何を危惧したかを理解したスタッフの勘は外れていなかった。

今までアースラの居た場所を通った高密度のエネルギー束を見送ったそのとき、だれもが自分の命が助かったと感じて力を抜いていた。

「みんな、再突入しないように軌道計算をやり直してちょうだい」

「「「「了解！」」」」

さーて、この情報を、ミッドチルダはどう感じるかしらね？

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２６（後書

さー、そろそろ政治の季節です。

何しろ、色んな情報をぶっちゃけましたので、次元を越えた三国志状態になる予定です。

・・・フェイトちゃんの発動体から思いついたわけじゃありませんよ？ｗ

４／４　修正

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２７（前書き）

夢は現、現はひとときの夢。

胡蝶の夢というけれど、忌々しくも夢の中では現の出来事。

求めるものは遠すぎる、求めるものが絶望的に遠すぎる。

己の命を差し出したって、得られるものがあるのなら！！

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　始まります

ミッドチルダというか、管理局は大混乱であった。
事件映像に関する問い合わせは当然ながら、闇の書に関する報道追求は熾烈を極めた。
真実の開示、闇の書に寄生された少女への処置、その責任、恐ろしいまでに細かな情報から見て、内部からのリークがあったことは間違いない。

というか、事件映像に併せて詳細がテロップで流れていたというのだから言葉もないとはこのことだろう。

放送主も放送場所もわからなかったが、撮影場所ならわかった。

第９７管理外世界。

魔法も何もない世界とされていたはずのその世界には、管理局の知らない魔法を持った、使った一族がおり、管理世界では想像も出来ないような力と奇跡を生み出していた。
あそこそがアルハザードなのではないかとすらいう噂まで立てられたぐらいだ。
管理不能とまで言われた闇の書を破壊することが出来る力を持つ一族。

そんな情報は管理世界に広がりきり、規制すら出来ないほどであった。

むろん、どの組織も手をこまねいていたわけではない。
取り込みをねらう手勢、排除を決める勢力、そして無視を決める

勢力。
だが、取り込み自体は、実際不可能だ。
自分たち以上の技術を持つ、計算では三世紀は先の技術を持つ存在を、どうやって隷属させるかすら思いも付きはしない。
同じ意味で排除も不可能。
では無視？

・・・明らかに無理だった。

あれほどの事象、あれほどの力、無視できるはずもなかった。
しかし、どうやって交流を持てばいいのか？
管理局も次元政府も紛糾していた。

が、そんな中、そんなもん知るか、知るためだったら靴だって嘗めたるわい、つうか嘗めさせろ！！　という強者（モサ）もいる。
映像にたまたま映っていた知人を頼ってやってきた研究者、ドクタースカリエッティその人であった。

かの人物と忠夫が始めてであったのは、マンション前であった。
マンション入り口で土下座していたのだ。
何事かと声をかけたところ、スゴい勢いでしゃべりだした。
目を血走らせて、両手をブンブンいわせて。
いろいろと修飾語とか形容詞とか入り乱れてたけど、結局のところ・・・

「研究のために、俺らの魔法のデータを取らせてほしい？」

声もなく、必死にうなずくドクター。

「あー、まだいたの、スカリエッティ。」

ふらりと現れたのはプレシア。

「知り合い？」

「ええ。フェイト制作に関わったF計画の推進者の一人よ」

「せやったら、フェイトちゃんと俺らを会わせてくれた恩人やな」

「忠夫君、そんな崇高な人間じゃないわよ、こいつ。データーさえ取れれば何でもいいって奴よ？」

「せやったら、好きな研究が死ぬほど出来れば何の文句も害もない、そういうことやろ？」

思わず絶句するプレシアを無視して、理解者を得た顔のドクター。

「俺の知り合いでな、何百年も生きてる錬金術師顔るんやけど、そいつと同じ感じや。非道も無道もない、ただただ研究したい、目的に至りたい、せやろ？」

無心にうなずく男を見てプレシアは驚いた。

この男はこんな純粋な顔をする人間だっただろうか、と。

「それにな、このおっちゃんもフェイトちゃんと一緒、せやろ？」

衝撃を覚えたのか、思わずふらついたドクターであったが、目をしばたかせた。

「どこで気づいたんだね？」

「んー？　霊体（アストラル）と肉体がフェイトちゃんと同じ感じでずれとるからな。」

目をきらきらとさせたドクターは、「そこんとこ詳しく（ｓｔｋ

w）！！」と詰め寄る。

「ええけど、これから友達のウチでパーティーやねん。一緒に来んか？」

「行く途中でいいので、さわりだけでも！！」

「懐かしい感じのマッドやな。うちのルシオラや忍さんと話が合うんちゃうかな？」

狂気の代名詞、「無限の欲望」とまで言われた男は、なぜか忠夫君の話をうれしそうに聞き入っているのであった。

「・・・なんなのよ」

忠夫君が関わると、私の常識って軽々粉砕なのよね。

あーあ、私もあんな感じでいなされちゃったのかしら？

忠夫君、ひどすぎだよ。

・・・何この人数。

忠夫君のお友達との再会記念とはやての救出記念をかねたパーティーを、アリサの家でやることになった。

なにしろ人数が多いので、ここしか集まれるところがなかった。

・・・で。

スゴい人数だよ、この「嫁」の数。
はっきり言うとね、嫉妬とかや気持ちとか吹っ飛んだよ。
そりゃね、ルシ姉様から色々と聞いてたけどね、こんなに人数が居るとは思わなかった。

総勢１８人・・・・。
スゴい数だよ？　学校のクラス、一つ分の女子だよ？
それが忠夫君の「嫁」だなんて・・・。

「わかる、わかるで、フェイトちゃん」
「はやて・・・・。」
「みんな素晴らしい「乳」と「その」候補や。」
「・・・私がはやてを理解できないし。」

はやては夜天の書から帰ってきて、色々と吹っ切れたらしい。

「それにしても、これだけの人数で一緒には住めんやろ？」
「あ、それは・・・」
「ご心配には及びませんよ？」

かわいらしいハロウィンの魔女のような格好をした少女が私たちに微笑む。

「横島忠夫霊能事務所の魔鈴めぐみです♪」

彼女曰く、異空間に固定された家があるので、その出入り口をこのマンションの一角に設置するだけだという。

「い、異空間？」
「ええ、結構便利ですよ？」

異空間の出口を何カ所か繋げれば、転移のように使えるそうだ。
それも魔力の消費なしで。

「す、すごいんやねぇ？」
「そうですか？　ふつうの技術ですよ？」

忠夫ちゃんの元々居た世界は、お母さんの言うとおりアルハザードみたいな世界だったのかもしれない。

「なーなー、魔鈴はん。」
「なに？　はやてちゃん」
「・・・みんなただやん好きなんやろ？」
「ええ、とっても。」
「・・・独り占めにしたいとおもわんのか？」
「そうですねぇ、確かにそういう思いはゼロじゃありませんけど・・・。」
「けど？」
「忠夫さん以外は嫌なんです。その可能性を追い求めて今の状態なんです。」

つよい、スゴく強い。
で、とっても尊敬できた。
私も、私だって、忠夫ちゃん以外嫌だから。

「・・・つよいなぁ、魔鈴はん」
「そうでもないのよ？　ほかの娘と仲良くしてるとジェラシぃし、私と話しているときに他の娘のことを考えると怒りますもの。」
「そりゃ、最低限まもらなあかんことやろ？」
「ふふふ、それって、他の子と会っているときにも私のことを考え

てくれるって言う裏返しなんですよ？」
「・・・やっぱ、強いわ、魔鈴はん」
「・・・あ、あ、あの！　師匠ってよんでいいですか？」
私の台詞を聞いたはやてと魔鈴さんは大爆笑だった。
なんで？

うちの狙撃は目だたへんかったなぁ・・・。
せっちゃんも、スポッターでしか活躍できへんかったし。
もちろん、時間制御技術の中核やから、霊力ぎりぎりまで使っておって身動きできへんかったんやけど。
うちは、結構余力があったから、雑魚を狙撃して露払いやったんやけど、あんまりやくたたへんかったなぁ。

「あの、お話をお聞きしていいですか？」
美神隊長っぽい感じの女性がウチに話しかけてきた。
もちろんお話ＯＫや。

「じつは、あなたの狙撃を観察させていただいてまして・・・。」
その後はすばらしいとかスゴいとか近年まれにみる逸材だとかほめられてもうた。
何でそんなにほめるんやろ？
活躍できへんかったで？

「あなたの癒しの魔法を砲撃でたたき込むという手法、感動しました」

これやったみたいや。

確かに、うちのまわりでも癒しは近接やもんな。

でも忠夫さんの協力で、魔力弾として打ち出すことに成功したんや。

結構努力したし、関西呪術協会の総力も込められとったからな、結構大変やった。

とはいえ、戦争向きの能力なんで好きやないんやけどな、こう言うときには役立つなら便利なものや。

「出来れば、本当に出来れば、技術供与いただけませんか？」

その辺が難しいんや。

エヴァちゃん達とも話したけど、魔法技術やオカルト技術って、うちらの世界より遅れてるというか、制限されとるみたい。

だから、うちらの技術が目新しいらしい。

たしかに、うちらの世界でも「横島（うち）事務所」の技術は異端やしね。

「さすがに無理やと思うで。うちらだけの技術やないし」

「・・・そうですか・・・。」

まぁ、勝手に呪式を盗むのに比べればええんやけどね。

昔は、麻帆良にあった事務所に泥棒が入って結句事件が起きたもんや。

もちろん盗まれたのは失敗することが前提の「嘘」呪式なんで、結構失敗事故が多かった。

盗んでおいて呪われたちゅう文句が、某ネズミーランドの国から

きたもんや。
あと中華な国も「陥れられた」呼ばわりで、声高に抗議にきとったけどな。
とりあえず、老師にシメてもらったもんや。

良い思い出や。
GS協会とオカルトGメンには悪夢やったけどな。

「まぁ、アースラはんが独立できたら、いろいろと技術供与でもしましょ？」
「・・・そのときを心待ちにしてるわ」

見た目は美神隊長みたいやったけど、中身はアマアマさんやな。
こりゃぁ、向こうの世界にフッカケるのは決定や。
エヴァちゃん、おいしいで、この状況。

「このちゃん、笑いが邪悪やで」

あかんあかん、顔にでてもうた。

遅れていた忠夫がやってきた。
連れがおり、アルフという者とフェイトの母プレシア、そして娘の一人であるアリシアであった。
が、見慣れぬ者が一人いたので聞いてみると、うれしそうにほほえむ忠夫。

「こっちの世界のカオスみたいなドクターや」

聞けば、正邪関わりなく研究に没頭するマッドだという。
そのせいでミッドチルダという世界では犯罪者扱いだという。
ふむ、その程度ならいいか。

「え、いいんですか！？」

エイミィと呼ばれていた小娘が驚くので私は胸を張る。

「私など、元にいた世界で六〇〇万ドルの賞金首だったのだぞ？大したことあるまい」
「おお、それはそれは」
「ていうか、エヴァちゃんそこで胸を張らない」
「よいではないか。忠夫のおかげでお咎めなしなんだ」
「おお！」

なんだか期待しているな、ドクター。

「ま、人殺しと非道実験を「これからは」しなけりゃ文句は言わんよ」

肩をすくめる忠夫に向かって、しゃにむに頭をふるドクター。
なんとなく、この男のキャラに合わないのではないのかと考えるのはおかしくあるまい。
なにしとプレシアが胡散臭いものを見る目でドクターを見つめているから。

「どんな犯罪者だって許す訳じゃないけど、ドクタースカリエッテ

ィの性根は、ただ行き着きたいだけの、そんな狂気。知ってるんだよ、こういう狂気はゴールまでが平坦じゃないことも、そのゴールもね」

エイミィとやらに微笑む忠夫。

・・・やばいな。

そう思って、私は忠夫の腕にぶら下がった。

「この男の両脇はすでに二桁の女がぶら下がっておる。惚れるなよ？」

な、な、な、とか真っ赤になっているあたりギリギリだったようだ。

「忠夫、あの魔法少女隊はいいだろう。ほかに選択肢はなかったようだからな。だが、これ以上「嫁」を増やすな、これは賢い妻達からの忠告だ」

「わいは、そんな誑しやと思われとったんか！？」

「事実誑しだろ？」

「・・・アースラでも、あの「逆天号」に何人の恋人が乗っているか賭になってたんですけど、二桁は予想外でした」

親の総取りです、と暗い笑いのエイミィ。

わりと黒いな、この娘。

「さすが、誑しの国の誑し王子、略して「たらちゃん」ですね」

「日曜夕方が似合いそうな名前やな！！」

うむ、よい突っ込みだな、忠夫。

懐かしくてうれしいぞ。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２７（後書

あれぇ～？　何でこうなった？

政治色の濃い話が、萌えキャラ無しの政治鉄板が続くはずだったのに、なぜかスカティの土下座でぶち切れてしまった。

・・・私には向かないんですかねぇ？ＴＴ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２８（前書

たとえ短い宴でも、全てを並べれば長大になる。

飽きもするだろうし興味深くもある

すべを味わうなど神でもできぬこと

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまるぞ

同い年！
シロちゃんと一緒に大盛り上がり。

これで妹ポジション卒業！　って思ってたのに、大量の妹「嫁」発生。
・・・どうしろと？

霊的な専門課程を終えているのが私と横島さんだけだったので、すかりえってぃ？さんの質問は私と横島さんと、ユエちゃんのＡＦであるミニマリアさんに集中しました。
とはいえ、私も座学は今一なので、マリアさんに一任してますけど。
で、純粋な工学とオカルトの融合による人工霊魂や融合霊魂の分離と増幅という、カオスさんと横島さんの研究の話に至ったところで、スカリエッティさんよりもぷれしあさんが乗ってきました。
もう、ここまで来るとＧＳの世界じゃありません。
マッドです。

「あー、すまんな、おキヌちゃん。こんなバカ騒ぎに巻き込んで」
「横島さん。私は来たくてきたんですよ？」
「拙者もでござる！　横島先生と一緒にいたかったのでござる！！」

シロちゃんは純粋だなぁ。

横島さんもその辺がわかっているので、よっしゃよっしゃと撫でつけている。
しっぽも全快で振ってるし、ご機嫌だ。

「おキヌちゃんもバカだな。こんなところまで俺みたいなバカを追っかけてくるなんて」
「横島さん、私にとっての二度目の生は、美神さんと横島さんとともにあったんですよ？　美神さんとはもう、一生分の縁が結んであります。あとは横島さんと生涯分の縁を結びたいんです」

いっちゃった～！
うへへへへ～。

・・・あれ？　みんなドン引き？

「さすがおキヌ殿。拙者ができないことを空気も読まずにやり抜ける。そこに憧れるでござる」

え、わたしＫＹ？
空気読めてない？
・・・・あれぇ・・・・？

魔法少女だよ魔法少女！！
さすがに横島さんとルシオラが味付けした三人は「濃い」「色物」系だったけど、白いの、白い女の子は違っていた。

まじ、魔法少女！！

助手オコジュ、じゃなくてフェレットとの出会いから変身、初めての魔法・・・もう萌え要素満載！！

ただ、横島さんが介入したせいで、家族公認の魔法少女という希有なバックボーンを背負ってるけど。

さらに、その家族（父・兄・姉）が実践実証剣術継承中ってのが怪しすぎる。

いろいろクロスしすぎだろ！？

ネタは絞れってんだ！！

・・・あ、いかんいかん。

ちょっと興奮しちまった。

それはさておき、パワーアップについて相談を受けた。

その白いの、高町なのはから。

なんでも横島さんから、

「そういうのは千雨ちゃんが詳しいで」

と助言を受けたとか。

ＧＪ！！　横島忠夫！！　あんたについて来て正解だったぜ！！

愛してるーーー！

やべ、また暴走した。

「・・・てなわけで、パワーアップは簡単だ。あとは、そのパワーアップ時の外装だな」

「・・・外装、なの？」

「そう、外装。明らかに格好が変わっていながら同系統の外装、それこそが重要だ！」
「・・・あんまり外見に気を使っても、見る人はいないの」
「わかっていない、わかっていないぞ、高町なのは！！」
「・・・！」
「魔法は常にイメージに左右される。強くイメージできた魔法には強いという付加が、今一と感じた魔法には弱い付加しかつかないんだ！！」
「・・・なるほど」
「そして、それが強化されたという姿ならば、そこにあるのは本当に強くなった自分だ！！」
「・・・・すごい説得力なの」
「イメージしろ、高町なのは。常に最強の自分を幻視するんだ。妄想じゃなく、思いこみでもなく、理論的に実践的に最強な自分を思い描き、そこに自分を当てはめろ。魔法はそこから始まるんだ！！」
「し・・・師匠！！」
「では、強化外装に関わる先生をお呼びしよう」
「はいなの！」
「高町美由希先生だ！！」

ジャーン、ジャーン、ジャーン！

「げぇ、お姉ちゃん・・・」
「なに、なのは。その三国志の雑魚みたいな台詞は？」
「ひどいの、はめられたの！　先生は裏切ったの！」
「ふふふ、なのは。魔法少女に詳しい私が美由希さんとつるまないわけがないだろ？」
「そうそう、千雨ちゃんはこの年にして私を越える才能を持っているの。さぁ、正統派魔法少女の道を邁進するわよ？」

「忠夫くーーーーん、たすけてなのーーー！！」

「ふぁはっは、横島さんならすでに懐柔済みだよ」

「忠夫君の懐柔なんて簡単だよ」

「「ねー？」」

私と美由希さんは、着せかえ自由な魔法少女を手に入れた。

ふふふ、横島さん、本気で愛してるよ。

マジで。

「・・・へぇ、そんな大冒険だったんですか・・・。」

「横島さんと一緒だと、絶対にそれ以上になりますです、アリサさん」

忠夫の嫁、ときいて本気で焦ったけど、私たちと立場は似たようなものだった。

ただ、こう、なんというかバリエーションにとんでいるというか何というか。

この、ちょっとデコな少女、ユエも、実際の年齢は結構上なんだけど、世界をわたる影響で体内の時間を巻き戻されてしまったらしい。

で、忠夫の実年齢は、なんと、「２Ｘ歳」。

・・・そりゃ成績で勝てるわけないでしょ。

「そうでもないのです。大人になればそれだけ過去を忘れます。小

学校の勉強となると結構めんどくさくて覚えてないのです」

・・・あー、何となくわかるわ。
だから、復習は必ずしている、そういうことね？

「そうですね、そのとおりです。で、ですね」

聞けば、嫁軍団、うちの学校に編入してくるとか。
・・・これだけの美少女軍団が二十人近く投入される。
新しいクラスでも作った方がいいんじゃないかしら？

「あ、それもおもしろいですね。ルシオラさんあたりを先生にして、○年Ｂ組魔族先生～とか」

・・・魔族？

「ええ。ルシオラさんは、ソロモンの魔神であるアシュタロトの娘です。そしてその娘をかっさらったのが横島さんです。」

・・・へぇ。

「反応うすいですね」
「驚きすぎて脳味噌がシャットダウンしたわ。」
「納得ですね」
「でもいいの？　そんなすごいこと聞いたら言い触らすわよ？」
「誰も信じませんし、かわいそうな子として入院決定か黒歴史決定ですよ？」

・・・納得したわ。
しかし、あのルシオラさんもただ者じゃないと思ってたけど、魔

族、ねぇ？
でもそんな悪い人に見えないけど？

「魔族と神族はコインの表裏なのです。神界の中心宗教によって神族になったり魔族になったりなのです。アシュタロトですら、以前は「イシュタル」という女神だったですよ？」
「じゃぁ、ルシオラさんは、世が世なら神様の娘、お姫様？」
「で、そんな神様から娘を奪った大罪人が横島さん、と」

思わずユエと一緒に笑ってしまった。
なんだ、話してみると普通。
身構えて損した。

「そうそう、横島さんの嫁になるつもりなら、いろいろと大変ですので、覚悟してくださいね」

・・・普通じゃなかった。
そうだった、この人も忠夫の妻だったっけ。
すごいわよ、異世界。
一夫多妻だもの。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２８（後書

宴会の続きです。

キャラが多いので、いたし方無しということでｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２９（前書

思いは募る、想いは重なる。

想いは思いは結構重い。

だからスカッとスキ飛ばす！

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじめるわよ！！

いやーすっきりしたぁ。
おもいっきりやって良いって話だから、やりすぎちゃった。
チャンバーからだと会話できないけど、思わず叫んじゃったもんね。

「ウォォォォォォン（あいしてるーーーー）」って。

まぁシロ姉とタマモ姉さんぐらいにしか解らないんだけど。

とはいえすっきり。

で、今私は目の前の惨状をどうしようかと考えている。
全身包帯を巻かれた男性が、両脇を猫耳女性にはさまれてる。

「ふたまた？」
「ち、ちがっ！！」
「「いや～～ん、ふたまたかけられちゃった～」」

この反応で解るとおり、猫耳が包帯を填めようとしているわけだ。
でも、まだまだ甘い。
私が振ったんだから、なぜそこで踏み込まない？
アマアマな話ね。
案の序、チャレンジャー現る。

「こら、クロノ君をこんなところにつれてきてどうするつもり！？」

猫耳をぎゅってつかんで、包帯から引きはがすが、猫耳も黙っていられないらしく、ギャンギャン始めた。
全く、なんでみんな一緒じゃだめなのかな？

「・・・お子さまには分からない話さ」
「そうそう！　女の愛は勝ち取るものなんだよ！」

で、そうやって争っている間に、横からさらわれる、と。

「「「え？」」」

横島さんって、結構昔からもててたんだけど・・・・・

「「「・・・・・」」」

それでも昔の上司と同僚で独占できてたんだって。
で、その状況に甘んじてて、愛をちゃんと育てていなかったの。

「「「・・・・・・・」」」

そこで現れたのはルシオラさん。
戦場の恋、引かれ会う二人、二人を引き裂く悲恋。

「「「そこんとこ詳しく」」」

まぁ、そのへんは後々交流が深まってから・・・

「「「く・・・・・」」」

で、気づいたらルシオラさんにとられてました。愛はちゃんと育

みましょう、ってはなし。

「じゃ、じゃぁあんた等は？」

私たちは、ルシオラさんが途中退場している間に割り込んだ妾、かなぁ？

「妾？」

でもルシオラさん公認だし、私たちに注がれる愛だってルシオラさんに負けてないことも解ってるよ？

・・・あれ、どうしたの？

「・・・あたし等の方が子供だったとはね」

「いやいや、進みすぎだろ、異世界」

「べ、勉強になりました」

三者三様。

とはいえ、これで争いはマイナスだって解ったよね？

「「「こくこくこく」」」

あとは、包帯さんを共同統治できる実力者と組んで、自分の占有時間を削り出すてのが最終目標かな？

「「「せ、先生と呼ばせてください！！」」」

あー、運営はエヴァちゃんかタマモ姉さんに聞いた方がいいよ？

エヴァちゃんは妾頭だし、タマモ姉さんは「白面九尾」こと玉藻

御前の転生体で、その辺の運営に詳しいから。

「「「おしえてエヴァさま、タマモさまーーーー！！！」」」

ダッシュで走る三人の女性を後目に、柱の陰で隠れてる包帯さんに声をかけた。

「とりあえずの窮地は救ってといたけど？」

私の一言に背をふるわせる包帯さん。

「それ以上の窮地が口を開いてる気がするんだが？」
「それこそ男の甲斐性でしょ？」

そう、男の甲斐性。
女が自分を選んでくれというばかりではなく、磨いた自分を囲えといってるんだから、それができる自分に磨きあげるべき。
そのままの自分を好きになってくれなんてあり得ない幻想。
ともに磨きあげてこその男女。
これ、タマモ姉さんの持論。
私も大賛成。

「・・・忠夫君の手強さの秘密を垣間見た気がするよ」
「そりゃ男前へ一歩前進でしょ」
「・・・君らは本当に、忠夫君と、そのそういう関係なのかい？」
「うん、結構深いところまで、ばっちり」

ぐっと親指を立てると、包帯さんは苦笑いだった。
やっぱ、少女姿じゃリアルじゃないかな？
まぁ、いいけどｗ

「岩斬剣！！」

少女の手によって、人間の倍ほどもあるような大岩が綺麗に断ち切れた。

断面はなめらかで、本当に「切った」ことが解る。

「すごいね、この剣術は。」

「いいえ、史郎殿。私どもの剣は退魔の剣。自分よりも大きな敵を切り伏せることに特化しているため、人との切り合いに向いておりません」

「それが解っているからこそ、いろいろと修行しているんだろ？」

「・・・はい」

にこやかにほほえむ少女の名は刹那。

忠夫君を追って、世界を越えてきた少女たちの一人だった。

向こうの世界では退魔を司る剣士だったそうで、いろいろと修行して龍神の教えまで受けているという。

それよりも強いというのだから、忠夫君にボコられても恥ではない、恥ではないんだよ、恭也。

技の交換をしていたところで、我慢できなくなった恭也が刹那ちゃんに挑んだのだけど、一刀のもとに叩き伏せられた。

ちょっと離れたところにいた僕にも、全く見えなかった。

この動きこそが、彼らの速度なんだろう。
人知を超えた速度、反則的だな、と思っていたら、ふらりと現れた美由希に一言二言説明しているうちに、美由希がマスターしてしまった。
まだ遅いが、間違いなく彼らの系統の技だった。
「これは瞬動という技で、この上位に虚空瞬動という技(もの)があります。」
そういって、彼女は、まるで階段飛ばしで駆け上がるかのように宙を舞った。
地上三階ほどまで上がったところで、彼女はひらりと飛び降りてきた。
「この辺は極め方によりますが、最終的には瞬動の最上位を極めますと・・・」
「先ほどの刹那君の動きに行き着くんだね?」
「はい」
なるほど、と苦笑いだ。
これはうちの流派に組み込んでみるかな?
「ただ、あまり多用しないことをおすすめします」
「なぜだい?」
「読まれれば自爆技ですので」
「・・・ああ、なるほど」
たぶん、その自爆を避ける知識もあるのだろうけど、その辺は自分で探さないと意味はないな、うん。

「ありがとう、桜咲刹那くん」
「・・・いずれは横島ですので、刹那とお呼びください」
・・・忠夫君、この可愛い生物(しょうじょ)をうちの流派にくれないかね？
なのはは君へ嫁に出すから！！

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン２９（後書き）

士郎暴走ｗ
せっちゃんかわいいよ～　ということなのですよｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン３０（前書

悲劇は悲嘆、悲恋は非情。

誰もが感じる物語。

でも、それがハッピーエンドでエンドロールしてたら？

これは物語。幸福への路線を変えたエンドロール。

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまります

私のＡＦとタマモさんの力で、幻術による私たちの今までを見せていた。
始まりは、あの「大霊障」。
私たちの世界をおそった悲劇と喜劇と悲恋。
女の子は大泣き、女性陣もボロボロに泣いている。
ただ、忠夫さんとルシオラさんが恥ずかしそうにしていた。
内容がどうであれ、結婚式の披露宴の上映会みたいなものですものね。
男性も泣いてます。
あ、あのスカリエッティという人とプレシアという女性は別ですね。
目を爛々とさせてメモを取ってます。
たぶん、後ですごい量の質問を忠夫さんにしてくるのでしょう。

それはまぁともかく、今度は麻帆良に移ってからの話。
巨大学園とその内側の秘匿された魔法、対戦の英雄の息子とオカルト英雄の交流。
仕組まれた罠、迫る戦い、陰謀と野望って、結構ドラマチックだったのね。
私も見入ってしまった。

加えて、主と従者という仮契約（パクティオ）は、こっちの魔法少女たちの興味をかき立てた。
というか、自分たちもと騒ぐのをどうにか押さえて上映続行。
未知の世界ともいえる魔法世界とその崩壊、既存の戦いを越える

倫理と常識とそれを越える非常識の戦いを、誰もが固唾をのんで見守った。
わずか３０分ほどにまとめられた７Ｄｅｙｓだったけど、私の胸の内が熱くなる。

「（ネカネ、おちつきなさい）」
「（は、はい、タマモさん）」

魔法世界の騒動、その後の騒動、様々な事件を軽くまとめた後、ついに核心に触れる部分に達した。
そう、忠夫さんとドクターカオスによるルシオラさん復活だ。

このシーンになった途端、スカリエッティさんとプレシアさんは瞬きをやめた。
後、手元のメモがすごい勢いで増えていく。

結局は、ルシオラさんの復活はなるものの、世界意志に阻まれてはじき出されてしまった忠夫さん。
そして行き着いたのがこの世界。

上映終了とともに大拍手。
様々な感想はあったけど、すべて好意的だった。
まぁ、あの二人を祝福しないなんてできないわよね、乙女として。

とはいえ、ここまで見せる必要があったのかしら？　と聞いたところ、忠夫さんはにこやかに言った。

「悲恋でも悲劇でもなく、もうノロケやし」

・・・認めましょう、瞬間で嫉妬しました。

だからその場で忠夫さんにキスしましたよ、ええ。
周囲を幻覚で囲って、タマモさん以外に見えないようにして！
驚いた顔の忠夫さんでしたけど、そっと抱きしめてくれました。

・・・渡ってきてよかった。

事前情報がなければ、感動的なスペクタル映画でした、で済む内容だった。
が、あれは事実だ。
一撃で世界を滅ぼせる神による侵攻とそれに対する反撃。
戦力比で数百桁もあるような隔たりを越えて勝ち抜いた英雄たち。
そう、「英雄」たち。
そしてその「英雄」の加護を受けた少女たちもまた「英雄」だった。
魔法という戦火をくぐり抜けた一騎当千の乙女たち。
正直に言いましょう、私は非常にうらやましかった。
出自も出身も隔たりも無視して集う少年少女。
まるでおとぎ話のようじゃないか、と。

さらに、秘匿された魔法や禁忌の技術すら厭わずに取り込み進みゆく少年、横島忠夫の姿は自分と全く同じに見えた。
目指す先に差はあれども、艱難辛苦の道のりは間違いなく同じで、そしてその意志の硬さもあきらめの悪さも決意の程も。

私は、至れることを確信した。
彼の決意が彼女に至ったように。
彼の意志が彼女を浮き上がらせたように。

「とりあえず、霊子工学に関して、くわしく。」
「待ちなさい、スカリエッティ！　ディープアナザースペースドライブの方が先よ！！　時間を巻き出す次元航行？　夢の生体調整よ！！」
「バカを言うのではありません！！　はじめにオカルトありきです！！」
「理論実証できれば、私たちでも可能かもしれないでしょ！！」
「可能不可能は両面の技術を知らなければ判断できません！！」

ああ、まったく！！
この女は絶対「若さ」を手に入れるために言っているに違いない！！

あのころの研ぎ澄まされた研究心はどこに行ったのですか！！
あの科学とオカルトと魔法が絡み合った、渾然一体となった夢の技術に心奪われない研究者など存在意義はありません！！

「存在しようと何だろうと、ミットチルダの裕福層と権力層を取り込むには必須よ！！
というかこれ以上の餌なんてないわ！！」
「我々研究者が権力者などに関わっても意味はありませんよ？」
「いつまでも若いお母さんでいられるという魅力にどれだけの女がひざまつくどおともの！？　わたしは絶対腹見せて降伏よ！！」

そんな中、横島忠夫君は一つの飴を取り出した。
それをプレシアに渡してなめさせると、瞬間、彼女の見た目が変わった。

そう、見た目、二十代後半ぐらいに！！

「これはな、年齢詐称薬つうおもちゃ。幻覚でそう見せてるだけやけど、こっちのほうがおもろいとおもうけど？」

れ、レシピ・・・ぐぎゃ・・・・・。

スカリエッティ無惨。

殺到した女性陣に囲まれた俺は、年齢詐称薬の説明をすると、誰もがそれを望んだ。

年長者は年齢マイナス、年少者は年齢プラス。

まぁ、事務所関係者はいいとして、こっちの世界の方々はすごく大喜びだ。

プレシアさんの言うとおり、即時降参状態になった。

が、一つの疑問がある。

桃子さん、高町桃子さん、あなたの見た目は寸分変わって見えません。

なにが起きてるのでしょうか？

「た、忠夫君、ど、どうかな？」

「忠夫ちゃん、みてみて、せくしー？」
「ただやん、どうや、うちの乳！！」
「あ、あの、忠夫、その、結構いい感じでしょ？」
「ただおさん、みて、くれる？」

ここまではいい、ここまでは。

「どうどう、忠夫君。結構可愛かったんだよ、私の五年前！！」と忍さん。
「・・・似合いますか？」とノエルさん
「はわわ、胸縮んじゃいました・・・。」とファリンさん。

結構ギリギリだよ！！

「・・・これで、忠夫君にステッキを作ってもらえば、自分で魔法少女が・・・。」

あー、美由希さん。
発動体にそういう機能付ければいいんじゃないかなー

「それよ！！　それよ！！！！」

ずびっとこちらを指さす美由希さんとスケッチブック片手にデザインを話し合う千雨ちゃん。
いいかんじでコンビやなー。

・・・あ、高町夫妻がご休憩モード。
史郎さん、結構若々しいイケメンになったし。
なのはちゃん、来年はお姉さんかもしれんね。
美神さんより離れとらんから我慢せなな？

ところで、シス魂。

「・・・なんだよ」

プラス１０歳しても、貫禄でんかったな。

「・・・うるせぇ・・・。」

シス魂は、ちょっと眩しそうに妹をみていたのであった。

「みてねぇよ！！」

「「「「「うそだ！！！」」」」」

周囲総ツッコミ。

気持ちいいもんや。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン３０（後書

のりがいい、横島周辺でした。

基本、ルシオラと共有している観察情報があるので、、アースラ衆の情報や高町の情報など色々と詳しい横島従者団。

以後もそのスタンスで動く予定らしいです。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン３１（前書

怒りは体を鋼にする。

でも、思考も鋼になってしまう。

硬直した思考は、やすやすと罠や計略にはまる。

怒りは静かに穏やかに、そしてゆっくりと・・・

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　静かにゆっくり始まります

猫猫姉妹の話では、すでにミッドチルダの意見はまとまりつつあるそうだ。

討伐か、降伏勧告か。

あまりのバカさ加減に目眩を覚えた私だった。

とりあえず、この地球にたどり着けないように認識阻害の結界を、高位次元方面からかけたんだけど、それでも流れ着く人間がいない訳じゃない。

運任せのボトルメール方式で転移してくるって、どんだけよ？

基本、管理局所属のアースラには帰還命令がでているんだけど、次元政府からは現地交渉の礎として留まるように「依頼」されている。

本当に纏まってないのよね、あそこって。

で、もう一つの勢力、聖王教会なんてところからもアクセスがあるらしい。

でも、宗教はメンドクサいので関わらない、それが今回方針なので無視を決め込んでいたんだけど、とうとうボトルメールで到達してしまった人間がでてしまった。

それも、聖王教会の騎士で。

曰く、この第97管理外世界を拠点としている私たちとコンタクトを取りたいそうだ。

「私は取りたくないけど？」

その一言に、一瞬むっとした騎士さんだったけど、深呼吸の後で言う。

「現在、ミッドチルダおよび管理世界全体で危機意識が高まっている。」

「ミッドチルダが戦争に負ける、って？」

「・・・そうです」

「私たちからそっちに戦争なんて仕掛けてないし、いくきもないわよ？」

「それを証明するものなどありませぬ」

「あのね、あいつは強い武器を持ってるんだぜ、怖いから殺そうぜ、ってどこの蛮族？」

「・・・返答できかねます。しかし愚衆政治というものは、最悪の選択をしたがるものです」

「だから、その前に宗教と手を結べ？　それこそ愚かな話ね」

「・・・我らは聖王をあがめる・・・」

「はいはい、教義はいいわ。で、あなたのところで私腹を肥やした司教が一人もいない？女を買ってる司教が一人もいない？酒を飲んでる司教は一人もいない？　わるいけど、それをあなたの命を懸けて宣誓できないような相手とは、これ以上お話できないわ」

押し黙る騎士。

少しだけ挙動しようとしたところで驚きを浮かべた。

「ああ、いま、この周辺はアンチマジックフィールドを張ってるから。私たち仲間以外の魔法は使えないわよ？」
「なっ、そんな指向性が高いＡＭＦなど聞いたことはないぞ！！」
「あら？　ＡＭＦなんて聞いたことはないぞって話じゃないんのね？」
「・・・！！」

ほんとうにおバカさん。
私は指を鳴らして騎士に停止結界を張る。
高位次元航行で研究されたデーターから作り上げた、時間制御魔法だ。
これが結構苦労した割には、作ってみると誰にでも使えるものだとわかり、公開できないと泣けた。
まぁ、術式は迷彩かけたし、このまま次元の海に放流ね。
もちろん、高位次元経由だから、どこにつくが不明だけど。
二・三歳年を吸い取られて、混乱してね。

さて、これで私たちの技術力の高さと、宗教に対する悪感情は伝わったはず。
というか、教会内を浄化したい連中はこれで鼻息を荒くするはずね。

で、管理局と政府が乖離しつつある、か。
でもマスコミが戦争を騒いでいるということは、政府も絡めて戦争を訴えているということよね。
でもって、アースラに待機、か。
んー、マーカー代わりってのが主戦派で、交渉の下地ってのが反戦派かしら？
で、主戦派の背後には経済団体ありっているのはどこの世界も一

緒でしょうね。
じゃぁ、反戦は母体は？
こちらも経済界。
とはいえ、戦争で儲けられないか、損をするって奴らと、あとは・・・過去ミッドチルダに占領された世界でしょう。
これを機会に独立気運を高めちゃいましょう、という方向かしら。
うん、それは使えるわよね・・・。

こえーよ、あの姉さん。
流石魔族ってか？

はっきり言うとさ、ミッドチルダと仲良くしてくれないかなーとは思ってたんだわ。
でもさ、ほら、ご主人様を洗脳している管理局を信じきれないし、逆支配されている政府も信用できないという結論になる。
つまり、誰も信用できないような状態で、誰か味方を作るか？

答え：　味方？　いらないいらない、なにそれおいしいの？

どうせ、今の体制が気に入らないけど反抗はしにくい。
だから姉さんたちが成功したら続こう、その程度の奴らなんか仲間にいらないし、そもそも、管理局に逆らえるなら、仲間になるまでもなく反抗している。
つまり、唯々諾々としている連中の仲間はいらない。
が、おもしろおかしく動いてもらうのはアリ。
ちょっとした技術開示をして、ちょっとだけ応援してますよって

メッセージを添えて。
これで鼻息が荒くなるバカなら、それはそれでいいし、利用されることに気づく程度には頭が回るならそれも結構。
とまれ、不和の種をまいておこうというのがルシオラ姉さんの作戦だった。
思わず、「こんな作戦、させていいのかい！？」と横島忠夫に聞いたところ、彼は苦笑い。

「つまりさ、これって相手の心の内を強くしただけで、いずれ起きることだろ？」

返す言葉もなかった。
確かに起きることの時計の針は進めたかもしれない。
しかし、これはミッドチルダによる支配体制の歪みでもあるのだ。
そういう意味では管理世界から観測できない結界に守られた、あの地球は、これからの争乱を高みの見物できるのではないだろうか？

アースラ、動くなよ？
政府も管理局も混乱しているから良いけど、どこかのバカが砲撃指令とか出しかねないからな。
もちろん、アースラのレーダーからもあの地球は見えていないけど。
絶対どこかのバカが引き金を引く。
間違いない。

ルシオラがいなしたバカ騎士が何かを置いていったというので解析して驚いた。
デバイスと呼ばれる魔具の中に人間が圧縮封印されているのだ。
それも、子供！
どういうことかと展開してみると、なんとみっどチルダ辺境の子供、それも双子が聖王協会によって拉致され、双子の片割れは協会にて拉致、もう片方はボトルメールで漂流。
この地球に到着できたら封印中の子供に危機感を感じさせて、その危機感を拉致中の双子で感じさせる。
双子の共振を使った、反吐が出るような探知だった。

「おねがい、姉さんを助けて、みんなを助けて！！」

言われるまでも無い。

「千雨ちゃん、逆天号準備。茶々丸、逆探査準備」
「「了解！！」」
「エヴァちゃん、戦争や」
「ああ、ここまで反吐が出る上に見苦しい悪は久しいぞ」

「ま、待ってちょうだい！　これは聖王協会の一部が暴走して・・・。」

そんな言葉を背中で射抜く俺達。
非道？　構わんよ。
極道？　極めればいい。

ただな、絶対許しちゃいけない道がある。

「外道、許すマジや」

「・・・！！」

息を呑むアースラ周辺。

「タマモ、魔鈴さんと一緒にボトルの中身だけ探査。同一デバイスだけ抜き取ってや。」

「高音も欲しいわ。成功率上げないと」

「宜しくてよ」「お姉さま、私も！」

「愛衣ちゃんはこっちや。」

「了解です！」

横島従者隊が割り振られる中、はやてちゃんがこちらを見た。

「はやてちゃん、こっからは魔法少女やない。戦争やで。」

「それでもただやんが行く道や。うちらいくで、な？」

「いくの！」「忠夫ちゃん置いてかせないよ！」「忠夫、いくからね」「ただおさん仲間はずれはしないよね？」

魔法少女達も気合十分だった。

「・・・エヴァちゃん予定変更や。はやてちゃん達を戦士にしてから出発や。」

「つまり、私に弟子が増えるということだな？」

「たのめるか？」

「そういう時は、任せたって言え。」

照れくさそうに微笑むエヴァちゃんを久しぶりに撫でる俺だった。

「じゃ、残りは訓練で精度上げをしつつ、ボトルメールの回収ですね？」
「せやな、さよちゃん。がんばろな？」
「はい！」

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン３１（後書

結構外道な独走で始まった教会ですが、管理局だって負けていませんｗ
どうなるかは、まぁおたのしみにｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン３２（前書き）

正義ってのは、何角形だろうな？

丸じゃねえ事は確かだ。

進むほどに、回るほどに、動くほどに周囲全てを傷つけるからな。

そんな正義を無茶な方法で助ける、それが正義の味方。

ま、敵だな。

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまるぜ

・・・・・・・・・

死ぬかと思った。
忠夫君の特訓って、私たちの体を考えてくれていたんだって、心底信じられた。
なにしろエヴァ様の特訓は、私たちのためを思っているのではなくて、自分たちについてこれるように、迷惑を掛けられ無い様にということが主眼だから。

勿論文句は無い。
だけど、一日の時間が＋１０日になるのは凄すぎる。
宿題した後、７時から開始で、朝までの１０時間を「１０日間」にかえる魔法球って、どんな世界なの？
というか、これだけやっても時間が足りないというのは凄いと思う。

「フェイトは覚えがいいぞ。流石に忠夫と幼い頃から暮らしているだけあって、色々と勘所が良いな」

こんな風に時々エヴァ様が褒めてくれるのがくすぐったい。

「すずか、おまえはできているし形になってるがな、小さく纏まりすぎている。われらはもっと大きな力を大きく使うものだ。うん、

そう、いいぞ」

こんな感じでやさしく指導してくれる特は嬉しいんだけど、総合火力演習みたいな絨毯爆撃は勘弁して欲しい。

本当に逃げ場が無いし。

異次元漂流している騎士たちを回収し始めて三日目。

本気で馬鹿なんですねぇ、と感心してしまいました。

装備無し、食料無し、魔法と気力だけでシールド張ってる人ばかりですよ。

一日目で回収した人なんで、「お前達に人の心は無いのか！？あんな異次元で漂流しているのだからもっと早くに回収するべきだろう！？」とか食って掛かってきたので、即効で時間停止して高位次元経由でミッドチルダに送り返しました。

聞けば、ルシオラさんも同じ対応だったらしいので、間違ってないなーと安心しました。

回収した際に接収したデバイスには、やはり子供がいて、泣き叫んでいました。

どうやら、子供の魔法力を無理やり吸い上げてシールドに回していたらしいです。

そんな魔方陣を発見したユーノ君は、すんごく暗い情念を燃やしていました。

まるで夏美ちゃんみたいな感じですね・・・、ってそれってやばいかな？

まぁ、そのへんはなるようにしかならないですよね～。

で、本日、捜索範囲内の騎士と子供の回収は終わりました。
流石に全員高次元を通して送ると何かを感づくかもしれないので、停止結界を張った騎士たちを「超」高速で異次元射出して、清掃教会って所に送り届けることにしました。

・・・聖王でしたっけ？

まぁ、光速の2．5倍程度ですから、大丈夫ですよね？

「・・・え？　光速の2．5倍？」
「・・・通常空間でもその速度ですか？」

射出準備を逆天号でしてたら、スカ先生とプレ先生が現れました。
時間停止しているから見かけの質量増加はありませんし、大丈夫ですよね？

「・・・いやぁ・・・都市部全体が吹っ飛ぶんじゃないかなぁ・・・。」
「・・・惑星半球全体に被害が・・・。」

・・・ええ！　そんな脆い構造なのに私たちにけんかを売ったんですか！？　・・・無謀ですねぇ・・・

「私たちはその無謀を絶望に感じてるよ。」
「とりあえず、通常空間に戻ったら、通常加速にできないかしら？」

んー、じゃぁ、大気圏外に飛び出させて、生身で大気圏突入して

もらいましょう。

「ま、ま、ま、待ちたまえ!!　そんなことをしたら死ぬだろ!?」

ところがぎっちょん、平気だった人がいまーす。

「まさか、忠夫、君?」

せいかいでーす!

能力っていうのもありましたけど、当時、空中浮揚系の術もなしに大気圏突入を生身でして、かすり傷程度で済んでいます。

「「・・・・・・」」

信じられなかったら、マリアさんに聞くと良いですよ?

一緒に大気圏突入したときのデーターがあるそうですから。

「「(だっしゅ!)」」

さぁ、みなさん、生身で大気圏突入して、死ぬ思いをしてくださいねー!

勿論死ねませんよー。五体無事ながら、死の恐怖だけを全身で浴びて、決死の任務というものが如何にバカらしいかを体感してください。

そして、語ってください。

本当は光速の2．5倍で突っ込まされる所だったと、ね。

ふふふふふ。

ああ、皆さんには特殊な停止結界に入ってもらってます。

物理的衝撃は全てカットしてますが、意識までは停止していません。

解りますか？

生身で異次元突入して、生身で異次元アウトして、生身で大気圏突入して、聖王教会の中央に落ちていただきます。

ああ、そうそう、物理衝撃は無効化してますけど、魔法攻撃は結構通りますから、もしかすると貴方達の身など関係無しで排除されたら、凄く痛いかもしれませんね。

でも、魔法で受け止めてくれればまだしも、撃墜しようとしたら痛そうですね・・・・。

ああ、伝わってきますね、呪詛の念。

解ってますか？貴方達がデバイス内に閉じ込めていた子供たちにしていたことの意味を。

いえいえ、今更後悔しても遅いのです。

十二分に後悔しているでしょうけど、それは自分の身に起きる地獄への恐怖から逃れるためですものね。

さぁ、お祈りは済ませましたか？　懺悔はすみましたか？

味方から撃墜されて痛い思いをしたのに受け止めてもらえず、聖王教会中央に攻撃を仕掛けた裏切り者として殺される準備はできましたか？

ふふふふふ

さよちゃんこえー。

半ば役だろうけど、結構本気は言ってるよなぁ。

散々脅してるけど、取り合えず大気圏突入してもらうのは本当だし効果も同じ。

だけど、彼らの視覚外に「聖王教会のバカ騎士在中」という大きな視覚魔法をつけたタグをつけてるし、認識阻害結界を大きく外れた所から射出されるので、場所の特定もできないし、と色々と気を使ってやってるのに、最後にゃ泣き言の念しか伝わって着やしない。

本気で騎士とか名乗れる存在なのかね？

ま、特攻なんて自分からかけるバカなんて、名誉欲と成功した自分しか思い描けないバカばっかりだから当然だろうけど。

まぁ、教会中央上空で逆噴射して、運動エネルギーだけを叩きつける仕様の魔法だから、死にはしないだろうけど。

あ、そうだ、サービスに向こうのニュースが見える方術を追加してやるか。

飛んでる間は暇だろうしな。

「千雨さーん、そろそろ射出お願いしマース」

「おう、まかせろ。」

術式展開、仮想バレル発生。

「おおおお、素晴らしい光景だね！」

「・・・ごくり」

いつの間にかマッドコンビが砂被りよろしくで正面窓に取り付いた。

「先生がた、そろそろ発射するけど、こっちのコンソール呪式は見ないで良いのか？」

「ま、ま、まってくれたまえ、同時にみれんかね？」

「ん？　ああ、そこの射撃管制のコンソールに行けば・・・」

二人の大人が席の取り合い。

まぁ見てるしいいか。

「発射（ファイエルン）！」

一条の光となったバカが、異次元突入して虹になる。

見た目だけなら見ごたえのある風景だな。

やつらが現地の到着するのは、向う時間で7日後。

意識だけ、霊体だけしか動いてないけど、テレビも見れるから暇にはならんだろ？

「うわー、きれいだったねー」「すごくきれいだったー！」

わらわらと子供たちが艦橋に集まる。

「こらこら、ここはお仕事場所だから騒いじゃだめよ？」

「「「「はーい」」」」

那波につれられた子供たちが、園児よろしく付き従ってる。

やっぱこいつ、見た目年齢以上が宿命だよな。

「・・・千雨さん、何か考えましたか？」
「のーのー、マッタクカンガエテイマセン」

やべー、葱構えてやがった。
あ、子供もびびってるってことは、やられたな？
南無南無。

「で、保護した子供たちはどうするって？　横島さん」
「取り合えず、身寄りのない子供たちばかりだから、暫く引き取るつもりみたいよ？」

「ねーねー千鶴、姉さん助けてくれる？」「ボクの兄さんも・・・」
「あのねあのね、ねえちゃんをたすけてほしい・・・。」

子供たちにすがり付かれる千鶴。
そして、私に期待の視線を向ける子供たち。
あーあー、はいはい、わかってるって。
あたしらは正義の味方じゃないし、正義ってわけでもない。
でもな、ひとつだけ、これだけは味方をするって決まってる相手がいるんだ、それはな・・・・

「「横島さん　（忠夫さん）は、美女美少女の味方、そして子供の味方だから。」」

だから安心しろよ？
絶対に助けるからな！！

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン３２（後書

見えない敵状態の横島一味。

あらゆる認識が脳味噌に繋がっている限り特定できないと言う対管理局世界への切り札みたいな状態ですね。

で、非道っぽいけど優しいタグが付いている状況を、管理世界はどう受け止めるのか？

話の筋道は、この先、その判断にかかっています。

・・・まぁ、決まってるようなものですがｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン３３（前書

真実、それは甘いもの
真実、それは苦いもの
真実、それはありきたりの現実

そこに至るまでの道筋に比べれば、なんと軽々しいものか

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまる

それは絶叫の念だった。

ＭＢＳ（ミッドチルダ・ブロードキャスト・システム）が取材移動中に拾った情報だった。

絶叫、死にたくないという感情、そして戒告ともいえる反吐が出るような自戒。

自分が何を思って、なにをし、何を行ったか。

そして誰に出会い、誰に言われてそれを行ったか。

克明に記録できるほどの絶叫。

明確な懺悔。

そして、その念の発信元は、超「光」速で異空間を横切っていた。

この情報を受けたＭＢＳ首脳陣は、いち早く管理局へ問い合わせしたが、一切情報として受けていないという回答があった。

加えて、先日からの挙動不信があったため責め気味で取材してしまい、広報全ての態度が硬化した。

いわば、情報の出口が全て閉まってしまったのだ。

ならば、ともうひとつの情報先にと突撃取材をした所、そこでは、聖王教会では、殉死した騎士たちの葬儀が行われていた。

あの正体不明の身確認魔法集団へ交渉へ出かけ、そして帰らぬも

のとなった騎士たちへ「聖騎士」の称号を与え、送り出そうという儀式の途中であったが、その人名を見てＭＢＳ取材班は困惑を禁じえなかった。

なにしろ、その人名に記された人物達は、現在進行形でミッドチルダに向けて飛翔中だったからだ。

それも超「光」速で。

そのことを言おうにも相手にされなさそうであったが、一人だけ目を引く人間を見つけた。

シャッハ＝ヌエラ

あのカリム＝グラシア直属が、この式典に参加していた！！

このチャンスを逃すものは報道屋にいるはずも無い。

彼らはシャッハ＝ヌエラへの接触を敢行した。

当然警戒された、拒絶一歩手前であったが、彼らが差し出した情報ソースを見て目の色を変えざる得なかった。

彼らは絶望していた。

自分達の行いを誠告し、それを多くの人に知らせることができたなら、その突進は止まるだろう。

これが、発射寸前に聞かされた言葉だった。

こんな異次元でナニを、と思ったが、考える意思があるのならば念も飛ばせるだろうと思い試すと、他の男たちとも会話ができた。
はじめは、本当の初めは今の境遇への絶望と、こんな作戦を立てた人間への怒りをほえていたが、しきりにその声は小さくなった。
後に残ったのは生への渇望。
後に残ったのは醜悪な渇望。
いや、どんな状況であろうとも生きることは尊い。
しかし、彼らの行った足掻きは醜かった。

自分達の行いを悔やみ、自分達の行いを罪と感じ、そして上司の罪を暴き教会の罪を暴き、そして自分達の行いを誠告した気になった。
勿論突進は止まらない。
何しろ誰も聞いていないのだから。

不意に、自分たちの視界の端に放送映像が入っていることに気付いた。
そこでは報道番組がうつっており、やつらから無事返された騎士についての報道がされていた。
騎士は如何に相手が非道で悪逆であるかをまことしやかに語っていたが、そんなのは全部嘘だ！
お前がそんなことを感じているはずが無い！
だって、無事に帰されているんだろうが！？

そう思った瞬間、彼らの中の神経が何本か切れた。
そこから溢れた感情の渦が、運悪くＭＢＳに拾われていた。

緊急報道番組で放映された内容を見て、人々は絶叫した。
なんと、絶望的な質量弾になった聖王教会騎士が、ミッドチルダに落ちてくるというのだ。
時間にして二日後。
逃げる時間などありはしない。
空港はパニックになり、政府は狂乱し、管理局は沈黙していた。
聖王教会騎士を取りまとめる某聖騎士は、こうの賜った。

「彼らは既に聖騎士として死んだ身。このミッドチルダのためにその身を散らせるのならば本望でしょう」

勿論、世論は荒れた。
が、その言葉に縋った。
人命や人権などというものは、衣食が足りてこそ生きるものなのだから。

遠距離魔法による砲撃。
長距離魔法による攻撃。
あらゆる攻撃がこめられたが、一切通る事無く、そのエネルギーは増したかに見えた。
管理局の分析官の報告では、この速度のまま衝突すれば、ミッドチルダの惑星表面2／3が焼き払われるだろう、と。
管理局首脳陣の反応があまりのも悪いため、調査した所、なんと、幹部職員全員が退避済みであった。
実に迅速で、実に統制の取れた集団であった。

幹部だけ。

無論、一般職員は狂乱したが、逆に現場サイドは腹を決めた。
そう、彼らが護るべきは市民。
彼らが護るべきは、秩序だから。

現場単位での行動が、一つの目的に向かって動くとき、それは大きな波になる
力の波が、意思の波が、行動の波が、想いの波が彼らを突き動かす。
不合理から秩序を護るため！！

「レジアス閣下からの通信だ！！」
「閣下は残っておられた！！」

地上部隊の士気が盛り上がる。

『管理局将兵の諸君、聞いてくれ。』

息を呑む将兵たち。

『現在、ミッドチルダは未曾有の危機に瀕している』

ごくりとつばを飲み込んだ彼らであったが・・・

『・・・ように見えるが、大したことは無い』

「「「「「へ？」」」」」

『私がいて、諸君らがいる。これで護れぬものは無い！！』

一瞬抜けた気が、爆発的に高まった。

『これより直接指揮は私が取る！　指揮所立ち上げは１０分後、それまで治安を維持し、市民を護れ！』

「「「「「了解！！」」」」」

その瞬間、管理局は本来の業務を遂行する組織に生き返った。

ごく一部だけだが、組織刷新が行われた瞬間だった。

「これでよかったのかね？」

「ま、上出来だろう」

ギル＝グレアムに苦笑いでレジアルは問いかけた。

無論グレアムは答えて笑う。

車椅子に座り、猫耳の少女達に支えられて。

グレアム自身が正気に返ったのは一日ほど前であった。

使い魔達の献身的な行動により、管理局による思考制御がはずされたのだ。

手法に関しては彼も聞いていないが、深く知る必要は今は無いと考えていた。

それよりも、あの「騎士弾」の対処を、と動こうとする彼を使い

魔達は止めた。
なんと、彼女たちはあの「第９７管理外世界」を占拠する集団に組していたのだという。

・・・いやちがう、この考え方は自分のものではない。

冷静に、静かに黙考した彼はひとつの可能性に思いつく。
これは攻撃ではないのではないのではないか？　と。
その考えに、使い魔達は嬉しそうな笑顔で「正解」と答えた。

聖王教会が行った非道、いや外道。
それ自体は許せないが、それ自身を帰してしまえば同じこと。
だから、それっぽく見えるようにした「いたずら」。
無論、その種を教えることは無い。
そんなことにすら気付けない低能とは付き合えないという傲慢な姿勢でもある。
しかし、自白をある一定上のメディアで全世界報道したら止まる、そんな事ができるのか？

いや、できるのだろう。

「・・・！　まずい、その双子が証拠隠滅されてしまう！！」
「マスター、その点はもう大丈夫です」
「カムリ＝グラシア様が保護してくださってます」

・・・そうか、と彼は座り込んだ。
そして、自分が再び立ち上がることができないほど疲労している事に気付いたのだった。

「すまん、リーゼ。車椅子を頼む」

「「はい、マスター」」

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン３３（後書

じつにおっさんくさい展開です。

で、さらにはよこっちでませんｗ

加えて、まだ解決してませんｗ

つづきまーすｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン３４（前書

事件や事故、そういう渦中にいると、全体なんて捉えられるわけが無くて。

後で通しの特別番組を見て、こんな事件だったのかーなんて思うもの。

とはいえ、把握しなさ過ぎるのもどうかと思うわけで

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまるよ～

我らの混乱は極みに達していたが、しなくてはいけないことはすぐに理解した。
部隊を率いて市民を慰撫する。
制圧でも鎮圧でもない、慰撫するのだ。
逃げる気持ちは分かる、焦る気持ちも解る。
そして政府も管理局も信用できないことも理解している。

だから逃げるのだ。

この段階で信用させることはできない。
ならば、信用できなくても、信用のおける事実が必要だ。
だから、誘導し、対応し、そして慰撫する。
怒鳴る男性の言葉を受ける。
怒れる人々の言葉を受ける。
泣き叫ぶ人たちを守る。
そう、私たちは市民を守るためにいるのだから。

「・・・お兄ちゃんたちは逃げないの？」

妹ほどの女の子。
不安でつぶれそうなのに人を気遣うことができる女の子。
だから俺もほほえむ。

「俺たちはね、市民みんなを守る事が使命なんだ。だから、最後の一人がいなくなるまでこの町を守る」

すっと息を呑んだ女の子は、キッと瞳に力を入れた。

「・・・私はまだなにも出来ないけど、きっと私も誰かの役にたちたい。」
「・・・うん、がんばれ！」

俺は、少女を送り出して、再び周囲を見回した。
守るべき市民、守るべき世界。
やってやろうじゃないか！

ティアナ、大切な妹。おまえの世界を守ってみせるからな！！

バカを打ち出して直後、私たちは逆天号でミッドチルダへ潜入した。
思いの外科学が進んでいるかに見えたが、ルシオラさん曰く「ハリボテ」だとか。
色々と見方もあるし、進む方向の違いもあるから見解も分かれると思う。
で、バカの滑空が半分も過ぎようかと言うところで、なぜか公共の放送局が、バカの滑空をニュース特番で始めた。

ミッドチルダに落ちてくる砲撃として。

ニュースの中には敵性存在や被害予想、そして対策が管理局でも放棄されていることが放送された。

「・・・おいおい。」

まずは対策だろ？　政府。

いや、主導は管理局らしいから管理局が対策をするんだろうけど、放棄ってなに？

思わず周囲をみると、みんな呆然としていた。

術の解析も何もしないで砲撃って・・・。

「まじぃ、魔鈴さん！　子供たちのリンクを追ってください！！」

「・・！　はい！！」

事の次第がどこまで漏れているか解らないけど、この事実が報道から漏れたという事は、政府機関の対応に痺れを切らしたリーク報道だろう。

となると、双子の片割れが始末される可能性が高い。

一刻も早い保護が必要になる！！

「忠夫さん、子供たちは一カ所に集められていますが、周辺で交戦してます。」

ＡＦで映し出した画面を逆天号のメインモニターに出す。

そこでは、概念図としての建物と、その周辺で交戦している人員配置が映し出された。

見た目は、そう、突入と防戦。

「どっちにつきますか？」

魔鈴さんの問いに、横島さんは笑顔で答える。

「防戦やな。防戦側が子供たちを殺す目的なら、防戦する前に殺しとる。生かしたまま守っとるつう事は、敵の敵や」

つまり、味方性が高いという判断だろう。

とはいえ味方の保証もないから、背後から撃たれても大丈夫な装備だし、とりあえず、子供は守る。

「アスナ、シロ、前衛部隊を率いて引き裂け。」

「「了解　（でござる）」」

「魔鈴さんはそのまま状況監視と報告」

「了解」

「エヴァと高音は突入とゲート、よろしく」

「「了解　（ですわ）（だ）」」

さーてと、とつぶやく横島さん。

「みんな、子供を救うこと、これだけに精励してくれ」

「「「「「りょうかい！！」」」」」

ケイトと私が誘拐されて二日後に私たちは引き離された。
そして同じように引き離された兄弟姉妹たちが一カ所で管理されている。
私たちは誘拐相手をみなかったけど、ほかの子たちが結構みていた。

聖王教会騎士

なんで、という思いよりも「やっぱり」という感じの方が強い。
何しろ私たちの世界では、聖王教会の孤児院といえば人身売買組織につながっているというのが常識だから。
ほかの世界は知らないけど、誘拐・人身売買は聖王教会の船を経由している。
これが私たちの世界の常識だ。
だから、私たち姉妹が孤児院で暮らしていられたのも運が良かったから、そう思っていた。
が、実際は順番が来ていなかっただけ、そうと解った。
双子という希少性が売買を遅らせた。
それだけだったのだ。

そんな絶望の中、一週間ほどしたところで、部屋の外が騒がしくなった。
大部屋の中でみんな騒いだけれど、部屋の外にいるはずの人は誰も注意に来なかった。

もしかして、逃げられるかも。

そう思ったけれど、さすがに鍵は開いていなかった。

ちょっとした希望が潰れたぐらいだったけど、それでもあきらめる気にならなかった。
だから、いろいろとあがいていると、聞き覚えのない声が響いた。
『子供たち、助けにいくぞ。その場を動くな』
美しい女性の声。
私たちが固まった瞬間、私の足下から黄金色の髪の毛を靡かせた少女が現れた。
「君たちの妹弟からの依頼でな。助けにきた」
わっと沸く部屋だったけど、少女は「シー」とポーズする。
「外ではバカ同士が戦っている。気づかれぬうちに逃げるぞ?」
軽いウインクが可愛くて、私たちは赤くなってしまった。
「高音、私を中心に影のゲートを」
「了解ですわ」
いつの間にか現れた品の良い少女が、私たちの体の大きさの二倍ほどの大きさで黒い板のようなものを出した。
「さぁ、ここを潜ってくださいね。待避場所でご兄弟がお待ちですよ?」
ばっと駆け出すみんな。
私も我慢できずに走った。

ケイト、ケイト、ケイト！！

あの子が無事であることを祈り縋る思いだった。

部下からの通報を受けて現場に急行してみれば、死屍累々と言った無勢で聖王教会の騎士達が内輪もめ中であった。

ＭＢＳはこの状況をカメラで写していたが、建物に攻め込む騎士の一人に切り捨てられようとしている。

逃げろ、と思ったが、カメラマンは必死にその画像を写していた。

それはプロ意識、だろうか。

いや、恐怖で身動きできない体で行った、最後の意地だろう。

私達の誰もが届かぬ光景に凍り付いている中で、一筋の影が通り過ぎ、そして、騎士は空振りしていた。

「報道に攻撃するなんて、どこの狂信者だ」

カメラマンを抱いたまま、少年は唸るように呟いた。

「おいちゃん、あんたはえらい。最後の瞬間まで報道やった。それがカメラマンの魂ってやつやな」

少年のその言葉に緊張の糸が切れたのか、へなへなと崩れ落ちたカメラマンをそのまま寝かせ、騎士に向き直った。

「われら、異なる世界の者達。異界で回収せし子供達の依頼によって、片割れを迎えに来た！！」

瞬間、建物を攻めていた騎士たちが少年に殺到した。
彼の発言を止めんとして！

「シロ、アスナ！」
「「クオォォォォォォォン！！」」

今度は光のような筋が二本、少年の正面に現れ、殺到する騎士たちを切り伏せた。

「クーフェイ、楓！！」

再び現れた光の筋は、再び殺到した騎士たちを吹き飛ばす。

「コノカ、愛衣！！」

まるで光の雨のように光弾が降り注ぎ、攻撃を避けていた騎士たちに降り注ぐ。

「忠夫さん、増援です」
「さんきゅな、茶々丸ちゃん」

少年の背後に立つ少女がささやくと、あわせる様に少年は両手を広げた。

「千鶴、さよ！！」

今まさに攻撃をしようとしていた騎士たちが静止する。
まるで石化したかのように！！

～忠夫さん、内部完了です。

「お、さんきゅな、夏美ちゃん」

～呼応してくれた騎士さんも同行してもらってます。

「さすがやな。んじゃ、適当なところで撤収や！」

瞬間、目の前が光に溢れ、戦場を圧倒していた少年と少女達は消えた。

まるで夢のような光景に、誰もが身動きを取れないでいた。
が、職務は忘れない。

「公道での武器準備集合で現行犯だ、ひっとらえろ！！」

「「「「「了解」」」」」

まるで、美味しいところだけ準備されたようで、どうにも居心地の悪い話に思える私だった。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン３４（後書き）

いかん、魔法少女空気だｗ

まぁ、学校があるのでつれて来ていないと言う事なんですが。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン３５（前書き）

隠された真実、ってものには意味がある。
パニック防止とか、自己保身とか。
でもさー、こりゃないっしょ？

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はーじまるよー

他人がみれば滑稽な会見だろう。
しかし、この会見は意味のあるものであった。

彼らには非常に迷惑で関係のない事柄であるにも関わらず、深く踏み込んで来てくれた事が有り難かった。

もちろん、事の混乱の大本ではあるが。

「・・・では、信用していただけるのですね？」

彼は、少年は、笑顔で深く頷いてくださった。

「宗教は嫌いや。せやけど、その中に生まれる庇護者は否定せん。ねーちゃんみたいなひとが頑張ってくれるなら、あの子たちも守られるんやろ？」

わたしは全霊をもってその言葉に違わぬ動きをすることを誓う。
すると少年は、うんうんと頷いた。
少年の隣の女性は苦笑いだ。
この少年の、年格好に似合わぬ背伸びした所行にではなく、誰とも知れぬであろう私を信用するという行為に対してらしい。

「ヨコシマ、美人だからって信用しすぎて困るのが貴方だけならいいけど、子供たちも巻き込むことになるかも知れないのよ？」
「せ、せやけどな。このねーちゃんは絶対唐巣神父系統の、苦労して苦労して自分の体を削っても人々を守るタイプやで？」

・・・いやなことをいう少年ですね。
なんだか暗い未来を幻視してしまったではないですか。
ヨコシマと呼ばれた少年は、ちょっと機嫌を損ねた私の表情を見取ってか、あははは～とごまかした。
割と話の通る相手であると感じた私だった。

「とりあえず、子供たちには安全を祈願したタリスマンを持たせたからな。手放させないでな？　あと、取り上げて研究とかさせたら、不幸になるで？」
「・・・それは、脅しですか？」
「純然たる事実やな」

にっこりほほえむ少年、ヨコシマは、なぜか悪魔のような笑みを浮かべているのに影を感じさせない、そんな存在だった。

管理局にも席のあるという聖王教会の偉い人に渡りを付けることに成功したのは、ひとえに子供と一緒に同行してくれた騎士がいたからだろう。
現在、聖王教会は二派に別れているという。
簡単にいうと、バレたらヤバいことをしている奴らと、そいつ等を排除したい奴ら。
先日の放送で「貴い犠牲」を推奨したのは前者らしい。

で、今飛翔中なのも「前者」。
実に分かりやすい話だ。

加えて、管理局も二派に別れているらしいが、これも分かりやすい。
市民に何もいわず逃げた組、残った組。
逃げた組の大半は「精神魔法」に浸透されている方で、残った方は精神魔法をかけられていないもしくは、それを上回る意志がある存在らしい。

まぁ、「らしい」ばかりで何ともいえないのは、実のところ目の前のパニックが収拾しないと全部の状況などわからないだろうからだ。
当事者情報が、現場の人間だけに偏ると、絶対正しい状況にならないから。
それは、自分でも解ってるしな。

「忠夫さん、ネットワーク介入準備完了しました」
「こっちのプロトコル解析も完了。ハック出来るぜ」

んじゃ、停止条件の配信から始めよか。

突如、情報画面の三分の一が占拠された。
通常画面の三分の一が半透明の文章で埋められたのだ。
そこに書いてある文章を見て、いや、見ることが出来た人間は呆然とした。

空港の管制室で、管理局の中央制御室で、政府議会会場で、各種取材をしていた報道管制室で、空港ロビーで、行列の中で、渋滞する車の中で、混雑で離陸できない航空機の中で・・・・。

『現在飛翔接近している物体に関する詳細』

それが教会騎士であること、その騎士の氏名、何を目的にメッドチルダを出発し、何をしたか、そしてどんな装備を持っていたか。
表示されていたリンクをたどると、そこには誘拐された子供たちの氏名や誘拐された元々の世界、そしてすべての子供たちが教会の孤児院で保護されていたはずの子供たちであり、現在は名簿にも載っていないこと。
そして、その孤児院の管理がどこの部署にあり、どの経路で移動されたかまでが詳細に記載されている。
この記載が正しい場合、いかなる経路でも管理局の監査の網に引っかかるはずであったが、そんな報告は管理局には上がってきていない。

飛翔体に対する詳細内容からはそれる内容なので記載は割愛とされていたが、ひどく気になる内容には違いなかった。
加えて、飛翔体停止条件という項目があったが、リンク先がブロックされていた。

それは政府機関による情報機密ブロックのエラー。
つまり、政府が読むべきではないと判断したということであった。
が、飛翔体が停止すると、する条件があると解った市民は大いに動き出し、そして一人の強者（モサ）が声を上げた。

「俺の端末のキャッシュに、それ、はいってる！！」

強者（モサ）の端末から広がった情報は、ミッドチルダ全体に広まり、誰もが認識した。
つまり、

『一定以上の人間が彼らの叫ぶ内容を認識し、それを事実として受け入れる』

事が達成した瞬間だった。

たったこれだけのことで止まった、と人々は安堵したが、それ以上に怒りの矛先は飛翔体を射出した者たちに、ではなく、政府や管理局に向いていた。
すでに、初期段階で飛翔体停止条件が政府高官や管理局上層部では理解されていたことは間違いないし、それが行われることがないことを管理局上層部は解っていたから逃げたのだ。
つまり、情報の秘匿と隠蔽、そして隠滅と大義名分を得るために黙っていたのだ。

ミッドチルダとその市民を犠牲にして。

早々に情報発信をしていたＭＢＳにも政府圧力が加えられており、特務魔導師による現場監視があったため、逆らえなかった旨をキャスターが涙ながらに語っている。

それでも、最後まで報道に関わっていた彼らへは賞賛が送られた。
そして、最後まで市民を守ると胸をはった空士にも賞賛が集まった。
上司は一目散に逃げ出していたが、それ以外の仲間をまとめた力量は高く評価されたのだった。
もちろん、彼ばかりが評価されたわけではないが、分かりやすい存在というものがあるという事だった。
数々の人間にスポットが当たる中、唯一、誰だか解らない人間がいた。
そう、はじめにキャッシュからデータをサルベージした男だった。
どこで、だれが、どんな状況でサルベージで来たのか、最後までだれも解らなかった。
ともあれ、市民は燃えていた。
糾弾されるべき存在、「政府」「管理局」「聖王教会」に向けて。

まとまっていた社会システムを外から破壊したのですから、責められて当然。
しかしながら、自衛の延長線上にあり、さらに自己崩壊の流れとなると責めていいのかどうかは悩みます。

４／１７　いろいろ修正しました、ふぉぉ～

面倒な話になっちゃったなぁ、と苦笑いですｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン３６（前書

時の流れは誰にでも平等。

誰にでも等しく流れる、生きる上での税金みたいなもの。

そういえば、コロニーに空気税って言うのがあるって聞くけど、空気代でもいいような気がする。・・・関係ないけどねｗ

魔法ＧＳりりかるヨコシマン　はじまりまっす

当初報道は「占拠」であった。

第９７管理外世界を占拠する不良魔道師たち、それが彼らに対する報道だった。

事実上占拠はしていなかったが、実効支配はしていた。

住民にそれと気付かれること無く。

一つの町を覆う認識阻害結界。

魔法を認識させない誤認識目的であり、一人の少女を世間から隔離して何らかの実験をしていた。

そんな報道だった。

が、現実は違っていた。

一つの町を覆う結界は、実は管理局によって行われたものであり、一人の少女を闇の書の生贄にしようとしたのも管理局であった。

その事実が発表された所で、その責任を負える人間はいなかった。

すでに「全員」が逃亡していたからだ。

この事実にメディアは食いついたが、その矛先を一般管理局員に向けがたい状況でもあり、内容は混迷と迷走を極めた。

政治家は、いまこそ政治主導の時だと気合を入れたが、身動き一つのたびにスキャンダルが噴出し、更なる混乱を招く結果となる。

聖王教会でも内部自浄を行っているせいで外部への影響力は低く、逆説的に現時点での聖王教会は受動で善良な組織形態になったといえる。

後の歴史家が「単純な内部抗争」と言うかも知れない状態だが、

それでも今を生きる人々にとっては好ましい形態といえた。

平穏、安定、恒常。

それこそが求めるべき日常だから。

もちろん、大多数の人間が求める日常で満足しない人間が少なくない。

比率としては極少数だが、集めてみれば迷惑なほど多い。

そして、そんな人間の多くは権力中枢に上りたがり、そして占有を目標とする。

現状、管理局の「極少数」は、本局を放棄して逃亡中。

聖王教会の「極少数」は、教会内での処理待ち。

そして政府では・・・・・。

全員が「極少数」なので、全く自浄も行われず利権争いに終始し、膠着状態になっていた。

そんな最中、ＭＢＳが一つの特番を放映した。

それは、あの第９７管理外世界を占拠しているといわれている魔導師達のインタビューであった。

彼らは昔からあの世界に隠れ住んでいたという。

そして現地民の中に隠れ住みながら、世界間交流を絶っていた。

そんな彼らの隠れ里周辺で奇妙な結界が張られたのは数年前。

術式が大きく違うために解析に手間取ったが、別の事件で知り合ったミッドの住人の手も借りて解析できた。

その解析結果での、結界で隔離されていた少女の救出、寄生デバイスの除去、少女の保護を行った流れの説明は実に自然だった。

保護された少女はインタビュアーに対して、自分が如何に孤独だったか、今がどれだけ幸せかを歌い上げるように語る。
すこし言動が微妙だが、それでも彼女の現時点の幸せを否定出来はしなかった。

そんな最中、彼らはもう一つの結界を発見した。
それは事件の中で知り合った管理局の艦長、リンディ氏の頭部であった。
彼女にかけられていた思考誘導および言動誘導を行う魔法結界は、管理世界で禁止されている精神系の魔法であった。
加えて、数人接触したが、高官になればなるほど精神系魔法にかかっている率は高かったという。
その術式の簡易版を研究者に見せたインタビューでは、これほど悪辣な魔法は無い、と怒りも露なものになっていた。
ここで、低俗な企画番組ならば、その非道さを追求しただけに終わるだろうが、この番組は一味違った。
件の精神系魔法が、実は、管理局の幹部への教育魔法の一巻であったことを突き止めたのだ。
つまり、この魔法は、法規や先例等を意識定着させる魔法が元々になっており、何者かに歪められたものだったと言う内容だった。

今後の組織浄化を願う締めと共に、かの魔導師たちが挨拶をする。

「今回は自衛のためとはいえ、皆さんにご迷惑をおかけしたことを心からお詫びします。本来であれば、メディアでの挨拶などという失礼な形ではなく、正式な国交を結びたかったのですが、こちらの政府から有り得ない無理難題を吹っかけられたので相手に出来ませんでした。そこで、申し訳ないながら市民の皆さんへ直接お詫びのご挨拶をさせていただく形になりました。」

ぺこりと頭を下げた青年は、にっこり微笑む。

「・・・とはいえ、こちらも十二分に被害を受けていますので、ありとあらゆる賠償を政府に求めてゆきます。そのやり取りに関しましては、政府広報で歪められたくありませんので、ネットで共有させていただきます。ご興味のある方はアクセスしてください。」

青年とそのとなりで微笑む美女は軽く手を振って、そして番組が終わった。

ＭＢＳから出た途端、狙撃されるわ刺されるわ、爆弾によるテロなんてのもあった。

で、全ての犯行の背後にいるのは逃げ出した管理局関係者、略して逃管理局。

勿論、偽装犯行声明は出してるけど、全員無事にひっとらえてるし、暗示魔法なんかの解析も完了している。

事実上、逃管理局は犯罪結社認定がされ、ミッドおよび管理世界から追われる事になった。

本来であればここまで過酷な処置にならなかったんだろうけど、やってることが宗教以上に狂信的すぎてフォローできない。

勿論、全て「護」の文珠によって、周囲環境も含めてプロテクトしてるんだけど、同行したエヴァちゃんの反撃のほうが凄かった。

魔法力を一切使わずに武術だけで叩き伏せるんだからなぁ。

俺だったらネタ技で受けをとるけど。

「タダオ、もう少し真面目になれ。これは政治的な闘争じゃない。

内戦だぞ？」

内戦ちゅうても、こっちはあと、子供の面倒見て帰るだけやろ？
それに、内戦つうもんは、暴力沙汰の選挙だし。
投票数か、使った銃弾の数かぐらいの差しかないと思うが？

「その内戦に子供たちが巻き込まれるんだぞ？」
「それを考えなかったわけや無いけどな、そのへんはフォローしきれんやろ？」
「だったら、なぜそんなに悔しそうな顔をしている」
「・・・・」

子供だから、女だからと守備範囲を広げすぎれば、どの道待っているのは破滅だ。
その辺は一応「学習済み」なのだ。
しかし、それを言葉には出来ない。
してはいけない。

「関わった子供たちだけでも保護したいんだろ？」
「・・・うん」

これは偽善だ。
見える範囲での自己満足に過ぎない。
しかし、何もしないよりもマシだと思う。
俺達の手はそこまで長くないし、強くも無いのだから。

「ま、聖王教会にでも顔を出すか」
「で、聖騎士さまに、このバカどもを押し付けるのか？」
「・・・そこまでは考えてねえってば」

管理局に残った数少ない幹部による指令により、回収された資料から、その精神系魔法は幹部講習プログラムに組み込まれており、抗魔法力に問わず9割の確率で洗脳完了していた。

残った幹部こそが洗脳から逃れたという幹部であり、中央の出世レースからは外れた存在ではあった。

しかし、現場に近い立場で活動していたため、今回の騒動で大きな存在感を示すことが出来た。

残った管理局、新管理局は自らの透明性をアピールしつつ、現状の回復に努め、今だ辺境にいる部隊の精神魔法調査を包めることとなった。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン３６（後書き）

執筆速度低下中～

まぁ、スペシャルで書き始めたので。その辺はご容赦をｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン３７（前書き）

お久しぶりの物語

出会いと別れは今も昔も変わりません。

ここにある物語は明日におきる未来かも？

魔法ＧＳりりかるヨコシマンはじまるよ～

深異次元航行による体内時間巻きだしよりも、忠夫君が持ち込んだ魔法薬の方が恐ろしいまでに好評で病的な人気だった。

一瞬で年齢をいじれる魔法薬。

その名も「年齢偽証薬」って、どんだけ疚しい内容なんだ？　と思わず悩んでしまう内容だが、効果は本物だった。

主に女性に大人気で、ミッドチルダの一部富裕層はベビーラッシュになるだろうことは間違いない。

で、入手先は忠夫君のみとなると、まずは計略で彼をハメようとする勢力があらわれ、次に正面から彼を取り込もうとし、最後には頭を下げてきた。

実に人間くさいと言うよりも権力者特有の流れだろう。

私もスカリエッティーにもよくわかる流れだった。

対外は、相手が頭を下げるまで行き着くまでにドチラかが破綻するものなのだが、よこしま忠夫という人間は、全く負担にも感じていませんという態度を崩さなかった。

実際、なんの被害もないから気楽なものらしいけど。

今ではミッドチルダ商工会連合と中央議員連合、そして管理世界企業会と議員連合会の指示を取り付けており、表の世界の取りまとめを終えている。

聖王教会の取りまとめは流石に進んでいないけど、相互不可侵状態にはなっているという時点で前進といえるだろう。

「・・・なんというか、表の世界に認められるというのは、実に面倒な話だねぇ、プレシア」

苦笑いとともに、スカリエッティーは私にほほえんだ。

「まぁ、裏ばかりじゃ方向性に行き詰まるものよ、スカリエッティー」

私の言葉にまじめぶった顔でうなずくスカリエッティー。

こんな気軽な会話ができるようになるとは思わなかったけど、それはそれで悪くない人間関係だと思っている。

「はーい、みなさーん。効果は十分ですかぁ？」

十数人の幼児相手に身振り手振りで相手をする忠夫君。

相手の幼児もうれしそうに「はーい」とかやっている。

とはいえ、その幼児たちは、年齢詐称薬の体験で訪れた各管理世界の要人だった。

次元航行鑑「逆天号」へ招待の上、時間調整魔法球へ招待し、その上で年齢詐称薬を楽しんで貰おうという、実に手の込んだ洗脳だ。

要人を護衛している人間は、あまりの理解不能な内容に気が違っているかもしれない。

少なくとも忠夫君に出会う前の私だったら、間違いなく狂気してたわ。

まぁ、今だって精神安定剤を飲まないとやってられないことの方が多いけど。

「よし、小僧どもは忠夫の方に集まれ。小娘どもは私についてくるんだ」

忠夫君の隣で保母のお姉さんとしては口調がゾンザイながら、それでも優しげなオーラを出しているのが、彼の自称妾、エヴァンジェリン＝Ａ＝Ｋ＝マクダウェル。
存在自身がバグ、という真祖の吸血鬼なのだそうだ。
弱点をほぼ克服していることから、別の存在だともいえるかもしれないけど。
彼女自身、その存在として恥ずかしくないほどの「悪」だった時期もあるそうだが、忠夫君に触れてあり方を変えたそうだ。

「ほんじゃ、男子はこっちの服を自由に～、女子はエヴァの部屋で着替えなぁ。・・・ああ、そうそう、怪我してもいいから遊びたい女子は、いま手を振ってるアスナんところ、逆天号見学希望者は・・・そう、あのライムグリーンの髪の毛の茶々丸ん所に集合なー」
「「「「「はーーーーい！！」」」」」

まぁ、一応、外交使節団ってことになってるから、そういう人たちも多いだろうけど。
とはいえまじめね。
この魔法球にいる間なら、ほぼ無限に時間を引き延ばせるのに。

「問題を後延ばしにしないと言うのは、好感が持てるんじゃないかね？」
「そういう問題じゃないと思うわよ？」

だって、子供の姿になってから外にでようって言うんですもの。
明らかに情報流出と伝達、そして忠夫君とのコンタクトの成功を報告するためでしょ？
護衛を通して情報を流して、って、確かにまじめな話だったわね。

「とはいえ、護衛を驚かせるって言う第一目標が一番でしょ？」
「たしかにねぇ」

まぁ、女がいつまでの女だというのは事実だが、子供や孫すらいる女たちが喜声をあげて私の作った服で着飾っているのは嬉しい気もする。
やはりゴスロリは世界を越えた標準だな。
アマロリ、クロゴス、シロゴスと様々とあるが、趣味があう人間も多い。
こうみると、孫を着飾らせるのは代償行為だと知れるな。
やはり、自分で身につけたいが年齢的には無理、だから孫に強要という流れで間違いないだろう。

「あ、あの、エヴァンジェリン様。このレースはエヴァンジェリン様がお作りになったんですか？」
「ん？　ああ、時間だけはあったからな。暇に飽かせて作ったものだ、気に入ってくれたなら持って帰ってもらっていいぞ？」
「「「「「きゃーーーー♪」」」」」

流石に年かさを重ねているだけあって遠慮なく山分けを始める幼女たち。
とはいえ、薬が切れたときが悲惨だな。
あれだけ似合っていたゴスロリが、実際の年齢にもどってみると・・・。

うむ、成長は嬉しいが、ゴスロリが似合わん年齢になるのは困るな、うん。

「あのあのあの、この傘とこのアマロリの組み合わせは・・・」
「ポーチとあいますわよね、ね？」

まったく、女の欲望は底なしだな。
まぁ、この部屋の中にあるロリアイテムは全部持ち出し許可のものばかりだ、気にせずに合わせるがいい、と言った瞬間、幼女たちの瞳は欲望で燃え上がった。

ああ、こうやって忠夫のかけた罠の深みにハマってゆくのだな。
可哀想なぐらいに今に溺れている幼女たちを私は見守ることにした。
何しろ、ゴスロリは持って帰れるが、薬は持って帰れんのだからな。

「きゃー、これ、この組み合わせですわ！」
「いやーーー！すてきすてきすてきぃ！」
「すごいすごいすごいぃ！」

完全魔法無効、ぱねー。

自分の能力なのに、正直寒気がするわね。

はじめは子供同士の遊びだったんだけど、いつのまにか砲撃魔法で打ち合ってやんの。
どうやら民族紛争的な土壌があるらしい。
そんなわけで、マジ説教。

砲撃魔法と防御魔法を完全消去して、驚愕の子供たちを瞬動で引き集めて処理。

拳で説得&説教コースに叩き込んだところ、なんだか周辺の幼児姿の奴らがなついてきた。
簡単に言えば、大人になって本気になって説教されたことが無く、新鮮だった、ということになるんだろうけど、なんだか居心地の悪い視線なのよね、うん。
こうなんというか、嘗め回すような視線というか何というか。
よし、きめた。

「（ゼロ、聞こえる）」
「（オウ、キコエルゼ）」
「（お姉さんズに今の光景を撮影させて）」「（御主人様ノ命令デ、実行中ダ）」

さすがエヴァちゃんわかってる。
さーて、じゃぁ、私は名前の交換で各自特定ね。

「さーて、仲良しこよしの挨拶ってことで、自己紹介しない？　あたし、みんなの顔と名前が一致しないのよ」

名前と顔を一致させ、そのうえ子供の特権セクハラをしてきたところを完全撮影。
ふふふ、伊達にネギ相手にしていたわけじゃないわよ？

真のラッキースケベ以外全部押さえさせてもらうんだから。
ふふふ。

「（ナァ、アスナ）」
「（なに、ゼロ？）」
「（コノガキドモ、オ前ノ完全魔法無力化ニ興味アルンジャネエノカ？）」
「（・・・・あ）」

・・・反省。
あたしは、マダマダ、なのね。

「外交使節団のエロ映像、とれてるかぁー？」

私の言葉に茶々丸の姉たちは丸の合図。
どうやら随分と好調らしい。
で、管理外世界の書物に興味があるという集は何故か愛衣の先導で「ドラゴンボ○ル」祭り開催中だった。
加えて「聖戦士星○（セイント）」祭りに移行してなんだか解らないノリになっている。

「こ、このデバイス無しの魔法は、あなたたちでもできるのか？」

こんな質問に、忠夫さんが呼び出されてネタ技が披露されて大騒ぎになった。

ペガサ○流星拳は、たぶんあれだ、無音拳。あれの応用だな。
クロスを纏ってみてほしいとと言われて「魔装術」使ってるし。
とはいえ、契約がルシオラさん相手なので結構ファンシーな格好だったけど。
この世界の魔法は「砲撃」型が多いせいか、「かめは○波」が大人気で、実演したところで弟子にしてほしいと泣きつく人間多数。
加えて呼ばれたユエとアキラが格ゲー技をかましたところで大盛り上がり。
なんつうか、ここは麻帆良か？　と思わされたよ、うん。

「この映像はとらんでいいぞ？」

茶々丸姉ズの丸サイン、再び。
さすが解ってるなぁ。

「千雨様、お茶です」
「あんがとな」

さーて、満足いく情報を握ってもらったことだし、こっちも満足させてくれよ？

「少なくとも、外交使節の全員のハートをつかみましたし、二度と離れることのできない弱みもつかみました。作戦は成功です」
「ま、さすが忠夫さんだ。えげつねぇ」

でも、それもこれも、すべて自衛のため。
必要な布石は打ちまくるもんだ。

「でもよ、マンガ祭りはいらなくないか？」
「必要な布石と判断します」

「そうか・・・」

あ、まずい、○、スノートをユエが持ち込みやがった・・・。

「やべ、カウンターでなんか軽いのでも放り込んでくれ」

「『君に届け』か『のだめ』になりますが？」

「『のだめ』だ」

「了解です」

やべーやべー、だんだん読んでる奴らの顔が「やば」くなってきやがった。

そろそろ、この話の元になった魔道具は何ですかんんつう話になりそうだ・・・。

ナイスタイミング！！「のだめ」が効力発揮だ！

よし、よし、イエス！

いい感じだぞ！！

って、あたしなにしてんだろ。

ミッドチルダの異空間に待機していた逆天号にアクセスしてきたのは、ミッドチルダ政府ではなく管理世界政府連合の方が先だった。

加え、情勢に乗り遅れたという危機感でミッドチルダ議員連合が超党派で結成されて連絡が入り、あとはもう、流れに乗りたいやる

等が大騒ぎとなった。

一応、この辺の交流は全世界放送していますので、言葉に気をつけて、と忠告の後に始まった交渉の数々はかなり上手くいき、第97管理外世界を、管理世界とすることなく交流の対象ないに含むことが決まった。

この決定に先立ち行われた連合外交使節団は、異なる魔法科学と魔法薬学の成果をまざまざと見せつけられ、強い羨望と深い交流をして帰ってきた。

美味しげな餌につられた欲深い使節団だったと一部新聞は書き立てたが、使節団の婦人たちは鼻で笑ったそうだ。

「欲深い？　確かに欲望を感じますけどね、彼らの懐の深さをみれば、自分たちの欲望など底の浅いものだと感じいりますわよ？」

タイトでありながらもゴージャスなフリル満載なドレスを着た女性の意見を聞いて、一部マイノリティー集団は、彼女の話を聞きに集まったとか。

集まったマイノリティー集団の名は「全世界フリルの会」。

年齢や性別や体格から、己にフリルが似合わないけれど使いたいと願う、そんな集団だった。

相談を持ちかけられた彼女は、何の障害も感じることなく、集まったものたちを迎え入れ、そして心の師匠と崇める女性の作品を公開した。

その出来映え、その精密さ、そして愛あふれる作品の数々に感動した「全世界フリルの会」は、各世界支部に連絡をとばす。

かの管理外世界にいるという「フリル師匠」を名誉会頭とすべし、と。

見た目麗しく、そして空き時間のほとんどをフリルに叩き込んだという伝説の匠を、出会う前からリスペクトしはじめた「全世界フリルの会」であった。

おまけ

「あれ、おかあさんの携帯にメール。珍しいね」
「ああ、これ？　刺繍の会の会員メールよ・・・・あらあら」
「え、？　なんでエヴァちゃんを名誉会長にって話になってるの？」
「さぁ？」

まさに全世界だったｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン３７（後書）

お久しぶりの外伝魔法ＧＳでした。

作風が思い出せなくて何度も自分で読み返してしまいましたｗ

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン３８（前書

愛しい想いも恋しい気持ちも一方通行。

重ね束ねなくちゃ届かない。

想いも想いも重いけど、それでも届けこの気持ち。

魔法ＧＳりりかるヨコシマンはじまるよー

双子孤児たちを大量に引き受けてくれた某王宮に大量の年齢詐称薬をたたき込んだところ、王家の秘宝として死蔵されているらしい。
いや、正確には女性王族が外に顔を出す際に使われているらしい。
メイクのノリもよいと王宮スタッフにも評判だとか。
それを知っている周辺世界外交官は、某国との交流レベルをあげて連合になる段階になっているとか。

「これって、謀略のレベルよね」

アキラの台詞に苦笑いのネカネ。

「少なくとも、求める物を求められる相手に、こちらの意図とともに送るのは外交って言うのよ？」
「さすが大英帝国の末裔の説得力はちがうのです」

どことなくデ○ノート祭りをじゃまされて不機嫌そうなユエ。
つうか、あれはネタではすまない。
まだジ○ジ○の方がマシだ。
少なくとも高音への理解が深まる。

「そうですねぇ、第三部までは仕込みましたわ」

というかすでに布教済みだった。

「おねえさま、今度来た方には『ヒカルの碁』を・・・」

「「「「「腐女子禁止！」」」」」

ただでさえ貴婦人ばかりなんだ、貴腐人にでもなられたら国家間紛争になるぞ？

「いえいえ、マイノリティーが支えを求めるのは当然です」

えへへと笑う愛衣だったが、今、その話題はまずい。

「愛衣、それは、私への挑戦か？」

「きゃーーーー」

ダッシュで逃げた愛衣を糸で吊したエヴァちゃんは不機嫌そうにため息をつく。

「まぁ、気持ちは分からなくもないわな」

「そうやね～」

俺とコノカがのぞき込んだ通信画面に映っているのは、まるでエヴァを崇め奉るかのようなＨＰであった。

タイトルは「全世界フリルの会」。

先日蒔いたゴスロリとアイテムが詳細に載せられていて、その技量を「神」と崇めている。

加えて、終生名誉会頭として任命しており、どの世界支部からでも部下を派遣するとか大騒ぎ。

この騒ぎに応じるように偽物は多数出ているが、速攻で化けの皮が剥がれるとか。

それほどの技量という評判。

で、そんな扱いは、まぁいいのだ。

問題は、エヴァちゃん、本当にあらゆる世界から大量に崇め奉られすぎて「神格」を得てしまったのだ。
まだ、吸血鬼としての属性が強いが、本格的に修行すれば、ピートの数十倍の聖魔属性を得られること間違いなしだったりする。
とはいえ、エヴァちゃん自身は気楽な小学生をしようと思っていた矢先の話だけに、非常に迷惑し、忌々しい限りだったりする。
なにしろ、自分が恨んだ対象の仲間にされてしまったのだから。

「ルシオラ、どうにかならんか？」
「いっそ、堕天する？」
「考慮しよう、本気で」

まぁ、信仰の力を失った神でもないエヴァちゃんには無理なんだけどな。

「忠夫さん、空間掌握成功です」

茶々丸ちゃんの報告に、緩んでいた雰囲気は締まった。

「おっし、んじゃ、いろいろと置き土産も完璧みたいやし、そろそろ帰るか？」
「「「「「はーい」」」」」

夏美ちゃんをチャンバーに、逆天号は異空間航行を開始した。
もちろん、ミッドチルダからは何の予備動作もなしに消え去ったかのように見えたことだろう。

ほぼ、二月ぶりに忠夫ちゃんが帰ってきた。
聞けば向こうでは一年近く活動していたそうで、その辺の時間調整が聞くのが無空間航行技術なんだそうだけど、私にはわからなかった。
ただ、忍ががっつり食いついてルシ姉さまをはなさないのは、ちょっと迷惑かも。

「まぁ、欠席中の事情なんかを調整してくれたんや、少しぐらいはな？」

うー、タダオちゃんが優しいのは知ってるけど、そういう気遣いをされるとむやみにジェラシぃよぉ・・・。

「どうしたんや、フェイちゃん？」
「んーーー、もうちょっと私に構って」
「おーおー。わかったわかった」

きゅっと抱きしめてくれるタダオちゃん。
んー、愛が満ちあふれるよぉ。

「あー、なんや、理解はするけどな、場所は弁えて欲しいんやけど？」
「じゃ、ハヤテも参加する？」
「・・・がっつり了解や！」

タダオちゃんの半分をあけると、そこにハヤテが滑り込んだ。
ふふふ、この幸せ地獄、タダオちゃんは耐えられるかしら？

「まったく、かわいいもんや」

あれ、なんかアピール失敗？
思わずハヤテと視線を合わせるけど、向こうも原因不明って顔。
おかしいなぁ、女好きなタダオちゃんなら一発のはずなのに。

「わかってないな、フェイトちゃん、ハヤテちゃん」

あらわれたな、なのなの怪人！
タダオちゃん成分、タダオミンを吸収するのは私たちの役目！！

「なのはにもわけてほしいの！」
「フェイトちゃん、今のうちは仲間でまとまったほうがええで」
「そっか、そろそろ来るんだっけ？」

そう、やってくるのは横島妻の会。
世界を超えてやってきた、根性の座った女たち。
それが年齢も見た目も調整して、小学生としてやってくるんだそうだ。
とはいえ、今のクラスにはあと三人ぐらいしか入れないんだけど？

「ああ、新しくクラスを新設して、そこにつっこむらしいわよ？
私たちも含めて」
「アリサ、まじ？」
「マジ」

うっわぁ・・・思い切ったことやるわね忍。
でも効率的かな?

「まぁ、いろいろと遠慮がいらなくなるかも」
「たしかに」

うん、私たち魔法少女隊が内輪もめしている場合じゃないよね。

「だから、フェイトちゃん、代わってなの!」
「だめ~」

私のタダオミン吸収は終わってないのです。

「うー、背後からあたーっくなの!!」
「ぐはっ!」
「というか、あんたら大概にしないと先生泣いてるわよ?」
「「「「・・・あ」」」」

授業中でした。

よこしまほら　ｉｎ　リリカルなのは―魔法ＧＳりりかるヨコシマン３８（後書）

ゼロ魔とりりかる同時更新でしたｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7296r/

よこしまほら外伝集

2011年10月23日03時01分発行